

を除いて全周する。柱穴はやや不明瞭だが、逆台形上に4本並ぶ。南側東西列の2本の間隔が狭いほかはほぼ均等間隔である。柱穴の掘形は、径30～40cm程度の円形、不整形な楕円形状で、深さはP1が14cm、P2が20cm、P3が29cm、P4が12cmである。柱間は、P1・P2が2.3m、P1・P3が1.9m、P2・P4が2.1m、P3・P4が2.0mである。床面には住居の部材と思われる炭化した木材が散乱していた。このことから、火災に遭ったものと考えられる。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。両側の北側壁よりも住居内に約40cm、長さ1.5m程度はみ出た部分に、壁をそのまま利用して燃焼部奥壁とする。袖は、壁から55cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、165cm(うち煙道部分の長さ90cm)、幅120cm、高さ35cmを測る。燃焼部分は、最大幅約65cm、奥行き70cmで、8cm程度掘りくぼめた火床を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かい緩やかに立ち上がり、先端部分でピット状に掘りくぼめる。煙道の幅は、上端で15～35cm、下端で10～25cm、深さは先端で10cmを測る。

遺物については、カマド周辺の床面および南東側の床面を中心にして、良好な遺物が多数出土している。特に鉄鏃を中心として金属製品の出土数が多いことが特色である。カマド内から土師器杯(8)、小型甕(32・33)、須恵器蓋(27)、須恵器短頸壺(34)、カマド正面の床面(+13cm)から土師器杯(3)、同床面(+6cm・+8cm・+10cm)から須恵器杯(16・15・14)、中央床面(+10cm)から須恵器盤(25)、南側床面(+2)から土師器甕(30)、同床面(+21cm・+22cm)須恵器高台付杯(22)、蓋(26)、覆土中から土師器杯(1・2・4～7、12)、椀(9～11)、須恵器杯(13・17～21)、茶灰色系の須恵器杯(13)、高台付椀(23・24)、蓋(28)、短頸壺(35)、土師器甕(29・31)、須恵器大型甕の胴部破片(36)などが出土している。このほか、金属製品としてカマド左正面から東側床面(4～8cm)にかけて鉄鏃7本(45～51)、東側壁際の周溝内から鉄釘(56)、鉄斧(57)、中央東側の床面(+6cm)から鉄製鎌(52)、北東床面のP2内から刀子(54)、南側床面(+5cm)から摘鎌(53)、覆土中から凝灰岩製砥石(44)、カマド正面の床面(+10cm)から桃の種子7個(37～43)が出土している。なお、小片のため図示し得なかったが、カマド内から灰釉陶器片が出土している。また、土師器杯(2・12)については、現在遺物が行方不明となっている。

土器の特徴 土師器杯については、体部外面および底部を手持ちヘラケズリで整形する杯が主体を占めている。土師器杯(1)・(2)は器高の低いやや丸底風で、体部内面に螺旋状暗文(1)、斜格子状暗文(2)をそれぞれ施している。土師器杯(3～8)は体部外面をざっくり幅広く削り、平底化が進む杯。土師器椀(9～11)は体部が内彎する椀で、体部内面に放射状のヘラミガキなどを施す。土師器杯(12)については、ロクロ整形で底部を回転糸切りで切り離した後、外周を手持ちヘラケズリで整形し、内面を横方向のヘラミガキで施し黒色処理する杯である。須恵器杯類については、ほとんどが底部を回転ヘラケズリで整形する。須恵器杯(13)は茶灰色系の須恵器で千葉地域産の可能性が考えられる。

41号住居跡(第244・245図、写真図版38・39・115・173)

遺構は、南東側尾根状台地部分のJR-89、98、99区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN-8°30'-Wである。規模の小さい住居で、形状は東西方向にやや横長の方形状で東西軸3.0m、南北軸2.9mを測る。住居の角は隅丸で、壁は垂直に掘り込まれ、北壁で44cm、西壁で59cm、南壁で52cm、東壁で40cmを測る。面積は、確認面で8.61㎡、床面で7.0㎡となる。床は、ハードローンを約20cm掘り込み、その上にローン土と暗褐色土の混合土を5cm程度敷き詰め、貼床とする。中央部は、直接ハードローン面が床となっている。床面は、全体に固く良好である。周溝は、カマド部分を含めて全周するが、あまり明確ではない。柱穴は、検出されなかった。

カマドは北東向きで、北壁の東隅に位置する。カマド自体は、住居主軸より26°40'東へ傾く。カマド構築前に周溝が掘られており、周溝を埋め、壁を利用して燃焼部の奥壁とする。袖は、壁を利用して40cm程度の長さで白色

粘土を用いて構築する。袖はあまり開かない。カマドの全長は、現状で80cm、幅80cm、高さ25cmを測る。燃烧部分は、最大幅約55cm、奥行き50cm、奥壁は垂直で、深さ7cm程度の掘りくぼめた火床を持つ。煙道部分は、痕跡程度しか残っていない。推定で長さ95cm、幅25cmを測る。先端部分と思われる位置には、長軸15cm、短軸10cm、深さ4cm程度のピットが残る。両袖外側の周溝部分には、ほぼ円形状のピットが各1個ずつ見られる。左のピットは左袖より35cm離れており、径25cm、深さ71.5cm程度。右のものは右袖のすぐ脇で径20cm、深さ71.5cmを測る。また左袖の基部に径20cm、深さ40cm程度の横方向に並んだピットが2基見られる。いずれもカマドに付随した施設の柱穴と考えられる。

遺物については、カマド右側の東壁際の床面(床直)から倒れてつぶれた状態で土師器甕(7)が出土している。またカマド内からは須恵器杯(3)、土師器甕(6・8・9)、覆土中からは土師器杯(1・2)、須恵器蓋(4・5)、西側床面(床直)から鉄製紡錘車の紡輪部(13)、南側の床面(床直)から刀子(11・12)、カマド燃烧部内から支脚として使用されたものと思われる平瓦(10)などが出土している。

土器の特徴 土師器杯は、体部外面を手持ちヘラケズリで整形する非ロクロ杯である。

42号住居跡 (第246・247図、写真図版39・115)

遺構は、南東側尾根状台地の東部分のK S—23、33区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—2°10′—Eである。かなり規模の小さい住居で、形状は東西方向にやや長い横長の方形状で、東西軸2.75m、南北軸2.43mを測る。住居の角は隅丸で、壁は垂直に掘り込まれ、北壁で43cm、西壁で49cm、南壁で45cm、東壁で33cmを測る。面積は、確認面で6.39㎡、床面で5.73㎡となる。床は、ハードルーム面を直接床面としている。貼床ではないため、全体に固く締まっている。周溝は認められなかった。規則性のある柱穴は見られないが、西側床面に径25cm、深さ25cm程度の2本のピット(P1・P2)が南北方向に並んで認められる。このピット列が柱穴の可能性も考えられる。

カマドは北向きで、北壁の東隅に位置する。住居主軸よりさらに7°35′東へ傾く。壁を利用して燃烧部の奥壁とする。袖は壁を利用して55cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、130cm(うち煙道部80cm)、幅90cm、高さ35cmを測る。燃烧部分は最大幅約50cm、奥行き45cmの垂直な奥壁で、深さ5cm程度の掘りくぼめた火床を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃烧部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かい緩やかに下がる。煙道の幅は上端で45cm、下端で30cm、深さは先端で20cmを測る。右袖の内側はよく焼けており著しく赤化している。

遺物については、カマド正面の床面(床直)から土師器杯(2)、中央床面(+4cm)から須恵器杯(3)、カマド燃烧部内および周辺の床面から土師器甕(6)、覆土中からは土師器杯(1)、黒灰色系の須恵器杯(4)、須恵器甕(7)、台付甕の脚部(5)が出土している。瓦については、カマド燃烧部内から平瓦(10)、覆土中から平瓦(8・9・11)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については体部外面を手持ちヘラケズリで整形する非ロクロが主体を占める。須恵器杯(4)は体部から口縁部にかけて外反する特徴を持つ。土師器甕(5)については胎土に雲母片を含んでいる。

43号住居跡 (第248・249図、写真図版39・115・173・177)

遺構は、南東側尾根状台地の東部分のK S—44、54、55区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—13°55′—Eである。形状は、東西方向に長い横長の方形状で東西軸3.74m、南北軸3.35mを測る。住居の角は直角で、壁は垂直に掘られている。壁高は、北壁で34cm、西壁で46cm、南壁で42cm、東壁で23cmを測る。面積は、確認面で12.03㎡、床面で11.09㎡となる。床は、ハードルームを約5～10cm掘り込んで暗褐色土混入のルーム土を5～10

cm程度敷き詰め、貼床としている。床面は、中央部が固いのみで全体に軟弱である。周溝は、カマドの位置を除いて貼床の高さで全周する。また、南側の壁から、北方向に長さ135cm、幅10cm程度の細長い溝が見られるが、住居内の間仕切りの区画と思われる。柱穴については、床面の北東隅を除いて、各隅に径40cm、深さ15cm程度のピットが確認できるが、いずれも浅く、柱穴とは考えにくい。北西隅のピット(P1)については直径40cm、深さ14cmで、底面から土師器杯(1)が出土していることから、貯蔵穴と考えられる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分からやや東に位置する。壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とし、煙道部を設けないカマド形態となっている。白色粘土を用いて壁から長さ60cm程度の平行に開く袖を構築する。カマドの全長は60cm、幅140cm、高さ20cm、燃焼部の最大幅は約60cmを測る。燃焼部奥壁は垂直に立ち上がる。

遺物については、北東隅の床面(床直)から底部外面に墨が薄くはっきりしないが「興?」の墨書のある須恵器高台付杯(3)、中央床面(+1cm)から茶灰色系の須恵器杯(4)、北西隅の貯蔵穴内から底部外面にひっかきキズ程度の「×」の線刻が見られる土師器杯(1)、覆土中から土師器杯(2)、甕(5~8)が出土している。瓦についてはカマド燃焼部内から平瓦(10・11)、丸瓦(9)が出土している。また南側壁際周溝内より凝灰岩製砥石(12)、南側床面(床直)から鉄釘? (13)、中央床面の溝内からほぼ完形の刀子(14)などが出土している。

土器の特徴 非ロクロ土師器杯が主体を占める。土師器杯(1)は、底部が縮小し器高が高くなる杯で、体部外面に細かい手持ちヘラケズリを施している。須恵器杯(3)は永田・不入窯の製品で、須恵器杯(4)は千葉地域産のものである。

44号住居跡 (第250~252図、写真図版40・115・175・178)

遺構は、南東側尾根状台地の中央部分でJQ-80、90、JR-71、81区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN-4°25'Eである。形状は方形状で、東西軸3.25m、南北軸3.23mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で34cm、西壁で23cm、南壁で26cm、東壁で27cmを測る。面積は、確認面で10.4㎡、床面で9.3㎡となる。床は、ハードローム上面まで掘り込み、その上にロームブロックと暗褐色土の混合土を5~10cm程度敷き詰め、貼床としている。床面は、中央部が固いだけで左右は柔らかい。カマド付近には、床面に粘土が見られる。周溝は、カマド左袖の下から始まり、北東隅の手前までめぐり、柱穴については、規則性のあるピット列は見られない。南側床に6基程度のピットが見られるが、住居に伴うものではない。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分よりやや東に位置する。カマド自体は、住居主軸から10°55'程度さらに東に傾いている。壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とする。袖は、50cm程度の長さで白色粘土を用いて平行に開く。カマドの全長は、105cm(うち煙道部分の長さ45cm)、幅95cm、高さ25cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約45cm、奥行き50cmで、なだらかに立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約15cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに立ち上がる。煙道の幅は、上端で20~40cm、下端で15~25cm、深さは先端で10cmを測る。

遺物については、カマド右脇奥の床面(床直)から須恵器杯(3)、カマド左脇の周溝内から須恵器杯(4)、須恵器甕の胴部破片(14)、カマド正面の床面(床直)から須恵器蓋のつまみ部分(6)、北東隅の床面(床直)から須恵器杯(5)、同床面(+4cm)から土師器甕(13)、南東の床面(+4cm)から土師器杯(1)、カマド内から土師器杯(2)、甕(9・10・12)、覆土中から土師器甕(8・11)、須恵器高台付鉢(7)が出土している。瓦については、カマド燃焼部内から平瓦(15)が出土している。そのほかの遺物として、中央南側の床面(床直)より敲石(16)、中央西側床面(床直)から門の金具(18)、南側床面(+2cm)から鉄釘(17)などが出土している。

土器の特徴 土師器杯については、体部外面を手持ちヘラケズリで整形する平底の非ロクロ土師器杯が主体的

に見られる。須恵器杯(3～5)については永田・不入窯製品のものである。

45号住居跡 (第253～255図、写真図版40・116・152・178)

遺構は、南東側尾根状台地の中央部分のJQ-50、60区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN-9°00'-Eである。形状は、南東側が内側に入るややいびつな方形状で東西軸3.54m、南北軸3.38mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は深く、北壁で68cm、西壁で68cm、南壁で70cm、東壁で66cmを測る。面積は、確認面で11.6㎡、床面で10.27㎡となる。床は、ハードローンを約30～40cm掘り込み、その上にロームブロックと暗褐色土の混合土を5～10cm程度敷き詰め、貼床としている。床面は、全体に固く良好である。カマド付近には、床面に粘土が多く見られる。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。深さは、貼床の高さである。柱穴については、住居内に見られない。住居外の4隅(P1～P4)および南側中央に見られるピット(P5)については、深さが20～40cmと不揃いだが、柱穴の可能性もある。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。カマドは燃焼部と煙道部の方向が食い違っており、煙道は住居主軸から11°30'程度西に傾いている。壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とする。袖は、50cm程度の長さで白色粘土を用いて平行に開く。カマドの全長は、135cm(うち煙道部分の長さ75cm)、幅105cm、高さ60cmを測る。燃焼部分は、最大幅約35cm、奥行き50cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに下り、煙道先端で垂直に立ち上がって終わる。煙道は2段に掘られており、最上端で幅60cm、中段の上端で35cm、最下段で25cm、深さは先端で55cmを測る。中段部分に粘土を詰め煙道の側壁とし、中段以下の掘りくぼめた部分を煙道とする。中段部分には、凹面を上にした平瓦(14)を被せて天井としている。

遺物については、カマド右脇の床面(+1cm)から土師器小型甕(11)、南西隅床面(+2cm)から土師器杯(2)、同床面(+9cm)から底部外面に大きくしっかりとした「×」の線刻のある土師器杯(1)、覆土中から土師器杯(3～6)、須恵器杯(7・8)、土師器甕(9・10)が出土している。瓦については、カマド左正面床面から、行基葺き丸瓦(13)、煙道部天井から平瓦(14)が出土している。そのほかの遺物として、カマド右脇床面(+4cm)から凝灰岩製紡錘車(12)が出土している。

土器の特徴 体部外面、底部を細かな手持ちヘラケズリで整形する器高のある土師器大型坏が主体的に見られる。須恵器杯(7・8)については永田・不入窯製品のものである。

46号住居跡 (第256～258図、写真図版41・116)

遺構は、南東側尾根状台地の中央部分でJR-60、JS-51、52、61、62区に位置する。住居は北西を向き、主軸方位はN-30°20'-Wである。大型の住居で、形状は北東-南西方向にやや長い方形状で北東-南西軸4.9m、北西-南東軸4.7mを測る。壁はしっかりとしており、垂直に掘り込まれている。地形が、西側から東へ下がる斜面部分に作られているため、壁高は北西壁で54cm、南西壁で70cm、南東壁で47cm、北東壁で16cmを測る。面積は確認面で21.14㎡、床面で19.57㎡、内区(主柱穴内側)で5.3㎡となる。床は、西壁でハードローンを30cm掘り込み、ローム土と暗褐色混じりの混合土を10～15cm程度敷き詰め、貼床としている。床面は、中央部が固く、西側、東側は柔かい。周溝は、カマド左脇から始まり、北東の角隅で終わる。南東側壁際中央の床面には、長さ1m、幅40cm、厚さ10cm程の白色粘土の塊が、周溝をふさぐように被さっている。周溝の底には、黒色土が落ち込んでいることからこの粘土塊を置く前から存在していたことになる。主柱穴は、東側の間隔が狭く不整形な形状で4本並ぶ。柱穴は、いずれも直径40cm程度の円形状の掘形で、深さはP1が39cm、P2が80cm、P3が60cm、P4が65cmである。柱間は、P1・P2が2.4m、P1・P3が2.2m、P2・P4が2.0m、P3・P4が2.35mである。

カマドは北西方向で、北西壁の西側と東側に2基認められる。西側のカマド(A期)は袖部、燃焼部を周溝によって壊されていることから古い時期のもので、燃焼部の奥壁を中心とした部分と煙道部を残している。残存長65cm(うち煙道部分の長さ45cm)、幅50cm、高さ17cm、燃焼部分の残存幅35cm、奥行き10cmを測る。袖はほとんど残っておらず、燃焼部内に袖あるいは天井部の構築材の白色粘土ブロックが残っている。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部分と同じ高さで先端に向かい緩やかに下がる。先端部分は15cm程度トンネル状に地中に潜っている。煙道部分の掘形は、上端20cm、下端10cm、深さ約26cmの逆台形状である。東側のカマド(B期)は、北西壁の中央部分よりやや東側に位置する。壁を「 $\neg$ 」字形に掘り込み燃焼部奥壁とする。袖は、90cm程度の長さで白色粘土を用いて平行に開く。右袖は短く、50cm程度である。カマドの全長は、215cm(うち煙道部分の長さ120cm)、幅130cm、高さ50cmを測る。燃焼部分は、最大幅約60cm、奥行き95cmで、なだらかに立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部内の左袖内側はよく焼け、赤化が著しい。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに下り、煙道先端で垂直に立ち上がって終わる。煙道は、中央部がふくらむ形状で2段に掘られており最上端の最大幅95cm、中段でさらに長さ95cm、幅38cmの細長い煙道を掘り込んでいる。深さは、先端で35cmを測る。中段部分に粘土を詰め煙道の側壁とし、中段以下の掘りくぼめた部分を煙道とする。煙道の形状は「U」字形である。

遺物については、A期カマドの燃焼部内から器高の低いやや丸底風の土師器杯(1)、B期カマド内からは土師器甕(11・16)、覆土中からは、土師器杯(2・3・4・5・6)、須恵器杯(7・8)、土師器甕(9・10、12～15、17～21)、土師器甕(22・23)が出土している。

土器の特徴 全体的に体部外面、底部に細かなヘラケズリで整形する非ロクロの杯が主体を占める。土師器杯(1)は鬼高期の系譜を引く丸底風の器高の低い杯で、口縁部内側にかえりを持つ古い様相を示す。須恵器杯(7)については、永田・不入窯製品であろう。なお土師器杯(6)はロクロ整形で、底部を回転ヘラケズリで整形する杯である。

47号住居跡(第259～261図、写真図版41・116・117・173)

遺構は、南東側尾根状台地の南東側でJ S—74、75、84、85、86区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—19°00′—Wである。形状は、正形状で東西軸4.25m、南北軸4.2mを測る。住居の壁は、きちっと垂直に掘り込まれ、角も直角で極めて規格性のある形状である。地形が西側から東へやや下がる斜面部分に作られているため、壁高は北壁で60cm、西壁で92cm、南壁で77cm、東壁で31cmを測る。面積は、確認面で17.64㎡、床面で15.8㎡、内区(主柱穴内側)で3.5㎡となる。床は、西側壁でハードローンを30cm程掘り込み、その上にローンブロック主体の土と暗褐色土の混合土を10cm程度敷き詰めて貼床としている。床面は水平ではなく、全体的に西側が約13cm程度高い。柱穴内の内区部分がよく締まっているが、全体に周囲は軟弱である。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周するものの、南東側部分が乱れている。西側床面には、壁に直角に2mの間隔をおいて2本の溝が平行に掘り込まれている。おそらく住居内の小区画の痕跡と思われる。柱穴は、ほぼ対角線上に4本認められる。直径40cm程度の円形でほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が48cm、P2が68cm、P3が40cm、P4が43cmである。柱間は、東西方向が狭いものの間隔はそれぞれ均等である。P1・P2が1.7m、P1・P3が2.0m、P2・P4が2.0m、P3・P4が1.75mである。南側中央部分に径30cm、深さ25cm程度のピットが2基(P5・P6)認められるが、住居出入口施設の柱穴と思われる。また住居の南東隅床面に径30cm程度の粘土塊が、床面に密着した状態で検出されている。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とする。山砂を

用いて長さ70cm程度の「ハ」の字状に開く袖を構築する。しっかりとした作りで、全長は170cm(うち煙道部分の長さ83cm)、幅115cm、高さ45cm、燃焼部分は、最大幅55cm、奥行き75cmで、急に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃焼部奥壁より20cm程度の段をつけ、先端に向かって緩やかに下り、先端部分で径35cm程度のピットを作って終わる。煙道の上端幅は43cm、下端20cm、最も深い先端部で40cmとなる。

遺物については、カマド左正面の柱穴付近床面(床直)から土師器杯(1)、同右側付近の床面(+4cm)から土師器杯(3)、東側周溝内から土師器甕(10)、カマド左脇の北側周溝内(+28cm)から須恵器高台付杯(6)、中央床面(+5cm)から土師器甕(9)、覆土中から土師器杯(2)、内面を黒色処理した杯(4)、須恵器杯(5・8)、椀(7)、土師器甕(11・14)、小型甕(12・13)、須恵器甕破片(15)などが出土している。そのほかの遺物については、覆土中から丸瓦(16・17)、平瓦(18)、中央床面(+9cm)から刀子(19)が出土している。

土器の特徴 非ロクロ土師器杯が主体を占めている。特に器高の低い平底で、体部外面をざっくりと大きく削る手持ちヘラケズリ整形する杯が多い。またロクロ整形で、内面を丁寧なヘラミガキ後、黒色処理する大型の土師器杯(4)が認められる。土師器小型甕(13)は外面にハケ調整を行う。

48号住居跡 (第262～264図、写真図版42・117・177)

遺構は、南東側尾根状台地の先端部分でJ S—34、44区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—8°05′—Eである。南側の49号住居跡と重複関係で、状況から48号住居跡が新しい。形状は正形状で、東西軸3.5m、南北軸3.56mを測る。住居の角は、北側部分がやや隅丸で、壁は垂直に掘られている。壁高は、北壁で52cm、西壁で81cm、南壁で76cm、東壁で34cmを測る。49号住居跡の床面からは、18cm程度さらに掘り込んで作られている。面積は、確認面で11.73㎡、床面で10.72㎡となる。床は、西側でハードローンを20cm程度掘り込み、その上にローン土を主体とした混合土を5cm程度敷き詰めて貼床としている。床面は、全体に固くよく締まっている。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。柱穴については、規則性のあるものは認められないが、南側中央壁際および南東隅の床面にそれぞれ径15cm、深さ26cm、径30cm、深さ20cmのピット(P1・P2)があり、P1は住居出入口施設の柱穴の可能性が考えられる。

カマドは北方向で、北側壁の中央よりやや南に位置する。壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とする。白色粘土を用いて長さ50cm程度で平行に開く袖を構築する。カマドの全長は178cm(うち煙道部分の長さ100cm)、幅100cm、高さ30cm、燃焼部分は最大幅50cm、奥行き80cmで、緩やかに立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部の火床は16cm程度の深さで袖部分より外側に出る。住居外に延びる煙道部分は燃焼部奥壁よりなだらかに上がって、先端に向かって水平に延びる。煙道の上端幅は30～50cm、下端15～20cm、先端部で10cmとなる。

遺物については、カマド内から土師器杯(1)、甕(7・9・10)、カマド左側床面(+4cm)から土師器杯(2)、南側壁際の床面(+6cm)から須恵器杯(4)、東側床面(+2cm)から須恵器蓋(6)、覆土中から土師器杯(3)、須恵器高台付杯(5)、土師器甕(8・11)、須恵器大型甕の胴部片(12)が出土している。そのほかの遺物としてカマド内から石製砥石(14)、カマド左正面の床面(+4cm)から鉄釘(15)、覆土中から玉縁の丸瓦(13)が出土している。

土器の特徴 体部外面を削りの細かい手持ちヘラケズリで整形する土師器杯が主体的である。須恵器類については永田・不入窯製品と思われる。土師器甕(10・11)については武蔵型甕で、器壁が非常に薄く口縁部を「く」の字状に長く外反させ、口縁部付近の胴部上半を横方向のヘラケズリで整形する。

49号住居跡 (第262・265図、写真図版42・117・172・173)

遺構は、南東側尾根状台地の先端部分でJ S—34、44、45区に位置する。住居の3/5以上を、北側の48号住居跡によって壊されている。住居は北西を向き、主軸方位はN—5°20′—Wである。形状は、南北に長い縦長方形と思

われ、推定南北軸3.2m、東西軸2.85mを測る。住居の角はやや隅丸で、壁は、垂直に掘られている。壁高は南壁で40cm、東壁で34cmを測る。面積は、復元値で確認面8.68㎡、床面で7.83㎡となる。床は、西側でハードローム上面を床面としている。床面は全体に固い。周溝は認められない。柱穴については、残存部分では確認できなかった。

カマドは、北側壁にあったと思われるが、48号住居跡に壊されているため不明である。

遺物については、48号住居跡の南側壁に近い床面(床直)から須恵器杯(5)を上にして土師器杯(1～3)が重ねられた状態で出土している。また南側壁際の床面(+7cm)から土師器杯(4)、東側壁際の床面(+14cm)から須恵器杯(6)、東側壁際床面(床直)から土師器甕(7)が出土している。そのほかの遺物として東側床面(+14cm)、南西隅床面(+10cm)から鉄釘(8)、南東隅の壁際床面(床直)から大形の鉄鎌(9)が出土している。

土器の特徴 体部外面を削りの細かい手持ちヘラケズリで整形する土師器杯が主体を占める。このうち土師器杯(3・4)については上総地域特有の体部内面に斜格子状暗文を施す。須恵器高台付杯(5)については永田・不入窯製品と思われる。土師器甕(7)については武蔵型甕で、器壁が非常に薄く口縁部を「く」の字状に長く外反させ、口縁部付近の胴部上半を横方向のヘラケズリで整形する。

50号住居跡 (第266図、写真図版43)

遺構は、南東側尾根状台地の中央部分でJ S-15、16、25、26区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—18°00′—Wである。形状は、南北に長い縦長方形で南北軸3.45m、東西軸3.1mを測る。住居の角は隅丸で、壁は垂直に掘り込まれている。地形が西側から東へやや下がる斜面部分に作られているため、壁高は、北壁で50cm、西壁で56cm、南壁で43cm、東壁で11cmを測る。面積は、確認面で9.86㎡、床面で8.76㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面としている。部分的に凹凸があり、その部分だけに土を埋め込み平坦としている。床面はカマドによった部分が固いのみで、全体に軟弱である。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。規則性のある柱穴については、見られない。南側中央床面に径30cm、深さ25cmの円形ピット(P1)が認められるが、これは住居出入口施設の柱穴と考えられる。このほか、床面に見られるピットは、この住居に伴うものではない。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分よりやや東に位置する。壁を掘り込まずにそのまま燃烧部奥壁とする。袖は60cm程度の長さで白色粘土を用いて平行に開く。煙道部は大方を削られ、燃烧部との境付近の底部に敷いた粘土が残るのみである。カマドの全長は105cm(うち残存煙道部分の長さ25cm)、幅85cm、高さ35cmを測る。燃烧部分は、最大幅約45cm、奥行き75cmで、やや急に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃烧部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに傾斜する。煙道の幅は現状で30cmを測る。

遺物については、時期を検討できる資料が少ない。南側壁際柱穴内から土師器杯(1)、カマド内から土師器杯(3)、覆土中から土師器杯(2)が出土している。瓦については、中央床面(床直)から丸瓦の破片(4)が出土している。

土器の特徴 土師器杯(1)については、内面にロクロ整形と思われる横ナデが見られる。他の杯については体部外面を手持ちヘラケズリで整形する非ロクロ杯と思われる。不明な部分が多い。

51号住居跡 (第267・268図、写真図版43・117・118・173)

遺構は、南東側尾根状台地先端部分の北東斜面部でJ S-38、39、48、49区に位置する。南側の52号住居跡を壊して作られている。住居は北を向き、主軸方位はN—11°30′—Wである。形状は、西側壁が北方向に長い変形した方形状を呈している。壁の長さは、西側壁3.3m、東側壁3.0m、北壁3.5m、南壁3.2mを測る。住居の角は、東側部分がやや隅丸で、西側部分が直角の形状である。壁は垂直に掘られている。地形上、南西側から北東側に下がる傾斜部分に作られていることから、壁高は北壁で51cm、西壁で76cm、南壁で83cm、東壁で30cmとなってい

る。また52号住居跡の床面からは5cm程度さらに掘り込んで作られている。面積は、確認面で9.6㎡、床面で7.3㎡となる。床は、西側でハードローンを30cm程度掘り込み、その上にローン混じりの暗褐色土を5～10cm程度敷き詰めて貼床としている。床面は中央部が固いのみで、周囲は軟弱である。周溝は西側壁部分および南側壁から東側壁の2/3付近までの部分が途切れた形でめぐっている。柱穴については、規則性のあるものは認められないが、東側壁部分に直径40cm、深さ47cm程度の円形状ピット(P1)があり、柱穴の可能性が考えられる。

カマドは北方向で、北側壁の中央よりやや西に位置する。壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とする。白色粘土を用いて長さ55cm程度で「ハ」の字状に開く袖を構築する。カマドの全長は、115cm(うち煙道部分の長さ60cm)、幅105cm、高さ30cm、燃焼部分は、最大幅55cm、奥行き55cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部内の両袖は、よく焼け赤化している。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より15cmの高さで先端に向かって緩やかに立ち上がる。天井、側壁、床には粘土が敷き詰められている。煙道の上端幅は25cm、下端20cm、深さ7cm程度となる。

遺物については、カマド内から土師器杯(1)、甕(12・13)、カマド右脇床面(+2cm)から土師器甕(10)、同(床直)から須恵器高台付長頸壺(15)、カマド左脇床面(+1cm)から土師器甕(11)、南側床面(+10cm)から土師器の短頸壺(14)、南東壁際の床面(+27cm)から底部外面に「潔」の墨書の須恵器杯(7)、南側壁際床面(+20cm)および周溝内から須恵器杯(8)、覆土中から土師器杯(2～5)、高杯(9)、須恵器杯(6)、大型甕の胴部破片(16)などが出土している。そのほかの遺物として南側床面(+3cm)から刀子(17・18)が出土している。

土器の特徴 体部外面を削りの細かい手持ちヘラケズリで整形する土師器杯が主体を占める。須恵器杯(6)については永田・不入窯製品と思われる。土師器短頸壺(14)については、器肉が分厚く口縁部が直立するタイプで、あまり見かけないものである。

52号住居跡 (第267図、写真図版43)

遺構は、南東側尾根状台地先端部分の北東斜面部でJ S—48、49区に位置する。住居の2/3以上を北側の51号住居跡によって壊されている。住居は北を向き、主軸方位はN—13°50'—Wである。形状は方形と思われ、推定で南北軸3.1m、東西軸3.1mを測る。住居の角はやや隅丸で、壁の掘り込みはやや傾斜している。壁高は、西壁で85cm、南壁で77cm、東壁で43cmを測る。面積は、復元値で確認面9.6㎡、床面で7.3㎡となる。床は、西側でハードローン上面を直接床面としている。床面は踏み固められたようすはなく、全体に柔かい。周溝も認められない。柱穴は、残存部分では確認できなかった。

カマドは、北側壁にあったと思われるが、51号住居跡に壊され不明である。

遺物は検出されなかった。

53号住居跡 (第269・270図、写真図版44・118)

遺構は、南東側尾根状台地先端部分の南東斜面部でJ T—61区に位置する。宅地造成の際の掘削で、東側3/5以上を壊されている。住居は北西を向き、主軸方位はN—8°25'—Wである。形状は方形状と思われ、北壁にカマドを持つ。規模の分かる部分が削られているため大きさは不明だが、推定で南北軸3.8m、東西軸3.8mを測る。壁は垂直に掘り込まれ、壁高は北壁で43cm、西壁で52cm、南壁で28cmを測る。面積は、方形状と仮定して確認面で14.4㎡、床面で12.9㎡となる。床は、西側でハードローンを約20cm掘り込み、東側でソフトローン面を直接床面としている。床面は西側で固く、東側では柔かい。周溝はカマドの位置を除いて、床面より10cm程掘り下げている。柱穴は、カマドの左右正面に東西方向に2基認められる。円形でほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴はP1が径50cm、深さ37cm、P2が径30cm、深さ39cm、柱間は、P1・P2が1.9mである。

カマドは北方向で、壁を「ハ」字形に掘り込んで燃焼部と煙道を構築する。白色粘土を用いて長さ50cm程度で「ハ」の字状に開く袖を構築する。カマドの全長は、80cm(うち煙道部分の長さ20cm)、幅100cm、高さ30cm、燃焼部分は、最大幅60cm、奥行き60cmで、なだらかに立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は短く、燃焼部より15cmの高さで、先端に向かって緩やかに立ち上がる。カマド左袖の基部には径35cm程度の変形なピットが認められるが、カマドに付随した柱穴の可能性も考えられる。

遺物については、カマド右袖外側の床面(床直)から底部外面に○の中に|を組み合わせた記号のような線刻とそれをなぞるように墨書された内面黒色処理の土師器杯(1)、カマド西側壁際の床面(床直)から土師器碗(2)、同東側壁際の床面(床直)に置かれたような状態で出土した須恵器高台付杯(5)、同正面の床面(床直)から土師器甕(7)、台付甕(8)、覆土中から土師器杯(3・4)、須恵器蓋(6)、丸瓦(9)が出土している。

土器の特徴 体部外面を削りの細かい手持ちヘラケズリで整形する土師器杯類が主体を占める。須恵器高台付杯(5)は、胎土に雲母片を含む。

55号住居跡 (第271図、写真図版44・118)

遺構は、南東側の尾根状台地先端部分の北東斜面部で I S—99、J S—08、09区に位置する。規模の小さい住居で、住居は東を向き、主軸方位はN—69°00′—Eである。形状は、南北に長い横長の方形状で東西軸2.1m、南北軸2.8mを測る。地形が西側から東へ下がる斜面部分の最下位に作られているため、西側が高く住居の東壁は不明瞭ではっきりしない。壁高は北壁で44cm、西壁で48cm、南壁で43cm、東壁で5cmを測る。面積は、確認面で5.88㎡、床面で4.7㎡となる。床は、西側でハードローム面を約20cm掘り込み、その上に暗褐色土のごく少量混入したハードロームを5～10cm程度敷き詰め床面としている。床面は全体に固く良好である。周溝は東壁を除いて全周する。柱穴については規則性のあるピット列は見られないが、北西隅の床面に径35cm、深さ62cmの円形ピット(P1)があり、この住居に伴うものである。

カマドは東方向で、住居東側壁の南隅に位置する。カマド自体は、住居主軸から11°05′程度さらに東に傾いている。壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁としている。袖は45cm程度の長さで白色粘土を用いて平行に開く。煙道部は、現状では認められないが、地形が傾斜のある斜面部であることから、ロームを掘り込まずに作られていた可能性もある。カマドの全長は50cm、幅80cm、高さ15cmを測る。燃焼部分は、最大幅50cm、奥行き40cmで垂直な奥壁を持つ。

遺物については、北側壁際の床面(+9cm)から土師器杯(1)、覆土中から土師器杯(2・3)、甕(4)、須恵器大型甕の口頸部(5)が出土している。

土器の特徴 体部外面を削りの広い手持ちヘラケズリで整形する器高の低い平底の土師器杯が主体を占める。土師器杯(1)については、内面に弱い斜格子状暗文が見られる。

56号住居跡 (第272図、写真図版44・118)

遺構は、南東側の尾根状台地先端部分の北東斜面部 I S—68、69、78、79区に位置する。住居の南東半分を攪乱により削られているため不明部分が多い。東向きの住居として考えた場合、主軸方位はN—74°30′—Eと考えられる。方形状として復元すると東西軸2.9m、南北軸3.4mとなる。地形が西側から東へ下がる斜面部分の最下位に作られているため、西側が高い。壁高は北壁で43cm、西壁で57cm、南壁で42cm、東壁は削られており不明。面積は、復元値で確認面9.2㎡、床面で8.2㎡となる。床は西側でハードローム面を掘り込み、その上にロームブロックを主体とした混合土を敷き詰め貼床としている。床面は、全体に固く良好であるが凹凸が著しい。周溝、柱穴は認められない。北側床面には径40cm、厚さ7cm程度の粘土塊が貼り付いている。

カマドは東部分にあったものと思われる。

遺物については少なく、わずかに中央北側の床面(+10cm)から土師器甕(2)、覆土中から土師器杯(1)、鉄釘(4)、北東床面(+3cm)から平瓦(3)が出土している。

土器の特徴 時期を決定できる遺物は少ない。土師器杯(1)については体部外面を手持ちヘラケズリで整形する。土師器甕(2)は、口縁部に凹線をめぐらせ、端部をつまみ上げ、胴部外面を斜行するヘラミガキを施した後、弱いが縦方向のヘラケズリで整形する。常総型の甕で下総北部系統と思われる。

57号住居跡 (第273図、写真図版45)

遺構は、南東側の尾根状台地の先端部分で I S—83、84、93、94区に位置する。南側の58号住居跡によって4/5を壊されている。北方向を向く住居で、主軸方位はN—7°25′—Wである。形状を正方形とした場合、東西軸3.7m、南北軸3.7mとなる。住居の角はやや隅丸で、壁は垂直に掘られている。壁高は、北壁で39cm、西壁で52cmを測る。面積は、復元で確認面12.9㎡、床面で11.6㎡となる。床は、西側でハードローンを直接床面としている。全体は不明だが、周溝をめぐらす。床面が大方壊されているため、柱穴については不明だが、北側および西側の周溝に径25cm程度のピットが認められる。また、西側壁際に粘土塊があり周溝を覆っている。

カマドは、58号住居跡のカマドによって壊されているが、わずかにカマドの左袖、煙道の一部が残っている。残存カマドから推定すると、北方向で北側壁のほぼ中央に位置する。白色粘土を用いて長さ45cm程度の袖を構築する。カマドの全長は現状で95cm(うち煙道部分の長さ50cm)、高さ25cmの規模である。

遺物は出土しなかった。

58号住居跡 (第273～275図、写真図版45・118・119・175・177・178)

遺構は、南東側の尾根状台地の先端部分で I S—84、94、95区に位置する。57号住居跡を壊して南東側にややずらして建替えている可能性が考えられる。住居は北を向き、主軸方位はN—16°45′—Wである。形状は東西にやや長い横長の方形で東西軸3.95m、南北軸3.7mを測る。住居の角は隅丸で、壁は垂直に掘られている。地形が西側から東へ下がる斜面部分の上端に作られているため、壁高は北壁で71cm、西壁で84cm、南壁で51cm、東壁で20cmを測る。面積は、確認面で13.9㎡、床面で12.9㎡、内区(主柱穴内側)で3.96㎡(内側3.42㎡)となる。床はハードローンを約40cm掘り込み、直接床としている。床面は全体に固く良好で、特に柱穴内の内区部分がよく締まっている。部分的にハードローンと粘土の混合土を敷き詰め強固にしている。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。柱穴は、ほぼ対角線上に規則的に並ぶ。南側のP3・P4の2本の柱穴はピットの重複があり、2時期の立替えが認められる。切り合いから外側部分が初めに立てられ、その後柱間を短くして内側に新たに立替えたもようである。いずれも直径30～40cm程度の円形でほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が29cm、P2が41cm、P3-1(古)が40cm、P3-2(新)が50cm、P4-1(古)が27cm、P4-2(新)が39cmである。なおP3-2では柱痕跡が残っており、径10cm程度の柱であったことが分かる。柱間は南北方向が長く、P1・P2が1.8m、P1・P3-1が2.2 m、P1・P3-2が1.9 m、P2・P4-1が2.1m、P2・P4-2が1.8m、P3-1・P4-1が1.8m、P3-2・P4-2が1.75 mである。南側中央部分に径30cm、深さ20cm程度のピット(P5)が認められるが、住居出入口の構造物に関連するものであろう。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。57号住居跡のカマドを壊してその南部分に構築する。カマドは壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とする。白色粘土を用いて長さ65cm程度の「ハ」の字状に開く袖を作る。しっかりとした作りで、全長は205cm(うち煙道部分の長さ125cm)、幅135cm、高さ40cm、燃焼部分は最大幅60cm、奥行き80cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部の火床部分はよく焼けて硬化しており赤化が著し

い。住居外に延びる煙道部分は燃焼部奥壁より30cm程度の段をつけ、先端に向かって緩やかに下り、先端部分で径40cm程度のピットを作って終わる。先端部の両脇に2枚の平瓦があるが、煙道の天井蓋に使用したものと思われる。煙道の上端幅は40cm、下端30cm、最も深い先端部で53cmとなる。

遺物については、カマド燃焼部の火床から土師器杯(1)、カマド内から土師器杯(3)、甕(5・7)、覆土中から土師器杯(2・4)、甕(6)、須恵器甕(8)、須恵器大型甕の胴部破片(8～10)、丸瓦(17)などが出土している。そのほかの遺物については、南側床面の柱穴内(P3-2)から石製砥石(12)、鉄釘(13)、カマド煙道左側から土製支脚(11)、カマド右脇の床面(+2cm)から平瓦(18)、鉄釘(14・15)、中央床面(床直)からかすがい(16)などが出土している。なお煙道部分に天井の蓋として使用されていた平瓦については行方不明のため図示し得なかった(第273図および写真図版45)。

土器の特徴 器高の高い、体部外面を連続して大きく削る手持ちヘラケズリ整形の土師器杯が主体を占める。

59号住居跡 (第276～278図、写真図版45・46・119・153)

遺構は、南東側の尾根状台地の中央部でJR-39、40、49区に位置する。住居は北西を向き、主軸方位はN-8°25'-Wである。形状は東西方向に長いやや横長の方形状で東西軸4.2m、南北軸3.75mを測る。住居の角は隅丸で、壁は垂直に掘り込まれている。北壁で36cm、西壁で49cm、南壁で23cm、東壁で18cmを測る。面積は、確認面で14.8㎡、床面で12.9㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面としている。やや凸凹しているが貼床にしていなため、全体に固く締まっている。周溝は北壁、西壁に認められる。全体的に幅広の周溝である。規則性のある柱穴は見られないが、南側中央の床に径30cm、深さ37cm程度のピット(P1)が認められる。住居出入口施設の柱穴であろう。

カマドは北向きで、北壁の東隅近くに位置する。壁を掘り込まずそのまま利用して燃焼部の奥壁とする。袖は45cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は130cm(うち煙道部85cm)、幅80cm、高さ25cmを測る。燃焼部分は最大幅約50cm、奥行き45cmで、深さ8cm程度のピット状の火床を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かい水平に延びる。煙道は上端で20～40cm、下端で10～25cm、深さは先端で15cmを測る。

遺物については、北側周溝内(+6cm)から土師器杯(1)、中央床面(+1cm)から須恵器大型甕の口頸部(9)、西側床面(+19cm)から土師器高台付甕の底部(5)、覆土中からは土師器杯(2)、須恵器杯(3)、蓋(6)、高台付椀(7)、土師器小型甕(4)、須恵器大型甕の口頸部(10)、甕(11)、須恵器長頸壺(8)が出土している。瓦については、南西隅の床面(床直)から熨斗瓦(16)、中央西側床面(床直)から行基葺き丸瓦(14)、南西床面(+2cm)から行基葺き丸瓦(15)、覆土中から玉縁の丸瓦(13)、平瓦(17)、均整唐草文の軒平瓦(12)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については、器高があり体部外面を手持ちヘラケズリで整形する杯が主体を占める。須恵器杯(3)は黒褐色の杯で千葉地域産のものである。須恵器長頸壺(8)については、猿投窯折戸10号形式の範疇にはいる。

60号住居跡 (第279・280図、写真図版46・119・177)

遺構は、南東側の尾根状台地の中央部JR-25、26、36区に位置する。住居は北西を向き、主軸方位はN-8°10'-Wである。形状は、東西方向に長いやや横長の方形状で東西軸3.8m、南北軸3.55mを測る。住居の壁はきちつと垂直に掘り込まれ、角も直角で極めて規格性のある形状である。壁高は、北壁で36cm、西壁で41cm、南壁で53cm、東壁で20cmを測る。面積は、確認面で13.3㎡、床面で12.25㎡となる。床面は、ほぼハードローム上面を床とするが、掘り込みに際して凹凸があり、その部分だけに粘土ブロック混じりの土を詰めて平坦にしている。床面

は、中央部が固くなっているのみで周囲は柔かい。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。深さは床より深く掘り込まれている。規則性のある柱穴は見られないが、カマド左脇の北側壁に径30cm、深さ37cm、右脇の外側に径30cm、深さ35cm程度のピット(P1)が認められる。カマドに付随した何らかの施設の可能性が考えられる。また南側中央床面には径20cm、深さ26cmのピット(P2)があるが、住居出入口施設の柱穴であろう。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。壁を掘り込まずそのまま利用して燃焼部の奥壁とする。袖は70cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、130cm(うち煙道部55cm)、幅140cm、高さ25cmを測る。燃焼部分は最大幅約55cm、奥行き70cmで急な立ち上がりの奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約15cm高い位置で、そこから「ㄩ」字形に掘り込む。煙道は上端基部で50cm、先端部で15cm、下端部分で35cm、深さは先端で10cmとなる。

遺物については、南西隅の床面(床直)から須恵器甕(3)、南側壁際の床面(+8cm)から土師器甕(1)、カマド内より土師器甕(2・4・7)、覆土中から土師器甕(5・6)、軽石製の砥石(8)などが出土している。

土器の特徴 須恵器甕(3)については、胎土に雲母を含んでいる。

66号住居跡(第281図、写真図版46・47・119・120)

遺構は、南側台地の北斜面寄りのJ P—70、80、J Q—61、71区に位置する。住居は北西を向き、主軸方位はN—30°00′—Wである。形状は、南西側壁が長いやや変形した方形状で北西—南東軸3.3m、北東—南西軸3.1mを測る。住居の角は直角ではあるが、壁は浅く全体的形態としてはあまり整っていない。壁高は、北西壁で27cm、南西壁で17cm、南東壁で21cm、北東壁で18cmを測る。面積は、確認面で9.42㎡、床面で8.5㎡となる。床はソフトローム面を直接床面とし、中央部が固いだけで全体に軟弱である。周溝はソフトロームを掘り込んでおり、カマドの位置を除いて全周する。床面にピットが確認できるが、いずれも浅く柱穴とは考えにくい。南東側壁際中央の床面にはピット(P1)が並列しているが、住居出入口の施設の柱穴であろう。

カマドは北西方向で、北西側壁のほぼ中央部分に位置する。壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とし、煙道部を設けないカマド形態となっている。白色粘土を用いて長さ45cm程度の「ハ」の字状に開く袖を構築する。カマドの全長45cm、幅140cm、高さ13cm、燃焼部の最大幅は約50cmを測る。燃焼部奥壁は垂直に立ち上がっている。

遺物については、東側床面(+2cm)から土師器杯(1)、カマド右脇の床面(+7cm)から土師器杯(3)、同床面(+10cm)から土師器杯(5)、同左脇床面(+6cm)から土師器皿(6)、カマド内から土師器杯(2・4)、甕(7~9)が出土している。なおカマド内から支脚として使用されたであろう平瓦が出土しているが破片のため図示し得なかった。

土器の特徴 ロクロ整形の土師器杯が主体的で、体部外面を回転ヘラケズリで整形する杯(1~3)、体部がやや内彎し、外面を手持ちヘラケズリで整形する杯(4・5)に分けられる。土師器杯(1)、土師器皿(6)は、底部を回転糸切りで切り離したまま整形調整をしていない。土師器杯(5)については、内面を横方向の丁寧なヘラミガキ、底部についても一方向の入念なヘラミガキを施している。

67号住居跡(第282・283図、写真図版47・119)

遺構は、南側台地の中央部K Q—41、51区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—9°20′—Eである。形状はやや北西に突出する平行四辺形状で、南北軸3.1m、東西軸3.1mを測る。住居の角は北東、南東が隅丸のほかはほぼ直角となる。壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で34cm、西壁で38cm、南壁で48cm、東壁で43cmを測る。面積は、確認面で9.46㎡、床面で8.47㎡となる。床はハードローム上面まで掘り込み、その上に暗褐色土を含むロームブロックを主体とした混合土を5cm程度敷き詰め、貼床としている。床面は、全体に固く極めて良好である。周溝はカマド部分を除いて全周する。柱穴については、規則性のあるピット列は見られない。住居

の南西隅と南側床面には70～80cm、厚さ15cm程度の粘土塊が見られるが、床面との間に覆土が一層入っていることから住居廃棄後に混入したものである。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。壁を「 $\cap$ 」の字形に掘り込んで燃焼部奥壁とする。袖は70cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、130cm(うち煙道部分の長さ55cm)、幅140cm、高さ30cmを測る。燃焼部分は火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約65cm、奥行き75cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約25cm高い位置で、そこから先端に向かって下り、径35cmのやや楕円形のピットを作る。煙道の幅は上端で35cm、下端で25cm、深さは先端で24cmを測る。

遺物については、北東の柱穴付近床面(床直)から須恵器杯(1)、カマド正面の床面(床直)から須恵器杯(7)、カマド内から土師器台付甕脚部(12)、南側の粘土塊の上(+6cm・+12cm)から須恵器杯(2・5)、西側壁際の粘土塊の上(+38cm)から土師器台付甕脚部(11)、覆土中から土師器杯(3・4)、須恵器杯(6)、土師器甕(9・10・13)、須恵器蓋(8)、大形甕の胴部破片(14)、丸瓦(15)、平瓦(16)などが出土している。このうち、南側および西側の粘土塊上から出土している遺物については、住居廃棄後に投棄されたものの可能性がある。

土器の特徴 体部外面を手持ちヘラケズリで整形する平底の土師器杯が主体的に見られる。須恵器杯(1)については永田・不入窯製品、須恵器杯(5～7)については茶灰色で、千葉地域周辺のものである。

68号住居跡 (第284・285図、写真図版48・120・173)

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近K P-66、67、76、77区に位置する。住居は南東を向き、主軸方位はN-115°30'-Eである。形状は、北東-南西にやや横長の方形状で、北東-南西軸3.63m、北西-南東軸3.36mを測る。住居の角は隅丸で、壁は浅いが垂直に掘り込まれている。壁高は、南東壁で19cm、北東壁で25cm、北西壁で18cm、南西壁で18cmを測る。面積は、確認面で11.52m²、床面で10.7m²となる。床は、ソフトローム面を直接床面とする。床面は、カマドに寄ったほぼ中央部が固いのみで全体に軟弱である。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。深さはソフトロームを5cm程掘り込んでいる。規則性のある柱穴については認められない。なお、北側床面に貝ブロックが認められるが、これは住居の廃絶後に捨てられたものである。

カマドは南東方向で、南東壁の中央部分よりやや北に位置する。壁を「 $\neg$ 」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は50cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、210cm(うち煙道部分の長さ150cm)、幅105cm、高さ25cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約60cm、奥行き60cmで、垂直な奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かって水平に延びる。先端部分および中位にピット状のくぼみが見られる。煙道の幅は上端で35～40cm、下端で20～25cm、深さは15cmを測る。

遺物については、西側壁際の床面(床直)から土師器杯(1)、カマド内から土師器杯(3)、甕(7・8・10)、平瓦(12)、須恵器甕(6)、カマド正面の床面(+2cm)から須恵器杯(4)、同右正面の床面(床直)から刀子(13)、西側隅床面(+3cm)から土師器小型甕(9)、覆土中から土師器杯(2)、須恵器杯(5)、軽石製砥石の破片(11)が出土している。

土器の特徴 非ロクロの土師器杯が主体的に見られる。土師器杯(3)は体部内・外面にロクロ整形による凹凸が見られ、外面を大きく手持ちヘラケズリで整形している。須恵器杯(4)は永田・不入窯製品である。

78号住居跡 (第286・287図、写真図版48・120・172・178)

遺構は、南側台地の北斜面寄り部分でJ P-85、86、95、96区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN-8°10'-Eである。形状は、東西方向に長いやや横長の方形状で東西軸3.0m、南北軸2.75mを測る。住居の壁はきちっと垂直に掘り込まれ、角も直角に曲がり極めて規格性のある形状である。壁高は深く、北壁で54cm、西壁で

56cm、南壁で60cm、東壁49cmを測る。面積は、確認面で7.83㎡、床面で6.66㎡となる。床は、ハードローンを15cm程度掘り込み、その上にローンブロックを主体とした褐色土の混合土を5～10cm程度敷き詰め貼床とする。床面は、中央部が固く締まっているのみで、全体に軟弱である。周溝は、カマドの位置および住居北西隅を除いて全周する。周溝の幅は一定ではなく南側部分は広い。規格性のある柱穴は認められないが、南側中央床面に径25cm、深さ30cm程度のピット(P1)があり、住居出入口施設の柱穴と思われる。

カマドは北方向で、北側壁の東隅に位置する。カマド自体は住居主軸から13°10′程度さらに東に傾いている。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は「U」字形の燃焼部分の下半部から70cm程度の長さで「ハ」の字状に開く。燃焼部の一部および袖は白色粘土で構築する。カマドの全長は、123cm(うち煙道部分25cm)、幅120cm、高さ45cmを測る。燃焼部分は住居外まで延び、幅約40cm、奥行き100cmで、奥壁はなだらかに立ち上がる。煙道は燃焼部と一体となっており、はっきりとした部分は認められない。

遺物については、北東隅の床面(床直)から土師器杯(1)、甕(4・5)、丸瓦(9・10)、南東隅床面(床直)から須恵器杯(3)、南側の床面(+2cm)から摘鎌と思われる破片(12)、同壁際の柱穴付近の床面(+5cm)から土師器杯(2)、カマド煙道部分から土師器甕(7)、覆土中から土師器甕(6)、須恵器甕(8)、敲石(11)などが出土している。

土器の特徴 非ロクロ土師器杯が主体的に占める。土師器杯(1)は、器壁が分厚くやや丸底風である。須恵器杯(3)については底部を回転糸切りで切り離し、中央部を残して外周を回転ヘラケズリで整形している。須恵器甕(8)は茶灰色系で、下総地域の所産と考えられる。

86号住居跡 (第288・289図、写真図版49・50・120・180)

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近でKO—35、45、46区に位置する。北側隣接の87号住居跡に煙道部分を壊されていることから87号住居跡より古い。住居は北西を向き、主軸方位はN—10°40′—Eである。形状は南北方向に長く縦長で、東側壁がやや内側に傾く方形状で南北軸3.54m、東西軸3.44mを測る。住居の壁はきっちりと垂直に掘り込まれ、角は直角である。壁高は、北壁で37cm、西壁で35cm、南壁で39cm、東壁で33cmを測る。面積は、確認面で11.56㎡、床面で10.08㎡となる。床面はハードローン面を10～15cm程度掘り込んで、その上にローンを主体に黒色土・暗褐色粒土を含む混合土を敷き詰め貼床としている。中央部分はローンの床面が見られ、周囲に貼床部分が多く見られる。床面には粘土ブロックが多く残る。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。周溝はカマドの位置を除いて全周する。規則性のある柱穴は見られないが、南側中央床面に径25cm、深さ12cmのピット(P1)があり、住居出入口施設の柱穴と考えられる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分からやや東側に位置する。87号住居跡を作る際に煙道部分を、カマド中央部に一辺90cm程度のやや四角い攪乱で大方を壊されている。袖は部分的に残っている。左袖は55cm程度の長さで白色粘土を用いている。カマドの全長は、現存で105cm(うち残存煙道部15cm)、幅105cm、高さ20cmを測る。燃焼部分の形状は不明。住居外に延びる煙道部分は基部が残っており、上端で35cm、下端部分で13cm、深さ20cmとなる。

遺物については、東側壁際の床面(床直)から置いたような状態で土師器杯(1)、覆土中から土師器甕(2～4)、須恵器大形甕の胴部破片(5・6)、平瓦(8)、管状土錘(7)などが出土している。

土器の特徴 非ロクロの土師器杯が主体となる。

87号住居跡 (第288・290～292図、写真図版49・50・120・153・180)

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、KO—25、35区に所在する。南側隣接には86号住居跡があり、その煙道部分を壊して作られている。住居は北を向き、主軸方位はN—3°45′—Wである。形状は、東西

方向に長い横長の方形状で、西側壁はやや弓なりに彎曲している。南北軸3.15m、東西軸3.6mを測る。住居の壁はきちっと垂直に掘り込まれ、角は直角だが、北西の角はやや鋭角的。壁高は、北壁で48cm、西壁で48cm、南壁で48cm、東壁で46cmを測る。面積は、確認面で10.5㎡、床面で9.37㎡となる。床は直接ハードローム上面としてある。床面は、平坦で中央部は固く良好である。周溝は、カマド部分を除いて全周する。柱穴については、規則性のある柱穴は見られないが、南側中央床面に径25cm、深さ12cmのピット(P1)があり、住居出入口施設の柱穴と考えられる。なお、住居の東側および西側壁際には、焼土が残っているが火災に遭ったとは思われない。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分からやや東側に位置する。煙道部を攪乱により壊されているほかは、比較的良く残っている。壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部奥壁とする。袖は50cm程度の長さで、白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、145cm(うち煙道部分の長さ70cm)、幅125cm、高さ30cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約55cm、奥行き75cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かって水平に延びる。煙道の幅は上端で最大60cm、下端で25cm、深さは20cmである。

遺物については、北東隅壁際の床面(床直)から土師器杯(1)、玉縁の丸瓦(15)、カマド内から土師器甕(6・7)、丸瓦(14)、覆土中から土師器杯(2・3)、須恵器杯(4)、大形甕の胴部破片(8～12)、灰釉陶器長頸壺の口頸部(5)、管状土錘(13)などが出土している。

土器の特徴 体部外面、底部の整形は手持ちヘラケズリだが、ロクロで整形したような器面の整った作りの土師器杯が見られる。土師器杯(1)はやや雑な作りで器面の摩耗が著しいが、体部外面を手持ちヘラケズリで整形する非ロクロのものである。また土師器杯(2・3)は器高の低い平底で、体部外面・底部を手持ちヘラケズリで整形する丁寧な作りで、内・外面をロクロで整形したような横ナデが見られる。土師器杯(2)については体部内面に暗文風の斜格子状沈線を施している。

88号住居跡 (第293～296図、写真図版50・120・154)

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、J O—93、94、K O—03、04区に所在する。住居は北を向き、主軸方位はN—22°20′—Eである。形状は正方形で、南北軸3.45m、東西軸3.45mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘られている。壁高は、北壁で23cm、西壁で31cm、南壁で30cm、東壁で22cmを測る。面積は、確認面で11.63㎡、床面で9.77㎡となる。床は、ソフトローム下層まで掘り込み、ローム土と褐色土の混合土を5cm程度敷き詰め貼床としている。床面は、中央部が固いだけで周囲は軟弱である。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。主柱穴は、カマド付近の床面に東西方向に並ぶ。柱穴のうち、P1は北西周溝内にあり径30cm、深さ36cm、P2は径35cm、深さ26cmである。北東隅の壁に径30cm、深さ30cmの円形ピットが認められるが、柱穴に付随するものと思われる。なお南西隅に径110cm、深さ50cm程度のほぼ円形状の土坑があるが、覆土の下層からカマド使用の粘土が入っていた。性格は不明である。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部奥壁とし、煙道部を設けないカマド形態となっている。袖は白色粘土を用いて長さ50cm程度で平行に開く。左袖の内側には瓦を使用し補強している。カマドの全長70cm、幅110cm、高さ15cm、燃焼部の最大幅は約60cmを測る。燃焼部奥壁は垂直に立ち上がる。

遺物については、カマド内から土師器杯(7)、東側床面(床直)から土師器杯(6)、北東隅床面(+4cm・+6cm)から土師器杯(8・10)、南側壁際床面(+8cm)から土師器杯(1)、カマド右脇の床面(床直)から土師器甕(12、13)、東側隅床面(床直)から土師器小型甕(15)、覆土中から土師器杯(2～5・9・11)、甕(14・16～18)、須恵器大形甕の胴部破

片(19)が出土している。瓦については、カマド左袖の内側の補強材として行基葺きの丸瓦(21)、カマド燃焼部内から平瓦(23・24)、丸瓦(20)、カマド内から平瓦の広端角隅を切り口で6cmほど切っている「隅落とし整形」の瓦(22)が出土している。このほか覆土中から灰釉陶器片が出土している。

土器の特徴 ロクロ整形の土師器杯が主体的で、体部外面下端を回転ヘラケズリで整形する杯(1～5)、体部がやや内彎し、体部外面下端を手持ちヘラケズリで整形する杯(6～9)、体部が直線的に外傾し、下端を手持ちヘラケズリで整形する杯(10・11)に分けられる。土師器杯(2)は底部を回転糸切りで切り離したまま整形調整しない。土師器杯(6)は回転糸切り後、中央部分を残して外周を手持ちヘラケズリする。土師器杯(8)については、通有の回転糸切り後の回転ヘラケズリとは考えにくい整形で、回転ヘラ切り技法かとも思われる。土師器甕(17・18)の底部は回転糸切りで切り離した後、部分的にヘラケズリで整形する。

90号住居跡 (第297～302図、写真図版50・51・52・121・154・155・177・180)

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、KN—19、20、29、30、40、KO—11、21、31区に所在する。本遺跡では最も大型の住居である。北東部分の隣接には、91号住居跡が90号住居跡の角隅にわずかにかかっている。切り合い状況や出土遺物の検討から判断して90号住居跡が先行して作られたものと思われる。住居は北を向き、主軸方位はN—6°40′—Eである。形状は東西方向に長い横長の方形状で、南北軸5.62m、東西軸6.2mを測る。住居の角はほぼ直角で壁は垂直に掘られている。壁高は、北壁で45cm、西壁で51cm、南壁で41cm、東壁で30cmを測る。面積は、確認面で34.2㎡、床面で31.9㎡、内区で9.3㎡となる。床は、ハードルーム面を直接床面としている。全体に固く良好である。周溝は幅が広く、カマドの位置を除いて全周する。支柱穴は、ほぼ対角線上に4本認められる。柱穴掘形は、円形状や楕円形状で径40～60cm程度でほぼ垂直に掘り込んでいる。柱穴の深さは、P1が44cm、P2が70cm、P3が61cm、P4が61cmである。柱間は、西側列の南北間(P1・P3)が短く、これ以外はほぼ均等で、P1・P2が3.15m、P1・P3が2.6m、P2・P4が3.0m、P3・P4が3.0mである。なおP3、P4の柱穴掘形から、2時期の立替えが認められる。また南側中央部分に径60cm、深さ50cm程度のやや四角形状のピット(P5)が認められるが、住居出入口施設に関連する柱穴と思われる。なお南側の複雑なピット群は、後世の攪乱と考えている。南東隅の角部分には粘土塊、焼土ブロックが見られる。これらは住居の廃絶に際して投げ込まれたものと思われる。また東側を中心とした床面に焼土が認められるが、この場所で焼けており、どのような性質のものであるか不明である。

カマドは、北壁および東壁の2カ所に所在する。両カマドとも壊されていないことから、同時に併存していた可能性が高い。北壁のカマド(カマドA)は、東に寄った位置に所在する。壁を掘り込まずそのまま燃焼部奥壁とする。袖は壁から110cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドAの全長は、183cm(うち煙道部の長さ124cm)、幅100cm、高さ30cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約60cm、奥行き62cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部内には、平瓦が縦方向に組み合わせり直立した状態で出土しているが、支脚として使用したものと思われる。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かって凸凹はあるものの緩やかに立ち上がる。煙道の幅は上端で35cm、下端で20cm、深さは15cmである。東壁のカマド(カマドB)は、中央から南に寄った位置に所在する。カマドBは、北方向を住居の主軸とした場合、北から93°40′程度、東方向である。カマドAと同様に壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とする。袖は壁から60cm程度の長さで白色粘土を用いて構築する。カマドBの全長は、125cm(うち煙道部の長さ33cm)、幅125cm、高さ43cmを測る。燃焼部分は、袖部分より外側に出ており、火床を床面より掘りくぼめている。最大幅約60cm、奥行き90cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから

30cm外側に延びる程度である。幅は約30cmで、掘り込みは浅く5～7cm程度である。両袖外側の周溝部分には、円形状のピットが各1個ずつ見られる。左袖脇のピットはほぼ円形、径30cm、深さ30cm程度。右袖脇は楕円形をしており、径30～50cm、深さ50cmを測る。カマドBに付随した施設の柱穴と考えられる。

遺物については土師器、須恵器など良好なものが多く出土している。南側壁際床面(床直)から土師器杯(2)、南西隅柱穴内(床面より－24cm)から土師器杯(1)、西側壁際周溝内(床面より＋6cm)から土師器杯(3)、南東隅床面から土師器杯(4)、北東隅床面(＋10cm)から土師器小型甕(10)、カマド内から土師器甕(14)、覆土中から土師器杯(5)、須恵器杯(6・7)、高台付杯(8)、蓋(9)、長頸壺の胴部・底部片(15)、土師器小型甕(11・12)、甕(13)、須恵器大形甕の胴部破片(16～19)などが出土している。このほか、カマドAの燃焼部内からは転用した切り熨斗瓦(59)を支脚として利用している。南側壁際の土坑内から平瓦(56)、覆土中から平瓦(55・58)、平瓦の広端角隅を切り口で5cmほど切っている「隅落とし整形」の瓦(57)、管状土鍾が34個(20～53)、石製砥石の破片(54)などが出土している。なお、管状土鍾が多数見られることから漁撈に関する行為を行ったものと思われる。

土器の特徴 非ロクロの土師器杯が主体である。このうち土師器杯(1～3)については、丸底風で器高の低いもので、体部外面、底部にケズリの細かい手持ちヘラケズリ、内面に横方向のヘラミガキを施している。3個体とも杯底部外面の中央部分に、それぞれ記号と思われる「ハ」の線刻を焼成後に行っている。須恵器杯(6)は永田・不入窯製品と思われる。須恵器杯(7)は、器形や底部を回転ヘラ切りで切り離している点、また胎土に黒色粒、石英粒、白色粒を含んでいることなどから常陸産の須恵器であろう。

91号住居跡 (第303～305図、写真図版51・52・121)

遺跡は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付附近に位置し、J N—98、99、K N—08、09、10、19区に所在する。住居の西壁部分で、93号住居跡の南東隅の角と重複している。また住居南東隅の角部分では、90号住居跡の西壁とわずかに重なっている。切り合い関係や出土遺物の検討から90号住居跡が先行し、93号住居跡が後出する。住居は北東を向き、主軸方位はN—23°25′—Eである。形状は南東壁がやや内側に傾くが、ほぼ正形状で南北軸4.25m、東西軸4.25mを測る。住居の角は直角で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北東壁で32cm、北西壁で36cm、南西壁で38cm、南東壁で38cmを測る。面積は、確認面で17.43㎡、床面で15.8㎡となる。床は、中央部分がハードローム上面を直接床面とし、一段低い東側・西側部分には暗褐色土とロームの混合土を敷き詰め貼床としている。床面は、中央部の広範囲にわたって固くなっている。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。床面には多数のピットが見られるがほとんどが浅く、支柱穴としての規則性のあるピット列は認められない。南西側中央部分で、直径40cm、深さ30cm程度のピットが2基(P1・P2)縦列するが、これは柱穴の可能性も考えられる。住居西隅部分には幅20cm、深さ10cm程度の「—」字形の溝で区画した部分が見られるが、住居内の小区画の可能性もある。

カマドは北東方向で、北東側壁の中央部分に位置する。壁を「冂」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、壁を利用して55cm程度の長さで白色粘土を用いて平行に構築する。燃焼部の天井部分はブリッジ状に残存する。カマドの全長は、150cm(うち煙道部分の長さ90cm)、幅115cm、高さ40cmを測る。燃焼部分は、最大幅約45cm、奥行き60cmで垂直な奥壁を持つ。袖の内側の燃焼部壁は、両側ともよく焼けている。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから水平に延び、先端部でピット状のくぼみを持つ。煙道の幅は上端で20～30cm、下端で15～20cm、深さは先端15cmで箱形を呈する。

遺物については、カマド右正面の床面(床直)から須恵器杯(6)、北西側壁際のピット内(＋3cm)から土師器杯(2)、カマド内から土師器杯(4)、甕(11～13)、小型甕(14)、須恵器甕(16)、甗? (15)、覆土中から土師器杯(1・3・5)、

須恵器杯(7・8)、蓋(9)、小型長頸瓶の口頸部(10)、大形甕の胴部破片(17・18)、丸瓦(19・20)、平瓦(21・22)などが出土している。

土器の特徴 土師器杯類は、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形するものが主体となる。土師器杯(2)は内面を丁寧なヘラミガキで調整する。須恵器杯(7)は底部片だが、外面に「大」の線刻が見られる。

92号住居跡 (第303・306図、写真図版51・52・121)

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、KN—07、08、17、18区に所在する。住居のカマドおよび北東部分を、北側に隣接する93号住居跡に壊されている。住居は北を向き、主軸方位はN—10°30′—Eである。形状は南北方向に長く、東側壁がやや内側に傾く縦長方形で、南北軸5.05m、東西軸3.6mを測る。住居の角は、直角で壁は浅いが垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で20cm、西壁で15cm、南壁で8cm、東壁で11cmを測る。面積は、確認面で18.1㎡、床面で16.98㎡となる。床は確認面から浅く、ソフトローム面を直接床面としている。全体に固く踏み固められている。周溝は北側部分にはなく、また南側中央部分の約1.2m分が途切れているほかは全周する。周溝が途切れるこの南側部分は、あるいは住居の出入口であった可能性もある。支柱穴は、床面には持たずに壁部分に見られる。東側、西側壁および南側壁にほぼ円形状の直径30cm、深さ40～70cmのピット列が見られる。支柱穴は2間×2間と思われる。柱間の長さは、西壁でほぼ190cm間隔、南壁で170cm間隔、東壁190cmとなり、各壁間は均等である。なお北側の一段下がった張り出し部分は住居の構造上不明である。

カマドは、93号住居跡によって壊されているものと思われる。壁際に柱を立てるなど、通有の住居構造ではないことから、カマドではなくあるいは炉の可能性も考えられる。

遺物については、北側中央の93号住居跡に壊された部分近くの床面(床直)から須恵器杯(1)、大形甕の胴部破片(8)、北側の張り出し部分の床面(床直)から土師器杯(5)、覆土中から土師器甕(6)、須恵器杯(4)、高台付杯(2・3)、器種不明の破片(7)、平瓦(9)などが出土している。

土器の特徴 須恵器杯(1)は、色調が灰白色で胎土に雲母片を含み、体部外面下端を手持ちヘラケズリ、底部を回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリで整形することから常陸系の須恵器と思われる。土師器杯(5)は、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する。

93号住居跡 (第303・307・308図、写真図版51・52・121)

遺跡は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、JN—97、98、KN—07、08区に所在する。南側の92号住居跡および東側の91号住居跡を壊して作られている。住居は、ほぼ真北方向で主軸方位はN—1°00′—Wである。形状は、南北方向にやや長い縦長の方形で、西側壁はやや弓なりに丸くなる。規模は、南北軸3.58m、東西軸3.45mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁はきっちと垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で49cm、西壁で33cm(92号住居跡の床との差)、南壁で36cm(92号住居跡の床との差)、東壁で3cm(91号住居跡の床との差)を測る。面積は、確認面で11.9㎡、床面で10.56㎡となる。床はハードローム上面を直接床面としている。床面は平坦で中央部分が固く良好である。周囲の柔かい部分は、暗褐色土とローム混合土を敷き詰め貼床としている。周溝は、カマド部分を除いて全周する。柱穴については、南側の東・西両壁付近にあるピットが該当するものと思われる。P1が径20cm、深さ36cm、P2が径30cm、深さ14cmである。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分からやや東側に位置する。壁を「ㄣ」の字形に掘り込んで燃焼部奥壁とする。袖は、60cm程度の長さで白色粘土を用いて平行に構築する。カマドの全長は、160cm(うち煙道部分の長さ100cm)、幅80cm、高さ50cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約40cm、奥行き60cmで、なだらかに立ち上がる奥壁を持つ。左袖の内側に丸瓦が横方向に立った状態で検出されているが、これは支

脚として使われていたものと思われる(遺物が行方不明のため図示し得なかった。写真図版52)。煙道は、カマド本体からやや西にずれて作られており、燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かって水平に延び、先端で傾斜をもって立ち上がる。煙道の幅は上端で40cm、下端で17cm、深さは27cmである。

遺物については、カマド内から土師器杯(1)、甕(10・13・16)、須恵器杯(6)、カマド右脇床面(+10cm)から土師器碗(4)、北西隅床面(+3cm)から土師器甕(8)、南側周溝内(+18cm)から土師器小型甕(14)、覆土中から土師器杯(2・3)、甕(9・11・12・15・17)、須恵器碗(7)、大形甕の胴部破片(18~20)などが出土している。なお、ロクロ整形土師器杯(5)は出土位置が不明であるが、遺物ポイント番号(093-1006)が付されていたため掲載した。混入品の可能性がある。

土器の特徴 体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する土師器杯が主体を占める。土師器碗(4)は、胎土に雲母粒を含み、体部内面を斜方向、螺旋を多用するやや乱雑なヘラミガキを施している。土師器杯(3)で体部内面に斜格子状暗文を施す。土師器小型甕(14)は胎土に雲母粒を含む。土師器甕(13)は武蔵型甕で、口縁部を「く」の字状に外反させ、胴部上位に横方向のヘラケズリを行っている。

94号住居跡(第309~311図、写真図版52・121)

遺跡は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、J N—88、89、98、99区に所在する。住居は北を向き、主軸方位はN—15°20′—Eである。形状は、やや東西に長い正形状で、東西軸3.88m、南北軸3.7mを測る。住居の角は、ほぼ直角で壁はきちと垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で27cm、西壁で35cm、南壁で35cm、東壁で28cmを測る。面積は、確認面で13.9㎡、床面で11.2㎡、内区(支柱穴内側)で8.28㎡となる。床は、ハードローム上面を床面としている。床面は平坦で、中央部分は極めて固く良好であるが、左右は柔かく軟弱である。周溝は、カマドの位置する部分および北側壁の東部分を除いてめぐる。支柱穴は、住居の四隅の角部分に円形状および四角形状の柱穴が見られる。ほぼ対角線上に4本並ぶ。北東隅の柱穴は広めだが、ほかは径30~40cm前後である。柱穴の深さは、P1が13cm、P2が12cm、P3が16cm、P4が13cmである。柱間は、それぞれほぼ均等で、P1・P2が3.0m、P1・P3が2.9m、P2・P4が2.85m、P3・P4が3.0mである。南側中央部分には径20cm、深さ12cm程度のピット(P5)が認められる。住居出入口施設の柱穴と思われる。柱穴P1、P3からそれぞれ1m、1.7m程度の溝が延びているが、これは住居内の小区画溝の可能性も考えられる。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。壁をやや掘り込んで燃焼部奥壁とする。袖は白色粘土を用いて長さ50cm程度の丸みを持って作られている。カマドの全長は、195cm(うち煙道部分の長さ115cm)、幅115cm、高さ25cm、燃焼部分は丸く作られており、最大幅60cm、奥行き80cmでなだらかに立ち上がる奥壁を持つ。右袖の内側は良く焼けていて赤化している。燃焼部内のやや左寄りには、平瓦が縦方向に直立した状態で出土しているが、支脚として使用したものと思われる。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部奥壁より23cm程度の段をつけ、先端に向かって緩やかに下がり、先端部分で垂直気味に立ち上がって終わる。煙道の上端幅は30cm、下端20cm、最も深い先端部で18cm程度となる。

遺物については、カマド右脇の床面(+3cm)から土師器杯(1)、甕(8・10)、小型甕(13)、中央東側床面(+8cm)から須恵器杯(4)、カマド内から土師器甕(9・12・14・15)、支脚として使われた丸瓦(16)、平瓦(19)、平瓦(17・18)、覆土中から土師器杯(2・3)、甕(11)、須恵器杯(5・6)、碗(7)などが出土している。

土器の特徴 非ロクロの土師器杯が、主体的と思われるが不明確である。ロクロ整形の土師器杯(3)は、混入品であろう。須恵器杯(4)は、底部のやや外周寄りに墨書(判読不明)が認められる。須恵器杯(6)は色調がこげ茶褐色で、千葉地域の南河原坂窯の所産と考える。土師器甕(12)は、やや胴部がふくらむが武蔵型甕で、器壁が薄く

「く」の字状に外反する口縁部、胴部上位を横方向のヘラケズリで整形する。

95号住居跡（第312～314図、写真図版53・121・122）

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近J N-86、87、96、97区に位置する。住居南側部分には2間×3間の南北棟である501号掘立柱建物跡が所在し、b1、c1柱穴が床面にかかっている。住居は東を向き、主軸方位はN-106°00'-Eである。形状は、ほぼ正形状で南北軸3.66m、東西軸3.6mを測る。住居の角は直角で、壁は浅いが垂直に掘り込まれている。壁高は北壁で11cm、西壁で13cm、南壁で22cm、東壁で23cmを測る。面積は、確認面で12.7㎡、床面で11.7㎡となる。床は、ハードローム上面にロームと暗褐色土の混合土を敷き詰め貼床とする。床面は、中央付近が固く硬化している。床の北東側はローム、暗褐色土を盛り上げやや高くしている。住居内を占有する使い分けの例であろう。周溝はカマドの位置および南東壁の南部分を除いてめぐる。支柱穴については、住居の角隅に直径30cm程度の円形ピットが4基あり、対角線上に並ぶ。柱穴の深さはP1が49cm、P2が46cm、P3が48cm、P4が61cmである。柱間はそれぞれほぼ均等で、P1・P2が3.4m、P1・P3が3.3m、P2・P4が3.2m、P3・P4が3.5m、対角線上のP1・P4は4.8m、P2・P3は4.6mである。南東壁際部分に焼土ブロックが認められるが、性格は不明である。南側壁際の中央部分には、長さ80cm、深さ10cm程度のピット状の不整形な土坑があり、この中から体部外面に墨書（一字分、判読不明）された土師器杯(1)が口縁部を下にして置かれていた。この位置が住居の出入口部分であることから、何らかの祭祀的性格を持つものと思われる。

95号住居跡と501号掘立柱建物跡との新旧関係は、95号住居跡の床は貼床で硬化しており、住居を掘りあげた段階での写真、実測図では501号掘立柱建物跡c1柱穴部分がまったく見えない。また501号掘立柱建物跡b1柱穴は、95号住居跡に壊されているようすから判断して501号掘立柱建物跡が先行するものと考えている。

カマドは東方向で、東壁の中央部分に位置する。木の根の攪乱を受け、燃焼部、煙道部を中心にして残存状態は良くない。袖は残り部分があまり良くないが、現状40cm程度の長さの白色粘土で作られた袖が残っている。カマドの全長は115cm（煙道部分は大きく壊されているため不明確だが、70cm程度）、幅70cm、高さ15cmを測る。燃焼部分は火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約40cm、奥行き40cmの円形状で、傾斜のある奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は壊されているため不明瞭。先端部分と思われる位置に径20cm、深さ8cm程度の円形状のピットが認められる。

遺物については、カマド左脇の床面(+2cm)から体部内面を黒色処理する土師器杯(6)、西側隅の床面(+15cm)から土師器杯(2)、北西側壁際の土坑内から「」という不明文字の墨書土師器杯(1)、土師器杯(7・8)、覆土中から土師器杯(3・4)、杯の底部片(9)、椀(5)、甕(10)、甗(12)、須恵器甕の胴部破片(11)、土師器の置きカマド(13)などが出土している。瓦については、西側床面(床直)から平瓦(15)、覆土中から玉縁の丸瓦(14)が出土している。

土器の特徴 ロクロ整形の土師器杯が主体的で、体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形するものが多い。置きカマド(13)は、覆土中からの出土で、正面の焚き口周辺の破片である。置きカマドは、このほかに220号・231号住居跡からも出土している。

98号住居跡（第315～317図、写真図版53・122）

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近J N-91、92、K N-01区に位置する。住居は北方向で、主軸方位はN-6°30'-Eである。形状は、南北方向に長い縦長形状で、東西軸3.7m、南北軸3.9mを測る。住居の角はやや隅丸で、壁はきちっと垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で39cm、西壁で38cm、南壁で37cm、東壁36cmを測る。面積は、確認面で14.47㎡、床面で11.55㎡となる。床はハードローム上面を直接床面とし、部分的に凹んでいる部分にロームと暗褐色土の混合土を詰めている。床面は平坦で、中央部が固く締まっている。周溝は、

カマドの位置を除いて全周する。支柱穴は、認められない。南側中央床面に径20cm、深さ15cm程度のピット(P1)が見られるが、これは住居の出入口施設の柱穴と思われる。

カマドは北方向で、北側壁の中央より東に位置する。カマド自体は住居主軸から7°25'程度さらに東に傾いている。壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は白色粘土を用いて、壁から55cm程度の長さで「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、155cm(うち煙道部分85cm)、幅95cm、高さ30cmを測る。煙道部分は、燃焼部奥壁より25cm程度の段をつけ、先端に向かって水平に延びる。煙道の上端幅は30cm、下端20cm、最も深い先端部で15cm程度となる。

遺物については、カマド右側の床面(床直)から土師器甕(8)、正面の床面(床直)から土師器甕(9)、同床面(+2cm・+7cm)から須恵器甕の胴部破片(16・15)、西側壁際の周溝内(+10cm)から須恵器甕の胴部破片を利用した転用硯(17)、覆土中から土師器杯(1~7)、甕(10~12)、須恵器甕(13・14・18・19)、などが出土している。瓦については、カマド右正面の床面(床直)から行基葺きの丸瓦(20)、平瓦(21)が出土している。

土器の特徴 非ロクロ土師器杯が主体を占める。土師器杯(1・2)は、器高の低い盤状風の杯で体部外面をケズリの幅広い手持ちヘラケズリで整形する。土師器杯(4)は体部内面に斜格子状暗文を施す。土師器甕(8)は胴部外面の上・中位を平行タタキで叩いた後、肩部を残してすり消す。胴部下半は横方向のヘラケズリで整形する。土師器甕(12)は、形が不格好で重量のあるものである。胴部外面を縦・斜方向に3段に分けてヘラケズリ整形を行っている。須恵器甕(17)は転用硯で、胴部の内側が広範にわたって平滑に摩滅している(スクリーントーンの範囲は平滑部分)。墨の付着は認められない。

99号住居跡 (第318・319図、写真図版54・122・175・178)

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、J N—63、64、73、74区に所在する。住居は北方向で、主軸方位はN—6°40'—Eである。形状は、東西に長い横長方形で、南北軸4.0m、東西軸5.5mを測る。住居の角は直角で、壁は垂直に掘られている。壁高は、北壁で38cm、西壁で43cm、南壁で44cm、東壁で37cmを測る。面積は、確認面で21.53㎡、床面で19.88㎡となる。床は、中央部分がハードローム面で、直接床面としている。東側壁際の床は、暗褐色土とローム混合土で貼床としている。床面は平坦で、全体に固く硬化している。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。支柱穴は、床面中央部分に東西方向に2本並ぶ。径40cm前後の円形の柱穴で、それぞれの深さは、P1が40cm、P2が67cmで、柱間は2.5mである。また、南側床面の中央部分のちょうどP1・P2の間位置に径45cm、深さ26cmの円形ピット(P3)が見られるが、支柱穴に関連するものかあるいは住居出入口施設の柱穴と思われる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分よりやや東に位置する。壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部奥壁とし、煙道部を設けないカマド形態となっている。カマドの全長は、105cm、幅100cm、高さ35cm、燃焼部の最大幅は、約70cmを測る。燃焼部は円形状に掘りくぼめて火床とし、奥壁は傾斜をもって立ち上がる。袖は、長さ50cm程度で「ハ」の字状に開く。右袖は数次にわたって修築を受けているもようで、焼土と粘土および黒褐色土が複雑な層を成して重なっている。また左袖は焼土よりも黒褐色土と粘土が混合している状況で、袖本体の部分が必ずしも明瞭ではない。

遺物については、カマドの燃焼部内から玉縁の丸瓦(11)が出土している。おそらく支脚として使用されたものと思われる。このほか図示した遺物については、すべて覆土中からの出土である。このほか、門金具の可能性のある不明鉄製品(9)、フイゴの羽口片(10)が出土している。

土器の特徴 土器器杯(1~5)は、体部外面をざっくりと削る手持ちヘラケズリで整形する。土師器杯(2・3)は、

体部内面に斜格子状暗文を施している。土師器甕(6)は胴部下半～底部片で、全体に白っぽい付着物が見られる。須恵器甕(7)は、大型甕の頸部～胴部上半部片である。須恵器甕(8)は、胴部破片を転用した砥石ではないかと思われる。

100号住居跡（第320～322図、写真図版54・122・175）

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、J N—45、54、55、56、65、66区に所在する。住居は北東を向き、主軸方位はN—12°30′—Eである。形状は、ほぼ正形状で南北軸4.37m、東西軸4.35mを測る。住居の角は直角で、壁を垂直に掘り込んでいる。壁高は、北壁で28cm、西壁で39cm、南壁で41cm、東壁で29cmを測る。面積は、確認面で18.92㎡、床面で17.85㎡、内区で5.29㎡(外側柱穴列)、4.20㎡(内側柱穴列)となる。床は、中央部分がハードルーム上面を直接床面としており、左右の部分はルーム土と暗褐色土を敷き詰め貼床としている。床面は、中央部分が固く良好である。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。支柱穴は、ほぼ対角線上に4本、南側壁際の床面に2本(西側P5、東側P6)認められる。柱穴の掘形から2時期の建替えが認められる。内側部分の柱穴列(P1-1、P3-1)が古く、外側(P1-2、P3-2)が新しく建替えられた部分である。柱穴の深さは、P1-1が54cm、P1-2が45cm、P2が47cm、P3-1が43cm、P3-2が47cm、P4-1が44cm、P4-2が34cm、P5が53cm、P6が49cmである。柱間は、古い時期である内側のP1-1・P2が2.0m、P1-1・P3-1が2.1m、P2・P4が2.05m、P3-1・P4が2.05m、新しい時期である外側のP1-2・P2が2.3m、P1-2・P3-2が2.3m、P2・P4が2.3m、P3-2・P4が2.3mである。P5・P6の東西間は2.1m、P3・P5の南北間は0.7m、P4・P6の南北間は0.8mである。P5、P6はいずれの柱穴列に帰属するかは不明である。

カマドは、北側壁の中央部分からやや東に位置する。しっかりとした作りのカマドで、壁を「 $\cap$ 」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は白色粘土を用いて、85cm程度の長さで「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、210cm(うち煙道部分110cm)、幅100cm、高さ30cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約60cm、奥行き100cmで、緩やかに立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より20cm程度の高さを持ち、そこから一旦中位付近に向かって下がって、先端でピット状のくぼみを作って終わる。煙道の上端幅は36cm、下端23cm、最も深い中位部分で30cm程度の深さである。煙道の壁は、粘土を使っている。両袖外側部分には、均等にピットが各1個ずつ見られる。左袖脇のピットは楕円形で径30cm、深さ40cm程度。右袖脇のピットはやや楕円形をしており、径25cm、深さ40cmを測る。カマドに付随した施設の柱穴と考えられる。

遺物については、カマド煙道部内から土師器甕(15)、カマド内から土師器杯(1)、甕(16・18・19)、カマド正面の床面(+7cm)から体部外面に「□花寺」の墨書のある土師器碗(5)、カマド内から須恵器杯(7)、カマド左脇床面(床直)から土師器甕(14)、同床面(+5cm)から土師器杯(4)、覆土中から土師器杯(2・3)、小型甕(20・22)、台付甕(23)、須恵器杯(6・8・9・11～13)、高台付碗(10)、甕(21)、鉄製品で門の金具(24)、鉄製紡錘車の軸部破片(25)、玉縁の丸瓦(26)、平瓦(27～29)などが出土している。

土器の特徴 非ロクロの土師器杯が含まれているが、ロクロ土師器杯類が主体的と思われる。土師器碗(5)は内面を黒色処理している。墨書については「法花寺」と書かれていたものであろう。土師器甕(15・16・18)は器壁が薄く、胴部上位部分を横方向のヘラケズリを行うなど武蔵型甕の特徴を持つ。図示したほとんどの須恵器杯類は回転糸切り後、中央部を残して外周を回転ヘラケズリで整形している。須恵器甕(21)は茶灰色で、やや寸づまりのようであるが、口縁部片と胴部下位～底部片と同一個体と思われるため、図上復元した。

109号住居跡（第323図、写真図版54・122）

遺構は、南側台地の北東斜面寄りのJ P—11、12区に位置する。住居は北西に向き、主軸方位はN—24°10′—W

である。形状は、北西壁が長く南東壁が短い逆台形状で、北東—南西軸2.8m、北西—南東軸2.62mを測る。住居の壁は比較的浅く、北東側部分は、壁部分がわずかに残る程度である。壁高は、北西壁で15cm、南西壁で16cm、南東壁で6cm、北東壁で4cmを測る。面積は、確認面で7.3㎡、床面で6.6㎡となる。床は、ソフトローム上面を直接床面としている。全体に軟弱であり、固い部分は見られない。規則性のある主柱穴は認められないが、床中央部分に東西方向に並ぶ径30cm、深さ35cm程度のピット(P1・P2)が見られる。あるいは柱穴の可能性も考えられる。周溝は認められない。住居の北西床面に貝ブロックが見られるが、これは住居廃絶後に廃棄されたものと思われる。

カマドは、北西側壁の東部分に位置する。残存状況は悪く、袖部分がわずかに残る程度である。カマドは壁を掘り込まず、そのまま燃焼部を構築したものと思われるが燃焼部は残っていない。袖は白色粘土を用いて作られている。煙道は認められない。

遺物については少量で、カマド正面の床面(+2cm)から土師器杯(2・4・5)、同右脇の床面(+7cm)から土師器杯(1)、覆土中から土師器杯(3)、北西隅の床面(床直)から行基葺きの丸瓦(6)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類は、底部を回転糸切りで切り離したまま整形調整を行わない杯が主体である。土師器杯(1)の体底部内面には、焼成時に重ね焼きを行うために貝殻(赤貝か)を置いた痕跡が残っている。

121号住居跡 (第324・325図、写真図版55・122・177)

遺構は、北東側尾根状台地の基部 I P-61、62、71、72区に位置する。ちょうど谷の最奥部の東斜面付近で、斜面部にかかる東側壁は、痕跡程度の残存である。住居は北方向で、主軸方位はN—5°30′—Wである。形状は、南北に長い縦長形状で東西軸3.6m、南北軸4.1mを測る。住居の角は直角で、壁は浅いが垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で17cm、西壁で11cm、南壁で10cmを測る。東壁はほとんど見られない。面積は、確認面で14.9㎡、床面で13.85㎡となる。床はソフトローム上面を直接床面とする。全体的に固く良好である。周溝はカマドのある北壁にはなく、西壁、南壁に所在する。主柱穴は住居の南東隅を除いて角隅に見られる。北東隅のP1柱穴は径50cm、深さ45cm程度、P2柱穴は攪乱によるためか壊されており、底の径20cm、深さは床面から62cm程度である。P3柱穴は70×40cmの長楕円形で深さ53cmを測る。柱間は、南北に長く、P1・P2が2.0m、P1・P3が3.2mである。このほか角隅にある直径30～40cmで、深さ50cm程度の円形状ピットが主柱穴を補助する柱穴となるのかもしれない。住居の南西、北東側にある横長の土坑は、それぞれ140号、141号陥穴である。

カマドは北西方向で、北西壁の中央部分に位置する。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は60cm程度の長さで、白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、200cm(うち煙道部分の長さ115cm)、幅140cm、高さは削られているため現状では15cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約75cm、奥行き70cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かって急な傾斜をもって下がる。先端付近および中位にピット状のくぼみが見られる。煙道の形状は不整形で、先端部分が広がる。幅は上端で22～45cm、下端で10～30cm、深さは50cmを測る。

遺物については、西側床面(床直)から土師器杯(1)、同床面(+14cm)から土師器杯(2)、カマド正面の床面(床直)から土師器杯(3)、同床面(+4cm)から行基葺きの丸瓦(15)、南側床面(床直)から石製砥石(14)、覆土中から土師器杯(4～6)、高台付杯(8)、皿(7)、甕(9～11)、須恵器甕(12・13)などが出土している。なお、土師器杯(7)については、底部に墨書(一字分)されているとのことであるが、現在遺物が行方不明となっている。

土器の特徴 土師器杯については、体部下端、底部を回転ヘラケズリで整形するものと整形調整せず回転糸切りのままのものが混在する。須恵器甕(12)は色調がこげ茶褐色である。

122号住居跡（第326～329図、写真図版55・123・177）

遺構は、北東側尾根状台地の基部 I P—22、23、32、33区に位置する。ちょうど谷の最奥部の台地側東南斜面部付近である。住居は北西を向き、主軸方位はN—48°50′—Wである。形状は、北東—南西方向に長い横長方形形状で、カマド部分の北西壁がやや長い。規模は、北西—南東軸3.8m、北東—南西軸4.1mを測る。住居の角はほぼ直角で、北の角がやや鋭角的に尖る。壁は、垂直に掘られている。壁高は北西壁で37cm、南西壁で35cm、南東壁で29cm、北東壁で31cmを測る。面積は、確認面で14.9㎡、床面で13.85㎡となる。床は、ハードルーム上層まで掘り込み、ルームと褐色土の混合土を5cm程度敷き詰め貼床としている。床面は、全体に固く良好である。周溝はカマドの位置および北西壁の西側部分を除いて全周する。規則性のある支柱穴は認められない。南東側壁際中央の床面に径40cm、深さ34cmのピット（P3）が見られるが、これは住居出入口施設の柱穴と思われる。

カマドは北西方向で、北西壁のほぼ中央部分に位置する。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部奥壁とし、煙道部が不明瞭なカマド形態となっている。袖は、白色粘土を用いて長さ50cm程度で平行に開く。カマドの全長は、135cm、幅125cm、高さ45cm、燃焼部の最大幅は約65cmを測る。燃焼部奥壁は傾斜をもって立ち上がる。燃焼部内、特に両袖は良く焼け赤化している。煙道部は不明瞭だが、燃焼部奥壁部分に長さ20cm、幅25cmの切り込み状のものが認められる。両袖の外側部分には、円形状のピットが各1個ずつ見られる。左袖脇のピット（P1）はやや楕円で径35cm、深さ40cm程度、右袖脇のピット（P2）は径30cm、深さ55cmを測る。カマドに付随した施設の柱穴と考えられる。

遺物については、カマド内から土師器杯(2)、椀(9)、皿(12・13)、甕(15～17・21)、平瓦(32)、カマド右脇の柱穴内(—12cm)から土師器甕(14)、カマド右側の周溝内(+8cm)から土師器甕(20・23)、南側床面(+3cm)から須恵器甕の胴部下半～底部(27)、覆土中から土師器杯(1・3～8・10)、皿(11)、甕(18・19・22・24・25・30・31)、須恵器甕の胴部破片(26・29)、甑(28)、石製砥石(33)などが出土している。ほか図示し得なかったが、覆土中から鉄滓が検出されている。

土器の特徴 土師器杯はロクロ整形で回転糸切り後、整形調整しないもの、回転ヘラケズリで整形するものが混在する。土師器杯(6・8)は墨書で、土師器杯(6)は底部外面の中央に細い文字で3字分が確認でき、「市原」と判読できる。土師器杯(8)は体部外面の中位付近に横書きで1文字分(至カ)の墨書が認められる。土師器皿(11～13)については、体部下端を回転ヘラケズリで整形する。土師器甕(11)は、胎土に雲母粒を含んでいる。

130号住居跡（第330図、写真図版56）

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近の J P—61区に位置する。住居は北西を向き、主軸方位はN—65°00′—Wである。住居の掘り込みが浅いことと北西、南東部分を後世の芋穴による攪乱で壊されているため、住居の北東部分は、不明確である。現状ではやや変形した横長方形形状で、北西—南東軸3.0m、北東—南西軸3.3mを測る。住居の角は隅丸ではあるが、壁は浅く全体的形態としてはあまり整っていない。壁高は、北西壁で11cm、南西壁で10cm、南東壁で5cm、北東壁は不明である。面積は、確認面で9.9㎡、床面で9.2㎡となる。床は、ソフトルーム面を直接床面とし、中央部が固いだけで全体に軟弱である。柱穴、周溝は検出されなかった。

カマドは北西方向で、北西側壁の中央部分よりやや南西に位置する。壁をわずかに掘り込んで燃焼部奥壁とし、煙道部を設けないカマド形態となっている。袖は残存が悪く、左袖がわずかに残る。全長60cm、幅は推定で100cm、高さ15cm程度である。燃焼部は、やや掘りくぼめて火床を作る。奥壁は垂直に立ち上がる。

遺物については、住居床面、覆土中からの出土はなかった。なおカマド内から須恵器杯が出土しているが、現在の遺物は行方不明である。

132号住居跡（第331～341図、写真図版56・123・124・155・156・174・176・177）

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近のJM—38、39、48、49区に位置する。住居は北西方向を向き、主軸方位はN—68°40′—Wである。住居南東側部分では、131号弥生時代住居跡が、南側では133号平安時代住居跡が、北西壁では134号平安時代住居跡の重複が認められる。いずれの住居についても、当住居がそれぞれの住居床面を壊している。形状はやや縦長の方形状で、東西軸4.7m、南北軸4.65mを測る。住居の角は南側部分が直角で、北側部分が隅丸である。壁は、垂直に掘り込まれている。壁高は、北西壁で36cm、南壁で47cm、東壁で23cmを測る。また131号住居跡の床とは21cm、133号住居跡とは8cm、134号住居跡とは16cm程度深く掘り込んでいる。面積は、確認面で20.93㎡、床面で19.4㎡、内区で3.4㎡となる。床はハードローム上面を直接床面とし、掘り込みのくぼんでいる部分を埋める程度の貼床である。従って、床面はやや凸凹で、また部分的に固いのみで良好ではない。周溝は、カマド側壁の北側および南西壁の一部に部分的に認められる程度である。柱穴は、ほぼ対角線上に4本検出され、円形でほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が54cm、P2が46cm、P3が64cm、P4が62cmである。柱間は、P1・P2が1.7m、P1・P3が2.0m、P2・P4が2.0m、P3・P4が1.7mで、対辺はほぼ均等である。また、南東側壁際中央の床面には、径30cm、深さ24cmのピット（P5）があり、住居出入口施設の柱穴と思われる。なお住居の北東部分床面を中心として、住居の部材と考えられる炭化した木材が散乱している。火災に遭った様相を示している。

カマドは西方向で、西側壁の中央部分よりやや北に位置する。重なっている134号住居跡のカマド煙道を壊して作られている。カマドは、壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、壁を利用して40cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。右袖基部の内側には丸瓦を立て補強材とし、左袖内の瓦の下には土師器杯を敷いている。カマドの全長は210cm（うち煙道部分の長さ135cm）、幅130cm、高さ50cmを測る。燃焼部分は、最大幅約65cm、奥行き65cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。袖の内側の燃焼部壁は両側ともよく焼けている。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約35cm高い位置で、そこから一旦深く下り、先端部で垂直に上がる。煙道は粘土を裏込めにして平瓦（45～49）、丸瓦（43・44）を用いて組み合わせ、箱形の側壁、天井部を作っている。

遺物については、住居内から多量に出土している。この住居に伴う遺物や住居の廃絶後に投棄されたものもあり、混在している状況である。このうち南東壁際の床面（床直）から、ほぼ完形に近い土師器杯（3）、中央の床面（床直）から土師器杯（7）、同床面（+6cm・+7cm・+18cm）から土師器杯（14）、内面を黒色処理した杯（15）、杯（6）、カマド内から土師器甕（23）、カマド右脇の床面（+2cm）から茶褐色系の須恵器甕（24）、南東隅の床面（床直）から茶褐色系の須恵器甕（25）、南東側壁際床面（+26cm）から須恵器大形甕の破片（31）、覆土中より土師器杯（1・2・4・5・8～13・17・18）、須恵器甕（27）、こげ茶褐色系の須恵器杯（16）、高台付椀（19）、土師器甕（20～22）、須恵器甕（27）、茶褐色系の須恵器甕（26・29）、土師器甕（28）、陶質土器の小瓶（30）、石製砥石（32）など多く出土している。このほか金属製品については、南側壁際の床面（+3cm・+10cm）から鉄釘（34・33）、同床面（+7cm）から完形の鑿（36）、南西隅の床面（+3cm）から鉄製紡錘車の軸部破片（35）、南東隅の床面（+3cm）から刀子（37）、中央西側の床面（+8cm）から茎に木質の残った刀子（38）が出土している。瓦についても中央床面（+3cm）から丸瓦（41・42）、覆土中から丸瓦（39・40）が出土している。なおこれらの遺物のうち、土師器甕（28）については、東側隣接の131号弥生時代住居跡の覆土中から出土と注記されているが、検討の結果、当住居からのものと判断した。また須恵器小瓶（30）は、当住居と西側隣接の134号住居跡の両方からの出土破片が接合しているが、帰属は当住居と考えている。

土器の特徴 土師器杯類は、底部を回転糸切りで切り離した後、体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形するもの（1～3・6）、手持ちヘラケズリで整形するもの（12・13）、回転糸切りで切り離したままのもの（7）と整形技法が

混在している。なお、土師器杯(13)は体部外面に「井」の墨書が認められる。土師器杯(3)は口縁部付近にススの付着が見られることから、灯明用として使われたものであろう。須恵器小瓶(31)は、とっくり状の小振りな壺で、内面の体部下半から底部にかけロクロ水引きの痕跡が顕著に残り、底部は回転糸切りのまま整形調整をしていない。東海または東海以西からの搬入品と思われる。

133号住居跡（第331・332・342図、写真図版56・124）

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、J M—38、39、48、49区に所在する。住居は真西を向き、主軸方位はN—89°50′—Wである。住居北側部分を132号平安時代住居跡により、また西側のカマドおよび北壁を134号平安時代住居跡によって壊されている。現状では、住居全体のうち2/3程度の残存である。形状は、方形状として東西軸2.95m、南北軸2.9mを測る。住居の角は直角で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、西壁で34cm、南壁で47cm、東壁で31cm、北壁は132号住居跡に壊されている。床との比高は8cm程高い。面積は、復元値で確認面8.5㎡、床面7.84㎡となる。床は、ハードローム上面にロームと暗褐色土の混合土を5cm程度敷き詰め貼床としている。床面は、周溝に寄った個所にわずかに柔かい部分があるが、全体に硬化している。残存部分の範囲での周溝は、カマドの位置を除いて、全周するものと思われる。支柱穴は残存部分範囲では認められなかった。

カマドは西方向で、西側壁の中央部分に位置する。煙道部および右袖を134号住居跡によって壊されている。壁を「ㄣ」形状に掘り込んで燃焼部奥壁とする。袖は左側が残っているのみである。長さ50cm程度で「ハ」の字状に開く。カマドの全長は不明。幅は、推定で100cm、高さ30cm程度である。燃焼部は、やや掘りくぼめて火床を作る。奥壁は垂直に立ち上がる。

遺物は少量で、覆土中からやや大形のロクロ整形土師器杯(1～3)、甕(4)、南西側の床面(+8cm)から鉄釘(5・図化していない)が出土している。

土器の特徴 杯については、底部が欠失しているため不明瞭だが、土師器杯(3)は底部を回転ヘラケズリで整形している。なお、この杯の底部片は、内面を入念なヘラミガキを施した上、黒色処理されている破片と、黒色処理されていない破片とが接合している。本来は黒色処理されていたものが、化学変化のため脱色し、部分的に変色したものと思われる。

134号住居跡（第331・332・342・343図、写真図版56・57・124）

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近のJ M—47、48区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—22°30′—Eである。住居東側部分の角と壁を132号平安時代住居跡により、また南東側の壁部分を133号平安時代住居跡、南西隅の角を135号平安時代住居跡によって壊されている。現状では住居全体のうち、4/5程度の残存である。形状は、やや北東—南西方向の横長形状である。規模は、南北軸2.9m、東西軸は推定で3.4mを測る。住居の角は直角で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で20cm、西壁で13cm、南壁で12cm、東壁で16cm(132号住居跡の床との差)を測る。面積は、復元値で確認面10.89㎡、床面で10.1㎡となる。床は、ソフトローム面を直接床面としている。床面は、平坦で中央部分が固いのみで、左右は柔かい。周溝は、残存部分の範囲では、カマドの位置を除いて、全周する。残存部分範囲では、支柱穴は認められなかった。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。重なっている132号住居跡のカマドによって燃焼部奥壁・煙道を壊されている。カマドは、壁を「凵」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、壁を利用して30cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、160cm(うち煙道部分の長さ110cm)、幅120cm、高さ30cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約60cm、奥行き50cmで、傾斜のある奥壁

を持つ。右袖の燃焼部内側に玉縁の丸瓦(15)が直立した状態で見られるが、袖の補強材として使われたものであろう。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かって水平に延び、先端やや深く掘り込み、垂直に立ち上がって終わる。煙道の幅は、上端で30cm、下端で15cm、深さは17cmである。このカマドは作り替えられており、古いカマドの煙道を埋め、粘土を貼って新しいカマドの煙道を作っている。煙道の基部付近に、平瓦を用いて天井蓋としている。

遺物については、カマド内から土師器杯(1～5・8)、皿(6・7)、甕(10～13)、覆土中から須恵器杯(9)、カマド燃焼部分の袖構築材として玉縁の丸瓦(15)、燃焼部内から丸瓦(14)などが出土している。なお、カマドの煙道部の天井に使われていた平瓦は行方不明である。

土器の特徴 ロクロ整形の土師器杯が主体で、底部を回転糸切りで切り離したままのものや、わずかに外周を回転ヘラケズリで整形するものを含んでいる。土師器甕(10)は、色調が乳白色できめの細かい胎土を有しているなど在地産のものではなく搬入品と思われる。

135号住居跡（第344図、写真図版57・124）

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近のJM-36、46、47区に位置する。東側隣接には134号平安時代住居跡があり、その南西隅の角を壊している。住居は北東を向き、主軸方位はN-7°40'-Eである。形状は、ほぼ正形状で南北軸3.4m、東西軸3.4mを測る。住居の壁は、深くきちっと垂直に掘り込まれ、角は直角である。壁高は、北壁で33cm、西壁で33cm、南壁で36cm、東壁で33cmを測る。面積は、確認面で10.9m²、床面で10.1m²となる。床は、直接ハードローム上面としている。床面は平坦で中央部は固く良好である。周溝、規則性のある支柱穴は見られない。南側壁際中央の床面には径20cm、深さ15cmのピット(P1)が見られるが、これは住居出入口施設の柱穴であろう。なお、住居の南東隅の角部分に粘土塊が床面に貼り付いている。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分より位置する。住居の主軸から5°程度さらに東へ傾く。カマドは、壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は30cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、140cm(うち煙道部分の長さ70cm)、幅100cm、高さ40cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約60cm、奥行き70cmで、傾斜のある奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約10cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに立ち上がり、先端部分で水平となって終わる。煙道の幅は上端で35cm、下端で22cm、深さは先端で15cmである。

遺物については、カマド右脇の北壁際から並べて置かれた状態(床直)でまとまって出土している。カマドの脇から順に土師器杯(1・3・6)、皿(5)、南西隅の床面(床直)から土師器杯(4)、覆土中から土師器杯(2)が出土している。

土器の特徴 ロクロ整形の土師器杯で、底部を回転糸切りで切り離した後、回転ヘラケズリで整形する杯が主体的である。このうち、土師器杯(4)は体部外面、底部外面に「清」の墨書、土師器杯(3)は体部外面に「ㄱ」の文字か記号のようなものが書かれている。土師器杯(2)は口縁部内・外面に油煙が付着していることから灯明に使われた杯であろう。土師器皿(5)は、底部を単一方向のヘラケズリで整形する。ロクロ整形の土師器甕(6)は、底部を回転糸切りで切り離した後、2方向からのヘラケズリで調整している。

136号住居跡（第345～347図、写真図版57・58・124・172・174）

遺構は、調査区の西縁に位置し、国分尼寺跡北辺部の北門近くのJL-68、77、78区に所在する。住居は北東を向き、主軸方位はN-24°00'-Eである。形状は、やや東西に長い横長形状で、南北軸3.55m、東西軸3.7mを測る。住居の壁はきちっと垂直に掘り込まれ、角はやや隅丸である。壁高は、北壁で41cm、西壁で46cm、南壁

で37cm、東壁で37cmを測る。面積は、確認面で13.0㎡、床面で11.9㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面とする。床の凸凹部分にロームと暗褐色土の混合土を敷き詰めている。床面は中央部が固く、周囲は柔かい。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。床の中央寄りに南北方向に溝が認められるが、住居内の間仕切りの痕跡と思われる。柱穴については、規則性のあるものは認められない。南側壁際中央の床面に径50cm、深さ28cm程度の楕円形状ピット(P1)が見られるが、住居出入口施設の柱穴と思われる。

カマドは北東方向で、北東側壁の中央部分に位置する。壁を「冂」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、壁を利用し65cm程度の長さで粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、155cm(うち煙道部分の長さ85cm)、幅110cm、高さ35cmを測る。燃焼部分は、最大幅約55cm、奥行き70cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部内は良く焼け、特に袖の内側は赤化している。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約25cm高い位置で、そこから一旦水平に延び、先端に向かって急激に下がる。先端部分で最も深くなっている。先端部分の奥壁は垂直に立ち上がる。煙道の幅は、上端で30cm、下端で20cm、深さは先端で27cmである。

遺物については、カマド周辺、南側の床面から多く出土している。カマド正面の床面(床直)からは、須恵器杯(3)、同正面の床面(床直・+5cm)から須恵器甕(13)、土師器甕(9)、カマド内から須恵器杯(2)、土師器甕(10)、行基葺きの丸瓦(16)、南東側の床面(床直・+9cm、)から須恵器杯(4・7)、南西側の床面(+3cm・+17cm)から須恵器短頸壺(12)、椀(8)、中央南側床面(+2cm)から灰釉陶器長頸壺(11)、南側壁際の床面(+28cm)から土師器杯(1)、覆土中から須恵器杯(5・6)、須恵器甕の胴部下半～底部(14・15)などが出土している。金属製品については、南側壁際の床面(床直)から摘鎌(17)、西側床面(+2cm)から刀子(18)が出土している。

土器の特徴 土師器杯の出土が少ないが、全般的に見て、体部外面を手持ちヘラケズリで整形する非ロクロ杯が主体と思われる。須恵器杯類は永田・不入窯跡製品で、体部外面を回転ヘラケズリで整形するものがほとんどである。須恵器杯(4)の底部外面には「法花」の墨書が認められる。須恵器杯(7)、椀(8)は、黒褐色の須恵器で千葉地域周辺産のものである。須恵器杯(13)、甕(14・15)は、こげ茶色の須恵器でやはり千葉地域周辺産と思われる。なお、須恵器甕(13)は、現在遺物が行方不明となっている。

142号住居跡 (第348～352図、写真図版58・125・156・157)

遺構は、北東側尾根状台地の基部 I O-30、39、40、49、50区に位置する。南東側隣接には143号平安時代住居跡があり、この住居によって南東隅のコーナ部分、東側壁、床を壊されている。また西側隣接には507号掘立柱建物跡が所在し、住居西側の壁に沿って東側桁行きの柱筋(c2、c3)が通っている。住居全体の約4/5が残っている。住居は北西を向き、主軸方位はN-11°55'-Wである。形状は、東西方向に長い横長の方形状で、やや東側が広い。南北軸3.7m、東西軸3.95mを測る。住居の壁はきちっと垂直に掘り込まれ、角は直角である。壁高は、北壁で42cm、西壁で40cm、南壁で35cm、東壁で推定40cm前後である。なお143号住居跡の床面より14cm程高い。面積は、復元値で確認面14.43㎡、床面12.6㎡となる。中央部分の床は、直接ハードローム上面を床面としており、固く締まっている。角隅部分の床については、暗褐色土とロームブロック混合土による貼床である。周溝はカマド部分を除いて全周するものと思われる。主柱穴については、認められなかった。南側壁の中央部分に掘り込まれている径30cm、深さ70cmのピット(P1)があるが、あるいは柱穴の一部と考えられる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。カマド左袖の基部、燃焼部を径70cm程のピットにより壊されている。壁をわずかに掘り込んで燃焼部奥壁とし、煙道部を設けないカマド形態となっている。袖は、50cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は80cm、幅100cm、高さ40cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約55cm、奥行き80cmで、傾斜をもって立ち上がる奥壁を持つ。

遺物については、南西の床面(+5cm)から須恵器杯(3)、覆土中から土師器杯(1・2)、台付甕の脚部(4)、平瓦(9・10)、北東隅の床面(床直)から玉縁の丸瓦(5～8)などが出土している。

土器の特徴 体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する土師器杯が主体的に見られる。須恵器杯(3)については体部外面に横書きで「隆」の墨書が認められる。

143号住居跡(第348・352～357図、写真図版58・59・125・157・177)

遺構は、北東側尾根状台地の基部 I O-40、I P-31、41区に位置する。北西側隣接には142号住居跡があり、この住居を壊して作られている。住居は北西を向き、主軸方位はN-11°10'-Wである。形状は、南北にやや長い縦長の方形状で東西軸3.35m、南北軸3.45mを測る。住居の角は直角で、壁は垂直に掘られている。地形が西側から東へ下がる斜面部分の上端に作られているため、壁高は北壁で40cm、西壁で45cm、南壁で30cm、東壁で14cmである。なお142号住居跡の床面を14cm程掘り込んで床としている。面積は、確認面で11.2㎡、床面で10.2㎡である。床はハードロームを掘り込み、黒褐色土とロームブロックの混合土を6cm程度敷き詰め貼床としている。床面は、全体に柔かい。壁は固く締まっている。周溝は、カマドの位置する部分および北壁の東部分を除き全周する。主柱穴については認められなかった。南側壁際中央にある径20cm、深さ30cmのピット(P1)が認められるが、あるいは柱穴の一部の可能性もある。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。142号住居跡の東壁、床を壊して構築している。しっかりとした作りで、全長は、210cm(うち煙道部分の長さ120cm)、幅170cm、高さ40cmである。袖は、壁を利用し35cm程度の長さで粘土を用いて「ハ」の字状に開く。右袖部分は、住居の北壁に沿って延びている。袖の先端部の内側は平瓦(19)、丸瓦(14)を用いて燃焼部壁の補強としている。燃焼部分は、壁を「U」字形に掘り込んで作られている。燃焼部の最大幅は60cm、奥行き80cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。内側の壁はよく焼け、赤化が著しい。燃焼部内に2枚の丸瓦(17・18)が直立した状態で見られるが、これは支脚として使われたものと思われる。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部奥壁より10cm程度の段をつけ、先端に向かって緩やかに下り、中位でピット状に深く掘りくぼめている。煙道の上端幅は45cm、下端15cm、最も深い先端部で50cmとなる。煙道内には瓦が多く残されている(15・16・20)が、煙道の側壁、天井蓋として使用されていたものと思われる。また先端部分には、3個体の土師器甕(7～9)を逆さまに伏せた状態で連結して煙突代わりにしている。

遺物については、カマド内から土師器杯(2)、椀(1)、大形の甕(10)、カマド内および正面の床面(+9cm)から須恵器大形甕(13)、カマド煙道内から煙突として使われた土師器甕(7～9)、覆土中から土師器杯(4)、皿(5)、小型甕(11)、須恵器高台付壺(6)、北西隅の床面(+8cm)から石製砥石(12)が出土している。瓦については、カマドの煙道部右側部分の丸瓦(16)、煙道の基部(横方向)の丸瓦(15)、煙道内から平瓦(20)、右袖の内側の補強材としての丸瓦(14)、同左袖の補強材として平瓦(19)、燃焼部内の支脚(左部分)の丸瓦(18)、同支脚(右部分)の丸瓦(17)が出土している。

土器の特徴 主体はロクロ整形の土師器杯で、底部を回転糸切りで切り離した後、回転ヘラケズリで整形する杯(3)、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する杯(2)が混在する。土師器皿(5)は回転糸切りで切り離したままのものである。大型の須恵器甕(13)は茶灰色系の須恵器で、千葉地域産のものである。なお、土師器杯(3)は体部外面に横書きで「至？」の墨書、土師器杯(5)についても同じように体部外面に「至？」の墨書が認められる。土師器杯(4)は体部外面に墨書らしき墨の痕跡が残るが、断片のため文字不明である。

145号住居跡(第358・359図、写真図版59・125)

遺構は、北東側尾根状台地の基部 I O-26、27、28、36、37、38区に位置する。北西側隣接には144号弥生時代

住居跡があり、この住居の東南部分を中心とした床の大半を当住居が壊している。また東側床面から東隣接にかけては2間×3間の規模を持つ南北棟の506号、507号掘立柱建物跡が所在し、住居東側床を壊して作られている。住居は北西を向き、主軸方位はN—12°40′—Wである。形状は、東西方向に長い横長の方形状で、南北軸3.62m、東西軸5.5mを測る。住居の壁はきちっと垂直に掘り込まれ、角はほぼ直角である。壁高は、北壁で62cm、西壁で63cm、南壁で42cm、東壁で40cm前後である。なお144号住居跡の床面との比高は、14～20cm程深く掘り込まれている。面積は、確認面で20.4m²、床面18.4m²となる。床はハードローム上面を直接床面としているが、部分的にロームと暗褐色土の混合土を敷いて貼床としている。床は、カマド周辺と南側壁際の中央部が固いのみで、全体的には柔かい。周溝はカマド部分を除いて全周する。柱穴は、中央の床面に東西方向に並ぶ径60cm程度の円形ピット列が主柱穴と思われる。深さは西側のP1が59cm、P2が53cmで、柱間の間隔は2.6mである。なお、南側中央床面にある径20cm、深さ10cm程度のピット(P3)は、住居出入口施設の柱穴と考えられる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分からやや東に位置する。カマドの方向は住居の主軸から7°30′東に傾く。壁を掘り込まず、そのまま燃焼部奥壁とし、袖は、白色粘土を用いて、「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、142cm(うち煙道部75cm)、幅140cm、高さ60cmを測る。燃焼部分は火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約70cm、奥行き65cmで、わずかに立ち上がって奥壁を作る。燃焼部と煙道は7cm程度の高さで、なだらかに立ち上がり、先端部で急激に上がって終わる。袖の内側の燃焼部分はよく焼け、赤化している。

遺物については、南西隅の床面部分の高い位置でまとまって出土している。全般的に出土状況が高い位置のため、この住居に伴うかどうか不明である。南西隅床面(+32cm・+36cm・+19cm)から土師器杯(1・4)、須恵器杯(5)、覆土中から土師器杯(2・3)、須恵器高台付杯(6)、土師器甕(7～9)、丸瓦(11)、平瓦(10)などが出土している。

土器の特徴 体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する土師器杯が主体的に見られる。須恵器杯(5)は永田・不入窯製品である。土師器甕(8・9)は武蔵型甕と考えている。

148号住居跡 (第360・361図、写真図版59・60・125・126・174)

遺構は、調査区の西縁で、国分尼寺跡北辺部北門近くの南側台地部分J M—41、42区に位置する。住居としては規模の小さいものである。住居は北を向き、主軸方位はN—18°00′—Eである。形状は、東西方向に長く北側部分が広がる方形状で、東西軸2.7m、南北軸2.5mを測る。住居の角はやや隅丸で、壁はきちっと垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で40cm、西壁で42cm、南壁で45cm、東壁42cmを測る。面積は、確認面で6.36m²、床面で5.63m²となる。床は、ハードローム面を約10cm掘り込み、その面を直接床としている。床面はカマドの中央部が固く締まっているが、左右は削り込んだハードロームそのままである。周溝はカマドのある北壁の一部、南側壁部分に見られるのみである。主柱穴は認められない。

カマドは北方向で、北側壁の中央より東に位置する。カマド自体は住居主軸から4°40′程度西に傾いている。壁を「冫」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は灰色粘土を用いて、壁から40cm程度の長さで「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、140cm(うち煙道部分75cm)、幅95cm、高さ40cmを測る。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部奥壁より25cm程度の段をつけ、先端に向かってなだらかに下り、先端部分で最も深くなる。煙道の上端幅は30cm、下端20cm、最も深い先端部で25cm程度となる。

遺物については、カマド周辺と南側床面を中心として出土している。カマド正面の床面(+3cm)から土師器杯(1)、甕(4)、須恵器甕(11)、カマド内から土師器甕(7)、南側壁際の床面(床直)から須恵器甕の底部(10)、同床面(+7cm)から灰釉陶器の小型壺の蓋(6)、南側床面(+17cm)から土師器甕(8)、覆土中から土師器杯(2・3)、甕(5・9)、須恵器甕(12・13)、刀子(15)などが出土している。瓦については、カマド燃焼部内から丸瓦(14)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については不明瞭な部分が多いが、体部外面を手持ちヘラケズリで整形するもの、ロクロで整形するものが混在する。須恵器甕(11～13)は黄褐色系で、千葉地域周辺のものであろう。

149号住居跡 (第362・363図、写真図版60・126)

遺構は、調査区の西縁で、国分尼寺跡北辺部北門近くの南側台地部分J L-10、20、J M-01、11区に位置する。東側隣接には150号平安時代住居跡が並列している。住居は北を向き、主軸方位はN—17°55′—Eである。形状は、ほぼ正方形で、南北軸3.2m、東西軸3.25mを測る。東壁・西壁は中央部がやや弓なりにへこんでいる。住居の壁は、深くきちと垂直に掘り込まれ、角は直角である。壁高は、北壁で38cm、西壁で41cm、南壁で45cm、東壁で47cmを測る。面積は、確認面で9.92㎡、床面で8.85㎡となる。床は、ハードローンを約15cm掘り込み、直接床面としている。床面は、平坦で中央部は固く良好である。周溝は全体に浅いが、カマドの位置を除いて全周する。規則性のある柱穴は見られない。南側中央床面には、長軸径20～30cm、短軸径20cm、深さ10cm程度の2基連結したピット(P1)が見られるが、これは住居出入口施設の柱穴であろう。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。カマド自体は住居の主軸から6°30′程度西へ傾く。カマドは壁をわずかに切り込んで燃焼部を構築する。袖は45cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、135cm(うち煙道部分の長さ70cm)、幅95cm、高さ45cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約60cm、奥行き65cmで、傾斜のある奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約25cm高い位置で、そこから先端に向かって下がって終わる。煙道の上部には粘土が貼ってあり両脇に残っている。煙道の幅は、上端で40cm、下端で15cm、深さは中位で30cmである。

遺物については、カマド正面の床面(床直)から土師器杯(5)、皿(4)、甕(7・8)、小型甕(9)、カマド内から土師器甕(6)、南東隅の周溝内(+1cm)から須恵器杯(1)、北東隅の周溝内(+2cm)から須恵器杯(3)、覆土中から須恵器杯(2)、甕(10)が出土している。

土器の特徴 須恵器杯(3)は墨書で、底部を回転糸切りで切り離した後、外周を回転ヘラケズリで整形し、その部分に「海上厨」の文字が書かれている。須恵器杯(1・2)は黒褐色系で、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する。千葉地域産のものである。土師器皿(4)は体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形している。土師器甕(9)は極小の甕で胎土に雲母粒を含む。

150号住居跡 (第362・364図、写真図版60・61・126・178)

遺構は、調査区の西縁で、国分尼寺跡北辺部北門近くの南側台地部分J M-01、02、11、12区に位置する。西側隣接には149号平安時代住居跡が並列している。住居は北を向き、主軸方位はN—18°35′—Eである。形状は、東西方向に長い横長の方形状で、南北軸3.2m、東西軸3.6mを測る。住居の壁は深くきちと垂直に掘り込まれ、角はやや隅丸状である。壁高は、北壁で53cm、西壁で42cm、南壁で58cm、東壁で60cmを測る。面積は、確認面で11.04㎡、床面で10.13㎡となる。床は、ハードローンを約15cm掘り込み、直接床面としている。中央部の床面はやや低くなっているが、固く良好である。左右の床についても、ハードローン面を直接床面としている。角部分は貼床で、踏み固められ硬化している。周溝は、住居を掘る際に若干広めに掘り、壁の補強をした後に埋め込んでいる。全体に浅めであるが、カマドの位置およびカマド左側の一部を除いて全周する。床面には、柱穴の痕跡はまったく見られなかった。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。壁を「ㄣ」の字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、35cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、95cm(うち煙道部分の長さ45cm)、幅120cm、高さ55cmを測る。燃焼部分は、火床を床面よりやや掘りくぼめており、最大幅約60cm、奥行き50cmで、

傾斜のある奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約15cm高い位置で、そこから先端に向かって水平に延び、先端で垂直に立ち上がって終わる。左袖の外側には土師器甕が、倒れかかった状態で出土している。

遺物については、覆土中からの出土で、須恵器杯(1~4)がある。ほかに覆土中から打製石斧(5)の出土があった。なおカマド左袖から出土した土師器甕は、遺物が行方不明となっている。

土器の特徴 須恵器杯(4)は黒灰褐色系である。須恵器杯(3)の底部内面には「×」の線刻が認められる。杯類は底部を回転ヘラケズリで整形するものである。

151号住居跡 (第365~367図、写真図版61・126・127)

遺構は調査区の西縁で、国分尼寺跡北辺部の北門近くの南側台地部分 I M—81、82、91、92区に位置する。南側部分には、149号、150号住居跡が所在する。住居は北東を向き、主軸方位はN—15°30′—Eである。形状は南北方向にわずかに長い縦長方形で、やや東壁が短い。南北軸4.14m、東西軸4.05mを測る。西側の両隅は、直角で東側部分は隅丸に近い。壁はしっかりとしており垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で24cm、西壁で32cm、南壁で34cm、東壁で26cmを測る。面積は、確認面で16.2㎡、床面で15㎡、内区(支柱穴内側)で4.7㎡となる。床はハードローム上面を直接床面としている。中央部がやや低くなっているが極めて固く締まっている。壁の付近は、ローム土を入れ、貼床としている部分が見られる。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。柱穴はカマド付近、南側壁際部分に東西方向に4本のピット列が認められる。やや台形状で不整形であるが、支柱穴と思われる。柱穴は、いずれも直径30cm程度の円形の掘形で、深さはP1が47cm、P2が32cm、P3が29cm、P4が26cmである。柱間は、P1・P2が1.65m、P1・P3が2.8m、P2・P4が2.5m、P3・P4が1.85mである。なお、南側のP3、P4の間に、やはり東西列の径50cm、深さ50cm程度で、柱間が60cm程のやや方形のピット列(P5、P6)が認められる。支柱穴に関連したものと思われるが、同時に存在したかどうかは構造上不明である。

カマドは北方向で、北壁の中央に位置する。カマド自体はわずかに住居主軸より30°程度西へ傾く。壁を「∩」字形に掘り込み燃焼部奥壁とする。袖は、塊状の白色粘土を壁に沿って厚く貼り付けている。カマドの全長は2.2m(うち煙道部分1.4m)、幅1.7m(袖の先端部分幅80cm)、高さ30cmを測る。燃焼部分は、火床を床面よりやや掘りくぼめており、最大幅約50cm、奥行き80cmで、垂直のある奥壁を持つ。部分的に天井が残っている。袖の内側には、平瓦を用いて燃焼部壁の補強とし、内部はよく焼け赤化が著しい。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かって傾斜を持ちながら下り、煙道先端で最も深くなる。先端の壁は垂直に立ち上がって終わる。上端で幅25cm、下段で20cm、深さは先端で40cmを測る。両袖外側の周溝部分には、円形状のピットが各1個ずつ見られる。左袖脇のピットは、径20cm、深さ35cm程度。右袖脇は楕円形をしており、径25cm、深さ30cmを測る。カマドに付随した施設の柱穴と考えられる。なお、カマド図に記載されているカマド内の壁補強材として使われた平瓦、丸瓦については、概報では焼成前の生瓦であるという。当該遺物が現在行方不明となっているため、図示し得なかった(写真図版61)。

遺物については、カマド正面から中央付近の床面を中心として出土している。カマド正面の床面(+3cm)から土師器杯(1・9)、同床面(床直)から甕(11)、左脇の床面(+18cm)から杯(5)、中央床面(+6cm)から碗(4)、皿(8)、同床面(+2cm・+10cm)から甕(10)、須恵器甕(15)、南西床面(+8cm)から土師器杯(3)、甕(13)、カマド内から土師器甕(12)、覆土中から土師器杯(2・6)、皿(7)、須恵器壺(14・16)、甕(17)がなど出土している。瓦については、カマド正面の床面(+2cm・+4cm)から平瓦(18・19)の出土である。なお土師器皿(7)については、現在遺物が行方不明である。

土器の特徴 土師器杯類は、体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1~3)、底部を回転糸切りで切

り離れたままのもの(6)などが混在する。土師器杯(9)については体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する杯であるが、出土は土師器杯(1)と同様である。土師器皿類は回転ヘラケズリで整形するもの(7)、手持ちヘラケズリで整形するもの(8)が混在する。土師器甕(12)は胴部外面を横・斜方向にヘラケズリしており、武蔵型の甕である。須恵器甕(15)、壺(16)、甕(17)は茶灰色系である。

152号住居跡（第368図、写真図版62）

遺構は、調査区の西縁で、南側台地部分 I M-74、75、84、85、95区に位置する。住居は北東を向き、主軸方位はN-18°10'-Eである。形状は南北に長く、西側壁より東側壁が長いやや不整形な縦長方形形状である。規模は、南北軸3.65m、東西軸3.1mを測る。住居の角は隅丸で、壁は浅く掘り込まれている。壁高は、北壁で17cm、西壁で12cm、南壁で22cm、東壁で11cmを測る。面積は、確認面で10.85㎡、床面で9.57㎡となる。床はソフトローム上面を直接床面としている。全体に軟弱で固い部分は認められない。周溝、柱穴は認められない。中央床面にある縦長の不整形な土坑状のものは後世の攪乱である。

カマドは北方向で、北壁の中央部分に位置する。カマド自体は、住居主軸から8°30'程度西に傾いている。壁を「U」字形に掘り込み燃焼部奥壁とする。袖は30cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。右袖は粘土の残りが悪く、左袖には袖内に多量の焼土塊が含まれている。カマドの全長は、185cm(うち煙道部分の長さ105cm)、幅95cm、高さ25cmを測る。燃焼部分は、床面を掘りくぼめて火床部分を作っており、最大幅約50cm、奥行き80cmでやや急に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かって傾斜して下がる。煙道の幅は上端で35cm、下端で25cm、深さは35cmを測る。

遺物については、時期を検討できる資料が少ない。覆土中から土師器杯の底部片(1)、茶褐色系の須恵器甕の胴部破片(2・3)が出土している。

土器の特徴 土師器杯(1)については、ロクロ整形で底部外面を単一方向のヘラケズリで整形する。

153号住居跡（第369～375図、写真図版62・127・128・157・158・174）

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近のJ N-31、32区に位置する。住居は西方向を向き、主軸方位はN-75°30'-Wである。形状は、南北に長い横長の方形形状で東西軸2.93m、南北軸2.65mを測る。住居の角は隅丸で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で約32cm、西壁で28cm、南壁で30cmを測る。面積は、確認面で7.28㎡、床面で6.77㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面としている。壁の周囲はローム土を入れ、貼床としている部分が見られる。床面は全体に固く、特に中央部が固く締まっている。周溝は全体に浅いが、カマドの位置を除いて全周する。柱穴は認められない。南側中央の床面には径25cm、深さ10cm程度のピット(P1)が見られるが、これは住居出入口施設の柱穴に関連したものであろう。

カマドは西方向で、西壁の南隅近くに位置する。カマドは壁を掘り込まずに直接燃焼部奥壁としている。煙道部分の調査から、2時期のカマドの作替えが認められた。古い時期のカマドは、新しい時期のものに大方壊されていたが、新しい時期の煙道部分のやや南にずれた位置の下から、長さ110cm、上端幅40cm、下端幅20cm、深さ35cm程度のカーブのきつい「U」字形の断面を持っている古い時期の煙道が検出されている(カマド平面図中の破線部分)。新しい時期のカマドは、袖部分に灰白色粘土を用いて縦50cm、横90cmの方形形状に作っている。焚き口部分には長さ50cm、幅15cm、厚さ15cmの断面がやや楕円形状の天井が残っていた。カマドの全長は、155cm(うち煙道部分の長さ105cm)、幅90cm、高さ50cmを測る。燃焼部分は、幅約50cm、奥行き50cmで垂直な奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、カマド主軸に対して若干北方向に曲がっている。煙道部には底部を打ち欠いた3個体の土師器甕(23・27・29)、平瓦等(43～45)を煙道内に埋設し、煙突状にしている。甕は煙道中位から燃焼部側にかけて、口

縁部を燃焼部に向けソケット状に連結し、外側に砂を詰めて固定する方法をとっている。また中位から先端にかけては、平瓦を箱形に組み合わせて煙道を作っている。煙道の形状は燃焼部より8cm程度高い位置で、そこから先端に向かって水平に延び、先端をピット状に掘り込んでいる。幅は上端で30cm、下端で15cm、最も深い先端の煙突部分で35cmを測る。

遺物については、カマド内およびカマド左脇から中央、南側床面にかけて多く出土している。カマド内からは土師器杯(9・11・12)、皿(19・21)、甕(24・25・30～32)、カマドの煙道として使用した土師器甕(23・27・29)、平瓦(43)、煙道部の左壁部分から平瓦(44)、同右壁部分から完形の平瓦(45)、カマド右脇の床面(+5cm)から土師器杯(5)、同左脇の床面(+1cm)から土師器杯(6)、同左側の床面(床直)から完形の平瓦(42)、同正面の床面(床直・+5cm)から須恵器短頸壺(34)、土師器甕(22)、中央床面(床直・+2cm)から土師器杯(10・4)、同(+2cm・+7cm)から土師器皿(18・17)、同(+5cm)から土師器甕(26)、同(床直)から丸瓦(41)、南側床面(床直・+8cm)から土師器杯(7・2)、同隅の周溝内(+19cm)から土師器杯(1)、南東床面(床直)から土師器杯(14)、東側・南側壁際の床面(+2cm・+5cm)から均整唐草文様の軒平瓦(39・40)、覆土中から土師器杯(3・8・13・15)、皿(20)、甕(28・35)、須恵器杯(16)、須恵器甕(33・36～38)、平瓦(46)などが出土している。このほか南側壁際の床面(+1cm)から鉄鏝(47)、中央東側の床面(+3cm)から鉄滓(2点・236g)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類は、体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1～11)、体部外面、底部とも手持ちヘラケズリで整形するもの(12～15)とが混在する。土師器杯(1)は底部を回転糸切りで切り離した後、中央を残して外周を手持ちヘラケズリで整形する。土師器杯(10)は底部外面に則天文字による「九」の墨書が認められる。土師器皿類は体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形する。須恵器杯(16)、甕(33・38)、短頸壺(34)は、黒褐色、茶灰色系の須恵器である。

154号住居跡（第376図、写真図版63・128）

遺構は、北東側尾根状台地の基部 I M—30、I N—21区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—9°25′—Eである。住居としては規模の小さいもので、形状は、東西方向に長く北側部分が広がる横長形状で、東西軸3.2m、南北軸2.68mを測る。住居の角はやや隅丸で、壁は浅く、部分的には痕跡程度である。壁高は、北壁で13cm、西壁で4cm、南壁で4cm、東壁で5cmを測る。面積は、確認面で8.06㎡、床面で7.23㎡となる。床はソフトローム上面を直接床面としている。床面はカマドを中心とした中央部が固く締まっているのみである。周溝はカマドのある北壁の一部、西側壁部分を除いてめぐる。支柱穴は認められない。

カマドは、北(カマドA)および西(カマドB)の2カ所あり、AからBに作り替えている。なおカマドの実測図がないため、範囲のみの図示である。カマドAは北側壁の中央よりやや西に位置する。当初に作られ、その後カマドBに作り替えたため、袖・燃焼部分は壊され、周溝・床面となっている。煙道部分以外は、痕跡程度しか残っていない。カマドBは、西壁のほぼ中央部分に作られている。住居の主軸からは西へ91°25′傾いている。壁を掘り込まずに直接燃焼部奥壁としている。カマドの全長は、20cm前後、幅70cm程度である。住居外に延びる煙道部分は、痕跡も認められなかった。

遺物については、中央床面の東側を中心として出土している。東側の床面(+1cm・+3cm)から土師器皿(3)、杯(2)、北側壁の周溝内(+5cm)から土師器杯(4)、北西隅の床面(床直)から土師器甕(10)、南西隅の床面(床直)から土師器杯(7)、覆土中から土師器杯(1・5・6・8・9)、台付甕(11)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類は体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1・4～6)、体部外面、底部とも手持ちヘラケズリで整形するもの(2)、底部を回転糸切りで切り離したままのもの(7)とが混在する。土師器杯(4)は

底部を回転糸切りで切り離した後、中央を残して外周を手持ちヘラケズリで整形する。

155号住居跡（第377～379図、写真図版63・128・158）

遺構は、北東側尾根状台地の基部 I N-03、12、13、23区に位置する。住居は北東を向き、主軸方位はN-47°10'-Eである。形状は、北西-南東方向にやや長い横長方形で北西-南東軸3.65m、北東-南西軸3.0mを測る。住居の角は隅丸で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北東壁で34cm、北西壁で33cm、南西壁で30cm、南東壁で36cmを測る。面積は、確認面で10.56㎡、床面で9.46㎡となる。床はハードルーム上面を直接床面とし、床のくぼんだ部分に暗褐色土を入れ平坦にしている。床は中央部分が固いのみで、周辺はあまり固くない。周溝は、床面より深く掘り込まれ、カマドの位置を除いて全周する。規則性のある柱穴は認められないが、中央南西側床面に径30cm、深さ25cm程度の円形状ピット(P1)が見られる。住居出入口施設に関連した柱穴と思われる。

カマドは北東方向で、北東側壁の中央部分よりやや西に位置する。カマド自体は住居主軸から7°00'西へ傾く。壁を掘り込まずに燃焼部を構築する。袖は、長さ50cm、幅40～50cm程度で灰白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、200cm(うち煙道部分の長さ125cm)、幅140cm、高さ35cmを測る。燃焼部分は、最大幅約55cm、奥行き75cmで、傾斜のある奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かい緩やかに下がる。先端部分で径25cm程度のピット状の煙突を作って終わる。煙道の幅は上端で30cm、下端で20cm、深さは先端で20cmである。なお燃焼部内から、カマド支脚として使われた玉縁の丸瓦が直立した状態で出土している。

遺物については、カマド右正面の床面(床直)から土師器皿(11)、平瓦(21)、北西床面(床直)から土師器杯(7)、北西壁際の周溝内(+6cm)から施薬陶器(奈良三彩)の小壺(16)、南西壁際の周溝内から丸瓦(20)、覆土中から土師器杯(1～6、8～10)、皿(12)、甕(13・14)、須恵器甕の胴部破片(19)、甕片(15・18)、刀子(17)が出土している。なお、カマド燃焼部内よりの出土で、支脚として使われた丸瓦は、遺物が行方不明のため図示し得なかった(写真図版63)。

土器の特徴 土師器杯類は、体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1・2・4～6・8～10)、底部を回転糸切りで切り離したまま整形せず、体部外面下端を回転ヘラケズリで整形するもの(3・7)、体部外面に数条の凹線状の沈線をめぐらすもの(5～8)などが混在する。土師器杯(3)は墨書土器で、破片のため不明瞭だが底部外面に一字分の文字が書かれている(左の部首が人偏で右は不明)。平瓦(21)は、格子目タタキである。

158号住居跡（第380～386図、写真図版63・128・159・160・161・174）

遺構は、北東側尾根状台地基部の斜面にかかる H N-42、43、52、53区に位置する。住居は北方向で、主軸方位はN-6°40'-Wである。形状は、東西方向にやや長い横長方形で、南北軸3.0m、東西軸3.25mを測る。住居の角は直角で、壁はきちっと垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で37cm、西壁で42cm、南壁で43cm、東壁で37cmを測る。面積は、確認面で9.57㎡、床面で8.25㎡となる。床は、ハードルーム上面を直接床面としている。中央部のみが固く、左右、入り口の部分は軟弱である。周溝は、カマド部分を除いて全周する。柱穴については、規則性のあるピット列は見られない。南側中央壁際の床面には径30cm、深さ20cm程度の円形ピット(P1)が見られるが、住居出入口施設に関連した柱穴であろう。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分からやや西側に位置する。煙道部分に瓦を使用するなどしっかりとした作りである。壁を「ㄣ」の字形に掘り込んで燃焼部奥壁とする。袖は、50cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、200cm(うち煙道部分の長さ145cm)、幅105cm、高さ50cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約50cm、奥行き55cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部内の壁は

よく焼けており、赤化が著しい。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かって緩やかに下がる。断面は逆台形状で上端60cm、下端で25cm、深さは40cmである。上面には平瓦(11・13・15・17・19)、丸瓦(10)を8枚程度横に渡して天井の蓋とし、粘土で被覆している。先端部分は平瓦(14・16)を直立気味に立てて煙突としている。

遺物については、カマド周辺を中心に出土している。カマド正面の床面(床直)から土師器碗(3)、小型甕(7)、平瓦(9)、同右正面の床面(床直)から土師器小型甕(6)、同左脇床面(床直)から玉縁の丸瓦(8)、中央床面(+8cm)から内面を黒色処理した土師器杯(1)、カマド内から土師器杯(2)、甕(4・5)、カマド煙道内から丸瓦(20)が出土している。なお、覆土中から2本以上の刀子片が付着した茎部分(21)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類は体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1・3)、底部を回転糸切りで切り離れたまま(2)のものが混在する。平瓦(19)は、熨斗瓦(切り熨斗瓦)への転用品である。

159号住居跡 (第387～399図、写真図版64・128・129・161～163・174・175・177)

遺構は、北東側尾根状台地基部の斜面にかかるHN-84、85、94、95区に位置する。住居は北方向で、主軸方位はN-16°50'-Wである。形状は、東西方向に長い横長形状で、南北軸3.58m、東西軸4.1mを測る。住居の角は隅丸で、壁はきちっと垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で33cm、西壁で32cm、南壁で24cm、東壁で37cmを測る。面積は、確認面で14.16㎡、床面で12.05㎡となる。床はソフトローム上面を直接床面とし、部分的に凸凹のある凹部に粘土や暗褐色土を埋め込んで床面としている。従って貼床というほどではない。踏み固められ、硬化した部分は広い。周溝は、カマド部分を除いて全周する。溝部分は、最初の掘り込みはさらに広いが、壁を補強した後に埋め込んだものと思われる。柱穴については、規則性のあるピット列は見られない。カマド右正面にある径30cm、深さ38cm程度の円形ピットの性格については不明である。南側中央壁際の床面に凸部を上にした平瓦(23)が見られるが、これは出入口の踏み石代わりに使用されたものであろう。

カマドは北西方向で、北西側壁の中央部分に位置する。煙道部分に瓦を使用するなどしっかりとした作りである。壁を掘り込まずに直接燃焼部奥壁とする。袖は60cm程度の長さで灰白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、220cm(うち煙道部分の長さ150cm)、幅120cm、高さ50cmを測る。燃焼部分は、火床を床面よりわずかに掘りくぼめており、最大幅約60cm、奥行き70cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。奥壁の煙道部との壁際には、土師器甕の胴部片が粘土で貼り付けている。燃焼部内の両側壁はよく焼けており赤化が著しい。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かって緩やかに下がる。断面は深い「U」字状で上端40cm、下端で15cm、深さは55cmである。上面には平瓦(26・28・30)を横に渡して天井の蓋とし、粘土で被覆している。また先端部分は5枚の平瓦(21・27・29・34・35)の凹面部を内側に向けて組み合わせるように直立させて煙突を作っている。

遺物については、カマド周辺、東側床面を中心に良好な資料が多く出土している。カマド内から土師器杯(2)、小型甕(11・14)、カマド左脇の床面(+4cm)から内面を黒色処理した土師器杯(7)、同右脇の床面(床直)から土師器甕(8・9)、東側の床面(床直・+2cm)から須恵器甕の胴部片(16・17)、南側壁際の床面(床直)から土師器杯(4)、南東角の床面(+13cm)から土師器小型甕(13)、西側壁際の床面(床直)から体部外面、底部の2カ所に「今」の墨書が認められる土師器杯(5)、同床面(+8cm)から土師器甕(15)、覆土中から土師器杯(1・3・6)、甕(10・12)、石製砥石(18)が出土している。このほかカマド右脇の床面(+2cm)から鉄鏃? (41)、門の金具(43)、東側壁際の床面(床直)から刀子の切先部分(44)、覆土中から鉄釘(42)が出土している。住居床面部分から出土の瓦については、カマド左脇および東側の周溝内から平瓦(33・37)、南西の床面(+2cm)から平瓦転用の割り熨斗瓦(40)、カマド正面の床面(床

直)から平瓦(25)、カマド右脇隅の床面(+5cm)から丸瓦(20)、カマド内から丸瓦(22)、平瓦(36・39)、南東隅の床面(+13cm)から平瓦(31)、覆土中から軒平瓦の破片(19)、平瓦(24・32・38)など出土している。

土器の特徴 土師器杯類は体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1・2)、底部を手持ちヘラケズリで整形するもの(4・5)、底部を回転糸切りで切り離したまま再調整しないもの(6・7)などが混在している。出土状況からは底部を切り離したままの杯類が主体的と思われる。

161号住居跡 (第400～402図、写真図版64・129・176)

遺構は、北東側尾根状台地基部の中央部分HN—98、JN—08区に位置する。住居は北東を向き、主軸方位はN—15°15′—Eである。形状は、東西方向にやや長い横長形状で南北軸3.21m、東西軸3.37mを測る。住居の角はやや隅丸で、壁は浅い。壁高は、北壁で23cm、西壁で31cm、南壁で30cm、東壁で22cmを測る。面積は、確認面で10.24㎡、床面で9.3㎡となる。床は、ソフトローム面を直接床面としている。床面は、全体に固くなく軟弱である。周溝は認められない。規則性のある柱穴は認められないが、南側床面に柱穴らしきピットが認められる。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。カマド自体は住居主軸から11°25′西へ傾いている。壁を「冫」字形に掘り込んで燃焼部奥壁とし、煙道部を設けないカマド形態となっている。袖は、灰白色粘土を用いて長さ50cm程度で平行に構築する。カマドの全長は70cm、幅95cm、高さ20cm、燃焼部の最大幅は約45cmを測る。燃焼部奥壁は、傾斜をもって立ち上がる。燃焼部内には支脚として使用されたとと思われる丸瓦(24)が直立した状態で検出されている。

遺物については、カマドを中心に多く出土している。特に土師器杯類が多く見られ、良好な資料である。カマド内から土師器杯(4・6・11)、高台付皿(16)、カマド右脇の床面(+4cm・+5cm)から土師器杯(9・14)、同床面(+5cm・+9cm)から土師器小型甕(18・17)、同床面(+8cm・+9cm)から土師器甕(20)、鉢(23)、カマド正面の床面(+2cm)から完形の土師器皿(15)、中央の床面(床直)から土師器杯(10)、東側床面(床直)から東側壁際の床面(+3cm)からほぼ完形の土師器杯(2)、南側壁際の床面(+10cm)から土師器杯(3)、西側床面(床直)から土師器杯(1・7)、覆土中から土師器杯(5・8・12)、内面を黒色処理した高台付椀(13)、土師器甕(19・21)、灰釉陶器の長頸壺(22)が出土している。瓦については、カマド正面の床面(+8cm)から平瓦(25・26)が出土している。このほか西側床面(+3cm)から鉄斧(27)、南側床面(+1cm)から鉄滓が出土している。

土器の特徴 土師器杯類は体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1～6)、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形するもの(7～9)、底部を回転糸切りで切り離したままのもの(10)とが混在している状況である。土師器皿(15)は、底部を回転ヘラケズリで整形する。土師器片口鉢(23)は、本遺跡で唯一の検出例である。

162号住居跡 (第403～406図、写真図版65・129・163)

遺構は、北東側尾根状台地基部の中央部分JM—28、29、38、39区に位置する。住居は北を向き、主軸方位はN—8°30′—Eである。形状は、正形状であるが全体にやや西に傾いている。規模は、東西軸3.95m、南北軸3.95mを測る。住居の壁は、深くきちと垂直に掘り込まれ、角もほぼ直角である。壁高は、北壁で46cm、西壁で50cm、南壁で46cm、東壁で43cmを測る。面積は、確認面で15.3㎡、床面で13.1㎡、内区(主柱穴内側)で2.9㎡となる。床は、ハードロームを直接床面としている。カマド正面、柱穴内の内区を中心として固くよく締まっている。左右および入り口部分は、暗褐色土を含むローム土を5～10cm程度敷き詰めて貼床としている。やや軟弱である。周溝は、北東の隅、カマドの位置する部分を除き全周する。深さは左右の貼床分だけである。壁を補強した後に貼床を施したものと思われる。主柱穴はほぼ対角線上に4本認められる。直径40cm程度の円形でほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が57cm、P2が46cm、P3が52cm、P4が47cmである。柱間は、それぞれ均等で、

P1・P2が1.7m、P1・P3が1.65m、P2・P4が1.7m、P3・P4が1.7mである。柱穴内には、柱痕が残っており、住居の廃絶後にそのまま廃棄されたか、または切り取られたかしたものであろう。抜き取られた痕跡は認められない。また南側中央部分に40×20cm程度、深さ50cm程度の縦長形状のピット(P5)が認められるが、これは住居出入口施設に関連する柱穴と思われる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分から西に偏っている。灰白色粘土を多く使用し、特異な構築方法で作られている。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部奥壁とする。袖はあまり住居床面に出ず、「U」字部分の両壁に灰白色粘土を使用して幅30cm、長さ80cm、厚さ50cm程度の箱形の袖を平行に作っている。カマドの全長は、200cm(うち煙道部分の長さ100cm)、幅115cm、高さ55cm、燃焼部分は長方形で、幅60cm、奥行き85cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部の両壁はよく焼け、赤化している。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部奥壁より25cm程度の段をつけ、先端に向かってほぼ水平に延びる。煙道の上端幅は60cm、下端25cm、最も深い先端部で50cmとなる。煙道の天井部分には厚さ15cm程度の粘土が、煙突部分の位置を除いて全面にわたり被覆されている。燃焼部内には、玉縁の丸瓦(14)、平瓦を転用した割り熨斗瓦(15)を2枚平行に立て並べているが、カマドの支脚に使用したと思われる。

遺物については、カマド内から土師器杯(1)、甕(4～7)、須恵器大形甕の胴部破片(12)、カマド右脇の床面(+2cm)から土師器時期小型甕(10)、北西周溝内(+9.5cm)から土師器杯(2)、覆土中から須恵器杯の破片(3)、土師器甕(8)、小型甕(9)、須恵器甕(11)が出土している。このほか左袖内から丸瓦(13)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する杯(1)とロクロ整形で体部外面下端、底部を手持ちヘラケズリで整形する杯(2)が見られる。土師器杯(2)については、ロクロ整形技法への過渡的な段階を示しているものか不明である。なお、周溝内のやや高い位置での出土であるから混入品の可能性もある。須恵器大型甕(12)については、破片の外面全面に朱が付着している。

167号住居跡 (第407～409図、写真図版65・129・130)

遺構は、南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、JN-02、03、12、13区に所在する。2間×3間の東西棟である503号掘立柱建物跡が重なっており、東部分には、東壁に接してやはり2間×3間の東西棟である502号掘立柱建物跡、南部分に隣接して2間×3間の東西棟である504号掘立柱建物跡がかかっている。掘立柱建物群との新旧関係は、写真を見る限り、掘立柱建物を壊して住居が作られたようにも見受けられるが、発掘当時の記載がないため不明である。

住居は北を向き、主軸方位はN-18°10'-Eである。形状は南北方向に長い縦長形状で南北軸4.0m、東西軸3.64mを測る。住居の角は直角で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で40cm、西壁で36cm、南壁で36cm、東壁で40cmを測る。面積は、確認面で14.32㎡、床面で12.14㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面としている。周溝、規則性のある柱穴は認められない。

カマドは、北方向で、北側壁の中央部分に位置する。カマド自体は、住居主軸から2°30'西へ傾いている。壁を「八」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、壁を構成する地山(ローム土)を「ハ」の字状に張り出させて、その部分に粘土を貼り付けて構築している。袖の粘土はほとんど残っていない。カマドの全長は、260cm(うち煙道部分の長さ185cm)、幅135cm、高さ35cmを測る。燃焼部分は、火床部分を掘りくぼめており、最大幅約70cm、奥行き75cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから煙道の中央に向かい緩やかに下り、一旦立ち上がって段を作ってさらに先端に向かって下がる。先端部分で径35cm程度のピット状の煙突を作って終わる。煙道の幅は、上端で20cm、下端で15cm、深さは先端で25cmである。

なお左袖の先端部分に丸瓦(20)が、袖の補強材として残されている。両袖外側の周溝部分には、円形状のピットが各1個ずつ見られる。左袖脇のピットは、径30cm、深さ60cm程度、右袖脇部分は、径30cm、深さ40cmを測る。カマドに付随した施設の柱穴と考えられる。

遺物については量的に多い。遺物の記載ではすべてカマド内から出土ということであるが疑問である。

土器の特徴 種別的にはロクロ整形土師器杯で、体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形する杯(1~4)、底部のみを回転ヘラケズリで整形する杯(5)、底部を回転糸切りで切り離したまま、整形調整しない杯(7~9)に分けられる。土師器皿(10・11)については体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形している。ほか土師器甕(12~15)、平底の甕(16)、須恵器甕の胴部破片(17・18)、平瓦(21)、丸瓦(19)などが出土している。

169号住居跡（第410~415図、写真図版65・66・130・164・165）

建構は、北東側尾根状台地基部の中央部分 I O-22、23、32、33区に位置する。住居の南側に接して505号掘立柱建物跡が存在する。住居は北を向き、主軸方位はN-7°05'Eである。住居の北東部、南東部の角付近には、それぞれ縄文時代の273号、274号陥穴がかかっている。

形状は、カマドのある北壁が弓なりに中央部にせり出しているが、ほぼ正形状で南北軸3.5m、東西軸3.5mを測る。住居の壁は垂直に掘り込まれ、角は直角である。壁高は、北壁で44cm、西壁で42cm、南壁で38cm、東壁で30cmを測る。面積は、確認面で11.73㎡、床面で10.47㎡となる。床はハードルームまで掘り込み、その上に粘土混じりのソフトルーム、ハードルームの混合土を約15cm敷き詰め貼床としている。床面は若干凸凹があるが、全体に良好である。カマド正面を中心として、中央部が固く周囲は柔かい。周溝および規則性のある支柱穴は認められない。北西の角部分(P1)や南側壁際の部分(P2)に径30~50cm、深さ50cm程度のピットが認められるが、あるいは柱穴の一部とも考えられる。

カマドは北方向で、北壁の中央部分に位置する。住居を作るに際して、カマドの位置を考慮して北壁を中央部分に向かって弓なり状にせり出すような形状にしたものと思われる。カマドは、壁を掘り込まずに燃焼部を構築する。袖は壁を利用して、灰白色の粘土を使用し、長さ70cm程度で「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、120cm（うち煙道部分の長さ55cm）、幅110cm、高さ45cmを測る。燃焼部分は、最大幅約60cm、奥行き65cmで、垂直気味に立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部内は良く焼けている。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから一旦水平に延び、先端に向かって緩やかに立ち上がる。煙道の幅は、上端で30cm、下端で15cm、深さは20cmである。両袖外側の周溝部分には、円形状のピットが各1個ずつ見られる。左袖脇のピットは、径30cm、深さ35cm程度。右袖脇部分は、径30cm、深さ40cmを測る。カマドに付随した施設の柱穴と考えられる。

遺物については、カマド部分およびカマド正面の床面、南側の壁際周辺から出土している。カマド内からは、土師器杯(2)、暗茶褐色系の須恵器杯(7)、甕(11)、カマドの右袖の上から土師器杯(1)、カマド右正面の床面(+5cm)から土師器碗(4)、同左正面の床面(+20cm)から須恵器杯(8)、南側壁際の床面(床直・+20cm)から黒茶褐色系の須恵器(6)、須恵器高台付碗(9)、土師器甕(10)、覆土中から土師器杯(3)、須恵器甕(13)、黒茶褐色系の須恵器杯(5)、甕(12)などが出土している。瓦についてはカマド本体の上部から玉縁の丸瓦(15)、行基葺き(17)と玉縁(16)の丸瓦が組合わさった状態で、またカマド正面の床面(+15cm)から玉縁の丸瓦(14)が出土している。このほかカマド右脇の床面(+3.5cm)から鉄釘(18)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類は体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1)、手持ちヘラケズリで整形するもの(4)などが混在する。須恵器杯・甕(5~7・11・12)は暗茶褐色で、千葉地域周辺産である。須恵器杯(5)は底部を回転ヘラ切りで切り離した後、中央を残して外周を単一方向のヘラケズリ、体部外面下端を回転ヘラケズ

りで整形する。須恵器杯(6・7)は体部外面下端、底部を手持ちヘラケズリで整形する。いずれも住居跡に伴うものである。

175号住居跡 (第416・417図、写真図版66・130)

遺構は、北東側尾根状台地基部の中央部分H O—41、42、51、52区に位置する。弥生後期の住居跡である177号住居跡を半分以上壊して作られている。住居は北西を向き、主軸方位はN—63°00′—Wである。形状はほぼ正方形で、北西—南東軸2.55m、北東—南西軸2.69mを測る規模の小さい住居である。住居の角は隅丸で、壁は垂直に掘り込まれている。壁高は、北西壁で27cm、南西壁で22cm、南東壁で19cm、北東壁22cmを測る。177号住居跡より5cm程度深く掘り込まれている。面積は、確認面で6.63㎡、床面で5.76㎡となる。床はソフトローム面を直接床面としている。掘り込みの際にくぼんだ部分に暗褐色土・粘土を敷き、床を平坦に整地している。全体的に床面は軟弱である。周溝、支柱穴は認められない。なお、中央床面には径20cm程度の鉄滓を含む焼土の塊が見られる。床を若干掘りくぼめ、小鍛冶を行った可能性が考えられる。

カマドは北西方向で、北西壁の中央よりやや西に位置する。カマドを調査した際の実測図がないため、詳細は不明である。住居平面図、写真等を見る限り、両袖部分に凹面部を内側に向けた平瓦(4・5)、煙道の側壁部分に平行に置かれた平瓦が見られる。構築材、補強用として用いられたものと思われる。推測での規模は全長90cm、70cm前後であろう。

遺物については、出土資料がわずかである。住居西側隅の床面から土師器甕(1)、覆土中から土師器台付鉢の口縁部片(3)、須恵器広口短頸壺の胴部上半部片(2)が出土している。

土器の特徴 台付鉢(3)については時期の下がる遺物であり、混入品の可能性が高い。いずれにしても時期を考える上での資料が少なく、検討を要する。

179号住居跡 (第418～423図、写真図版66・130・131・176・177)

遺構は、北東側尾根状台地の基部I P—02、03、12、13区に位置する。北東方向から谷が入り込んでおり、ちょうど谷の最奥部の南東斜面に住居は作られている。住居の南東側隣接には180号住居跡があり、この住居によって南東隅のコーナ部分、東側壁および床を壊されている。また北西側隣接には、511号、508号掘立柱建物跡が所在する。住居全体の4/5程度の残存である。住居はほぼ真北を向き、主軸方位はN—1°25′—Eである。形状は正方形で、南北軸4.45m、東西軸4.4mを測る。住居の壁はきちっと垂直に掘り込まれ、角は直角である。北西から南東に下がる傾斜面のため、壁高は、北壁で43cm、西壁で39cm、南壁で13～33cm、東壁で推定10cm前後である。なお180号住居跡の床面との比高差は45cm程度高い。面積は、復元値で確認面19.27㎡、床面17.64㎡、内区(支柱穴内側)で4.7㎡となる。床は、ハードローム面を直接床面としている様で、凸凹した部分にロームブロック、暗褐色土の混合土を敷き詰めて平坦にしている。床面は、直接踏み固められた中央部が硬化しており、周囲は柔かい。覆土中からは炭化物、焼土が多く見られるが、これらは投げ込まれたものと思われる。また、覆土、床部分からはスサ入りの壁材の破片が多量に出土している。周溝は、カマド部分を除いて全周するものと思われる。支柱穴はほぼ対角線上に4本あり、柱穴の掘形から2時期の立替えが認められる。やや西方向にずれている柱穴(P1-1、P2-1)が古く、住居の主軸に近い柱穴(P1-2、P2-2)が新しい。立て替える際に今までの柱は抜き取り、位置をわずかにずらして、さらに深く掘り込んで新しい柱を埋め込んだものとする。P2の柱穴には、南方向から掘って柱を抜き取った穴が確認できる。P3、P4は古い時期の掘形部分をさらに深く掘って新しい柱穴としている。柱穴の深さは、P1-1が35cm、P1-2が58cm、P2-1が47cm、P2-2が51cm、P3が43cm、P4が37cmである。柱間は、古い時期であるP1-1・P2-1が1.92m、P1-1・P3が2.3m、P2-1・P4が2.45m、P3・P4が1.9m、新しい時期であ

る外側のP1-2・P2-2が2.0m、P1-2・P3が2.42m、P2-2・P4が2.46m、P3・P4が1.9mである。なお、南側壁際中央の床面には径60cm、深さ30cm程の円形状ピット(P5)が見られるが、住居出入口施設に関連したものと思われる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。カマド自体は住居主軸から3°30'程度西に傾いている。しっかりとした作りで、壁を掘り込まずに燃焼部奥壁としている。袖は、70cm程度の長さで灰白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、165cm(うち煙道部95cm)、幅145cm、高さ40cmを測る。燃焼部分は、火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約65cm、奥行70cmで、ほぼ垂直に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かって緩やかに立ち上がって終わる。煙道の幅は、上端で30cm、下端で15cm、深さは20cmである。両袖外側の周溝部分には、円形状のピットが各1個ずつ見られる。左袖脇のピットは、径30cm、深さ30cm程度。右袖脇部分は、径20cm、深さ25cm程度である。カマドに付随した施設の柱穴と考えられる。カマド焚き口部分には平瓦が置かれており、カマドの構築材が支脚に使われたものと思われる(遺物については行方不明)。

遺物については、カマド両側の柱穴(P1、P2)付近の床面および中央東側、西側の床面を中心に土師器杯類などが多く出土している。カマド内からは土師器杯(10)、台付甕(22)、須恵器甕(31)、長頸壺(19)、カマド右脇の床面(床直)から須恵器蓋(18)、同右側の柱穴(P2)付近床面(+3cm・+5cm)から土師器杯(1・3)、左側の柱穴内(P1)から土師器杯(4)、甕(27)、カマド左正面の床面(+17cm・+23cm)から土師器杯(8・2)、中央西側の床面(+13cm・+20cm)から土師器杯(5)、甕(29)、中央東側の床面(+10cm)から土師器杯(9・14)、覆土中から土師器杯(6・7・11~13・15~17)、須恵器杯(21)、高台付杯(20)、土師器甕(26・28)、台付甕の脚部(23)、甕(24・25)、須恵器甕の胴部破片(30・32~36)などが出土している。瓦類についてはカマド内から格子目タタキの平瓦(42)、カマド左脇の周溝内から平瓦(41・43)、カマド左側の柱穴(P1)付近床面(床直)から丸瓦(40)、同右側の柱穴(P2)付近床面(床直)から丸瓦(39)、中央西側床面(床直・+20cm)から丸瓦(37・38)が出土している。このほかカマド左正面の床面(床直)から石製砥石(44)が、中央東側の床面(床直)から鉄斧(45)が、覆土中から鉄滓が出土している。

土器の特徴 土師器杯類は体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形するいわゆる非ロクロがほとんどである。大まかに分類すると大型で体部外面を細かい手持ちヘラケズリで整形するタイプ(1~3)、内面に丁寧なヘラミガキを施すもの(5・8)、口縁部内側にかえりを持つもの(7・8)、体部外面をざっくりと広く連続に手持ちヘラケズリするもの(15~17)とに分けられる。このうち土師器杯(1・4)は、体部外面を赤彩し、底部には木葉痕・小枝の圧痕が残る。土師器甕(28)は武蔵型甕である。須恵器高台付杯(4)は、永田・不入窯の製品と思われる。須恵器甕(32・33)は、灰茶色で胎土に雲母片を含んでいることから、常陸産須恵器の可能性が考えられる。

180号住居跡 (第418・424~426図、写真図版66・67・131・175・179)

建構は、北東側尾根状台地の基部I P-03、04、13、14、23、24区に位置する。北東方向から谷が入り込んでおり、ちょうど谷の最奥部の南東斜面に住居は作られている。北西側隣接には179号住居跡があり、この住居の南東隅、東壁、床部分を壊して作られている。住居はやや北西を向き、主軸方位はN-7°25'-Wである。形状は、南北にやや長い縦長の方形状で、東西軸4.32m、南北軸4.4mを測る。住居の角は直角で、壁は垂直に深く掘り込まれている。地形が、西側から東へ下がる斜面部分の上端に作られているため、壁高は、北壁で54cm、西壁で推定60cm、南壁で38cm、東壁で20cmである。なお179号住居跡の床面との比高差は45cm深く掘り込んで床としている。面積は、確認面で18.4㎡、床面で16.8㎡、内区(主柱穴内側)で3.9㎡である。床はハードロームを掘り込み、凹凸部分に暗褐色土とロームブロックの混合土を敷き床面を平坦にしている。従って床はハードロームを直接床面と

している部分も認められる。直接踏み固められた部分は中央部のみで、周囲は柔かい。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。主柱穴はやや方向は並ばないが、対角線上に4本認められる。直径50～70cm程度の不整形な円形でほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が60cm、P2が75cm、P3が47cm、P4が63cmである。柱間は、やや不等で、P1・P2が1.9m、P1・P3が2.06m、P2・P4が1.88m、P3・P4が1.94mである。柱は4本とも対角線上の外側から抜き取った痕跡が残っている。また南側中央部分に80×60cm程度、深さ30cm程度の略長方形のピット(P5)が認められるが、付随する柱穴か住居出入口の施設のものと思われる。

カマドは北方向で、北側壁の中央から東に寄っている。カマド自体は住居主軸から4°10'東へ傾いている。しっかりとした作りで、全長は、190cm(うち煙道部分の長さ120cm)、幅120cm、高さ55cmである。壁を掘り込まずにそのまま燃焼部奥壁とし、袖は、煙道基部から床方向に向かって灰白色粘土を用いて「ハ」の字状に作られている。燃焼部は、最大幅60cm、奥行き67cmで、火床を床面より掘りくぼめている。燃焼部内側の壁はよく焼け、赤化が著しい。なお、奥壁から煙道基部にかけて、粘土の天井部が残っている。住居外に延びる煙道部分は燃焼部奥壁より30cm程度の段をつけ、先端に向かって緩やかに下り、先端部で垂直に立ち上がって終わる。煙道の上端幅は基部で50cm、先端で30cm、下端は20cm程度、深さは最も深い先端部で50cmとなる。なおカマドからは瓦等が出土している。煙道基部の天井部上から平瓦(行方不明)、煙道の先端付近に横に渡した平瓦(行方不明)、燃焼部内からは土製支脚(22)が置かれた状態で出土している。

遺物については、カマド内、住居の北西隅の床面、中央床面から出土している。カマド内からは、須恵器高台付杯(6)、高盤の脚部(10)、土師器甕の胴部(13)、北西隅の床面(+10cm)から土師器杯(1)、中央の床面(床直)から須恵器杯(4)、南側床面(+8cm)から須恵器蓋(8)、南東隅の床面(床直)から須恵器蓋(9)、覆土中から土師器杯(2・3)、須恵器杯(5・7)、土師器甕(11・12・14)、小型甕(15～17)が出土している。瓦については、カマド正面の床面(+5cm)から平瓦(19)、北西隅の床面(+10cm)から平瓦(21)、覆土中から丸瓦(18)、平瓦(20)が出土している。このほか鉄釘(23・24)、鉄滓がカマド周辺の覆土中から出土している。

土器の特徴 土師器杯類は、体部外面を手持ちヘラケズリで整形する器高の低い平底の杯が主体的である。

182号住居跡 (第427～429図、写真図版67・131・165)

遺構は、北東側尾根状台地の基部HP-53、54、63、64、73区に位置する。北東方向から谷が入り込んでおり、ちょうど谷の最奥部の南東斜面に住居は作られている。住居は北西を向き、主軸方位はN—14°55'—Wである。住居西側壁には、横方向に396号陥穴がかかっている。形状は、規格性のある正方形である。規模は、東西軸4.2m、南北軸4.2mを測る。住居の壁はきちっと垂直に掘り込まれ、角もほぼ直角である。壁高は、北壁で44cm、西壁で43cm、南壁で30cm、東壁で27cmを測る。面積は確認面で16.8㎡、床面で15.4㎡、内区(主柱穴内側)で3.0㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面としている。カマド正面部分が踏み固められて固いほかは柔かい。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。周溝部の本来の掘り込みは、平面図に示された幅より広いが、壁を補強した後に埋め込まれたものである。主柱穴は、ほぼ対角線上に4本認められる。南東部分の柱穴(P4)が小さいほかは、直径50cm程度の不整形な円形でほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が36cm、P2が25cm、P3が21cm、P4が12cmである。柱間は、カマド方向に狭まる形状で、P1・P2が1.55m、P1・P3が1.8m、P2・P4が1.82m、P3・P4が1.85mである。また南側壁際の床面(床直)に凸面を上にした平瓦(11)が置かれているが、住居出入口の踏み石に使用されたものであろう。

カマドは北西方向で、北西側壁の中央部分に位置する。灰白色粘土を多く使用し、特異な構築方法で作られている。壁を「U」字形に深く掘り込んで燃焼部奥壁とする。袖は住居床面に出ず、「U」字部分の両壁部分に灰白

色粘土を厚さ10cm程度貼り付け、周溝部分でわずかに「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、145cm(うち煙道部分の長さ65cm)、幅125cm、高さ55cm、燃焼部分は長方形で、幅65cm、奥行き80cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに下り、煙道先端で最も深くなって終わる。先端の壁は、垂直に立ち上がっている。煙道は2段に掘られており、最上端の幅は70cm、中段でさらに長さ125cm、幅28cmの細長い煙道を掘り込んでいる。深さは、先端で45cmを測る。なお中段部の煙道の底には粘土ブロックが見られるが、粘土で被覆した天井部が落下したものであろう。また同部分の粘土混じりの層から須恵器杯(4)、こげ茶色系の須恵器杯(1)が出土している。

遺物については、カマドからの出土がほとんどである。上記の煙道出土のほか、カマド内から土師器甕(5・6)、小型甕(7・8)が、覆土中から体部内面を黒色処理した土師器杯(2)、土師器皿(3)、こげ茶色の須恵器甕(9)、丸瓦(10)などが出土している。

土器の特徴 住居に伴う遺物として、カマド煙道内から出土した須恵器杯が挙げられる。須恵器杯(1)については体部外面、底部をヘラケズリで整形するなど千葉地域産(南河原坂窯か)のものである。須恵器杯(4)については、底部を回転糸切りで切り離したまま、整形調整しないなど永田・不入窯の特徴を持っている。

183号住居跡(第430～432図、写真図版68・131・132・174・180)

遺構は、北東側尾根状台地の中央部H O-29、38、39区に位置する。住居は真北を向き、主軸方位はN-1°15'-Eである。形状は、やや東西方向に長い横長方形で南北軸3.2m、東西軸3.3mを測る。住居の角は北東隅が鋭角的に尖るが、ほかの隅はやや隅丸で、壁は傾斜をもって掘り込まれている。壁高は北壁で28cm、西壁で30cm、南壁で20cm、東壁で20cmを測る。面積は、確認面で9.95㎡、床面で8.4㎡となる。床は、ソフトローム面を直接床面とし、床のくぼんだ部分に暗褐色土を入れ平坦にしている。床は中央部分が固いのみで、左右と南側はあまり固くない。周溝はカマド左側から西壁、南壁までの部分に残っている。規則性のある支柱穴は認められないが、北西隅、北東隅の角部分に径25cm、深さ28cm程度の円形ピット(P1・P2)が、あるいは柱穴となるのかもしれない。また、南側中央壁際の床面に径30cm、深さ25cm程度の円形状ピット(P3)が見られる。これは住居出入口施設に関連した柱穴と思われる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、灰白色粘土を用いて長さ50cm程度で「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、215cm(うち煙道部分の長さ150cm)、幅110cm、高さ25cmを測る。燃焼部分は、最大幅約35cm、奥行き70cmで、なだらかに立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は細長い形状で、燃焼部より約15cm高い位置で、そこから先端に向かって水平に延びる。煙道の幅は上端で25cm、下端で8cm、深さは10cm程度である。右袖の外側には、径25cm、深さ15cm程度の円形状のピットが見られるが、カマドに付随した施設の柱穴と考えられる。なお煙道の基部に横に渡した丸瓦(遺物行方不明)が、また右袖の先端部分に土師器杯(6)が乗るように残されていた。

遺物については、土師器杯類が比較的多い。カマド内から土師器甕(11・14・16・19～21)、行基葺きの丸瓦(31)、カマド右袖の上から内面を黒色処理した土師器杯(6)、南側壁際の床面(床直)から置かれたままの状態の土師器杯(7・8)、覆土中から土師器杯(1～3・5・9・10・12)、碗(4)、甕(13・15・17・22)、小型甕(18)および管状土錘(23～29)、平瓦(30)などが出土している。このほかカマド内から刀子(32)、覆土中から鉄滓の出土が見られる。

土器の特徴 土師器杯類は、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形するもの(1～5)、底部を回転糸切りで切り離した後に中央部を除いて手持ちヘラケズリで整形するもの(6)、底部を回転糸切りで切り離したまま、整形調整しないもの(7～10)とに分類できる。土師器杯(3・6)は体部内面を黒色処理する杯である。土師器杯(5・8・9)は

口縁部内・外面に油煙が付着するなど灯明用杯として使用したものであろう。これらのうち、出土状況から確実に住居に伴うものは土師器杯(6・7・8)であり、底部を回転糸切りで切り離したまま、整形調整しない杯が主体的と思われる。土師器甕(16)については、口縁部に比して胴部が異様に膨らむもので、異種なものである。

190号住居跡 (第433図、写真図版68)

遺構は、北東側尾根状台地の中央部G O-97、98、H O-07、08区に位置する。住居は真北を向き、主軸方位はN-0°30'-Eである。形状は、東西に長く北東に角張る横長形状で東西軸4.5m、南北軸4.3mを測る。住居の角は北東の角を除いて直角で、壁は浅く斜めに掘り込まれている。壁高は北壁で26cm、西壁で25cm、南壁で25cm、東壁で23cmを測る。面積は、確認面で18.04㎡、床面で15.6㎡となる。周溝の施設は認められない。支柱穴は、対角線上に住居の四隅に径40cm程度の円形柱穴、および住居北寄りの床に東西方向に2本の円形柱穴が認められる。四隅の柱穴の深さは、P1(北西部分)71cm、P2(北東部分)62cm、P3(南西部分)70cm、P4(南東部分)60cmである。床面部分の柱穴は西側部分47cm、東側部分48cmであり、四隅部分を含めて、対になる柱穴の深さはほぼ一定している。柱間は東側、南側でやや広く、P1・P2が3.7m、P1・P3が3.5m、P2・P4が4.1m、P3・P4が4.1mである。床は、ソフトローム面を直接床面としている。床は踏み固められた部分が全くなく、炉、カマド等の施設も認められなかった。また遺物の出土量の少ないことなど、少なくとも生活に使用したものではなく、実際に使用しないか、あるいは日常生活以外の目的で作られた施設と思われる。

遺物については、出土が少なく、時期を検討する資料に欠ける。いずれも覆土中からの出土で、土師器杯の底片(1)、須恵器蓋部分(2)である。このほか瓦の出土があるが、小破片のため、図示し得なかった。

土器の特徴 土師器杯(1)は、体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形している。須恵器蓋(2)は天井部のつまみ部分を欠失する。

202号住居跡 (第434～436図、写真図版68・132・165)

遺構は、北東側尾根状台地の中央部G P-82、92区に位置する。住居は真北を向き、主軸方位はN-1°20'-Wである。形状は南北に長い縦長形状である。東西軸2.75m、南北軸3.1mを測り、規模の小さい住居である。住居の壁はやや浅いが、きちっと垂直に掘り込まれ、角もほぼ直角である。壁高は北壁で27cm、西壁で21cm、南壁で8cm、東壁で10cmを測る。面積は、確認面で8.4㎡、床面で7㎡となる。床は、中央部分においてハードローム上面を直接床面としている。左右の部分はロームと暗褐色土の混合土を敷きつめ貼床としている。床面は、カマド正面から中央部、南側壁にかけて踏み固められており固い。周囲は、踏み固められた形跡が見られるが、軟弱である。周溝はカマドの位置する部分を除き全周する。規則性のある支柱穴は認められない。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。182号住居跡のカマド形態に似ている。壁を「U」字形に深く掘り込んで燃焼部奥壁とする。袖は、住居床面に出ず、「U」字部分の両壁部分に灰白色粘土を厚さ8～10cm程度貼り付け、周溝部分でわずかに「ハ」の字状に開き、そのまま壁を沿うように袖を作っている。カマドの全長は、90cm(うち煙道部分の長さ30cm)、幅110cm、高さ25cm、燃焼部分は幅45cm、奥行き60cmで、傾斜をもって立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部内には平瓦(9・10)粘土の壁に貼り付け、直立するように立てている。これは壁の補強としたものであろう。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約30cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに下り、煙道先端で最も深くなって終わる。煙道の幅は、上端で25cm、下端で10cm、深さ10cm程度である。

遺物については、カマド周辺、壁際からの出土が主である。カマド内から土師器杯(2)、皿(5)、甕(6)、熨斗瓦(7)、カマド右側の周溝(直上)から体部外面に「本」と墨書された土師器杯(1)、西側床面(ピット内)から土師器杯(4)、東側周溝内から平瓦(8)、覆土中から体部内面の底部中央に線刻文字「𐤎」の認められる土師器杯(3)など

が出土している。

土器の特徴 遺物は少ないが、出土状況から土師器杯類は住居に伴うものである。土師器杯については、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形するもの(1・2)、底部を回転糸切りで切り離れたままで、体部外面下端のみ手持ちヘラケズリで整形するもの(3)に分類できる。

203号住居跡 (第437～439図、写真図版68・69・132・133・176・177)

遺構は、北東側尾根状台地の中央部G P-93、H P-03区に位置する。住居北西の隣接には、202号住居跡が存在する。住居はやや西を向く北方向で、主軸方位はN-8°25'-Wである。形状は、東西軸が南北軸の2倍弱ある横長形状である。規模は、東西軸3.42m、南北軸1.85mを測り、規模の小さい住居である。住居の壁はやや浅いが、きちっと垂直に掘り込まれ、角もほぼ直角である。住居の位置する地形が、北西から南東の谷に下がる緩斜面であるため、壁高は、北壁で18cm、西壁で16cm、南壁で13cm、東壁で14cmを測る。面積は確認面で6㎡、床面で5.2㎡となる。床は、ソフトローム面を直接床面としている。全体に踏み固められた形跡が見られるが、さほど固くない。西側部分は軟弱である。東側カマド付近に出入口と思われる固い部分が認められる。特別の施設を設けず、壁をなだらかに削り込んで出入口としたものと思われる。周溝、柱穴は確認できなかった。

カマドは北方向で、北側壁の北東隅に位置する。壁を掘り込まずに直接壁部分を燃焼部奥壁とする。袖は、壁から45cm前後の長さを持ち、あまり開かない形態である。カマドの全長は、80cm(うち煙道部分の長さ35cm)、幅75cm、高さ25cm、燃焼部分は、幅40cm、奥行き45cmで、傾斜をもって立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約10cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに上がって終わる。煙道の幅は上端で35cm、下端で25cm、深さ10cm程度である。

遺物については、カマド右脇の住居北東隅、中央床面、西壁際からまとまって出土している。床面直上の遺物が多く、時期を検討する上で良好な資料の一群となりうる。まずカマド右脇の住居隅床面(床直)からは土師器杯(1・4・17・23)、椀(10)、高台付き小型椀(14)、甕(19・26)、こげ茶色系の須恵器甕の胴部破片(24)、同部分の壁際床面(+5cm)から土師器台付鉢(25)、カマド内から土師器杯(6)、甕(20)、平瓦(28・29)が、カマド正面の床面(+3.5cm)から緑釉陶器の高台付稜椀(18)、中央西側の床面(+9cm・+10cm)からは土師器杯(9・7)、南側壁際の床面(+2.5cm)から土師器杯(8)、西側壁際の床面からは土師器杯が7個体重なったまま、崩れた状態で出土している。上から(2)・(3)・(5)・(13)・(15)・(11)・(12)の順に積み重ねられている。このほか覆土中から土師器高台付小型椀(16)、甕(21)、小型甕(22)、軽石製砥石(30)、平瓦(27)が、中央北側の壁際の床面(+7cm)からは銅製袴帯具の巡方(31)が出土している。

土器の特徴 出土状態のはっきりとした良好な遺物群である。土師器杯類は大まかに分けて、体部外面を整形せず、底部を糸切りで切り離れたままの杯(1～9)、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する杯(10～15)などに分類できる。この3種は同時期に伴うものである。土師器杯(11～16)は内面を黒色処理した杯類で、土師器杯(7・8)は、口縁部付近に油煙が付着していることから灯明用杯であろう。このほか、土師器台付鉢(25)は本遺跡では唯一の器種である。

205号住居跡 (第440図、写真図版69・70・133)

遺構は、北東側尾根状台地の南東斜面部H P-35、36、45、46区に位置する。南側隣接の206号弥生時代住居跡を壊して作られている。住居は真北を向き、主軸方位はN-0°30'-Wである。形状は南北方向に長く、また南壁より北壁が長いやや不整形な縦長形状で、南北軸3.49m、東西軸3.35mを測る。住居の壁はやや傾斜をもって掘り込まれ、角はやや隅丸である。壁高は、北壁で41cm、西壁で46cm、南壁で推定35cm、東壁で14cmを測る。206

号住居跡の床との比高は8cm程度掘り込んでいる。面積は、確認面で10.9㎡、床面で9.9㎡となる。床はハードローム面に5～10cm程度ロームブロックおよび暗褐色土、黒色土の混合土を敷き詰め貼床としている。直接踏み固められ、固くなっている部分は中央部のみで、左右は柔かい。周溝は、浅めで貼床部分の深さであるが、カマドの位置を除いて全周する。主柱穴の痕跡は認められない。南側中央壁際の床面に径40cm、深さ35cm程度のやや楕円形状ピット(P1)が見られる。住居出入口施設に関連した柱穴と思われる。

カマドは北方向で、北側壁のほぼ中央部分に位置する。壁を掘り込まずに、燃焼部を構築する。袖は、壁から70cm程度の長さで灰白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、160cm(うち煙道部分の長さ80cm)、幅130cm、高さ50cmを測る。燃焼部分は、火床を床面よりやや掘りくぼめており、最大幅約60cm、奥行き80cmで、傾斜のある奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに立ち上がって終わる。煙道の上部には、天井粘土が厚さ5cm程度敷き詰められているが、天井部分の被覆として用いられたものと思われる。煙道の幅は、上端で40cm、下端で25cm、深さ30cm程度である。煙道の先端付近に土師器甕がまとまって出土している。

遺物については、カマドの煙道部分から土師器甕(3～5)、覆土中から土師器杯(1・2)、土師器甕(6)が出土しているのみである。

土器の特徴 時期を検討する遺物は少ないが、土師器杯(1・2)は器高の低い平底の杯で、体部外面を手持ちヘラケズリで整形するものである。

207号住居跡(第441～443図、写真図版69・70・133・166)

遺構は、北東側尾根状台地の南東斜面部H P-55、56、66区に位置する。北側隣接の206号弥生時代住居跡の南側壁、床部分を壊して作られている。また南東側部分では、208号住居跡の北西隅の角、床を壊している。住居は北を向き、主軸方位はN-21°30'-Wである。形状は、南東角が内側に入るやや不整形な方形状で、南北軸4.0m、東西軸4.05mを測る。住居の壁は垂直に掘り込まれ、角は隅丸状である。住居が北西から南東に下がる斜面部に作られていることから、壁高は北壁で55cm、西壁で54cm、南壁で16cm、東壁で26cmを測る。206号住居跡の床との比高は47cm程度低く、208号住居跡の床とは5cm程度高い。面積は、確認面で14.8㎡、床面で13.3㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面としている。全体に固いが、踏み固められた形跡のある部分は、中央部のごく一部である。周溝は南西壁、北東壁の部分にのみ存在する。規則性のある主柱穴の痕跡は認められない。北西隅の壁際に径20cm、深さ35cm程度の2基のピット(P1・P3)、北東隅の壁際に同規模のピット(P2)が見られるが、あるいは柱穴になるのかもしれない。また、南側壁際中央の床面には径20cm、深さ30cmのピット(P4)が認められる。住居出入口施設に関連した柱穴と思われる。

カマドは北方向で、北側壁の中央よりやや東に位置する。カマド自体は住居主軸から6°30'東へ傾いている。壁を「ㄣ」字形に掘り込んで、燃焼部を構築する。袖は、壁から60cm程度の長さで灰白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、200cm(うち煙道部分の長さ125cm)、幅120cm、高さ50cmを測る。燃焼部分は、最大幅約50cm、奥行き75cmで、傾斜のある奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約40cm高い位置で、そこから先端に向かい傾斜をもって下り、先端部分で最も深くなる。煙道の上部には天井粘土が厚さ15～30cm程度敷き詰められているが、天井部分の被覆として用いられたものと思われる。煙道の幅は上端で40cm、下端で20cm、最も深い部分で60cm程度である。

遺物については、量的に少ないが、カマド内および床面から出土している。カマド内から土師器碗(4)、甕(6)、均整唐草文の軒平瓦(11)、ほぼ完形の行基葺きの丸瓦(12)、カマド右側床面(+6cm)から土師器碗(1)、南側壁際

の床面(+7cm)から土師器高台付皿(3)、覆土中から土師器杯(2・5)、甕(7)、須恵器甕(8~10)が出土している。

土器の特徴 時期を検討する遺物が少ないが、土師器杯(1)は体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する。土師器高台付皿(3)は底部を回転糸切りで切り離した後、中央部を残して外周を回転ヘラケズリ、体部外面下端を回転ヘラケズリで整形する。また、体部内・外面にはススが付着することから灯明用皿として使われていたものと思われる。

208号住居跡 (第441図、写真図版70)

遺構は、北東側尾根状台地の南東斜面部HP-57、67区に位置する。北西側隣接には207号住居跡があり、当住居の北西角を壊している。また、南東側は削平を受け、痕跡程度の残存である。住居はほぼ北を向き、主軸方位はN-1°25'-Wである。形状は、東西方向に長い横長方形で、カマド部分の北壁がやや長い。規模は南北軸2.92m、東西軸3.5mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は浅いが垂直に掘られている。住居の位置する部分が北西から南東に下がる斜面部であることから、壁高は北壁で32cm、西壁で40cm、南壁で5cm、東壁で痕跡程度である。面積は、確認面で10.0㎡、床面で9.5㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面としている。床は全体に固く、特にカマド正面から中央部にかけて良好である。周溝は、カマドより西側の壁に残っている。規則性のある支柱穴は認められない。中央東側の床面には焼土ブロックが認められる。

カマドは北方向で、北壁の中央部分からやや西側に位置する。壁を掘り込まずに直接奥壁としている。袖は、灰白色粘土を用いて壁から長さ55cm程度で平行に構築する。カマドの全長は、140cm(うち煙道部85cm)、幅95cm、高さ30cm、燃焼部の最大幅は、約50cm、奥行き50cmを測る。燃焼部奥壁は、垂直に立ち上がる。煙道部はやや貧弱で、燃焼部から20cm程度の段をつけ、先端に向かってなだらかに下がって終わる。先端部は垂直に立ちあがる。煙道の上端幅20cm、下端幅10cm、深さは先端で15cmを測る。

遺物については、出土しなかった。

209号住居跡 (第444・445図、写真図版70・71・133・177)

遺構は、北東側尾根状台地の南東斜面部HP-19、20、29、30、HQ-11、21区に位置する。住居は北西方向で、主軸方位はN-40°15'-Wである。形状は、北東-南西軸が北西-南東軸の2倍弱ある横長方形である。規模は、北東-南西軸6.4m、北西-南東軸3.3mである。住居の壁はきちと垂直に掘り込まれ、角もほぼ直角である。住居の位置する地形が、北西から南東の谷に下がる斜面であるため、壁高は北壁で56cm、北西壁で37cm、南西壁で37cm、南東壁で10cm、北東壁で25cmを測る。面積は、確認面で20.2㎡、床面で18.8㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面としている。全体に固いが、特に中央部が踏み固められている。周溝は認められない。床面には、ピットがいくつか見られるが、北西側床面に住居方向と並列しているピット(P1、P2)が支柱穴となるのかもしれない。P1は縦長、不整な形状で長軸90cm、短軸50cm、深さ15cm、P2は径40cm、深さ15cm程度である。柱間は4.4mを測る。また、南西側の北西壁、南東壁に掘り込まれている径30cm、深さ50cm程度のピット(P3、P4)が、あるいは柱穴に関連した可能性もある。なお、住居南西の床面に貝ブロックが残されていた(貝の資料については、行方不明のため分析し得なかった)。

カマドは北西方向で、北西側壁の中央よりやや北東に位置する。壁を「八」字形に掘り込んで燃焼部を作る。袖は、壁から60cm前後の長さで灰白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、120cm(うち煙道部分の長さ60cm)、幅100cm、高さ60cm、燃焼部分は幅55cm、奥行き60cmで、なだらかに立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は燃焼部より約70cm高い位置で、そこから一旦水平に延び、長さ50cm、幅35cm、深さ45cmの長方形の煙突状ピットを作っている。先端部の壁は傾斜をもって立ち上がって終わる。燃焼部と煙道の境に粘

土がブロック状に残っているが、これは燃焼部上の天井が落下したものであろう。

遺物については、南側中央床面(床直)から須恵器杯(4)、南東床面(+5cm)から凝灰岩製砥石(10・11)、覆土中から土師器杯(1～3)、甕(5)、須恵器盤(7)、長頸壺(6)、甕(8・9)などが出土している。

土器の特徴 土師器杯類は、器高の低い平底で、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する杯である。土師器杯(1)については体部内面に斜格子状暗文を施している。

210号住居跡 (第446～448図、写真図版71・133・134・167・177)

遺構は、北東側尾根状台地の南東斜面部GQ-93、94、HQ-03、04区に位置する。住居は北東を向き、主軸方位はN-49°00'-Eである。住居の南東壁は削られており、ほとんど残っていない。また、北東隅の角についても、大きな攪乱坑により壊されている。形状は復元からほぼ正方形状と思われ、北西-南東軸3.3m、北東-南西軸3.15mを測る。住居の角は直角で、壁は垂直に掘り込まれている。住居の位置する地形が北西から南東に下りながら傾斜することから、壁高は、北東壁で20cm、北西壁で35cm、南西壁で26cm、南東壁で8cmを測る。面積は、確認面で9.9㎡、床面で8.8㎡となる。床はハードローム上面を直接床面としている。床は全体に固いが、踏み固められた部分はカマドの全面部分のみである。周溝は、カマドの位置を除いて全周するものと思われる。規則性のある柱穴は、認められないが、中央南西側床面に径30cm、深さ25cm程度の円形状ピット(P1)が見られる。住居出入口施設の柱穴に関連したピットと思われる。なお、削られた南東壁部分の位置付近に、370号貝ブロック土坑が見られる。

カマドは北東方向で、北東側壁の中央部分に位置する。カマド自体は住居主軸から9°20'西へ傾く。壁を掘り込まずに燃焼部を構築する。袖は、壁から50cm程度の長さで、灰白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、210cm(うち煙道部分の長さ145cm)、幅115cm、高さ40cmを測る。燃焼部分は、最大幅約50cm、奥行65cmで、垂直な奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約15cm高い位置で、そこから先端に向かい緩やかに下り、先端部分で垂直に立ち上がって終わる。煙道は中位で膨らみ、上端幅は基部30cm、中位部分60cm、先端部分45cm、下端では基部15cm、中位部分40cm、先端部分25cm、深さは先端で45cmである。なお煙道部内から平瓦(14)、燃焼部の右袖部分から直立した状態で、玉縁の丸瓦(13)が出土している。なおこの丸瓦については、熨斗瓦として加工された可能性がある。

遺物については、カマド内から土師器甕(6～8・10)、小型甕(9)、茶褐色系の須恵器甕の胴部破片(12)、カマド右脇の床面(床直)から須恵器杯(4)、北西壁際の周溝内から比較的残りの良い凝灰岩製砥石(15)、覆土中から土師器杯(1～3)、須恵器杯(5)、黒褐色系の須恵器甕の口頸部(11)が出土している。なお覆土中から鉄滓が出土している。

土器の特徴 土師器杯類は、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する。土師器甕(6)は武蔵型甕である。土師器甕(7)は胴部外面にわずかに縦方向のヘラケズリを行い、ヘラ状工具によってクロスさせたような鋭い線を描いている。

211号住居跡 (第449～451図、写真図版71・72・134・167)

遺構は、北東側尾根状台地の南東斜面部GQ-77、78、87、88区に位置する。住居のカマド部分および南東隅の角は522号掘立柱建物跡の西側部分桁行きのa3、a4柱穴によって壊されている。住居は北東を向き、主軸方位はN-58°10'-Eである。形状は復元から、北西-南東軸が長い横長方形状で北西-南東軸3.8m、北東-南西軸3.24mを測る。住居の角は直角で、壁は深く垂直に掘り込まれている。住居の位置する地形が、北西から南東に下りながら傾斜することから、壁高は北東壁で75cm、北西壁で100cm、南西壁で60cm、南東壁で15cmを測る。面積

は、確認面で11.7㎡、床面で10.9㎡である。床はハードローンを直接床面とし、全体に固い。直接踏み込まれた部分はカマド全面の中央部のみである。周溝部分は、壁の掘り込みの深い北西壁、南西壁のみで、低い部分では認められない。規則性のある支柱穴は認められないが、南西壁部分に径45cm、深さ100cm程度、柱間2.0mのピット列(P1、P2)が見られるが、これが柱穴と考えられる。

カマドは北東方向で、北東側壁の中央部分よりやや北に位置する。カマド本体は522号掘立柱建物のa3柱穴によってほとんど壊されており、両袖部分の一部分が残っている程度である。

遺物については、床面から比較的多く出土している。東側隅の壁際床面(+5cm)から土師器碗(1)、南東壁際の床面(+3cm)から須恵器杯(6)、西側隅の床面(+2cm)から底部外面に「法花」と墨書された須恵器杯(5)、北側隅の床面(床直)から土師器甕(8・11)、黒褐色系の須恵器甕の胴部破片(14)、南東隅の522号建物跡c4柱穴によって壊された攪乱内から土師器杯(4)、覆土中から土師器杯(2・3)、灰釉陶器皿(7)、土師器甕(9・10・12)、黒茶褐色系の須恵器甕(13・15)などが出土している。瓦類については、中央床面(+2cm)から平瓦(18)、北側隅の床面(+5cm)から格子目タタキの平瓦(17)、南側隅の床面(+6cm)から玉縁の丸瓦(16)が出土している。このほか鉄製品については、南西壁際の床面(床直)から鉄釘(19・20)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類は、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する非ロクロ杯が主体を占めるものと思われる。土師器杯(3)は体部内面を黒色処理する。須恵器杯(5・6)は永田・不入窯の製品である。

216号住居跡 (第452～455図、写真図版72・134)

遺構は、北東側尾根状台地先端部の北西斜面部FQ—48、49、58、59区に位置する。西側の隣接に215号弥生時代住居跡があり、その東壁を壊して作られている。住居西側の壁は、215号住居跡の覆土を掘り込んでいたため、壁は残っていない。住居はほぼ北を向き、主軸方位はN—7°00′—Eである。形状は、東西方向に長い横長形状で、南北軸3.2m、東西軸は推定で3.5mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は浅いが垂直に掘り込まれている。床の高さは、216号住居跡の床面とはほとんど変わらない。壁高は北壁で23cm、西壁で0cm、南壁で28cm、東壁17cmを測る。面積は、確認面で11㎡、床面で9.5㎡となる。床はソフトローンを直接床面としている。凸凹した部分には暗褐色土を敷き詰め平坦にしている。床は直接踏み固められた形跡は見られず、全体に軟弱である。周溝、支柱穴は認められない。

カマドは北方向で、北側壁の中央よりやや西に位置する。カマド自体は住居主軸から7°30′程度さらに東に傾いている。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は住居床面に出ず、「U」字部分の両壁部分に灰白色粘土を厚さ10cm程度貼り付け、周溝部分で15～30cm程度張り出し、わずかに「ハ」の字状に開く。カマドの全長は、125cm(うち煙道部分の長さ40cm)、幅115cm、高さ30cm、燃焼部分は「U」字形で、幅60cm、奥行き80cmで、なだらかに立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かってなだらかに立ち上がって終わる。先端には壁らしいものは見られない。煙道の上端の幅は35cm、下端幅25cm、深さ15cmである。

遺物については、カマド内およびカマド周辺から多く出土している。カマド内からは土師器杯(1・5～7)、甕(17)、茶褐色系の須恵器甕(20)、カマド正面の床面(+3cm)から土師器杯(8)、同左脇の壁際床面(床直)から土師器杯(10)、同床面(+15cm)からこげ茶褐色の須恵器杯(9)、同右正面の床面(+15cm)から土師器甕(16)、南東床面(床直)から土師器杯(4)、覆土中から土師器杯(2・3)、体部内面を黒色処理した土師器高台付碗(11)、甕(12～15)、須恵器甕(19)、長頸壺(22)、茶褐色の須恵器甕(18・21)などが出土している。瓦については、カマド燃焼部内から支脚に使用されたとと思われる平瓦(23)が出土している。

土器の特徴 土師器杯については、底部を回転糸切りで切り離したまま、整形調整しないものがほとんどで、このうち体部外面下端を手持ちヘラケズリで整形するもの(1~3)、体部外面も整形調整しないもの(4~8)に大まかに分類できる。(9)は、底部を回転糸切りで切り離した後、中央を残して外周を手持ちヘラケズリ、体部外面を手持ちヘラケズリで整形する杯で千葉地域産のものである。(11)は体部外面下端から削りだして高台部を整形する。体部内面はヘラミガキの後、黒色処理する。

219号住居跡（第456図、写真図版72・135）

遺構は、北東側尾根状台地の南東斜面部GQ—73、74、83区に位置する。住居としてはかなり規模の小さいものである。住居は北を向き、主軸方位はN—18°15′—Wである。形状は、東西方向に長い横長方形で、東西軸2.95m、南北軸2.6mを測る。住居の角はやや隅丸で、壁はきちっと垂直に掘り込まれている。壁高は、北壁で55cm、西壁で47cm、南壁で25cm、東壁27cmを測る。面積は、確認面で7.4㎡、床面で6.1㎡となる。床はハードルーム上面を直接床としている。直接踏み固められた部分は中央部のみで、左右は柔かい。周溝は、カマドの位置する部分を除いて全周する。主柱穴は認められない。南側中央床面には径25cm、深さ20cm程度のピット(P1)が見られるが、住居出入口施設の柱穴と考えられる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。カマド自体は住居主軸から2°25′程度東に傾いている。壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、灰色粘土を用いて、壁から53cm程度の長さで平行に構築する。カマドの全長は、105cm(うち煙道部分40cm)、幅95cm、高さ50cmを測る。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部奥壁から傾斜をもって先端まで立ち上がる。煙道の上端幅は30cm、下端10cmを測り、先端部ですばまって終わる。

遺物については、出土が少なく、時期を検討する上で良好な資料とは言えない。カマド内からは、須恵器杯(2)、土師器甕(3)、覆土中から須恵器杯(1)が出土している。

土器の特徴 須恵器杯(1)は全体に風化して摩耗が著しいが、底部を回転ヘラケズリで整形する。永田・不入窯製品であろう。土師器甕(3)は器壁の薄い丁寧な作りであることから、武蔵型甕の可能性も考えられる。

220号住居跡（第457~464図、写真図版73・135・167・168・173・175・176）

遺構は、北東側尾根状台地の先端部GQ—40、49、50、60、GR—41区に位置する。北東方向から谷が入り込んでおり、ちょうど谷の南東斜面に住居は作られている。住居はほぼ北を向き、主軸方位はN—2°05′—Eである。形状は、西側壁が東側より長いやや不整形な方形である。規模は、東西軸4.65m、南北軸は西壁4.7m、東壁4.1mで、平均値で4.65mである。住居の壁はきちっと垂直に掘り込まれ、角もほぼ直角である。地形が北西から南東に下がる傾斜面であることから、壁高は北壁で54cm、西壁で50cm、南壁で60cm、東壁で30cmを測る。面積は、確認面で19.8㎡、床面で16.8㎡、内区(主柱穴内側)で4.86㎡となる。床は、ハードルーム上面を直接床面としている。カマド正面および内区を中心にして、良く踏み固められている。これ以外の部分は踏み固められた痕跡はない。周溝は、カマドの位置する部分を除き全周する。主柱穴は、中央より南側壁方向に寄った位置で4本認められる。柱穴は四角形状で、立替えの痕跡が認められる。南西部分の柱穴(P3)が小さいほかは、一辺60cm程度の柱穴でほぼ垂直に深く掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が117cm、P2が75cm、P3-1が56cm、P3-2が42cm、P4が60cmである。柱間は各対辺が均等で、P1・P2が1.84m、P1・P3が2.7m、P2・P4が2.74m、P3・P4が1.84mである。また南側中央壁の周溝が床に張り出しているように見られるが、これは住居出入口施設の埋め込みのための土坑と思われる。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。2時期の作替えが認められる。古い時期のカマド(A期)は、住居主軸から2°さらに東に傾く。壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部を作っている。袖部分はB期カマドに壊され、

ほとんど残っていない。燃焼部の火床は掘りくぼめている。煙道は、燃焼部奥壁から先端方向へなだらかに上がり、先端部分でやや膨らむ。長さは130cm、幅は上端で推定60cm、下端25cmで、煙道側壁の底部に丸瓦(44・45)、平瓦転用の割り熨斗瓦(48)を縦に並べ、さらに先端では平瓦(50)を直立させて煙突としている。新しい時期のカマド(B期)は、古い時期のカマド(A期)を半分程度壊して、東にずらして作り替えている。住居の主軸に対してやはり1°30'東へ傾いている。燃焼部は新たに掘り換えをせず、A期の燃焼部をそのまま使用して奥壁とする。左袖はA期の燃焼部奥壁から灰白色粘土で長さ95cm、幅50cm程度の袖を、右袖は住居壁部分に長さ50cm、幅65cmの四角形状の粘土ブロックを置くような形でそれぞれ袖を作る。カマドの全長は、225cm(うち煙道部分の長さ135cm)、幅165cm、高さ65cmを測る。燃焼部分は不整形な三角形で、幅60cm、奥行き100cmで傾斜をもって立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約20cm高い位置で、そこから先端に向かって水平に延びる。先端の壁は傾斜をもって立ち上がっている。煙道は中位付近が幅広く、最上端の幅は推定で70cm、深さは先端で40cmを測る。煙道の先端付近には凸面を上にし、横に渡した平瓦転用の隅切り瓦(46、53)が残っている。天井の蓋に使用したものと思われる。なお、両袖の外側部分には、方形状のピットが各1個ずつ見られる。左袖脇のピットは一辺45cm、深さ50cm程度、右袖脇のピットは一辺35cm、深さ40cmを測る。柱間の幅は2.5mである。カマドに付随した施設の柱穴と考えられる。

遺物については、カマドの左右正面の床面を中心として良好な資料が多く出土している。カマド内から土師器杯(5・12)、皿(23)、甕(27)、茶褐色系の須恵器甕の胴部破片(35)、カマド周辺の床面(+2cm・+7cm・+23cm)から土師器杯(1・3)、椀(17)、同左脇の柱穴内から土師器椀(16)、中央床面(床直・+5cm・+9cm)から土師器甕(31)、土師器杯(14・8)、東側床面(+2cm)から土師器皿(22)、小型甕(29)、同壁際の床面(床直)から土師器皿(25)、北西隅の床面(+16cm)から土師器杯(18)、西側の床面(+22cm)から土師器杯(7)、西側壁の周溝内から土師器杯(9)、南西角隅の周溝内から須恵器甕の胴部破片(38)、覆土中から土師器杯(2・4・6・10・11・13・15・19)、皿(21・24・26)、甕(28)、小型甕(30)、須恵器大形甕の胴部破片(39・40)、茶褐色系の須恵器杯(20)、甕(32~34・36・37)、置きカマド(41)など多く出土している。瓦については、カマド内出土のほか、覆土中から平瓦の隅切り瓦(49・52)、平瓦(47)、斜格子目タタキの平瓦(51)、軒平瓦の破片(42)、丸瓦(43)が出土している。このほか金属製品では、鉈(55・56)がそれぞれ西側および東側壁際の周溝内から、鉄製紡錘車(54)が西側壁際の周溝内から、鉄釘(57~59)が覆土中から出土している。

土器の特徴 土師器杯類については、底部を回転糸切りで切り離した後、回転ヘラケズリで整形するものが主体を占める。大まかには、体部外面を回転ヘラケズリで整形する杯(1~6・8・9・11~14)、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する杯(16~18)、底部整形のみの杯(7・10)に分類できる。なお、土師器杯(8~11・17)には、体部外面の中位付近に数条の凹線状沈線をめぐらせる特徴あるものである。土師器皿については、ほとんどが体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形する技法である。土師器杯(19)は特異な杯で、体部下端を削りだして高台風の底部作っている。土師器杯(13)は底部を回転ヘラケズリで整形した後、中央部分に弱い線刻で「×」を描いている。土師器杯(3・14)は口縁部内・外面に油煙・ススが付着していることから、灯明用として用いられた可能性がある。置きカマド(41)については焚き口のアーチ部分のため全体の形状は不明である。本遺跡では、このほかに95号、231号住居跡からも出土している。

227号住居跡 (第465~468図、写真図版73・74・135・136・175)

遺構は、北東側尾根状台地の先端部GR-51、52、61、62区に位置する。北東方向から谷が入り込んでおり、ちょうど谷の南東斜面に住居は作られている。住居は北を向き、主軸方位はN-5°30'-Wである。住居南東角は、

斜面部のため削られて痕跡程度である。形状は、規格性のある正形状である。規模は東西軸4.2m、南北軸4.15mを測る。住居の壁はきっちと垂直に掘り込まれ、角もほぼ直角である。地形が北西から南東に傾斜することから、壁高は北壁で58cm、西壁で30～60cm、南壁で6cm、東壁で0～15cmを測る。面積は確認面で16.6㎡、床面で15.5㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面とし、周囲は暗褐色土、ロームブロックを敷き詰め貼床としている。直接床面とした部分には所々に粘土が敷き詰められている。床は中央部が良く踏み固められて固い。周溝は、カマドの位置する部分および南東隅を除き全周する。規則性のある支柱穴は認められない。南側中央床面に径40cm、深さ30cm程度のピット(P1)、西側中央床面に径40cm程度のピット(P2)が見られるが、これはカマドの時期を異にする住居出入口施設に関係した柱穴であろう。

カマドは、北壁および東壁の2カ所に見られる。併存ではなく、カマドA(北)からカマドB(東)に移し替えられている。当初のカマドAは、ほぼ北方向で北壁の中央部分に位置する。壁を掘り込まずに直接燃焼部を構築する。袖は灰白色粘土を用いて、壁から45cm程度張り出し、ほとんど開かない。カマドの全長は、190cm(うち煙道部分の長さ125cm)、幅95cm、高さ65cmである。燃焼部分は方形状で、火床を掘りくぼめている。幅は50cm、奥行き60cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。住居外に延びる煙道は、燃焼部より約40cm高い位置で、そこから先端に向かって急傾斜して下がる。煙道先端で最も深くなって終わる。先端の壁は、垂直に立ち上がっている。煙道の両側は、20cm程度の幅で帯状に浅く掘りくぼめている。上端の幅は45cm、下端で25cm、深さは先端部で70cmを測る。煙道の先端付近に平瓦(35)が横方向に置かれていた。カマドBは、東壁の中央部に位置している。構造は北カマドより簡略な作りである。壁を掘り込まずにそのまま燃焼部とし、煙道は持たない形状で、袖は壁から40cm程度の長さでほとんど開かない。カマドの全長は、55cm、幅100cm、高さ10cmである。燃焼部分は幅45cm、奥行き55cmで、火床部を掘りくぼめている。

遺物については、カマドA正面の床面、西側床面から多く出土している。ただ、大方の遺物の出土レベルが床面から10～25cm浮いた状態であり、当住居に伴うかどうかの帰属性については検討を要する。カマドA内から底部外面に「北□」の墨書が認められる土師器杯(6)、小型甕(23)、須恵器蓋(29)、暗黄褐色系の須恵器杯(15)、カマドA正面の床面(床直・+7cm)から土師器杯(7・4)、同床面(+13cm・+20cm)から黄褐色系の須恵器甕(28)、須恵器高台付椀(18)、同床面(+14cm・+18cm)から須恵器長頸壺(32)、須恵器浄瓶の口頸部(31)、同床面(床直)および中央床面(+4cm)から茶灰色系の須恵器杯(9)、カマドA左正面の床面(+22cm)から体部内面を黒色処理した土師器杯(8)、中央床面(+19cm・+21cm・+28cm)から暗黄褐色系の須恵器杯(10・14・12)、同床面(+20cm)から土師器甕(25)、西側床面(+26cm)から土師器小型甕(24)、台付甕(26)、同床面(+24cm)から須恵器長頸壺の胴部破片(30)、同床面(+28cm)から土師器杯(1)、須恵器杯(16)、覆土中から土師器杯(2・3・5)、甕(19～21)、小型甕(22)、須恵器高台付椀(17)、茶褐色系の須恵器杯(11・13)、同須恵器甕の口縁部片(27)などが出土している。このうち須恵器長頸壺(32)は遺物が行方不明となっている。瓦についてはカマドA正面の床面(+23cm)から丸瓦(33)、南東隅の床面(+4cm)から行基葺きの丸瓦(34)、北東隅の床面(+5cm)から平瓦(36)、カマドAの煙道内から平瓦(35)が出土している。なお、丸瓦(33)は、隣接の228号住居跡内から出土した破片と接合している。この瓦の出土はかなり高い位置であるため、228号住居跡の瓦と考えられることも可能である。なおこの付近から須恵器浄瓶(31)が同レベルで出土している。このほかカマドA正面の床面(床直)から鉄釘(37)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類は体部外面、底部を手持ちヘラケズリする丸底風の杯(1～3)、平底の杯(4・5)、ロクロ整形で体部外面、底部をヘラケズリする杯(6・8)に大まかに分類できる。このうち住居に確実に伴うものとしては、カマドA内出土の土師器杯(6)、カマドA正面の床面(床直)出土の土師器杯(7)である。茶褐色系の須恵器杯類(7・

9～15)は、千葉地域周辺産で体部外面を手持ちヘラケズリ、底部を不定方向に削るものである。須恵器長頸壺(32)は形態から猿投窯(折戸10号窯式)に類似する。

228号住居跡 (第469～472図、写真図版74・136・137・174・175・177・178)

遺構は、北東側尾根状台地の先端部GR-43、44、53、54区に位置する。北東方向から谷が入り込んでおり、ちょうど谷の南東斜面に住居は作られている。北側隣接には226号弥生時代住居跡があり、この住居の南側壁、床部分を壊して作られている。住居は東を向き、主軸方位はN-76°30'-Eである。住居の東側壁の南半分および南側壁、床面部分については削平されている。全体の3/5の残存である。形状は、削平を受けているため不明瞭な部分があるが、東壁が西壁より長いやや逆台形状で、東西軸5.0m、南北軸は推定で5.0mとなる。住居の角はやや開き気味の直角で、壁は垂直に掘り込まれている。地形が、北側から南へ下がる斜面部分の上端に作られているため、壁高は北壁で48cm、西壁で45cm、南壁で0cm、東壁で3cmである。なお226号住居跡の床面から32cm程度深く掘り込んで床面としている。面積は、確認面で23㎡、床面で21㎡、内区(主柱穴内側)で5.4㎡である。床はハードロームを掘り込み、黒褐色土、ロームブロック(粘土を含む)を全面に敷き貼床としている。直接踏み固められた部分は中央部のみで、周囲は柔かい。周溝は北壁、西壁部分にめぐる。カマドの位置する部分は認められない。

主柱穴はほぼ対角線上に4本あり、柱穴の掘形から2時期の立替えが認められる。立て替える際に今までの柱は抜き取り、位置をわずかにずらして、さらに深く掘り込んで新しい柱を埋め込んでいる。P1、P4の柱穴には、南方向から掘って柱を抜き取った穴が確認できる。P2、P3は古い時期の掘形部分をさらに深く掘って新しい柱穴としている。柱穴の深さは、P1が75cm、P2が73cm、P3が100cm、P4が74cmである。柱間は、P1・P2が2.0m、P1・P3が2.5m、P2・P4が2.7m、P3・P4が2.3mである。南側中央部分に径50cm、深さ30cm程度の円形状のピット(P5)が認められるが、住居出入口施設に関連した柱穴と思われる。

カマドは東方向で、東壁の中央部分に位置する。カマド全体の2/3以上を壊されており、左袖部分、煙道の先端部分のみの残存である。全長は推定で195cm(うち煙道部分の長さ125cm)、幅100cm、高さは不明である。壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部奥壁とする。袖は左部分が残っているのみで、壁から長さ60cm程度延びる。燃焼部は推定で幅55cm、奥行き70cmで、火床を掘りくぼめている。住居外に延びる煙道部分はピット状の煙突が残るのみで、長さ60cm、幅30cm、深さ20cm程度である。

遺物については、住居南東部分が削られているため、北西部分を中心として出土している。北側壁際の床面(+22cm)から土師器杯(1)、北西隅の床面(+7cm・+12cm)から土師器杯(4)、灰釉陶器長頸壺の脚部(15)、南西壁際の床面(床直)から須恵器杯(6)、覆土中から土師器杯(2・3・5)、甕(16・17)、小型甕(18～20)、台付甕の脚部(21)、須恵器杯(7・8)、蓋(12・13)、茶褐色系の須恵器杯(9～11)、同須恵器甕の胴部破片(22・23)、須恵器長頸壺の口縁部(14)などが出土している。このほか中央北側の床面(+6cm)から刀子(29)、北側の壁際の周溝内からは門の金具あるいはかすがいと思われる鉄製品(31)、覆土中から平瓦(26・27)、フィゴの羽口(24)、石製砥石(25)、刀子(28・30)、鉄釘(32)が出土している。なお自然遺物として住居内から貝類がブロック状に出土している。

土器の特徴 土師器杯類は、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する丸底風の杯(1)、平底の杯(2)、ロクロ整形で、底部を静止糸切りで切り離した後、中央付近を残して手持ちヘラケズリおよび体部外面を手持ちヘラケズリで整形する杯(3)、体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形する杯(4・5)に大まかに分類できる。このうち土師器杯(4)は体部内面を黒色処理する杯、土師器杯(1)は、口縁部内・外面にススが付着しているため灯明用の杯と考えられる。須恵器杯については、底部を回転糸切りで切り離した後、外縁のみ回転ヘラケズリで整形するもの(6)、不定方向にヘラケズリするもの(7)などである。須恵器杯(9～11)は、黒褐色系、茶褐色系で、底部

を一方向のヘラケズリ、体部外面下端を回転、手持ちヘラケズリで整形するなど千葉地域産の杯類である。土師器甕(20)は小型ではあるが、薄手の作りで胴部上位を横方向にヘラケズリするなど武蔵型系の甕と思われる。

231号住居跡 (第473～476図、写真図版74・75・137・138・168・169・172・174)

遺構は、南側台地の先端部GR-01、02、03、12区に位置する。住居は東を向き、主軸方位はN-87°05'Eである。形状は、住居の南東の角がやや広がる不整形な方形状で南北軸3.6m、東西軸3.35mを測る。住居の角は南東が隅丸のほかは、ほぼ直角となる。壁はやや傾斜をもって掘り込まれている。壁高は、北壁で55cm、西壁で56cm、南壁で46cm、東壁で20cmを測る。面積は確認面で11.4㎡、床面で10.3㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床面としている。中央部が良く踏み固められているほかは左右は柔かい。周溝は、カマド部分を除いて全周する。柱穴については、規則性が見られるピット列は認められない。住居の西側壁際の床面に径25cm、深さ20cm程度のピット(P1)が認められるが、住居出入口の施設に関連した柱穴であろう。

カマドは東方向で、東側壁の中央部分に位置する。カマド自体は、住居の主軸から2°35'西へ傾いている。壁をほとんど掘り込まずに燃焼部を作る。袖は、東壁から65cm程度の長さで灰白色粘土を用いて「ハ」の字状にやや開く。カマドの全長は、200cm(うち煙道部分の長さ130cm)、幅120cm、高さ25cmを測る。燃焼部分は火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約60cm、奥行き60cmで垂直に立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部内側は良く焼け、赤化している。住居外に延びる煙道部分は、燃焼部より約25cm高い位置で、そこから先端に向かって下り、先端付近で深くなる。煙道の幅は上端で40cm、下端で25cm、深さは先端で30cmを測る。なお、燃焼部内には平瓦(21)が直立しているが、支脚として使用されたものであろう。

遺物については、土師器杯類を中心として、カマド周辺から中央床面、西側床面の広範囲にかけて出土している。ほとんどが床面直上からの出土で、資料的にも良好である。カマド内から土師器杯(3)、甕(13～15)、須恵器甕(20)、カマド内およびカマド正面の床面(床直)・中央床面(床直)から置きカマド(26)、カマド左脇の床面(床直)から土師器杯(1)、同右脇の床面(床直)から土師器杯(5・6)、同床面(+3cm)から土師器時期杯(2)、同正面の床面(床直・+2cm)から土師器碗(8)、皿(10)、中央床面(床直・+3cm)から黄褐色系の須恵器甕(16)、灰釉陶器長頸壺の胴部破片(17)、西側壁際の床面(床直・+4cm)からこげ茶色系の須恵器杯(12)、土師器杯(7)、覆土中から土師器杯(4)、底部外面に「山邊郡立」・「山」と複数の文字が書かれた墨書の土師器杯(9)、須恵器高台付碗(11)、甕の胴部破片(18・19)などが出土している。このほか、カマド燃焼部内から隅切り瓦(23)、カマド正面の床面(床直)から丸瓦転用の割り熨斗瓦(22)、南西隅の周溝内から鉄製鎌(25)、刀子(24)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類については良好な一群である。体部外面、底部を回転ヘラケズリで整形する杯(1～7)がほとんどを占めているが、底部を回転糸切りで切り離した後、中央部を残して外周、体部外面下端を手持ちヘラケズリで整形する杯(8)が認められる。墨書土師器杯(9)は底部を静止糸切り後、大方を残し、外縁、体部下端を手持ちヘラケズリで整形する。土師器皿(10)については底部、体部下端を回転ヘラケズリで整形している。土師器杯(4～7)は体部外面中位に、3条程度の凹線状の沈線をめぐらす特徴的な杯である。須恵器甕(16)は器形やタキ技法から千葉地域系のものである。

233号住居跡 (第477～482図、写真図版75・76・138・139・169・174)

遺構は、北東側尾根状台地の中央部GO-23、32、33、42、43区に位置する。住居は真北を向き、主軸方位はN-0°00'である。形状は、南北方向に長い縦長方形で、カマド右側の北壁部分がやや張り出す。規模は南北軸3.9m、東西軸3.55mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘られている。壁高は、北壁で46cm、西壁で45cm、南壁で37cm、東壁で24cmを測る。面積は確認面で13㎡、床面で10.9㎡となる。床は、ハードローム上面を直接床

面としている。踏み固められた部分はカマド正面から中央の床面にかけて、固く締まっている。周溝は、カマドの位置を除いて全周する。本来の周溝の掘り込みはさらに幅広いものであるが、壁の固定を行った後に埋め戻している。規則性のある支柱穴は認められない。住居南側壁際の床面に、径30cm、深さ15cmのピット(P1)が見られるが、住居出入口施設に関連した柱穴であろう。

カマドは北方向で、北壁のほぼ中央部分に位置する。カマド自体は住居主軸から5°00'西を向く。壁を「U」字形に掘り込んで燃焼部とし、煙道部が不明瞭なカマド形態となっている。袖は住居床面に出ず、「U」字部分の両壁部分に灰白色粘土を厚さ15cm程度貼り付け、周溝部分で30cm程度の長さの袖を作っている。カマドの全長は、110cm(うち煙道部分20cm)、幅150cm、高さ45cmを測る。燃焼部分は火床を床面より掘りくぼめており、最大幅約50cm、奥行き85cmで傾斜をもって立ち上がる奥壁を持つ。煙道部は、燃焼部と一体化しているため不明瞭だが、燃焼部から35cm程度の高さで、奥壁部分をさらに長さ20cm程長く延ばして煙道としている。幅は基部で35cm、先端部で20cm、深さは20cmとなる。煙道部内からは、隅切り瓦(37)が横方向に置かれているが、天井部の蓋としたものであろう。右袖の外側部分には径40cm、深さ40cm程度のピット(P2)が見られるが、カマドに付随した施設の柱穴と考えられる。なお、燃焼部内から、行基葺きの丸瓦(35)が直立した状態で出土している。支脚として使用されたものと思われる。

遺物については、土師器杯類を中心として、カマド内および南西床面等から出土している。いずれも床直上のものやカマド内出土で良好な資料である。カマドの燃焼部内からは、土師器杯(3・5・7・9・11・13・14・16)、皿(18)、甕(19・21・22・24・25・27)、小型甕(26)、淡黒褐色系の須恵器甕の底部(29)、カマド左脇の床面(床直)から土師器杯(1)、カマド右正面の床面(+13cm)から平瓦(38)、北東隅の周溝内から土師器杯(2・10)、西側壁際の床面(+10cm)から土師器甕(28)、南西隅のピット内から土師器杯(6・8)、覆土中から土師器杯(12・15)、器高の低く皿に近い土師器杯(17)、甕(20・23)、甕の底部(30)、刀子(33)、平瓦(39)、丸瓦(34・36)などが出土している。このほかカマド正面の床面(+24cm)から刀子(32)、同右側床面(+7cm)から刀子(31)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類については、出土状況から良好な資料である。杯はロクロ整形で、底部を回転糸切りで切り離したまま、体部外面についても整形調整しないものがほとんどである。一部体部外面下端を手持ちヘラケズリで整形する杯(15・16)が含まれる。なお、土師器杯(6・8・10)は、墨書土器である。土師器杯(6)は体部外面に縦位に一字分の文字不明の墨書、土師器杯(8)は底部内外面の中央付近に「田」、体部外面の中位付近に「エ」という文字不明の墨書、土師器杯(10)は体部外面の中位に縦位の「甘」の墨書が認められる。土師器皿(18)は底部外面、体部外面下端を回転ヘラケズリで整形する。

400号遺構 (第485・486図)

当遺構については、遺物に番号が記載されているのみで、遺構平面図・断面図がなく、また全体図についても所在する位置が不明である。検討するにも手がかりがないため、遺物のみの掲載とした。

遺物については、6000番台の番号が振られていることから、覆土中からの出土として取り扱った。出土した遺物は、体部外面を手持ちヘラケズリで整形した土師器杯(1・2)、ロクロ整形した土師器杯(3)、須恵器長頸壺の底部～脚部片(6)、黄茶褐色系の須恵器甕の胴部破片(8)、ほかは土師器甕(4・5)、須恵器甕の胴部破片(7・9～14)である。瓦については、玉縁の丸瓦破片(15)、平瓦(16～19)が出土している。遺物から見る限りにおいては、時期差があまり感じられないことから、何らかの遺構の存在が考えられる。

401号住居跡 (第487・488図、写真図版76・139)

遺構は、北東側尾根状台地の基部HO-80、90、HP-71、72、81、82区に位置する。住居南西部分には、2間×

3間の東西棟である510号掘立柱建物跡が重なってかかっており、また南東部分にはやはり2間×3間の東西棟である508号掘立柱建物跡が重なっている。住居は北西方向で、主軸方位はN—31°30′—Wである。形状は、北東—南西軸が北西—南東軸の2倍弱ある横長形状である。規模は、北東—南西軸6.8m、北西—南東軸3.94mである。住居の角はやや隅丸で、壁はきちっと垂直に掘り込まれている。住居の位置する地形が、北西から南東に向かって緩やかに傾斜するため、壁高は北西壁で38cm、南西壁で31cm、南東壁で13cm、北東壁で11cmを測る。面積は確認面で24.2㎡、床面で23.1㎡となる。床は、ハードローム面を直接床面としている。中央部が広範囲にわたって踏み固められている。周溝は認められない。床面には、ピットが多数見られるが、これは508号、510号掘立柱建物跡の柱穴掘形である。規則性のある支柱穴は確認できない。南東側壁際の中央部分に径40cm、深さ40cm程度のピット(P1)が見られるが、住居出入口施設に関連した柱穴であろう。

カマドは2基所在する。いずれも北西方向で北西側壁の中央部分に220cm程度の間隔をあけて並列している。時期差については検討を要する。両カマド自体は住居主軸からさらに5°西に傾いている。左側のカマドAは壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部を作り、煙道のはっきりしない形状である。袖は、壁から50cm前後の長さで灰白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は90cm、幅105cm、高さ40cm、燃焼部分は幅55cm、奥行き90cmで、傾斜を持って立ち上がる奥壁を持つ。燃焼部の内側はよく焼け、赤化している。煙道部分は、燃焼部の奥壁を利用してわずかに住居外に出る。右側のカマドBはカマドA同様に壁を「ㄣ」字形に掘り込んで燃焼部を作り、煙道のはっきりしない形状である。袖は、壁から50cm前後の長さで灰白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は60cm、幅90cm、高さ30cm、燃焼部分は幅55cm、奥行き55cmで、垂直に立ち上がる奥壁を持つ。煙道部分は燃焼部の奥壁を利用してわずかに住居外に出る。カマドBに比べ、カマドAの方がしっかりとした作りで、長期間使用した痕跡が残っている。

遺物については、カマド内および西側隔壁際の床面から出土している。カマドAからは土師器杯(1)、甕の底部(9)、カマドBからは土師器杯(3)、須恵器杯(6)、西側隔壁際の床面(床直・+2cm)から土師器甕(8)、底部外面に「大里」と墨書のある内・外面に赤彩された土師器杯(5)、南東壁際の床面(+6.5cm)から須恵器杯(7)、覆土中から土師器杯(2)、丸瓦の破片(10)が出土している。なお、土師器杯(4)については、房総歴史考古学研究会編の坊作遺跡編年で掲載された杯で、当住居跡出土となっている。該当遺物が行方不明のため、出土位置等は不明である。

土器の特徴 土師器杯類については体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形するもので、やや丸底の杯(1・2)と器高の低い平底の杯(3～5)に分けられる。このうち、土師器杯(4)は体部内面に斜格子状暗文を施している。土師器杯(5)は口縁部がわずかに外反し、体部内外面、底部を全面赤彩するもので、武蔵あるいは下総系統のいわゆる盤状杯と呼ばれるもので、搬入されたものである。須恵器杯(6)は永田・不入窯製品、須恵器杯(7)は口縁部が外反するなど常陸系の須恵器である。

402号住居跡 (第489・490図、写真図版77・139・178)

遺構は、遺跡南東隅の南斜面部で国分尼寺跡北東辺の外郭溝の隣接部分MS—11、12、13、22、23区に位置する。住居は、後世の道路で全体の1/2以上を壊されている。不明瞭な部分があるが、形状は、方形で南北軸4.2m、東西軸は推定で4.2mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘り込まれている。住居の位置する場所が北西から南東に傾斜する地形から、壁高は北壁で60cm、西壁で50cm、南壁で25cmである。面積は、正形状と仮定して確認面で17.6㎡、床面で13㎡となる。主軸方位は、北方向にカマドが存在したと仮定してN—16°20′—Wである。床は、ハードローム面を直接床面としている。周溝は確認できなかった。半分以上壊されているため、規則性の

ある支柱穴は確認できなかったが、中央西側に径30cm、深さ26cm程度のピット(P1、P2)が2基重なって認められる。支柱穴の可能性も考えられる。

カマドは、削平された部分に存在したと思われるが、現状では確認できなかった。西壁あるいは北壁方向にあったものと思われる。

遺物については、点数が少ない。西側壁際の床面(床直)から土師器杯(1・2)、覆土中から土師器甕(3～5)、須恵器甕の胴部破片(7)、平底の甕(6)、平瓦(8)、丸瓦(9)、用途不明(温石か)の蛇紋岩製石製品(10)などが出土している。

土器の特徴 土師器杯については、底部を回転糸切りで切り離したまま、整形調整しない杯である。

403号住居跡(第491・492図、写真図版77・139)

遺構は、遺跡南東隅の南斜面部で国分尼寺跡北東辺の外郭溝の隣接部分MS—33、34、43、44区に位置する。住居は、後世の道路で全体の2/5程度を壊されている。不明確な部分があるが、住居は北西を向き、主軸方位はN—26°00′—Wである。形状は、北東—南西方向のやや横長の方形で、推定北西—南東軸4.0m、北東—南西軸4.3mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘り込まれている。住居の位置する場所が北西から南東に傾斜する地形から、壁高は北西壁で70cm、南西壁で50cm、南東壁で0cmである。面積は、横長方形形状と仮定して確認面で16.7㎡、床面で14.7㎡、内区で3.6㎡となる。床は、ハードローム面を直接床面としている。周溝はカマドのある北西壁側に認められる。柱穴はほぼ対角線上に4本検出され、円形でほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が60cm、P2が40cm、P3が45cm、P4が30cmである。柱間は、P1・P2が1.8m、P1・P3が1.8m、P2・P4が1.8m、P3・P4が1.95mで、対辺はほぼ均等である。

カマドは北西方向で、北西側壁の中央部分に位置する。右袖部分および煙道部分を後世の道路によって壊されている。カマド自体は、住居主軸から16°40′東へ傾いている。壁を「∩」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。袖は、壁を利用して50cm程度の長さで白色粘土を用いて「ハ」の字状に開く。カマドの全長は現状で80cm(煙道部分是不明)、幅80cm、高さ40cmを測る。燃焼部分は、最大幅約35cm、奥行き55cmで、垂直に立ち上がる奥壁をもつ。燃焼部の火床は掘りくぼめている。

遺物については、出土数が少ない。図示した遺物はすべて覆土中からである。

土器の特徴 土師器杯(1)は、器高の低い平底で体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する。体部内面に斜格子状暗文を施している。須恵器甕の底部(5)は黒褐色系である。須恵器大型甕(6～9)は胴部破片、瓦(10～13)については平瓦である。

404号住居跡(第493～495図、写真図版77・139・140・169・178)

遺構は、遺跡南東隅の南斜面部で国分尼寺跡北東辺の外郭溝の隣接部分MS—44、53、54区に位置する。住居は北西を向き、主軸方位はN—15°55′—Eである。形状は東西方向にやや横長の方形形状で、南北軸2.8m、東西軸3.1mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘り込まれている。住居の位置する場所が北西から南東に傾斜する地形から、壁高は北壁で50cm、西壁で40cm、南壁で5cm、東壁で20cmである。面積は確認面で8.4㎡、床面で7.3㎡となる。床は、ハードローム面を直接床面としている。周溝はカマドの位置する部分および南西隅の角を除いてめぐる。柱穴は北東隅の部分を除いて、対角線上に3本検出されている。円形でほぼ垂直に掘り込んで掘形とする。柱穴の深さは、P1が25cm、P3が28cm、P4が33cmである。柱間は、P1・P3が1.4m、P3・P4が1.6mである。

カマドは北西方向で、北西側壁の中央部分から東に偏っている。カマド自体は、住居主軸から5°55′さらに西へ

傾いている。壁を「へ」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。カマドの全長は120cm(うち煙道部分75cm)、幅90cm、高さ40cmを測る。

遺物については、土師器杯類を中心として良好な資料が出土している。カマド内からは土師器杯(2・9)、カマド正面の床面(床直)から土師器皿(15)、灰釉陶器高台付椀(19)、須恵器大形甕の胴部破片(28)、黒茶灰色系の須恵器甕の胴部破片(27)、覆土中から土師器杯(1・3～8・10～12)、体部内面を黒色処理した杯(17)、大形椀(16)、皿(13・14)、須恵器高台付椀(18)、灰釉陶器高台付椀(20)、須恵器蓋(22)、土師器蓋のつまみ部分(21)、土師器甕(23・25)、鉢(24)、黒褐色系の須恵器甕の胴部破片(26)などが出土している。このほか、覆土中から丸瓦の破片(30)、平瓦(32・33)、斜格子目タタキの平瓦(31)、敲石(29)が出土している。

土器の特徴 土師器杯類については、大まかに分けて体部外面下端、底部を手持ちヘラケズリで整形するもの(2～5)、体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1)、底部のみを回転ヘラケズリで整形するもの(11・12)、底部を回転糸切りで切り離した後、中央を残して外周を回転ヘラケズリで整形するもの(4・16)、回転糸切りで切り離したまま、整形調整しないもの(9・10)に分類できる。この中で体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形する杯が主体的に占める。土師器杯(10)については底部内面に「×」の線刻が施されている。土師器鉢(24)は器高の深い、形態的にやや異種なものである。

405号住居跡(第496・497図、写真図版77・140)

遺構は、遺跡南東隅の南斜面部で国分尼寺跡北東辺の外郭溝の隣接部分MS—45、46、55、56区に位置する。住居は西を向き、主軸方位はN—114°40′—Wである。形状は南北方向にやや長い横長方形で、南北軸3.7m、東西軸3.5mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘り込まれている。住居の位置する場所が北西から南東に傾斜する地形から、壁高は北壁で60cm、西壁で40cm、南壁で0cm、東壁で20cmである。面積は確認面で12.5㎡、床面で10.9㎡となる。床は、ハードローム面を直接床面としている。周溝、柱穴については認められない。南西隅の角部分に径30cm、深さ50cm程度のピット(P1)が見られるが、あるいは柱穴の一部になるのかもしれない。

カマドは西方向で、西側壁の中央部分に位置する。壁を「ㄩ」字形に掘り込んで燃焼部を構築する。カマドの全長は80cm(うち煙道部分40cm)、幅80cm、高さ40cm程度である。

遺物については、覆土中からの出土である。土師器杯(1～5)、体部内面を黒色処理する土師器高台付椀(6)、土師器甕(7～10)、茶灰色系の須恵器甕の口縁部片(11)、須恵器甕の胴部破片(12)、平瓦(13・14)である。

土器の特徴 土師器杯類については、大まかに分けて、体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形するもの(1)、体部外面、底部を手持ちヘラケズリで整形するもの(2)、底部のみ回転ヘラケズリで整形するもの(6)、底部を回転糸切りで切り離したまま、整形調整しないもの(3・4)と分類できる。この中で底部を回転糸切りで切り離したまま整形調整しない杯が、主体を占めるものと思われる。

406号住居跡(第498・499図、写真図版77・140)

遺構は、遺跡南東隅の南斜面の最下段部MS—39、40、49区に位置する。住居は北東を向き、主軸方位はN—66°10′—Eである。形状は北西—南東方向に長い横長方形で、北西—南東軸3.5m、北東—南西軸2.8mを測る。住居の角はやや隅丸で、壁は浅く掘り込まれている。住居の位置する場所が北西から南東に傾斜する地形から、壁高は北西壁で30cm、南西壁で30cm、南東壁で5cm、北東壁で10cmである。面積は確認面で9.5㎡、床面で8㎡となる。床は、ハードローム面を直接床面としている。周溝は北東側壁、北西壁側、南西壁側に見られる。柱穴については認められない。

カマドは北東方向で、東側壁の中央部分に位置する。不明確な部分が多いが、壁を「ㄩ」字形に掘り込んで燃

焼部を構築する。カマドの全長は110cm(うち煙道部分70cm)、幅70cm、高さ20cm程度である。

遺物については、覆土中からの出土である。土師器杯(1~3・5)、土師器皿(4)が出土した。箱形状の器壁の厚い土師器杯(5)は、口縁部内・外面にスス、油煙が付着することから灯明用杯であろう。

土器の特徴 土師器杯類については、体部外面下端および底部を回転糸切りで切り離した後、中央を残して回転ヘラケズリで整形する杯(1)、底部を回転糸切りで切り離したまま、整形調整しないもの(2)に分けられる。土師器皿(4)は体部外面下端、底部を回転ヘラケズリで整形している。

407号住居跡(第500図、写真図版77)

遺構は、遺跡南東隅の南斜面の最下段部LS—100、MS—10区に位置する。宅地造成の際の掘削で東側1/2を壊されている。住居は北を向き、主軸方位はN—19°55′—Wである。不明瞭な部分があるが、形状は正方形と仮定して、南北軸3.3m、東西軸は推定で3.2mを測る。住居の角はほぼ直角で、壁は垂直に掘り込まれている。住居の位置する場所が西から東に傾斜する地形から、壁高は北壁で40cm、西壁で30cm、南壁で5cmである。面積は正方形と仮定して確認面で10.2㎡、床面で8.4㎡となる。床は、ハードローム面を直接床面としている。周溝はカマドのある北壁、西壁に見られる。柱穴は床面には見られなかった。

カマドは北方向で、北側壁の中央部分に位置する。燃焼部および右袖部分が削平されているため、左袖部分のみの残欠である。削られた部分には燃焼部の火床と思われる焼土が残っている。左袖は壁を利用して50cm程度の長さで白色粘土を用いている。カマドの全長、幅は不明である。左袖の外側には30×20cm、深さ40cm程度の楕円形ピットが認められるが、カマド施設に付随した柱穴であろう。

遺物については、すべて覆土中からの出土である。須恵器杯(1)、須恵器蓋のつまみ部分(2)、土師器甕の底部(3・4)が出土している。出土した点数が少なく、時期を決定するに足りない。

(2) 掘立柱建物跡および鍛冶遺構ほか

掘立柱建物跡は、遺跡内の谷を挟んだ北側の舌状尾根の台地に作られている。建物は建替えを含めて32棟を数える。このうち2棟は鍛冶遺構で、鍛冶炉・作業場を覆う2間×2間の側柱構造の掘立柱建物である。このほか東西方向の柱列が2基、南北方向の柱列が1基および溝状遺構が4条検出されている。

以下、各遺構について説明を加える。なお、建物の方位は、南北棟では桁行きの柱筋を方向とし、東西棟では桁行きの柱筋を基準に90°北方向に換算した数値を方向とする。この軸と座標北のなす角度を建物方位として取り扱っている。

500号掘立柱建物跡(第502図、写真図版80)

南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近のKN—13、14、23、24区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の南北棟である。建物自体はやや東に傾き、方位はN—10°20′—Eである。規模は、桁行の西側列総長4.5m、柱間寸法は北からa1—a2間1.3m、a2—a3間不明、a3—a4間不明である。東側列総長は4.5m、柱間寸法は、北からc1—c2間1.5m、c2—c3間1.65m、c3—c4間1.3mである。梁行の北側列総長3.15m、柱間寸法は不明。南側列総長は3.15m、柱間寸法は、西からa4—b4間1.5m、b4—c4間1.78mである。柱の通りは良好である。柱穴は円形状を主体としているが、a2、b1、c3はやや方形に近い。またb4柱穴は他の柱穴に比べてやや小さい。規模は40~70cm、深さ34~42cmを測る。柱痕はa2、b4、c2、c3柱穴から検出されている。掘形覆土はローム土を基調として暗褐色土、黒褐色土を含んでいる。遺物については出土しなかった。

501号掘立柱建物跡(第502図、写真図版80)

南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近に位置し、JN—85、86、95、96、KN—05、06区に所在する。建物は、桁行3間×梁行2間の南北棟で、95号住居跡が北東部分で重なっている。建物は、南西側に隣接する500号掘立柱建物跡よりさらに東に傾き、方位はN—19°00′—Eである。規模は、桁行の西側列総長5.1m、柱間寸法は、柱痕が認められないので不明。東側列総長は5.1mで、c 2柱穴は95号住居跡の床面には見られない。柱間寸法についても不明である。梁行は北側列総長4.8m、南側列総長で4.9mとなる。柱間寸法は両列とも不明である。柱筋は、推定で復元している。柱穴は、方形状の掘形を主体としている。c 4が円形である。規模は南北辺が90～100cm、東西辺が80～90cm、深さは20～52cmを測る。掘形覆土はソフトローム、ローム土を基調として暗褐色土、黒褐色土を含んでいる。なお、重複している95号住居跡との新旧関係は、発掘時の記載がないため不明瞭であるが、95号住居跡の床は貼床で硬化しており、住居を掘り上げた段階での写真、実測図ではc 1柱穴の掘形がまったく見えない。また、b 1柱穴の東の半分以上を95号住居跡によって壊されているようすである。このことから判断して、501号掘立柱建物が先行するものと考えている。遺物については、出土しなかった。

502号掘立柱建物跡（第503図、写真図版81・82）

南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近のJN—13、14、15、23、24、25区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の東西棟である。建物の西側1/3は、503号掘立柱建物跡によって壊されている。また、建物の西側梁行部分では、167号平安時代住居跡と重複している。住居跡との新旧関係は、写真を見る限り建物のa 1柱穴を壊して住居が作られたようにも見受けられるが、発掘当時の記載がないため不明である。建物自体は東に傾き、方位はN—10°30′—Eである。規模は、桁行の北側列総長4.8m、柱間寸法は柱痕が確認できなかったため不明である。南側列総長は4.8m、柱間寸法は、西からc 1—c 2間1.65m、c 2—c 3間1.65m、c 3—c 4間1.5mである。梁行の西側列総長3.6m、柱間寸法は不明。東側列総長は3.6m、柱間寸法は、北からa 4—b 4間1.8m、b 4—c 4間1.8mである。桁行、梁行ともほぼ均等だが、柱の通りは不良である。柱穴は方形状を主体としているが、c 2は他の柱穴に比べて小さく円形状である。a 2柱穴部分で、503号掘立柱建物跡のa 4柱穴がこの柱穴を壊している。規模は65～100cm、深さ28～34cmを測る。柱痕はa 2、b 4、c 2柱穴から検出されている。掘形覆土はローム土を基調として暗褐色土、黒褐色土を含んでいる。遺物は出土しなかった。

503号掘立柱建物跡（第503図、写真図版81・82）

南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近のJN—02、03、04、12、13、14、23区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の東西棟である。建物の東側1/3は、502号掘立柱建物跡を壊している。また、建物の北西側部分、南西側部分ではそれぞれ167号平安時代住居跡、504号掘立柱建物跡と重複している。504号掘立柱建物跡との新旧関係は、504号b 4柱穴部分を503号掘立柱建物跡が壊しているように見られることから、504号掘立柱建物跡が先行するものと思われる。また167号住居跡との新旧関係は、写真を見る限り建物のa 1柱穴を壊して住居が作られているようにも見られる。発掘当時の記載がないため不明である。建物自体は東に傾き、方位はN—19°30′—Eである。規模は、桁行の北側列総長5.1m、柱間寸法は、a 3—a 4間1.8m以外不明である。南側列総長は5.1m、柱間寸法は、柱痕が検出できなかったため不明。梁行の西側列総長3.6m、柱間寸法は不明。東側列総長は3.6m、柱間寸法は、北からa 4—b 4間1.8m、b 4—c 4間1.8mである。桁行、梁行ともほぼ均等だが、柱の通りはやや不良である。柱穴は、方形状を主体としている。規模は長軸100～110cm、短軸70～90cm、深さ48～65cmを測る。掘形覆土は、黒褐色土を主体とし若干ローム土を含んでいる。遺物は出土しなかった。

504号掘立柱建物跡（第503図、写真図版81・82）

南側台地の国分尼寺跡北辺部溝付近のJN—11、12、13、21、22、23区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間

の東西棟である。建物の北東側は、503号掘立柱建物跡と重複している。503号掘立柱建物跡との新旧関係は、504号b4柱穴部分を503号建物が壊しているように見られることから、504号掘立柱建物跡が先行するものと思われる。建物自体は東に傾き、方位はN—12°10′—Eである。規模は、桁行の北側列総長4.8m、柱間寸法は不明である。南側列総長は4.8m、柱間寸法は、西からc1—c2間1.48m、c2—c3間1.8m、c3—c4間1.5mである。梁行の西側列総長3.14m、柱間寸法は北からa1—b1間1.64m、b1—c1間1.5mある。東側列総長は3.1m、柱間寸法は、北からa4—b4間1.8m、b4—c4間1.3mである。柱の通りはやや不良である。柱穴は方形状を主体としている。規模は長軸80～90cm、短軸60～80cm、深さ12～45cmを測る。掘形覆土は黒褐色土を主体としロームブロックを含んでいる。遺物については、柱穴内より行基葺きの丸瓦(1)が出土しているほか、小片のため図示し得なかったが、須恵器甕、土師器タタキ甕の破片が出土している。

505号掘立柱建物跡（第504図、写真図版82）

北西側尾根状台地の基部IO—31、32、33、41、42、43区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の東西棟である。建物自体は東に傾き、方位はN—7°00′—Eである。柱穴のうち、a2、c3はそれぞれ170号陥穴、275号陥穴にかかっている。規模は、桁行の北側列総長4.9m、柱間寸法は西からa1—a2間1.48m、a2—a3間1.8m、a3—a4間1.65mである。南側列総長は4.9m、柱間寸法は、西からc1—c2間1.62m、c2—c3間1.5m、c3—c4間1.78mである。梁行の西側列総長3.6m、柱間寸法は北からa1—b1間1.8m、b1—c1間1.8mある。東側列総長は3.6m、柱間寸法は、北からa4—b4間1.8m、b4—c4間1.8mである。桁行、梁行ともほぼ均等で、柱の通りも良好である。柱穴は、北側桁行と南側桁行部分は方形状であるが、梁行部分のb1、b4部分は円形状である。柱穴の規模は方形部分で長軸70～80cm、短軸60～80cm、深さ60～80cm、円形部分で径55cmを測る。柱穴の深さは、32～82cmである。掘形覆土は暗褐色土を主体としロームブロックを含んでいる。遺物については、写真、実測図ではa1柱穴内に平瓦が根石状に敷かれたように見られるが、遺物が行方不明のため、図示し得なかった。

506号掘立柱建物跡（第505～508図、写真図版82・170）

北西側尾根状台地の基部HN—68、69、70、78、79、80区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の東西棟である。建物自体は東に傾き、方位はN—13°00′—Eである。規模は、桁行の北側列総長6.42m、柱間寸法は、a3—a4間1.95mでこれ以外は不明である。南側列総長は6.42m、柱間寸法は、西からc1—c2間2.26m、c2—c3間1.96m、c3—c4間2.26mである。梁行の西側列総長3.45m、柱間寸法は北からa1—b1間1.8m、b1—c1間1.65mである。東側列総長は3.46m、柱間寸法は、北からa4—b4間1.66m、b4—c4間1.8mである。桁行、梁行やや不等ではあるが、柱の通りは良好である。柱穴は円形状である。規模は径65～80cm、深さ42～57cmを測る。掘形覆土は暗褐色土を主体としロームブロックを含んでいる。遺物については、掘形内より須恵器甕の破片(1・2)、千葉地域産の茶褐色系の須恵器甕の破片(3)、丸瓦(4～7)、平瓦(8～20)、格子目タタキ平瓦(21)など多数出土している。

507号掘立柱建物跡（第509図、写真図版83）

北西側尾根状台地の基部東側斜面部のIO—28、29、38、39、48、49区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の南北棟で、北西側桁行部分で145号奈良時代住居跡が、東側桁行部分で142号奈良時代住居跡が重複している。また、北西側部分では、526号掘立柱建物跡が重なり合っている。住居跡との新旧関係は、145号住居跡の床を壊して507号掘立柱建物跡のa1、a2柱穴を掘り込んでいることから、145号奈良時代住居跡が先行する。142号住居跡および526号掘立柱建物跡との関係は、調査時の記載がないため不明確である。建物の方位はN—4°10′—Wである。規模は、桁行の西側列総長6.6m、柱間寸法は北からa1—a2間2.4m、a2—a3間2.1m、a3—a4間2.1m

である。東側列総長は6.6m、柱間寸法は、柱穴が142号住居跡によって壊されているため不明である。梁行の北側列総長4.22m、柱間寸法は西からa1—b1間1.95m、b1—c1間2.26mである。南側列総長は4.2m、柱間寸法は、西からa4—b4間2.1m、b4—c4間2.1mである。柱筋は、ほぼ通っている。柱穴は方形の掘形を主体としている。規模は南北辺が70～100cm、東西辺が60～90cm、深さは58～105cm前後を測る。掘形覆土は、黒褐色土を主体とした土層で、ロームブロックを含んでいる。遺物は出土しなかった。

508号掘立柱建物跡（第510図、写真図版83・140）

北西側尾根状台地基部の東側斜面部分HO—90、HP—72、81、82、91、92区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の東西棟である。建物の北側桁行部分は、401号奈良時代住居跡が重複している。また北東側部分には510号掘立柱建物跡が重なっている。新旧関係は、記載がないため不明瞭ではあるが、401号住居跡の床を壊しているようである。また510号掘立柱建物跡との新旧については、510号掘立柱建物c4柱穴を508号掘立柱建物c1柱穴が壊していることから、508号掘立柱建物が新しいと言える。建物自体は西に傾き、方位はN—23°25′—Wである。規模は、桁行の北側列総長5.1m、柱間寸法は西からa1—a2間1.5m、a2—a3間1.8m、a3—a4間1.8mである。南側列総長は5.08m、柱間寸法は、西からc1—c2間1.65m、c2—c3間1.65m、c3—c4間1.8mである。梁行の西側列総長3.3m、柱間寸法は北からa1—b1間1.5m、b1—c1間1.8m。東側列総長は3.3m、柱間寸法は、北からa4—b4間1.5m、b4—c4間1.8mである。柱の通りは良好である。柱穴は方形を主体としている。規模は一辺55～90cm、深さ34～55cmを測る。掘形覆土は、暗褐色土を主体としロームブロックを含んでいる。遺物については、c2柱穴掘形内よりロクロ整形の土師器杯(1)が出土している。この遺物の時期については、9世紀中葉頃と思われる。

509号掘立柱建物跡（第510図、写真図版83・84）

北西側尾根状台地基部の東側斜面部分HO—87、88、89、97、98、99区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の東西棟である。建物の東側部分および南東側部分は、それぞれ510号掘立柱建物跡、511号掘立柱建物跡が重なりあっている。また509号掘立柱建物跡の中に2間×1間の512号掘立柱建物跡が重なっている。新旧関係で直接確認できる部分は、509号掘立柱建物跡c3柱穴で、511号掘立柱建物跡のa1柱穴を壊していることから509号掘立柱建物跡が新しい。510号掘立柱建物跡との関係は、柱穴同士が切り合っていないため直接的にはわからない。また、512号掘立柱建物跡との新旧も不明である。建物自体はわずかに東に傾いている。方位はN—3°40′—Eである。規模は、桁行の北側列総長5.4m、柱間寸法は西からa1—a2間2.4m、a2—a3間1.5m、a3—a4間1.5mである。南側列総長は5.4m、柱間寸法は、西からc1—c2間2.1m、c2—c3間1.5m、c3—c4間1.8mである。梁行の西側列総長3.9m、柱間寸法は北からa1—b1間1.95m、b1—c1間1.95mである。東側列総長は3.9m、柱間寸法は、北からa4—b4間1.95m、b4—c4間1.95mである。桁行部分のa2—a3間、c2—c3間が均等ではあるが、他の柱間に比して短い。柱の通りは良好である。柱穴は方形を主体としている。規模は、一辺80～100cm、深さ25～64cmを測る。掘形覆土は、暗褐色土を主体とし、若干ローム土、ロームブロックを含んでいる。遺物は出土しなかった。

510号掘立柱建物跡（第510図、写真図版83）

北西側尾根状台地基部の東側斜面部分HO—89、90、99、100区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間で南側に底の付く東西棟である。建物の北東側部分を401号奈良時代住居跡、東部分を508号掘立柱建物跡、南側部分を511号掘立柱建物跡、西側部分を509号掘立柱建物跡とそれぞれ重複関係にある。また西側の梁行部分に2間×1間の512号掘立柱建物跡が所在する。この建物とは梁行の柱筋と平行する。各々の新旧関係で、直接切り合っている

部分はc 4柱穴と508号掘立柱建物跡のc 1柱穴で、510号掘立柱建物跡が古いことがわかる。なお西側隣接の512号掘立柱建物跡については直接の新旧関係を判断し得ない。建物自体は西に傾き、方位はN—7°30′—Wである。身舎部分の規模は、桁行の北側列総長6.45m、柱間寸法は西からa 1—a 2間2.1m、a 2—a 3間1.8m、a 3—a 4間2.55mである。南側列総長は推定で6.4m、柱間寸法は、西から推定c 1—c 2間2.1m、c 2—c 3間2.1m、推定c 3—c 4間2.2mである。梁行の西側列総長4.5m、柱間寸法は北からa 1—b 1間2.55m、b 1—c 1間1.95mである。東側列総長は推定で4.5m、柱間寸法は、北から推定a 4—b 4間1.95m、b 4—c 4間2.55mである。底部分は南側桁行部分に沿う形で、2.55m程度南へ張り出す。柱間は2.1mで均等に配されている。柱の通りは良好である。柱穴は、方形状を主体としている。規模は一辺90～100cm、深さ34～45cmを測る。掘形覆土は、黒褐色土を主体とし、若干焼土、粘土など汚れた土を含んでいる。遺物は出土しなかった。

511号掘立柱建物跡（第510図、写真図版83・84）

北西側尾根状台地基部の東側斜面部分I O—08、09、99、10、19区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の東西棟である。建物の北東側部分を510号掘立柱建物跡、北西部分を509号掘立柱建物跡とそれぞれ重複関係にある。直接の切り合い関係は509号掘立柱建物跡で、当建物が先行する。建物自体は西に傾き、方位はN—23°10′—Wである。規模は、桁行の北側列総長は推定で5.88m、柱間寸法は不明である。南側列総長は5.85m、柱間寸法は、西からc 1—c 2間1.8m、c 2—c 3間1.95m、c 3—c 4間2.1mである。梁行の西側列総長は推定で3.6m、柱間寸法は不明である。東側列総長は3.6m、柱間寸法は、北からa 4—b 4間1.8m、b 4—c 4間1.8mである。柱間は対面する柱間は等しいが、列ごとの柱間は不揃いである。柱の通りは南側の桁行部分がよく通っている。その他の部分は不良である。穴は方形状を主体としている。規模は一辺72～90cm、深さ35～58cmである。掘形覆土は、暗褐色土を主体とし、若干ローム土、ロームブロックを含んでいる。遺物については、b 4柱穴の掘形内に土師器甕の破片か瓦らしき遺物が写真に写されている。現在この遺物については行方不明である。

512号掘立柱建物跡（第510図、写真図版83・84）

北西側尾根状台地基部の東側斜面部分H O—88、99区に位置する。建物は、桁行2間×梁行1間（南方向に桁行が1間分延びる可能性も考えられるが不明である）の小規模掘立柱建物である。建物を覆うように509号掘立柱建物跡が重なっている。東側の梁行部分では、柱筋と平行して510号掘立柱建物跡が存在する。新旧関係は、直接の切り合いが認められないため不明である。柱穴の掘形から建替えの可能性も考えられる。建物自体は西に傾き、方位はN—5°10′—Wである。規模は、桁行の西側列総長は推定3.6m。柱間寸法は、北からa 1—a 2間1.8m、a 2—a 3間1.8mである。東側列総長は3.6m、柱間寸法は、北からc 1—c 2間1.8m、c 2—c 3間1.8mである。梁行の北側および南側柱間寸法は1.8mである。柱間はほぼ均等である。柱穴は円形状を主体としている。規模は径40～50cm、深さ40～48cmを測る。掘形覆土は黒褐色土を主体とし、焼土、粘土など汚れた土を若干含んでいる。遺物は出土しなかった。

513号掘立柱建物跡（第511図、写真図版84）

北西側尾根状台地基部の中央部分H O—12、13、14、22、23、24区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の東西棟ある。建物自体はやや東に傾き、方位はN—3°30′—Eである。建物の北東隅a 4柱穴部分は、234号弥生時代住居跡の床を壊して掘り込んでいる。規模は、桁行の北側列総長5.4m、柱間寸法は西からa 1—a 2間1.8m、a 2—a 3間1.65m、a 3—a 4間1.95mである。南側列総長は5.4m、柱間寸法は、西からc 1—c 2間1.8m、c 2—c 3間1.8m、c 3—c 4間1.8mである。梁行の西側列総長3.9m、柱間寸法は北からa 1—b 1間2.1m、b 1—c 1間1.8mである。東側列総長は3.9m、柱間寸法は、北からa 4—b 4間1.95m、b 4—c 4間1.95mである。桁行、梁

行とも寸法は不揃いであるが、柱の通りは良好である。柱穴は方形状を主体としている。規模は一辺80～106cm、深さ24～55cmを測る。掘形覆土は、暗褐色土を主体としロームブロックを含んでいる。遺物は出土しなかった。

514号掘立柱建物跡（第512図、写真図版84）

北西側尾根状台地の中央部分G P—28、29、30、38、39、48、49区に位置する。建物は桁行3間×梁行2間の南北棟である。建物自体は東に傾き、方位はN—7°50′—Eである。規模は、桁行の西側列総長5.25m、柱間寸法は北からa 1—a 2間1.5m、a 2—a 3間2.25m、a 3—a 4間1.5mである。東側列総長は5.25m、柱間寸法は、北からc 1—c 2間1.5m、c 2—c 3間2.25m、c 3—c 4間1.5mである。梁行の北側列総長4.2m、柱間寸法は西からa 1—b 1間2.1m、b 1—c 1間2.1mである。南側列総長は4.2m、柱間寸法は、西からa 4—b 4間2.1m、b 4—c 4間2.1mである。桁行、梁行の柱間は、対面する柱間の寸法が等しい。a 2—a 3間、c 2—c 3間が他の部分より長い。柱の通りは良好である。柱穴は方形状を主体としている。規模は長軸90～120cm、短軸88～100cm、深さ50～82cmを測る。柱痕はa 2、b 4、c 2柱穴から検出されている。掘形覆土は黒褐色土、暗褐色土を含むローム土を交互に積み重ねている。覆土自体は全体によくしまっている。また柱痕部分覆土には若干粘土、焼土を含む。規格性があり、整った建物である。遺物は出土しなかった。

515号掘立柱建物跡（第513図、写真図版84）

北西側尾根状台地の中央部G Q—41、42、43、51、52、53、61、62、63区に位置する。建物は桁行3間×梁行2間の南北棟で、東側部分に庇が付く。建物自体はやや西に傾き、方位はN—5°00′—Wである。身舎部分の規模は、桁行の西側列総長4.93m、柱間寸法は北からa 1—a 2間1.8m、a 2—a 3間1.5m、a 3—a 4間1.63mである。東側列総長は4.95m、柱間寸法は、北からc 1—c 2間1.78m、c 2—c 3間1.5m、c 3—c 4間1.67mである。梁行の北側列総長3.45m、柱間寸法は西からa 1—b 1間1.72m、b 1—c 1間1.73mである。南側列総長は3.45m、柱間寸法は、西からa 4—b 4間1.74m、b 4—c 4間1.71mである。桁行、梁行の柱間はやや不揃いである。柱の通りは良好で対辺とも平行であるが、角は直角ではなくやや西に傾いている。庇部分は東桁行部分に沿う形で、総長4.95m、柱間寸法は北からd 1—d 2間1.6m、d 2—d 3間1.5m、d 3—d 4間1.69mである。身舎との柱間寸法はc 1—d 1間1.92m、c 2—d 2間1.91m、c 3—d 3間1.90m、c 4—d 4間1.91mである。柱穴は円形状が主体を占めている。規模は径60～80cm、深さ54～72cmを測る。庇部分は径60cm前後の円形で32cm前後の浅い掘り込みである。身舎部分の柱穴覆土は、暗褐色土を主体としてローム土を含んだ覆土が多いが、黒褐色土、ローム土を交互に積み重ねている部分も見受けられる。また柱痕部分覆土には若干粘土、焼土を含む。遺物については出土しなかった。

516号掘立柱建物跡（第512図、写真図版85）

北西側尾根状台地の中央部F Q—94、95、G Q—03、04、05区に位置する。尾根の先端部分に近いことから、建物は南西から北東方向に緩やかに下がる部分に作られている。建物は、桁行3間×梁行2間の東西棟である。建物自体は西に傾き、方位はN—8°30′—Wである。規模は、桁行の北側列総長4.52m、柱間寸法は西からa 1—a 2間1.51m、a 2—a 3間1.5m、a 3—a 4間1.51mである。南側列総長は4.5m、柱間寸法は、西からc 1—c 2間1.5m、c 2—c 3間1.5m、c 3—c 4間1.5mである。梁行の西側列総長3.15m、柱間寸法は北からa 1—b 1間1.57m、b 1—c 1間1.58mある。東側列総長は3.16m、柱間寸法は、北からa 4—b 4間1.57m、b 4—c 4間1.59mである。桁行、梁行ともほぼ均等で、柱の通りはc 2柱穴をのぞいて良好である。柱穴は円形状である。規模は径60～80cm、深さ28～55cmを測る。掘形覆土は、褐色土を主体としロームブロックを含んでいる。また柱痕部分の覆土には若干粘土、焼土を含む。遺物については出土しなかった。

517号掘立柱建物跡（第512図、写真図版85）

北西側尾根状台地の中央部GQ—01、02、11、12、13、22、23区に位置する。建物は、桁行4間×梁行2間の南北棟である。建物自体は西に傾き、方位はN—10°00′—Wである。規模は、桁行の西側列総長6m、柱間寸法は、北からa1—a2間1.5m、a2—a3間1.66m、a3—a4間1.49m、a4—a5間1.35mである。東側列総長は6m、柱間寸法は、北からc1—c2間1.5m、c2—c3間1.65m、c3—c4間1.5m、c4—c5間1.35mである。梁行の北側列総長3.6m、柱間寸法は西からa1—b1間1.65m、b1—c1間1.95mである。南側列総長は3.6m、柱間寸法は、西からa5—b5間1.65m、b5—c5間1.95mである。桁行、梁行の柱間は、対面する柱間は等しいが、列ごとの間は不揃いである。北側梁行、西側桁行は通るが、南側および東側部分は通りが不良である。対辺とも平行であるが、角は直角ではなくやや西に傾いている。柱穴は、円形状を主体としている。規模は径40～50cm前後、深さ20～30cmを測る。4間×2間の建物とはいえ、ほかの掘立柱建物の掘形と比べるとやや貧弱といえる。掘形覆土は暗褐色土を主体としロームブロックを含んでいる。遺物については出土しなかった。

518号掘立柱建物跡（第513図、写真図版85）

北西側尾根状台地の中央部GQ—24、25、26、34、35、36、44、45、46区に位置する。建物は、桁行3間×梁行2間の南北棟である。建物自体はやや西に傾き、方位はN—6°30′—Wである。規模は、桁行の西側列総長5.53m、柱間寸法は北からa1—a2間1.96m、a2—a3間1.64m、a3—a4間1.93mである。東側列総長は5.52m、柱間寸法は、北からc1—c2間1.8m、c2—c3間1.8m、c3—c4間1.92mである。梁行の北側列総長3.6m、柱間寸法は西からa1—b1間1.8m、b1—c1間1.8mある。南側列総長は3.6m、柱間寸法は、西からa4—b4間1.8m、b4—c4間1.8mである。桁行、梁行の柱間は、対面する柱間は等しいが、列ごとの間は不揃いである。柱筋はよく通っている。柱穴掘形もしっかりしており整っている。柱穴は円形状を主体としている。規模は径60～95cm前後、深さ37～75cmを測る。掘形覆土は暗褐色土、黒褐色土、ローム土を交互に積み重ねている。柱痕部分の覆土には、粘土、焼土が含まれている。遺物については出土しなかった。

519号A・B掘立柱建物跡（第514図、写真図版86・87）

北西側尾根状台地先端に近い位置で谷を見下ろす南東斜面部の上位部分FQ—86、87、88、96、97、98、GQ—07、08区に所在する。桁行3間×梁行2間の南北棟の建物で、位置をずらして2棟重なっている。状況から判断して、北西側に位置する柱穴掘形の大きい方が当初で、その後南東方向に90cm程ずらして建替えたと考えている。

当初の建物は、北西部分の519号Aで、建物自体は西に傾き、方位はN—7°00′—Wである。規模は、桁行の西側列総長4.78m、柱間寸法は北からa1—a2間1.63m、a2—a3間1.5m、a3—a4間1.65mである。東側列総長は推定で4.8mである。この列の柱穴は不明瞭である。梁行の北側列総長3.6m、柱間寸法は西からa1—b1間1.8m、b1—c1間1.8mである。南側列総長は推定3.6mで、b4柱穴が見あたらない。残存している桁行、梁行の柱間は、ほぼ均等である。柱筋は西側桁行部分がよく通っているが、東側部分はc2柱穴が並ばず、不良である。柱穴の形状は、四隅部分が比較的大きい方形状となり、その間に入る柱穴は小規模な円形状を呈している。規模は、方形状部分で一辺80～90cm、深さ70cm、円形状部分で径40～50cm前後、深さは浅く25cm程度である。掘形覆土は黒褐色土を主体としてローム土を含んでいる。遺物の出土はなかった。

519号B建物は、A建物から南へ80cm、東へ40cm程ずらした形で建てられている。建物自体はA建物とほぼ同じ傾きで、方位はN—7°00′—Wである。規模は、桁行の西側列総長4.8m、柱間寸法は北からa1—a2間1.8m、a2—a3間1.2m、a3—a4間1.8mである。東側列総長は推定4.75m、柱間寸法は、柱筋が通らないため不明である。梁行の北側列総長3.28m、柱間寸法は西からa1—b1間1.63m、b1—c1間1.65mある。南側列総長は3.29

m、柱間寸法は、西から a 4—b 4間1.8m、b 4—c 4間1.49mである。桁行、梁行の柱間は、対面する柱間はほぼ均等であるが、柱列同士では不均衡である。柱筋は、西側桁行部分がよく通っているが、東側部分は c 2、c 3柱穴が外側に出る形で並ばず、不良である。柱穴の形状は、方形状を主体としているが、不整形な楕円形状、円形状部分も見受けられる。規模は方形状部分で一辺70～100cm、深さ70cm、円形状部分で径50～70cm前後、深さは浅く25cm程度である。掘形覆土は暗褐色土、黒褐色土を主体としてローム土を含んでいる。遺物は出土しなかった。

520号 A・B 掘立柱建物跡（第514図、写真図版85・86・87）

北西側尾根状台地先端に近い位置で谷を見下ろす南東斜面部の上位部分 G Q—17、18、27、28、37、38区に所在する。地形的には斜面部にかかっている。建物は、桁行3間×梁行2間の南北棟で、位置をそのままにして2棟重なっている。状況から建替えと考えられる。

当初の建物は、北西部分の520号 A で、建物自体はやや西に傾いているが、柱痕部分が建替えによってすべて壊されているため、方位・規模は不明である。推定で桁行5.1m、梁行3.9m前後と考えられる。桁行、梁行の柱間は、柱掘形部分を見る限り、対面する柱穴部分はほぼ均等と思われる。列ごとの部分では、a 1—a 2間、c 1—c 2間が広いほかは、均等間隔と考えられる。柱筋の通りは柱痕が壊されているため、不明である。柱穴は方形状で、規模は90～120cm、深さ35～73cmである。掘形覆土は、褐色土を主体としてロームブロックを多く含んでいる。遺物は出土しなかった。

520号 B 建物は、A 建物の柱穴のなかにほとんど収まっているものの、やや西にずらして建てられている。建物自体は A 建物とほぼ同じ傾きで、方位は N—10°10′—W である。規模は、桁行の西側列総長5.24m、柱間寸法は北から a 1—a 2間1.65m、a 2—a 3間1.65m、a 3—a 4間は推定1.94mである。東側列総長は5.25m、柱間寸法は、北から c 1—c 2間1.8m、c 2—c 3間1.62m、c 3—c 4間1.83mである。梁行の北側列総長3.88m、柱間寸法は西から a 1—b 1間1.94m、b 1—c 1間1.94mである。南側列総長は推定3.86m、柱間寸法は、西から推定 a 4—b 4間1.94m、b 4—c 4間1.92mである。桁行、梁行の柱間は、対面する柱間はほぼ均等であるが、柱列同士では不均衡である。柱筋は各辺ともよく通っている。柱穴の形状は、方形状を主体としているが、不整形な楕円形状、円形状部分も見受けられる。規模は方形状部分で一辺50～85cm、深さ35～70cm、円形状部分で径30cm前後、深さは30cm程度である。確認面からの深さが浅いのは、この建物が斜面部に作られているためで、当時の地表を考慮すれば深かったのかもしれない。掘形覆土は、暗褐色土を主体としてロームブロック、粘土粒を含んだ汚れた土を含んでいる。遺物の出土はなかった。

521号掘立柱建物跡（第515図、写真図版86・87）

北西側尾根状台地先端に近い位置で谷を見下ろす南東斜面部分の G Q—47、48、57、58、59、67、68区に所在する。建物は、桁行3間×梁行2間の南北棟である。柱穴 a 1、a 2、a 3、b 1、c 1、c 2部分に2間×2間の規模の小さい527号掘立柱建物跡が重複している。切り合い関係から521号掘立柱建物跡が先行する。建物自体は西に傾き、方位は N—11°10′—W である。柱痕が明瞭でないため、建物の規模は不明瞭だが、桁行の西側列総長4.8m、柱間寸法は北から推定で a 1—a 2間1.55m、a 2—a 3間1.7m、a 3—a 4間1.55mである。東側列総長は4.8m、柱間寸法は、北から推定で c 1—c 2間1.5m、c 2—c 3間1.65m、c 3—c 4間1.65mである。梁行の北側列総長3.45m、南側列総長は3.45m、柱間寸法はいずれも不明である。柱筋についても不明瞭で推定の域を出ない。柱穴の形状は、不整形な楕円形状が主体的である。規模は70～110cm、深さ25～70cm程度である。確認面からの深さが浅いのは、この建物が斜面部に造られているためであろう。掘形覆土は、暗褐色土を主体として多量のロームブロック、粘土粒、焼土粒などを含んだ汚れた土を含んでいる。遺物の出土はなかった。

522号掘立柱建物跡（第515図、写真図版87・88）

北西側尾根状台地先端に近い位置で、谷を見下ろす南東斜面部分G Q—68、69、78、79、88、89区に所在する。建物は、桁行3間×梁行2間の南北棟である。建物の南西側には211号住居跡が一部重複している。新旧関係は、a 3柱穴が211号住居跡のカマド部分を壊して柱穴掘形としている。建物自体は西に傾き、方位はN—11°20′—Wである。柱痕が明瞭でないため、建物の規模は不明瞭だが、桁行の西側列総長4.8m、柱間寸法は、推定でa 1—a 2間1.5m、a 2—a 3間1.5m、a 3—a 4間1.8mと考えられる。東側列総長は4.8m、柱間寸法は、推定でc 1—c 2間1.5m、c 2—c 3間1.5m、c 3—c 4間1.8mと考えられる。梁行の北側列総長3.12m、柱間寸法は西から推定でa 1—b 1間1.56m、b 1—c 1間1.56mある。南側列総長は3.1m、柱間寸法は対応する柱穴が柱筋にのってこないため不明である。柱筋についても不明瞭で推定の域を出ない。柱穴の形状は、方形が主体的で、不整形な楕円形状も見受けられる。b 4柱穴は不明である。規模は方形状部分で長軸110～140cm、深さ38～97cm程度である。c 3、c 4柱穴の確認面からの深さが浅いのは、この建物が斜面部に作られているためで、当時の地表を考慮すれば深かったのかもしれない。掘形覆土は、すべての柱穴にわたって、ロームブロックを主体として、暗褐色土、黒褐色土を含んでいる。他の掘立柱建物とはかなり趣を異にした覆土である。柱痕部分は暗褐色土にローム粒を含んだものである。遺物については出土しなかった。

523号掘立柱建物跡（第516図、写真図版88）

北西側尾根状台地の先端部分F Q—89、90、99、100、F R—91区に位置する。尾根の先端部分に近いことから、建物は南西から北東方向に緩やかに下がる部分に作られている。建物は桁行3間×梁行2間の東西棟である。建物自体は西に傾き、方位はN—11°30′—Wである。建物の大半は、229号弥生時代住居跡と重複している。規模は、桁行の北側列総長4.92m、柱間寸法は西からa 1—a 2間1.5m、a 2—a 3間1.5m、a 3—a 4間1.92mである。南側列総長は4.93m、柱間寸法は、西からc 1—c 2間1.65m、c 2—c 3間1.65m、c 3—c 4間1.63mである。梁行の西側列総長3.42m、柱間寸法は北から推定でa 1—b 1間1.7m、b 1—c 1間1.72mある。東側列総長は3.42m、柱間寸法は、北から推定でa 4—b 4間1.7m、b 4—c 4間1.72mである。柱の通りはやや不良である。柱穴は隅丸方形状である。規模は長軸100～110cm、短軸90～100cm、深さ55～70cmを測る。掘形覆土は暗褐色土を主体とし、ロームブロック、粘土粒を含んでいる。また柱痕部分覆土には若干粘土、焼土を含む。遺物の出土については、直接的なものは見あたらないが、229号住居跡の覆土中から、混入品として出土した須恵器杯(1)、須恵器長頸壺の脚部(2)、胴部片(3)が、この建物の時期を考える上での資料になるのかもしれない。

524号掘立柱建物跡（第517図、写真図版89）

北西側尾根状台地の中央部分G P—79、80、89、90、99区に位置する。建物は、桁行2間×梁行2間の東西棟と考えられる。建物自体は他の建物に比して大きく西に傾き、方位はN—28°30′—Wである。規模は、桁行の北側列総長3.55m、柱間寸法は西からa 1—a 2間1.72m、a 2—a 3間1.83mである。南側列総長は3.58m、柱間寸法は、西からc 1—c 2間2.06m、c 2—c 3間1.52mである。また梁行の西側列総長は3.56m、柱間寸法は北からa 1—b 1間1.78m、b 1—c 1間1.78mである。東側列総長は3.58m、柱間寸法は、北からa 3—b 3間1.8m、b 3—c 3間1.78mである。桁行、梁行の柱間は、ほぼ均等で、柱の通りについては、桁行部分は良好であるが、梁行部分はb 1、b 3とも東側にずれて全体的に通らない。また柱穴のb 1とb 3との間に径30cm程度の束柱を埋め込む小柱穴が2基認められる。柱穴は円形状を主体としているがc 2柱穴は長楕円形状である。規模は径70～80cm、深さ55～80cm程度、また楕円形状部分は長軸120cm、短軸80cm、深さ50cmを測る。柱痕はa 1、a 2、a 3、c 2柱穴から検出されている。掘形覆土は、黒褐色土を主体にしてローム土を含んでいる。遺物は出土しなかった。

525号掘立柱建物跡（第517図、写真図版89）

北西側尾根状台地の先端部分 F R—73、74、75、83、84、85、94区に位置する。尾根の先端部分であることから、建物は、南西から北東方向に緩やかに下がる部分に作られている。建物群の中では、最も東に位置している。建物は桁行3間×梁行2間の南北棟の総柱である。建物自体はやや西に傾き、方位はN—11°30′—Wである。規模は、桁行の西側列総長5.7m、柱間寸法は北からa 1—a 2間1.9m、a 2—a 3間1.8m、a 3—a 4間1.9mである。中間列総長は5.68m、柱間寸法は、北からb 1—b 2間1.9m、b 2—b 3間1.8m、b 3—b 4間1.98mである。東側列総長は5.6m、柱間寸法は、北からc 1—c 2間1.85m、c 2—c 3間1.8m、c 3—c 4間1.95mである。梁行の北側列総長3.95m、柱間寸法は西からa 1—b 1間1.95m、b 1—c 1間2mである。南側列総長は3.92m、柱間寸法は、西からa 4—b 4間1.98m、b 4—c 4間1.94mである。柱筋は、南側梁行部分に通っていない他は良好である。柱穴はやや不整円形状を主体としている。規模は径55～90cm前後、深さ68～100cmを測る。掘形の規模からすると比較的深い。掘形覆土は、暗褐色土を主体にしてローム粒を若干含む。遺物については出土しなかった。

526号掘立柱建物跡（第509図、写真図版83）

北西側尾根状台地の基部東側斜面部の I O—27、28、37、38区に位置する。建物の西側桁行部分は、145号奈良時代住居跡が、南東側部分には507号掘立柱建物跡がかかっている。507号掘立柱建物跡との関係は、切り合う部分がないため不明である。構造は、桁行3間×梁行2間の南北棟である。建物自体はわずかに西に傾き、方位はN—4°40′—Wである。規模は、桁行の西側列総長4.8m、柱間寸法はa 2柱穴が不明のため明らかにできないが、a 3—a 4間は1.5mである。東側列総長は4.8m、柱間寸法は、やはりc 2柱穴が不明であるためc 3—c 4間1.5mのみである。梁行の北側列総長3.6m、柱間寸法は西からa 1—b 1間1.8m、b 1—c 1間1.8mである。南側列総長は3.6m、柱間寸法は、西からa 4—b 4間1.8m、b 4—c 4間1.8mである。柱筋は、ほぼ通っている。柱穴は、円形状の掘形を主体としている。規模はやや小さく径50cm前後、深さは30～55cm前後を測る。掘形覆土は暗褐色土を主体としてローム土、粘土、焼土を含んだ土層である。このことから、145号奈良時代住居跡との新旧は、掘立柱建物が床を壊して作られたと考えられる。遺物は出土しなかった。

527号掘立柱建物跡（第515図、写真図版87）

北西側尾根状台地先端に近い位置で谷を見下ろす南東斜面部分の G Q—47、48、57、58区に所在する。建物は、521号掘立柱建物跡の北側半分の柱穴を壊して作られている。構造は、桁行2間×梁行2間の南北棟である。建物自体は西に傾き、方位はN—8°00′—Wである。521号掘立柱建物跡との方位からは、やや東に戻している。建物の規模は、桁行の西側列総長2.85m、柱間寸法は北からa 1—a 2間1.5m、a 2—a 3間1.35mである。東側列総長は2.55m、柱間寸法は、北からc 1—c 2間1.3m、c 2—c 3間1.25mである。梁行の北側列総長2.55m、柱間寸法は西からa 1—b 1間1.2m、b 1—c 1間1.35mである。南側列総長は2.7m、柱間寸法は、西からa 3—b 3間1.2m、b 3—c 3間1.5mである。柱筋は東側、西側の桁行はよく通っているが、南側、北側の梁行きはb 1、b 3柱穴が内側に入り込んでいるため、不良である。柱穴の形状は、円形状が主体的で、不整形な楕円形状も見受けられる。規模は、円形状部分で径50～80cm、深さ38～70cm、楕円形状部分で長軸80cm、短軸60cm前後、深さは60cm程度である。掘形覆土は、暗褐色土を主体としている。遺物は出土しなかった。

528号柱列（第103・509図）

北西側尾根状台地の基部東側斜面部の I O—56、57、58、59区に位置する。東西方向に延びる4間の柱列である。この柱列の2.1m北方向に507号掘立柱建物跡が所在する。方位はW—6°30′—S（北方向に換算するとN—6°30′—W）である。柱列の総長は10.2m、柱間寸法は東から1.95m、2.1m、2.1m、4.05mであり、東側の3間はほぼ等間隔

であるが、西側1間分が2倍弱長い。あるいは未検出の柱穴があった可能性も考えられる。柱穴掘形は円形で、径50～60cm程度の大きさである。深さは計測値がないため不明である。

529号柱列（第104図）

北西側尾根状台地の先端部分F R—81、82、83区に位置する。東西方向に延びる2間の柱列である。この柱列の3m西方向に523号掘立柱建物が、2.1m東方向に525号掘立柱建物がそれぞれ所在する。方位はW—11°30′—S（北方向に換算するとN—11°30′—W）である。柱列の総長は3.6m、柱間寸法は1.8m等間隔と推定する。柱穴掘形は不整円形で、径65～80cm程度の大きさである。深さは計測値がないため不明である。

530号柱列（第103図）

北西側尾根状台地の基部東側斜面部のI O—44、45、54、55区に位置する。南北方向に延びる1間分の柱列である。この柱列の北に接して531号逆L字形の溝が所在する。方位はN—10°20′—Wである。柱間寸法は4.5mと推定している。柱穴掘形は不整円形で、径60～70cm程度の大きさである。深さは計測値がないため不明である。なお、南部分の柱穴に並んで同様の規模を持つ柱穴が認められる。柱列の建替えの可能性も考えられる。

531号溝状遺構（第103図）

北西側尾根状台地の基部のH O—56、57、64、65、66、73、83、93、94、I O—04、14、24、34、44、45区に位置する。南北方向および東西方向の逆L字形の溝状遺構である。南北方向の溝は、幅0.7～1.2m、長さ24mを測る。深さは、計測値が記載されていないため不明である。方位は西に傾き、N—10°20′—Wである。東西方向の溝は、南北方向の溝の北部分から90°東へ曲がる。規模は、幅0.7m、長さは現存部分で14.7mを測る。方位はW—10°20′—Sである。この溝状遺構は、507号～512号・526号掘立柱建物跡を囲むように掘られている。

532号溝状遺構（第102図）

北西側尾根状台地の基部のI M—78、88、98、99、J M—09、19、29、39およびJ M—89、99、K M—09区の2ヵ所に所在する南北方向の溝状遺構である。それぞれの溝は延長すると一直線上に通ることから同一の遺構と取り扱った。北側の長い溝は幅0.5～0.6m、長さ25.2mを測る。南側の短い溝は北溝と9mの間隔をおいている。幅は0.56m、長さは6mである。両溝を通した長さは40.9mとなる。深さは、計測値が記載されていないため不明である。方位はわずかに西に傾き、N—4°30′—Wである。

533号溝状遺構（第102図）

南側台地のJ O—23、33、42、52、61、62、71、81区の2ヵ所に所在する南北方向の溝状遺構である。それぞれの溝は延長すると一直線上に通ることから同一の遺構と取り扱った。南側の溝は幅0.9～1.1m、長さ13.9mを測る。北側の短い溝は南溝と0.9mの間隔をおいている。幅は0.9～1m、長さは6mで、北端付近が東方向に曲がっている。両溝を通した長さは21.4mとなる。深さは、計測値が記載されていないため不明である。方位は東方向に傾き、N—16°00′—Eである。

534号溝状遺構（第10図）

南側台地の基部K P—36、37、46、47区に位置する。南北方向の溝状遺構である。溝は、幅0.9～1m、長さ9.2mを測る。深さは、計測値が記載されていないため不明である。方位はN—13°00′—Eとなる。

373号鍛冶遺構（第483・484図、写真図版78・179）

北東側尾根状台地の基部H P—83、84、85、93、94区に位置する。北東方向から谷が入り込んでおり、ちょうど谷の最奥部の南東斜面に作られている。遺構は北西を向き、主軸方位はN—26°40′—Wである。住居跡に通有のカマドはなく、また中央に粘土で被覆した炉、鉄滓、フイゴの羽口、焼土ブロックなどが認められることから鍛

冶遺構と判断した。形状は、北東—南西に長い横長の平行四辺形状で北西—南東軸3.2m、北東—南西軸4.5mを測る。遺構の角は直角に近いが、北東、南西部分がやや鋭角、北西、南東部分がやや角度が開いている。壁は、北西から南東に下がる南東斜面に作られているため、浅く部分的に痕跡程度である。壁高は北壁で11cm、西壁で10cm、南壁で0cm、東壁で6cmを測る。面積は確認面で14.4㎡、床面で12.8㎡となる。床は、ハードローム面を直接床面としている。周溝は、認められない。主柱穴は、床面には持たずに壁部分に見られる。北西、南西、北東側の壁部分に径30～35cmのほぼ円形状のピット列(左列から南へa1、a2、a3、中列b1、右列c1、c2、c3)が見られる。主柱穴は、2間×2間で、南側部分は中間に柱がなく、オープンとなっている。柱穴の深さはa1が15cm、a2が46cm、a3が15cm、b1が44cm、c1が22cm、c2が64cm、c3が34cmである。柱間の長さはa1—a2が1.4m、a2—a3が1.5m、a1—b1が1.9m、b1—c1が2.3m、c1—c2が1.5m、c2—c3が1.35m、a3—c3が4.05mとなる。

遺構の中央よりやや北西部分の床面に130×100cm、厚さ25cmの台形状の粘土塊があり、その中央部分に径20cm程度の丸い炉(A)が見られる。その南西側には径50cmの楕円形の掘り込みが2基並列しており、内部はよく焼けていた。南東部分にはピットが複雑に重複している。北東および東側の床面には粘土、焼土混じりの炭化物が面的に広がっている。

遺物については、西側隅のa1柱穴内からフィゴの羽口(7)、覆土中からは体部外面を手持ちヘラケズリで整形する土師器杯(1・2)、底部を回転ヘラケズリで整形する須恵器杯(3)、フィゴの羽口(4～6)が出土している。なお、覆土からは鍛冶に際しての鍛造剥片、粒状滓が多量に出土している。

499号鍛冶遺構 (第501図、写真図版79・179)

南側台地の国分尼寺跡北辺部溝に隣接したKM—18、19、28、29、38、39区に位置する。遺構は北東を向き、主軸方位はN—14°40′—Eである。住居に通有のカマドはなく、また中央に粘土で被覆した炉、鉄滓、フィゴの羽口、焼土ブロックなどが認められることから鍛冶遺構と判断した。形状は、東西方向に長い2間×2間の掘立柱建物構造で、建物内に東西3.5m、南北2.7m程度の大きさで不整形に掘り込んで床面としている。掘り込み部分は北西部が丸く、北東・南東部分が角張る。壁の掘り込みは浅く、5～10cm程度である。面積は、掘立柱建物部分で16.8㎡、掘り込みの床面で8.4㎡となる。床はソフトローム面を直接床面としている。周溝は、認められない。掘立柱部分は、西側の梁部分の長さが3.6m、東側部分が4.4mとなり不整形である。柱穴は径30～40cm程度の円形状で、それぞれの深さはa1で40cm、a2で50cm、a3で60cm、b1で35cm、b3で60cm、c1で40cm、c2で30cm、c3で30cmである。柱間はa1—a2で1.6m、a2—a3で2.0m、c1—c2で2.2m、c2—c3で2.2m、a1—b1で2.2m、b1—c1で1.9m、a3—b3で1.95m、b3—c3で2.1mとなる。

遺構の中央部分の床面に50×60cm、厚さ15cmの台形状の粘土塊があり、その中央部分に径30cm程度の丸い炉が見られる。全体によく焼けている。その東側には径50×30cmの楕円形状の粘土塊、その南東部分に砂岩製の石塊などが残っていた。床面には焼土、粘土粒、焼土混じりの炭化物などが多く見られる。

遺物については、床面からフィゴの羽口(1～4)、鉄滓、土師器片などが出土している。土師器については小破片で、時期を検討できるものはない。なお、覆土からは鍛冶に際しての鍛造剥片、粒状滓が多量に出土している。

第4節 住居内および土坑内出土の貝の概要

(1) 貝の分布状況

坊作遺跡で出土した貝は、70ヵ所の遺構から検出され、総重量(洗い後の純粋な貝重量)286.234kgを量る。このうち、分析できるものとして選別し、数量を計測できた貝類は、点数50,191個体、総重量126.967kgである。

出土した貝の属する遺構の内訳は、住居内から検出された貝層が4号、68号、109号、204号、212号、228号、234号住居跡の7ヵ所、また陥穴から検出された貝層が366号、394号陥穴の2ヵ所で、これ以外はピット状の土坑で、最大で直径90cm前後、平均で50cm前後の小規模なものからの出土がほとんどである。これらの遺構は、北西側尾根の谷に面した斜面部分および尾根の基部台地部分に広がって分布している。分布の状況は、散漫的な広がりではなく、おおよそ7区のプロックにまとめることができる。ここでは、南東側から便宜的にA～G群という名称を付け、プロックごとに概略することとする。

A群 (第53・55・56・57図、写真図版90)

やや南東側尾根に近い台地上のK P・K Q区に分布する。該当する遺構は、310～320号貝ブロック土坑、392号貝ブロック土坑の12基である。このうち311号～312号、314号～317号貝ブロック土坑は東西方向に弧状に並んで分布している(第53図)。このほかは、やや散漫な広がりである。なお、392号貝ブロック土坑内からは、土師器台付甕(第53図392-1、写真図版140)、316号、317号貝ブロック土坑から土師器片等が出土している。

A群全体の貝の総重量(洗い後の純粋な貝重量)は64.82kgで、このうちカウントできた点数は7,843個体、重量28.877kgである。種類別に見ると、シオフキが圧倒的に多く、全体の約3/5にあたる58.96%を占め、続いてハマグリの22.15%、アサリ7.94%、マテガイ4.49%、イボキサゴ3.95%の割合である。

B群 (第55・57・58図、写真図版90)

国分尼寺跡外郭溝付近のK P区に分布する。該当する遺構は、321号～325号貝ブロック土坑の5基および68号住居内の貝層である。住居内から検出した貝層は、床面から25cm程浮いた状態で出土していることから、この住居の廃絶後に投棄されたものと考えている。なお、322号、325号貝ブロック土坑からは、土師器片が出土している。

B群全体の貝の総重量は27.72kgで、このうちカウントできた点数は5,934個体、重量14.24kgである。種類別に見ると、イボキサゴが半数の49.34%を占め、続いてウミニナの19.4%、ハマグリ10.5%、シオフキ10.16%、マテガイ6.45%の割合である。

C群 (第55・58・59図、写真図版90・91)

両尾根にはさまれた谷頭部分、J O・J P区の緩斜面に位置する。該当する遺構は327号～332号貝ブロック土坑・395号貝ブロック土坑の7基および109号住居内の貝層である。住居内から検出した貝層は、床面から12cm程浮いた状態で出土していることから、68号住居同様に、この住居の廃絶後に投棄されたものと考えている。

C群全体の貝の総重量は15.585kgで、このうちカウントできた点数は3,734個体、重量7.725kgである。種類別に見ると、イボキサゴが全体の約3/5にあたる61.3%を占め、続いてハマグリの15.96%、シオフキ9.59%、マテガイ6.59%、アサリ2.81%の割合である。

D群 (第53・55・59・60図、写真図版91・140)

両尾根にはさまれた台地部分、J O区に位置する。該当する遺構は326号、333号～336号、338号～346号貝ブロック土坑の14基である。このうち、326号、333号、334号貝ブロック土坑を除いた11基の土坑は、6×7m前後の範囲内に密集した形で分布している(第53図)。338号貝ブロック土坑からは、非ロクロ土師器杯、345号貝ブロック

土坑からは須恵器甕の口縁部がそれぞれ出土している(第53図338-1、345-1、写真図版140)。また、339号、341号、346号貝ブロック土坑からも土師器片等が出土している。

D群全体の貝の総重量は34.29kgで、このうちカウントできた点数は5,142個体、重量13.386kgである。種類別に見ると、ハマグリが全体の約1/3にあたる31.74%を占め、続いてシオフキの29.31%、イボキサゴの26.82%、ウミナナの3.89%、アサリ2.86%の割合である。

E群(第53・55・61図、写真図版91)

北西側尾根の基部付近、J O区に位置する。該当する遺構は、347号～352号貝ブロック土坑の6基である。このうち、348号～352号貝ブロック土坑については東西方向に列状に並んだ状況である(第53図)。351号貝ブロック土坑からは、丸瓦(第53図)が出土している。また、347号、348号貝ブロック土坑からは土師器片が出土している。

E群全体の貝の総重量は35.705kgで、このうちカウントできた点数は6,354個体、重量14.403kgである。種類別に見ると、マテガイが全体の約2/5にあたる38.46%を占め、続いてイボキサゴの29.21%、ハマグリ15.34%、シオフキ13.25%である。

F群(第53・55・61・62・63図、写真図版91)

北西側尾根の基部付近、I M・I N区に位置する。該当する遺構は、353号～362・364号貝ブロック土坑の11基である。11基とも北西から南東方向に向かって帯状に分布している(第53図)。353号貝ブロック土坑からは平瓦片(第53図)、355号、360号、364号貝ブロック土坑からは、時期不明の土器小片等が出土している。

F群全体の貝の総重量は23.9kgで、このうちカウントできた点数は3,060個体、重量10.84kgである。種類別に見ると、ハマグリが全体の約2/5にあたる42.25%を占め、続いてシオフキの27.84%、イボキサゴの12.78%、マテガイ9.61%、アサリ3.46%の割合である。

G群(第55・63図)

北西側尾根の谷に面した斜面部分、H P・H Q・G Q区に位置する。該当する遺構は、367号、370号、371号貝ブロック土坑および228号住居内貝層である。なお、209号住居からは床面より20cm程高い位置で、また210号住居にも貝が出土していることが図面に記されている。遺物がないため、どのような種類の貝であったか不明である。

G群全体の貝の総重量は11.164kgで、このうちカウントできた点数は2,914個体、重量6.496kgである。種類別に見ると、イボキサゴが全体の約7/10にあたる69.66%を占め、続いてハマグリ12.53%、シオフキ12.32%、アサリ3.4%、アラムシロ0.82%の順である。

弥生時代住居内貝層(第54・63図)

北西側尾根上に位置している。該当する住居は、東から212号、204号、やや西に離れて234号住居の3軒である。212号住居の貝については、床面からの出土で、あとの2軒については覆土中からの出土である。時期については、出土土器から弥生時代後期にあたる。

弥生時代住居内から出土した貝の総重量は13.25kgで、このうちカウントできた点数は6,447個体、重量8.403kgである。種類別に見ると、イボキサゴが全体の約4/5にあたる80.86%を占め、続いてハマグリ5.72%、マガキ4.76%、マテガイ4.13%、ウミナナ2.82%の順である。シオフキに至ってはわずか1.21%を占めているにすぎない。

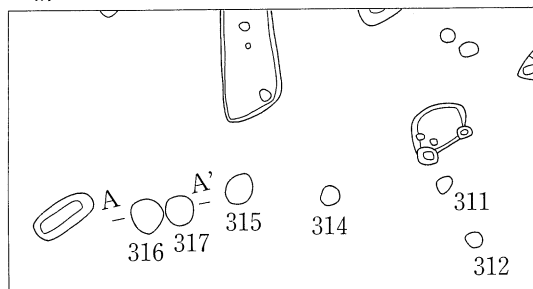
(2) 貝層サンプルの分析

① 貝層の時期および検出状況と量について

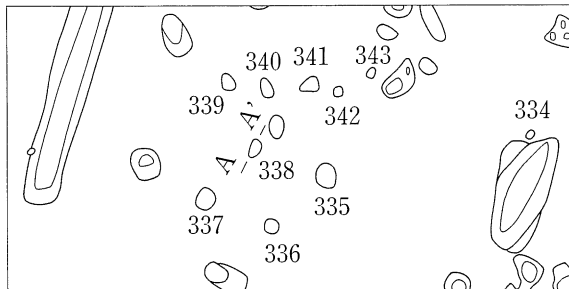


第52図 貝の分布状況

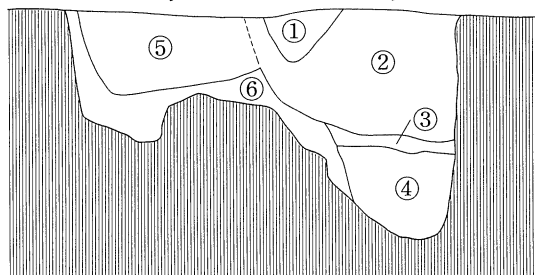
A群



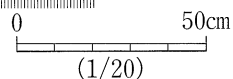
D群



A 316号 317号 (1/200) — A'

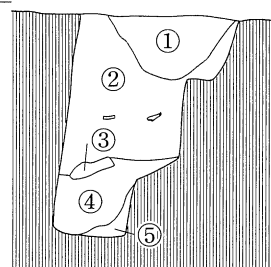


316号・317号貝ピットセクション図



- ①暗褐色土
- ②貝ブロック(317号)
- ③暗褐色土+ロームを多量に含む
- ④貝ブロック(317号)
- ⑤貝ブロック(316号)
- ⑥暗褐色土+ロームを多量に含む

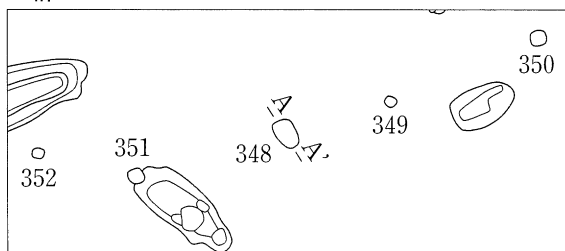
A A'



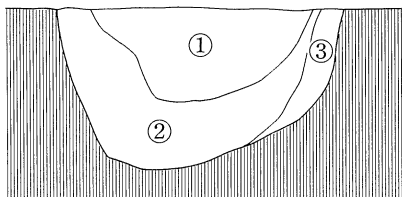
338号貝ピットセクション図

- ①貝ブロック
- ②暗褐色土
- ③ローム土
- ④暗褐色土(ローム含む)
- ⑤ローム土

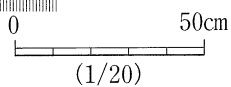
E群



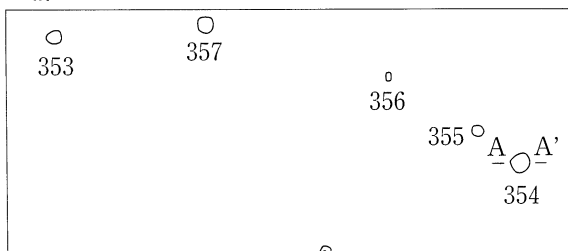
A A' (1/200)



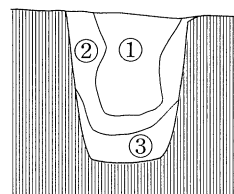
348号貝ピットセクション図



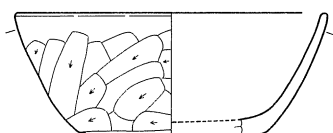
F群



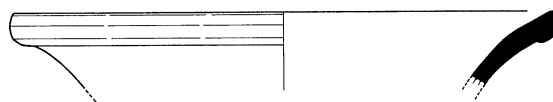
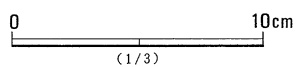
A A'



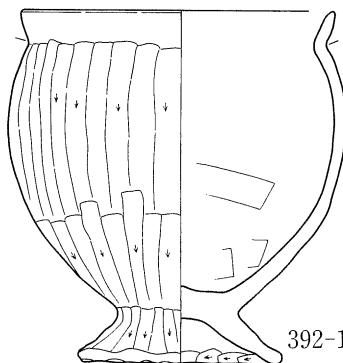
354号貝ピットセクション図



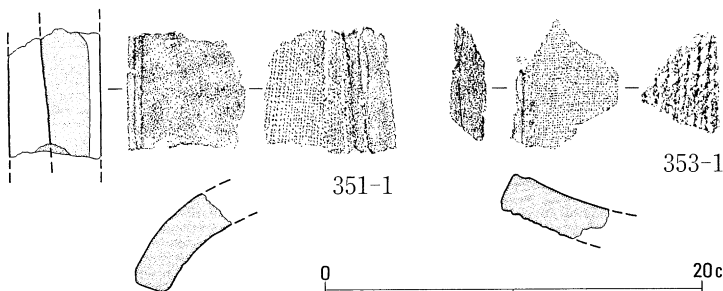
338-1



345-1

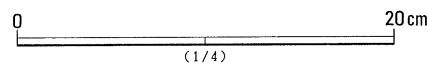


392-1



351-1

353-1



第53図 貝ブロック土坑出土遺物

第3表 貝類基礎データ集計表

NO.	群別	遺構番号	時代	グリッド番号	総乾燥重量 (洗い前)g	総乾燥重量 (洗い後)g	残屑貝殻 g	混土率 (%)	貝殻 破砕率(%)
A群貝ブロック									
1	A	310号貝ブロック		KQ04	1,370	1,170	340	14.6	29.1
2	A	311号貝ブロック		KQ23	920	580	160	37.0	27.6
3	A	312号貝ブロック		KQ23・33	3,950	3,040	690	23.0	22.7
4	A	313号貝ブロック		KQ25	470	350	130	25.5	37.1
5	A	314号貝ブロック		KQ22	10,280	8,420	1,350	18.1	16.0
6	A	315号貝ブロック		KQ21	920	560	100	39.1	17.9
7	A	316号貝ブロック		KP30	22,750	18,220	3,680	19.9	20.2
8	A	317号貝ブロック		KQ21	37,680	29,460	4,220	21.8	14.3
9	A	318号貝ブロック		KP50	200	60	18	70.0	30.0
10	A	319号貝ブロック		KQ52	320	320	198	0.0	61.9
11	A	320号貝ブロック		JP90	1,250	1,010	285	19.2	28.2
12	A	392号貝ブロック	奈良	KP09	2,250	1,630	500	27.6	30.7
B群貝ブロック									
1	B	68号住居跡	奈良・平安	KP66・67・76・77	660	560	127	15.2	22.7
2	B	321号貝ブロック		KP75・76	9,250	8,320	1,200	10.1	14.4
3	B	322号貝ブロック		KP85	10,750	9,810	1,760	8.7	17.9
4	B	323号貝ブロック		KP85	170	140	70	17.6	50.0
5	B	324号貝ブロック		KP54	140	130	45	7.1	34.6
6	B	325号貝ブロック		KP54	9,200	8,760	1,350	4.8	15.4
C群貝ブロック									
1	C	109号住居跡	平安	JP11・12	930	690	190	25.8	27.5
2	C	327号貝ブロック		JP25・26・35・36	10,530	9,280	2,600	11.9	28.0
3	C	328号貝ブロック		JP25	5,220	4,495	340	13.9	7.6
4	C	329号貝ブロック		JP24	280	120	40.9	57.1	34.1
5	C	330号貝ブロック		JO10	300	260	70	13.3	26.9
6	C	331号貝ブロック		JO39	470	350	40	25.5	11.4
7	C	332号貝ブロック		JO49	490	360	40	26.5	11.1
8	C	395号貝ブロック		JO58	440	30	21.6	93.2	72.0
D群貝ブロック									
1	D	326号貝ブロック		KO10	3,510	3,340	480	4.8	14.4
2	D	333号貝ブロック		JO77	400	390	90	2.5	23.1
3	D	334号貝ブロック		JO75	1,070	900	112.8	15.9	12.5
4	D	335号貝ブロック		JO84	7,620	6,580	2,795	13.6	42.5
5	D	336号貝ブロック		JO83	4,020	3,250	950	19.2	29.2
6	D	338号貝ブロック	奈良	JO73	3,500	2,720	1,173	22.3	43.1
7	D	339号貝ブロック		JO73	6,030	5,030	1,565	16.6	31.1
8	D	340号貝ブロック		JO73	760	460	191.5	39.5	41.6
9	D	341号貝ブロック		JO73	790	300	127.4	62.0	42.5
10	D	342号貝ブロック		JO74	3,260	2,650	910	18.7	34.3
11	D	343号貝ブロック		JO74	700	580	259.1	17.1	44.7
12	D	344号貝ブロック		JO63	110	110	0	0.0	0.0
13	D	345号貝ブロック	奈良	JO63	3,880	2,990	1,210.5	22.9	40.5
14	D	346号貝ブロック		JO52	5,540	4,990	1,180	9.9	23.6
E群貝ブロック									
1	E	347号貝ブロック		JO33	1,560	1,060	374	32.1	35.3
2	E	348号貝ブロック		JO04	35,760	30,685	8,976	14.2	29.3
3	E	349号貝ブロック		JO05・06	390	300	64.7	23.1	21.6
4	E	350号貝ブロック		IO96	2,410	2,250	119.3	6.6	5.3
5	E	351号貝ブロック	奈良・平安	JO02・12	280	230	31	17.9	13.5
6	E	352号貝ブロック		JO02	1,300	1,180	337	9.2	28.6
F群貝ブロック									
1	F	353号貝ブロック	奈良・平安	IN98	3,970	3,800	450	4.3	11.8
2	F	354号貝ブロック		IN85	4,170	4,040	304.5	3.1	7.5
3	F	355号貝ブロック		IN84	7,950	7,120	1,310	10.4	18.4
4	F	356号貝ブロック		IN84	490	360	96.8	26.5	26.9
5	F	357号貝ブロック		IN72	3,270	2,340	670	28.4	28.6
6	F	358号貝ブロック		IM79・80	1,580	1,390	204	12.0	14.7
7	F	359号貝ブロック		IM69	2,300	1,750	450	23.9	25.7
8	F	360号貝ブロック		IM39	410	190	56.5	53.7	29.7
9	F	361号貝ブロック		IM27・28	470	380	54	19.1	14.2
10	F	362号貝ブロック		IM56	730	360	130.1	50.7	36.1
11	F	364号貝ブロック		IN51	3,060	2,170	750	29.1	34.6
G群貝ブロック									
1	G	228号住居跡	奈良・平安	GR43・44・53・54	1,200	832	64	30.7	7.7
2	G	367号貝ブロック		HQ13	2,770	2,630	518	5.1	19.7
3	G	370号貝ブロック		HQ04	3,895	3,070	660	21.2	21.5
4	G	371号貝ブロック		GQ98	5,042	4,632	1,263	8.1	27.3
弥生時代住居内貝ブロック									
1	H	204号住居跡	弥生(後期)	GP76・77・86・87・96・97	6,120	4,900	190	19.9	3.9
2	H	212号住居跡	弥生(後期)	GP67・68	730	250	120	65.8	48.0
3	H	234号住居跡	弥生(後期)	GO94・95 HO03・04・05・14・15	9,320	8,100	1,250	13.1	15.4
弥生時代住居外貝ブロック									
1		4号住居跡	奈良	MS05・06・15・16	53,400	47,680	14,325	10.7	30.0
2		363号貝ブロック		JM64	1,590	1,570	610	1.3	38.9
3		366号陥穴		IO20・30	2,940	2,350	185.2	20.1	7.9
4		374号貝ブロック		KR42	1,890	1,580	495	16.4	31.3
5		375号貝ブロック		KR95・LR05	4,550	4,060	860	10.8	21.2
6		394号陥穴		GQ19・20	2,970	2,560	401.1	13.8	15.7
総 合 計 数					338,897	286,234	65,929	15.5	23.0
個体/総数					約338.9kg	約286.23kg			

第 5 表 貝層サンプル中検出節足動物・軟体動物種名一覧

				微 小 貝	
節足動物門		二枚貝綱		腹足綱	
甲殻綱	Phylum ARTHROPODA	Class CRUSTACEA	Class BIVALVIA	Class GASTROPODA	
蔓脚亜綱	Subclass Cirripedia	翼形亜綱	Subclass PTERIOMORPHIA	前鰓亜綱	Subclass PROSOBRANCHIA
完胸目	Order Thoracia	フネガイ目	Order Arcoida	カサガイ目	Order Patellogastropoda
フジツボ科	Balanidae sp.	フネガイ科	Family Arcidae	ユキノカサガイ科	Family Lottiidae
		サルボウガイ	<i>Scapharca kagoshimensis</i>	ヒメコザラガイ(ツボミガイ)	<i>Patelloida pygmaea form conulus</i>
軟体動物門		カキ目		盤足目	
腹足綱	Phylum MOLLUSCA	Order Ostreoida	Order Ostreoida	Order Discopoda	
前鰓亜綱	Class GASTROPODA	イタボガキ科	Family Ostreidae	スナモツボ科	Family Scalioidae
古腹足目	Subclass PROSOBRANCHIA	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	シマモツボ	<i>Finella purpurcoquicata</i>
ニシキウスガイ科	Order Vetigastropoda	異歯亜綱	Subclass HETERODONTA	リンツボ科	Family Rissoidae
イボキサゴ	Family Trochidae	異歯目	Order Heterodonta	コツブガイ属	
ダンベイキサゴ	<i>Umbonium moniliferum</i>	イシガイ科	Family Unionidae	〈陸 産〉	
	<i>Umbonium giganteum</i>	マツカサガイ	<i>Inversidens japonensis</i>	腹足綱	Class Gastropoda
盤足目	Order Discopoda	マルスダレガイ目	Order Veneroida	中腹足目	Order Mesogastropoda
ウミニナ科	Family Batillariidae	バカガイ科	Family Mactridae	ゴマガイ科	Family Diplommatinidae
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>	バカバイ	<i>Mactra chinensis</i>	ヒダリマキゴマガイ	<i>Palaina (Cylindropalania) pusilla</i>
タマガイ科	Family Naiticidae	シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i>	ゴマガイ	<i>Diplommatina ucensis cassa</i>
ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>	マテガイ科	Family Solenidae	柄眼目	Order Stylommatophora
新腹足目	Order Neogastropoda	マテガイ	<i>Solen strictus</i>	キセルガイ科	Family Clausiliidae
アッキガイ科	Family Muricidae	マルスダレガイ科	Family Veneridae	オカクチキレガイ科	Family Subulinidae
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>	カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>	オカチョウウジガイ	<i>Allopcas clavulinum kyotense</i>
ホソオヨウジガイ	<i>Allopcas pyrgula</i>	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	ホソオカチョウウジガイ	<i>Allopcas Pyrgula</i>
ムシロガイ科	Family Nassariidae	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	コハクガイ科	Family Zonitidae
アラムシロ	<i>Reticmassa festiva</i>	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	ヒメコハクガイ	<i>Hawaia minuscula</i>
		オオノガイ目	Order Myoida		
		オオノガイ科	Family Myidae		
		オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>		

坊作遺跡からは70ヵ所におよぶ貝層サンプルが採取されている。このうち貝層が形成された時期が明らかなのは、遺物の伴出している12ヵ所しかないが、これによると弥生後期の3ヵ所(204号住居・212号住居・234号住居)以外はいずれも奈良・平安時代のものである。また、この他のものについては、伴出遺物が無いため時期決定が難しいが、第52図の遺跡における貝ブロックの分布状況にみるように、幾つかのまとまりを見せながら奈良・平安時代の住居群の展開に対応する傾向が認められることから、弥生後期の住居内貝層3ヵ所を除いては、ほとんどが奈良・平安時代の所産とみてさしつかえないだろう。これらの多くは、遺構の覆土内に堆積したものであるが、住居跡7(4・68・109・204・212・228・234号)、陥穴2(366・394号)のほかは、小規模なピットに堆積したものである。住居内貝層と言っても、奈良時代の4号住居跡以外は、覆土全面に入り込むようなタイプではなく、いずれも規模の小さなものである。ただし、ピット内の貝ブロックの中には317・348号土坑のように、水洗後の乾燥重量で約30kgと比較的量の多いものもある。最大は、奈良時代の4号住居跡に堆積したもので水洗後の乾燥重量で約48kgある。この貝層は、第172図に示すように住居覆土のほぼ2/3強の範囲を占め、厚いところは約40cm、平均30cm程度の厚みを持って堆積していた。

② 貝層の内容

貝層における土の混入量を示す混土率は、比較的低いものが多く、平均すると15%ほどである。また、貝層の保存状態を示す貝殻破碎率は、平均23%とこれも低い。坊作遺跡周辺の縄文時代の貝層と比較すると、それぞれのブロックが基本的に1回程度の廃棄単位を示し、比較的規模の大きなものでも短期間に堆積したものである印象が強い。

貝層中からは、貝類以外の遺物の出土は極めて少ない。魚骨および獣骨は皆無であり、4号住居跡から非常に小型なカニのはさみの部分のとれた鉗脚の破片(写真図版183)がみついているが、種は同定できない。また、第6表に示すように14ヵ所からフジツボの破片が出土しているが、このうち検出量の多い204号・342号土坑は、本遺跡の貝層サンプルのなかではいずれもマガキの比率が高いことから、これらに付着していたものはずれたものとみられる。

③ 貝類について(写真図版181・182)

次に貝層の構成貝種について述べる。まず、貝種ごとに本遺跡のあり方の特徴を示した上で、組成のパターンについて弥生後期、奈良・平安時代の間に時期差が認められるかどうか、奈良・平安時代の分布状況から一つのまとまりとみられるA～G群までの7ブロックについて、ブロック内・ブロック間で類似性や相違点がみられるかを検討する。

坊作遺跡の貝層サンプルから検出された貝類は第5表の種名一覧に示したように、腹足綱6種・二枚貝綱11種である。

イボキサゴ

イボキサゴは44ヵ所のサンプルから検出されているが、このうちの19ヵ所では全体の60%以上を占める主体貝種となっている。

ウミニナ

ウミニナは4ヵ所から比較的多く検出されているが、1,000点以上が検出されその貝層の主体種となっている325

第6表

フジツボ検出数一覧

遺 構	点数	重量(g)
004号住居	7	1.8
204号住居	63	0.9
212号住居	10	0.2
234号住居	1	+
316号土坑	1	+
321号土坑	10	0.7
325号土坑	3	+
326号土坑	1	0.1
328号土坑	4	+
342号土坑	163	2.1
343号土坑	1	+
346号土坑	1	+
363号土坑	1	0.4
364号土坑	1	+

号土坑の存在は特筆に値する。遺物の残存状況についての詳細は後述する。

ツメタガイ

22ヵ所のサンプルから検出されているが、357号土坑の5.6%が最高で、多くの箇所は数点に止まる。

アカニシ

4ヵ所のサンプルから計10個体を検出したに過ぎない。

アラムシロ

22ヵ所のサンプルから検出されているが、これらは前述したイボキサゴを主体とする箇所との合致率が高いので、混獲されて集落内にもたらされたものとみられる。

ダンベイキサゴ

奈良・平安時代の4ヵ所のサンプル(336・348・355号土坑、4号住居)から出土しており、とくに336号土坑からは103点とかなりまとまった状態で検出されている。

サルボウ

15ヵ所のサンプルから検出されているが、いずれも数点に止まる。

マガキ

10ヵ所のサンプルから検出されており、このうち342号土坑および204号住居跡からは比較的多くの個体数があるが(全体比でそれぞれ13%・5%)、その他のサンプルからは数点に止まる程度である。

アサリ

全サンプルの77%にあたる54ヵ所からの検出があるが、あまり多量に出土するところはなく、全体比の10%未満のことが多い。

オキシジミ

16ヵ所のサンプルから検出されているが、いずれも数点に止まる。

カガミガイ

28ヵ所のサンプルから検出され、数点単位のところが多いが、322・325・327・348号土坑には9%を最高にある程度のまとまりがみられる。

ハマグリ

2ヵ所を除くほぼ全てのサンプルから出土している。遺跡全体でみると貝類総数の約16%を占める。

シオフキ

5ヵ所を除くほぼ全てのサンプルから出土している。遺跡全体でみると貝類総数の28%を占め、イボキサゴに次いで多く、二枚貝では最も多い。遺構別にみると、314・316・317・338・345・354・375号土坑、4号住居では全体比の60%以上の高率を占めている。

バカガイ

10ヵ所のサンプルからの出土があるが、いずれもわずかの量である。

マテガイ

27ヵ所のサンプルから出土しており、このうち348・364号土坑では、全体の50%を越える比率で検出されている。この他にも4ヵ所で10～30%程の比率でまとまって検出されたものがある。

オオノガイ

6ヵ所のサンプルから出土しているにすぎず、いずれも数点単位に止まる。

マツカサガイ

唯一の淡水産の貝であるが、312号土坑と212号住居にわずかに認められたに過ぎなかった。

全体を概観してみると、本遺跡の貝類のあり方を特徴づけるのは、比較的コンスタントにある程度の比率で見られるシオフキ・ハマグリ・アサリなど二枚貝系の貝類と、検出箇所は少ないもののかなり集約的に採集されている感のあるイボキサゴ・ウミニナ・マテガイの存在である。坊作遺跡に隣接する縄文時代後期の祇園原貝塚では、全体的にイボキサゴを主体とする採貝活動が中心で、坊作遺跡のようにウミニナ・マテガイがまとまる例は確認できなかった。また、シオフキの比率もハマグリを超える例はなかった。東京湾東岸の縄文中期から後期の貝塚を特徴づけるのは、何と言っても多量に消費されたイボキサゴの存在あり、この貝を中心とする採貝活動が生業形態の中である程度の位置づけがなされていた縄文時代と、それがかなり希薄になった時代との差が現れているのだろう。後述するダンベイキサゴを含め、坊作遺跡の貝類のあり方には、ある程度の選択的な採取の仕方、ある貝に対する嗜好が認められる。また、シオフキ・アサリの生息環境はハマグリのそれと異なり、やや泥質底となるため、当時こういった水域環境が多かった可能性がある。

坊作遺跡の貝ブロックには、弥生後期のものが3ヵ所あるが、204号住居跡以外はかなり小規模で組成内容的にもあまり共通点が認められない。したがって、奈良・平安時代との比較はあまり意味がないかもしれないが、204号住居跡を代表させるとすれば、貝層中に占めるイボキサゴの卓越があげられよう。

つぎに、「貝類など食べ物の残骸は、習慣的に居住する場所付近にまとめられた」という前提で、貝の隣接する分布状況からあるまとまりとしてとらえた奈良・平安時代A～G群の7つのブロックについて、その組成に注目する。前述のシオフキ・イボキサゴ・マテガイ・ウミニナ・ダンベイキサゴのあり方を中心に検討すると、一つのブロック内の複数サンプルがすべて同じ貝種組成の傾向を示すものは一つもないが、イボキサゴの比率が高いサンプルが多いブロックは、C・E・G群、シオフキの比率が高いサンプルが多いブロックはA・B群、マテガイの比率が高いサンプルが多いブロックはB・E群という傾向がみられ、またウミニナを多く含むサンプルはB・D群に、ダンベイキサゴはD・F群に見られる。貝種組成の類似したサンプルは別の群としたものにも存在する。

主要二枚貝類であるハマグリとシオフキの大きさについて、時期別・ブロック別に殻高の分布状況を示したのが第65～70図である。ハマグリは、弥生後期では40mmを最頻値とするのに対し、奈良・平安時代では32mmを最頻値とし、弥生後期のものの方が大型である。なお、縄文

第7表 微小貝検出数一覧

	陸 産			海 産			種 不 明
	オカ チヨウ ウジ ガイ	ホソ オカ チヨウ ウジ ガイ	ヒメ コハ クガイ	ツ ボミ ガイ	シ マモ ツボ	コ ツブ ガイ 属	
004号住居跡	1						
234号住居跡			1				
316号土坑	1						
317号土坑							1
319号土坑	2						
321号土坑	1	6					
325号土坑		2		8			
327号土坑	2						
339号土坑	2						
340号土坑	1	3	3				
342号土坑					1		
343号土坑	2						
348号土坑	2						
353号土坑						1	
363号土坑	3		8				
364号土坑	2						
367号土坑	1						

時代の祇園原貝塚では、概ね30mm前後に最頻値をもつものが多かった。シオフキは、弥生後期はデータがないが、奈良・平安時代では38mmを最頻値とする。奈良・平安時代のハマグリの大きさを、ブロック別にみると最頻値は最低がG群の24mm、最高がB群の40mmである。シオフキでは最低が、A・B・D群の34mm、最高がC群の40mmである。

④ 微小貝について（写真図版183）

一般に貝塚などから検出される1～2mmほどの大きさの貝を「微小貝」と呼ぶが、これには陸産と海産のものがある。前者はいわゆるカタツムリのなかまで貝層形成当時の集落付近の環境を推定するのに役立つと言われ、後者は貝類その他の水産資源を海から集落へ持ち込む際に混じり込んだものと考えられており、本来の採集目的物の推定につながる可能性をもっている。坊作遺跡検出の微小貝について、第7表に検出サンプルと点数を示したが、陸産微小貝がやや多いものの、一カ所から多量に検出されているわけではなく、検出状況も明らかでないため断定はできないが、オカチョウジガイ・ホソオカチョウジガイ・ヒメコハクガイの3種はいずれも、豊かな森からイメージする林内地ではなく、どちらかという開地系の場所を好む貝であることから、当時の集落の周辺がかなり開かれたものであったことが推定される。

また、海産微小貝のうちツボミガイ（写真図版183下）はウミニナに付着して生息する貝として知られているが、これを検出した325号土坑は、坊作遺跡の中で唯一多量のウミニナで構成される貝層であることと合致するので、混獲されたものとみなすことができる。

⑤ ダンベイキサゴについて（写真図版184上）

336号土坑から103点、355号土坑から34点、4号住居跡から31点のダンベイキサゴが出土した。ダンベイキサゴは、外洋に面した砂浜に生息する巻貝であり、縄文時代の千葉県一宮町貝殻塚貝塚、神奈川県茅ヶ崎市堤貝塚・遠藤貝塚などが、チョウセンハマグリとともにこの種を主体とする貝塚として有名である。しかし東京湾東岸の内湾に面した貝塚からこれらの貝類がまとまって検出されることは極めて稀である。ただし、食用以外の目的たとえば装身具又はヘラなどの道具の素材として持ち込まれたと考えられる搬入貝類は、縄文時代には事例が比較的多い。しかし、貝殻を道具の素材として使用することがほとんどなくなる奈良・平安時代の坊作遺跡でのあり方は、本来の目的、すなわち食べ物として持ち込まれたと考えなければならぬ。ダンベイキサゴは、千葉県内では九十九里沿岸の地域で「ながらみ」と称され親しまれている。この地域は坊作遺跡の時代には山辺郡や武射郡が存在し、これらの集団が上総国分尼寺の造営に関与したことが知られており、坊作遺跡の231号住居跡の覆土中から「山邊郡立」と書かれた墨書土器の出土が確認されている。したがって、遺跡から発見されたダンベイキサゴは、これらの集団が何らかの形で郷里から持参し集落内で消費したものである可能性が高い。

⑥ ウミニナについて（写真図版184下）

ウミニナが、縄文時代の貝塚から出土することは珍しくないが、貝層の主体をなすほどの頻度で存在することはほとんどない。坊

作遺跡の325号土坑

第8表 ウミニナが多く検出されたサンプルでの殻の状態と点数

からは1,121点、このサンプル全体の63%を占める比率でウミニナが出土した。縄文時代のウミニナは、

遺構	時期	総数(点)	完形	殻頂部を欠くもの	縦半分に欠けたもの
004号住居跡	奈良時代	123	14	106	3
204号住居跡	弥生時代	170	92	74	4
325号土坑		1,121	22	1,079*	20
326号土坑		99	2	87	9

* 殻頂のみの破片は169点

当時主体的に採集されていたイボキサゴを採る際に、アラムシロなどとともに混獲された可能性が高い。しかし坊作遺跡の事例は、あくまでこの貝を主目的に採集された結果と考えられる。

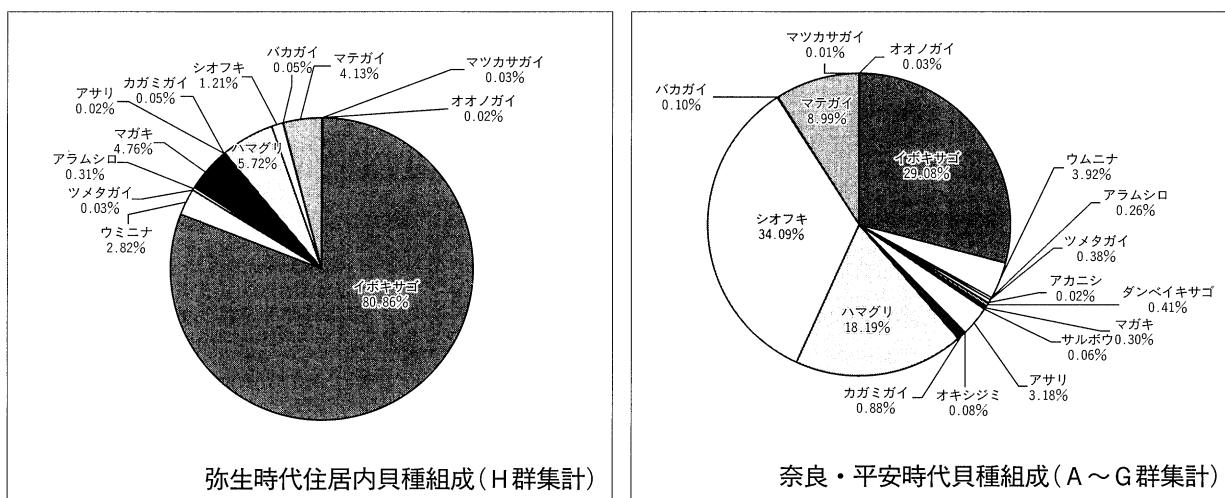
西野(註1)によれば、千葉市に所在する古墳時代後期の笹目沢遺跡、弥生時代後期の中野台遺跡からまとめて出土したウミニナの殻を観察した結果、身を取り出すための破壊の痕跡が認められたという。前者では殻の体層部を破壊して破片を除きながら身を取り出す「体層部破壊法」が、後者では殻頂部を螺溝部分で切断し殻口部に口をあてて吸い込む「殻頂部切断—吸い出し法」がとられたと推定する。

この資料をふまえ、坊作遺跡出土のウミニナを観察した。325号土坑の他にも、イボキサゴがあまり出土していないサンプルでありながらウミニナが比較的多く検出された奈良・平安時代の326号土坑および奈良時代の4号住居跡、多量のイボキサゴとともに検出された弥生後期の204号住居跡があるので、あわせて検討する。第8表に観察結果を数字で示した。

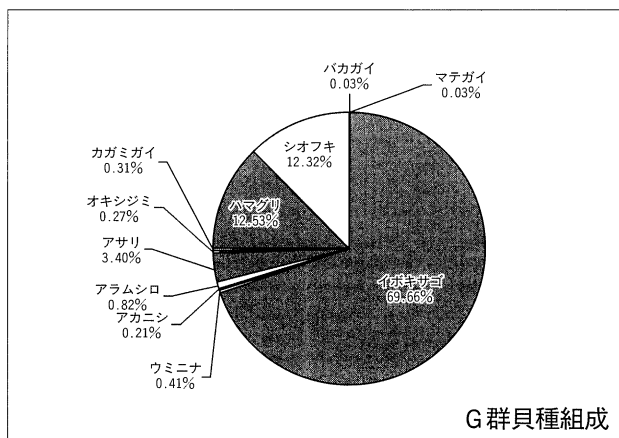
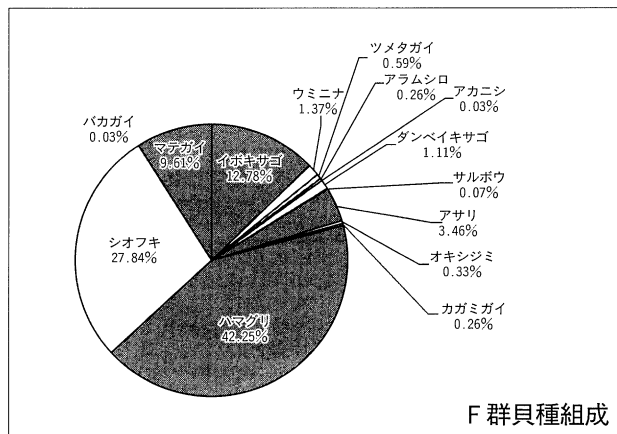
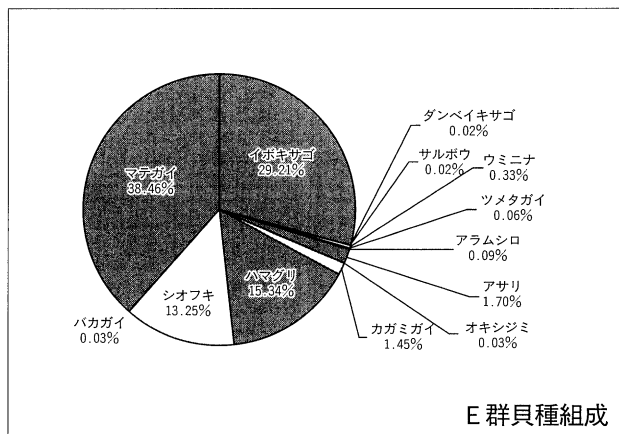
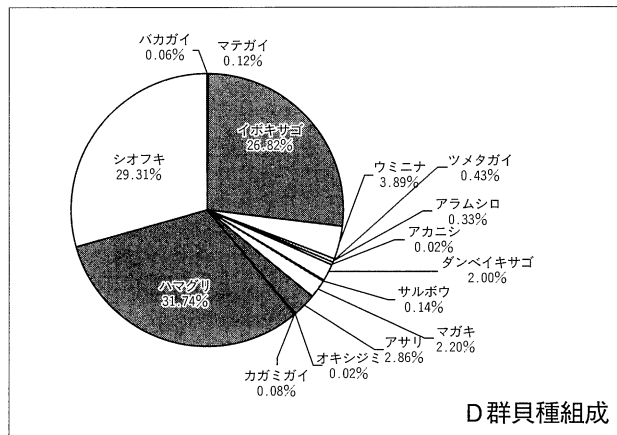
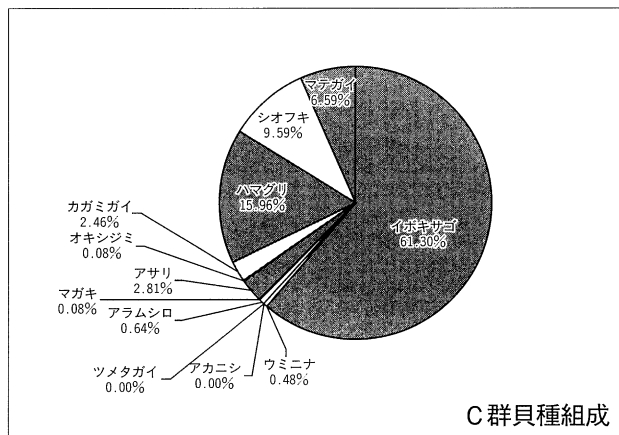
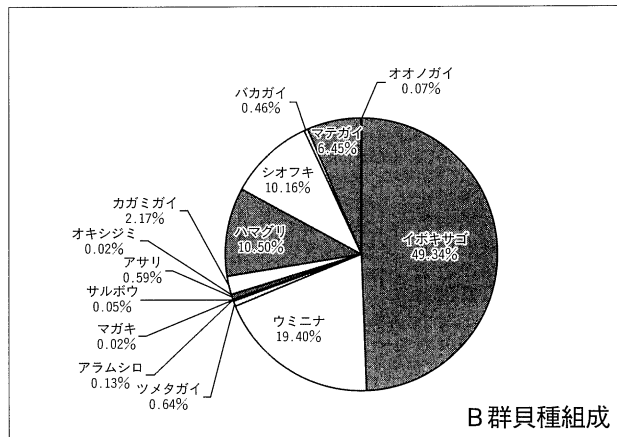
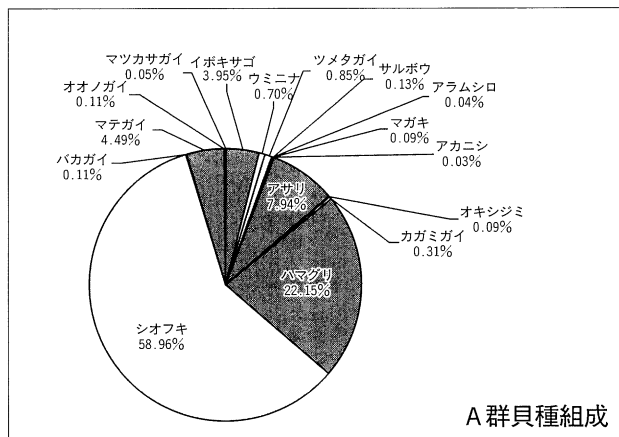
この結果、奈良時代の4号住居跡、奈良・平安時代の325号・326号土坑ともに、全体の80%以上が殻頂部の折れた個体であった。これに対し、弥生後期の204号住居跡は、殻頂部を欠くものは全体の43%に止まった。また、各サンプルともに明らかに意図的に縦方向に半分に破壊された個体がいづつかみられた。なお、最も多くウミニナが検出された325号土坑では、殻頂のみの破片は169点に止まり、切断された殻頂部の多くが貝殻本体と一緒に廃棄されなかったようである。

市原の地でも奈良・平安時代、好んでウミニナを食す習慣があり、殻頂部を折り取る方法がとられたようである。

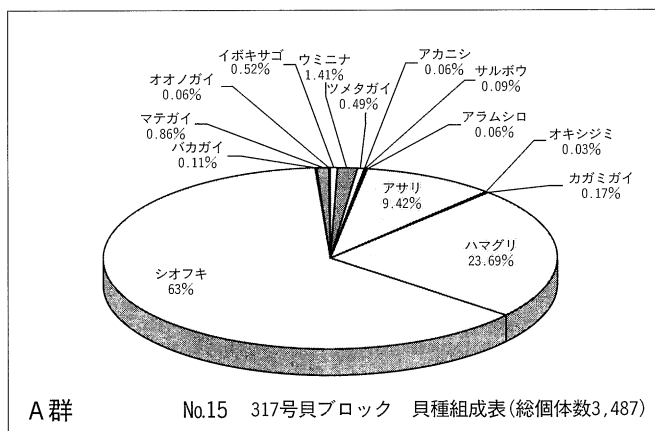
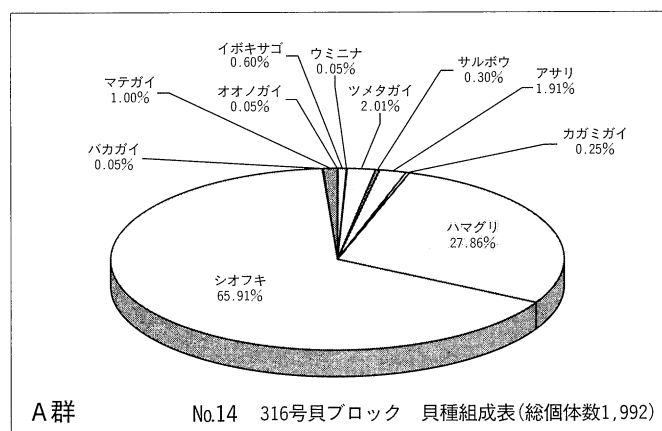
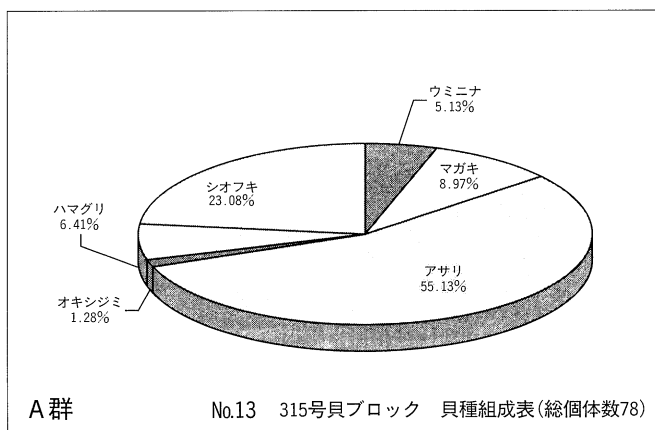
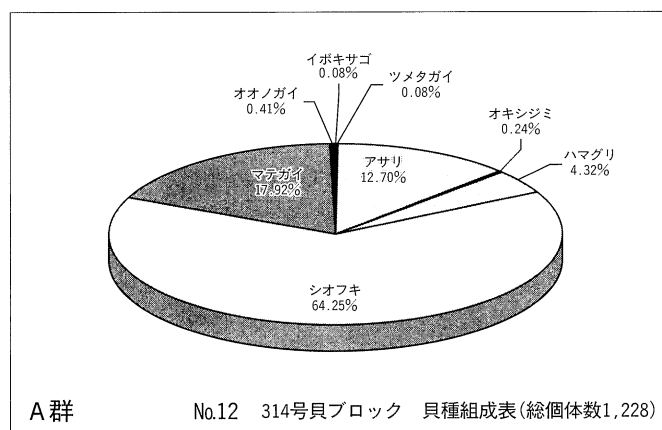
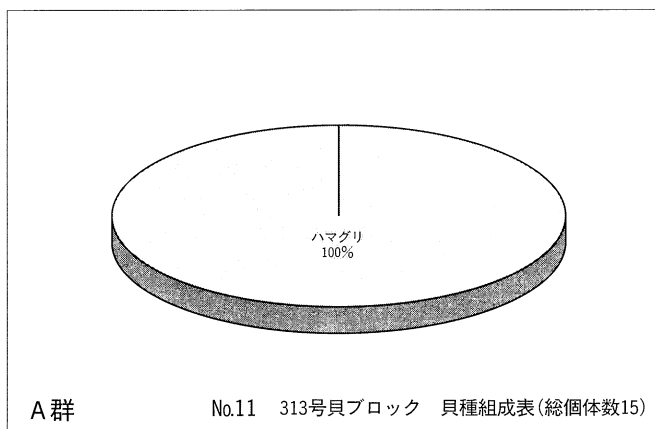
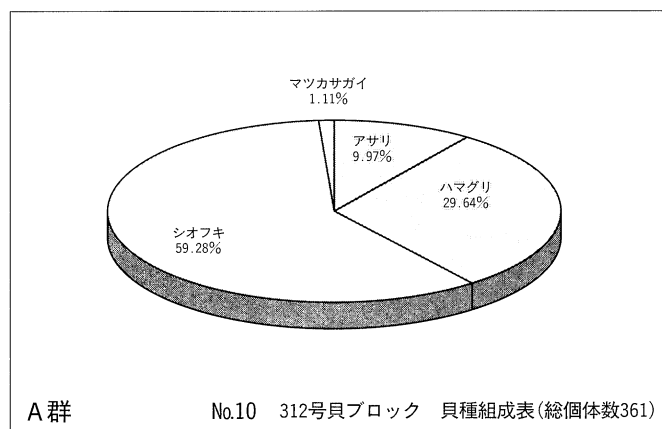
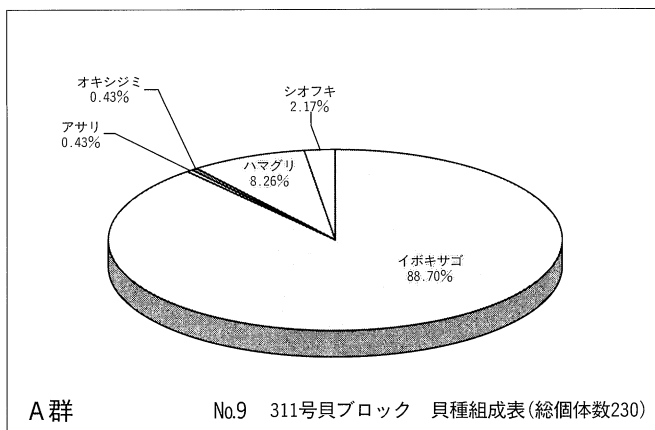
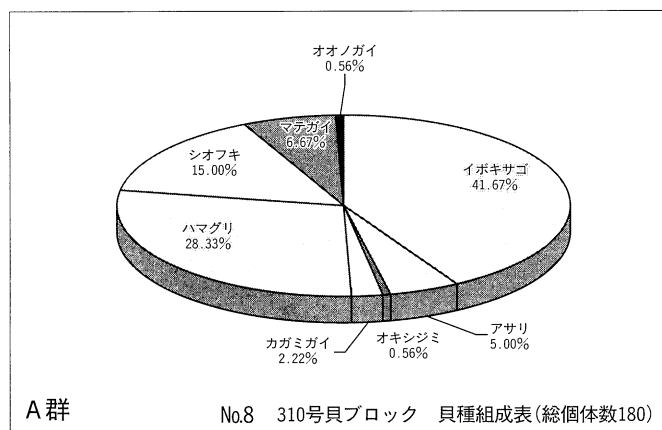
註1 西野正人 「ウミニナ類の身を取り出す2つの方法」『研究連絡誌』第50号 財団法人 千葉文化財センター 1997



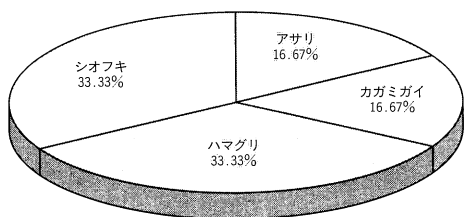
第54図 時期別貝種組成



第55図 A～G群貝種組成

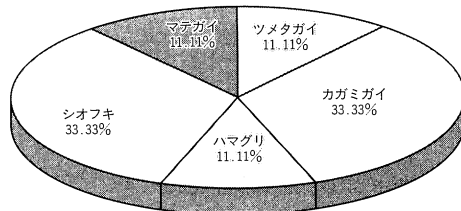


第56図 遺構別貝種組成(1)



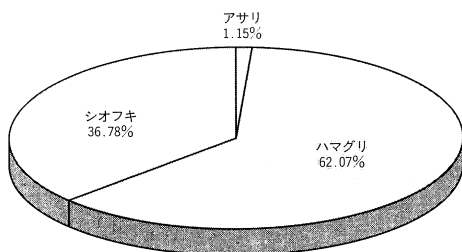
A 群

No.16 318号貝ブロック 貝種組成表(総個体数6)



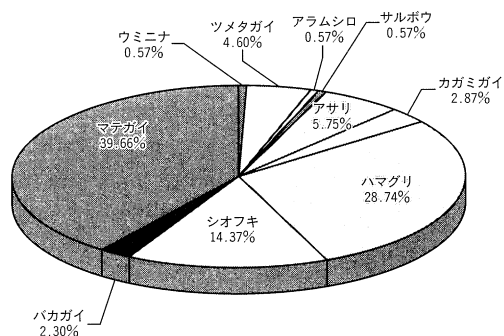
A 群

No.17 319号貝ブロック 貝種組成表(総個体数9)



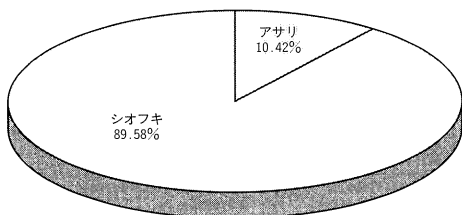
A 群

No.18 320号貝ブロック 貝種組成表(総個体数87)



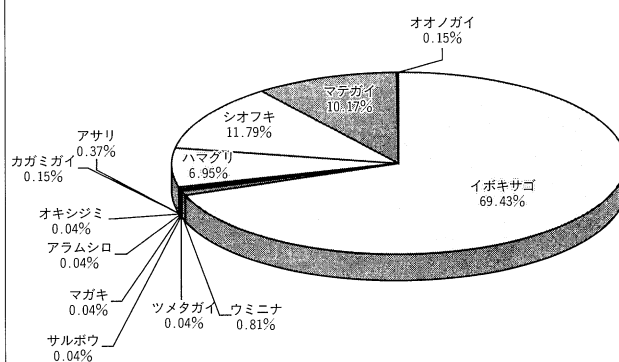
A 群

No.68 392号貝ブロック 貝種組成表(総個体数173)



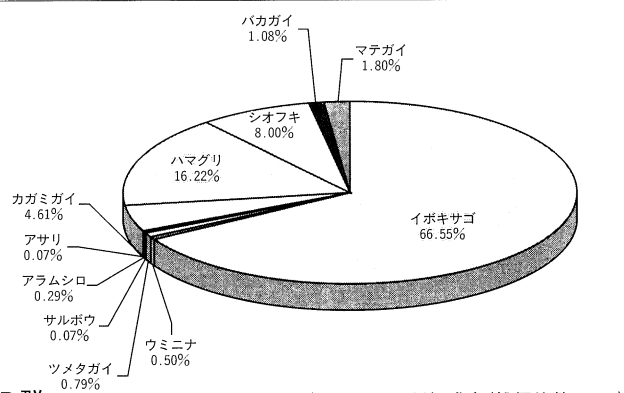
B 群

No.2 68号住居 貝種組成表(総個体数48)



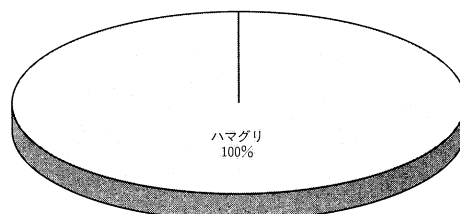
B 群

No.19 321号貝ブロック 貝種組成表(総個体数2,705)



B 群

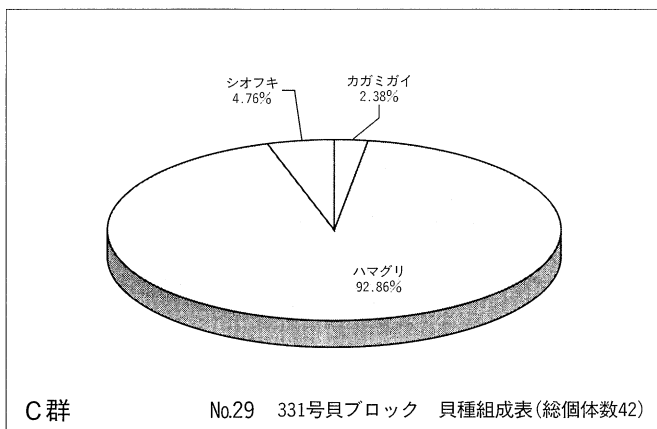
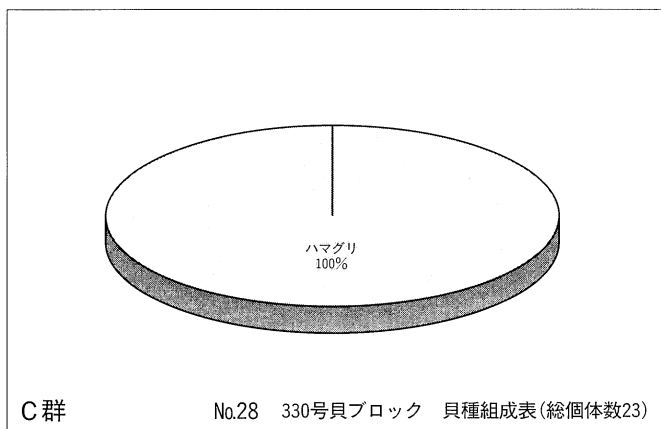
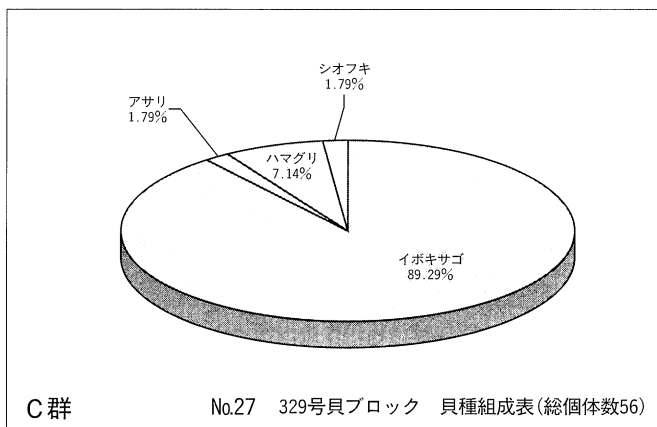
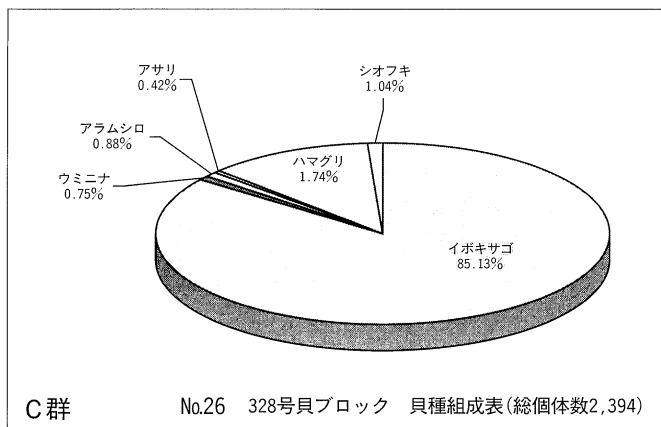
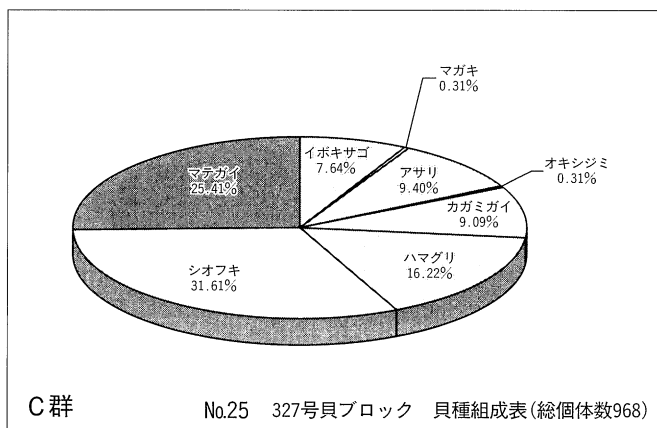
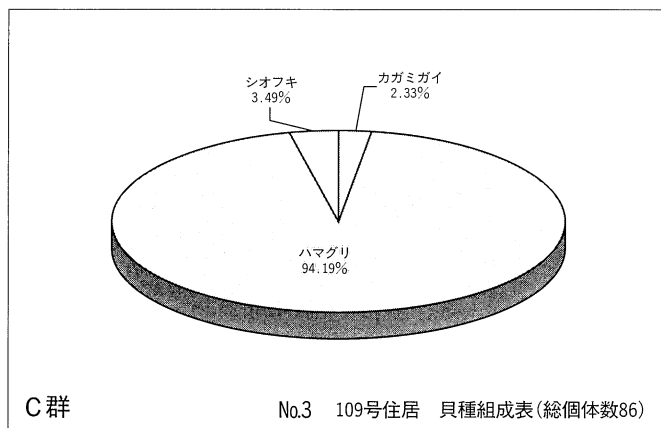
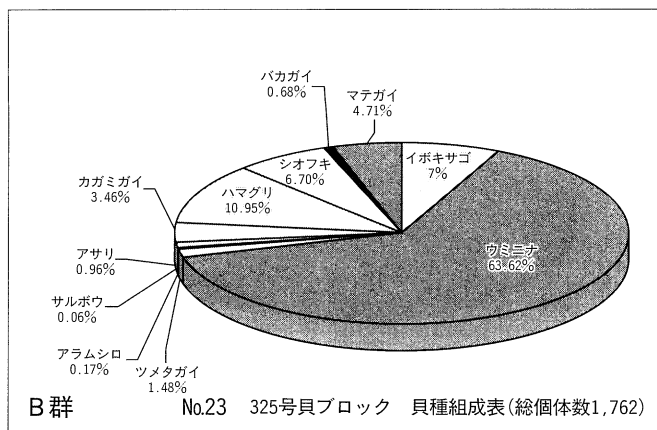
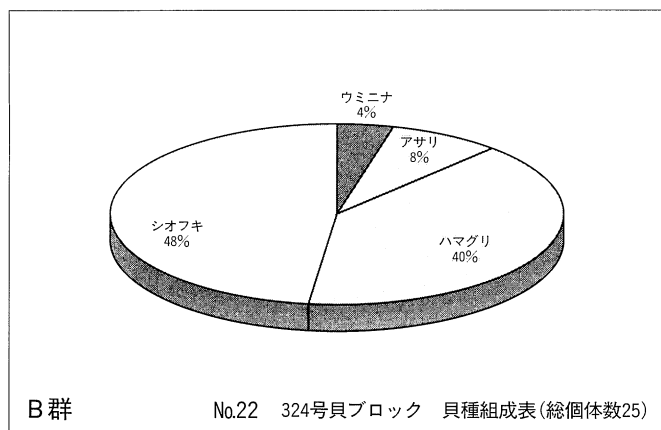
No.20 322号貝ブロック 貝種組成表(総個体数1,387)



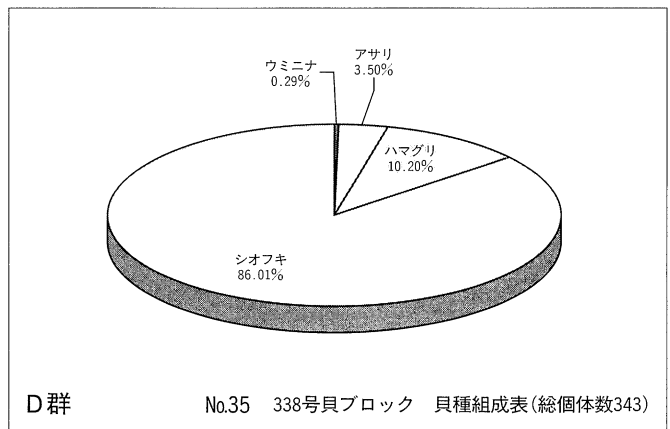
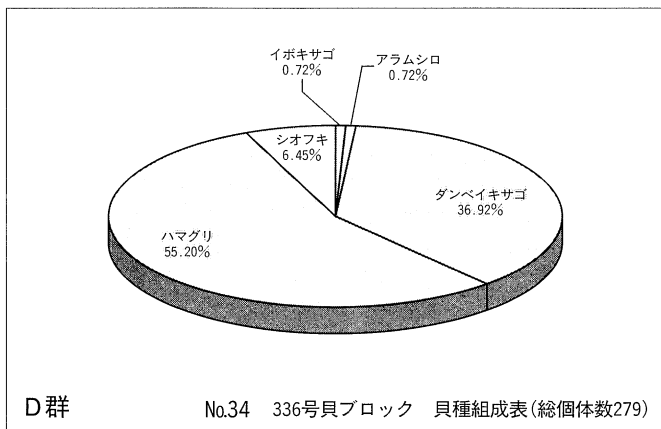
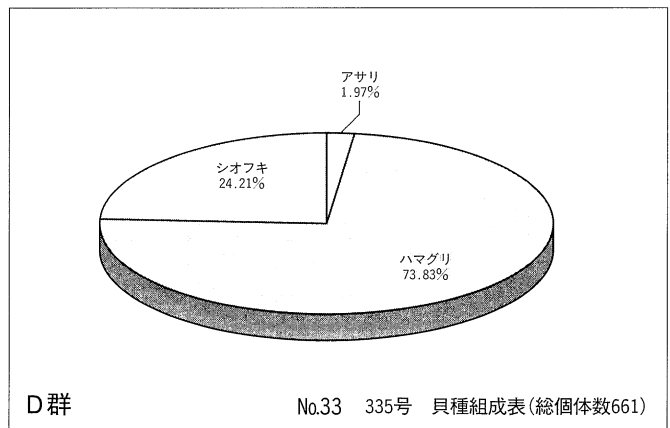
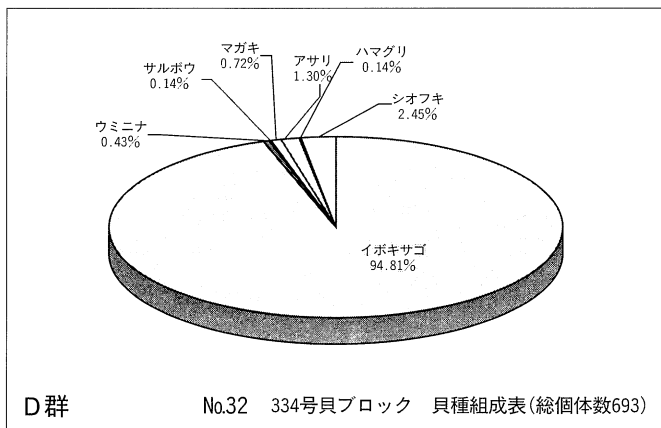
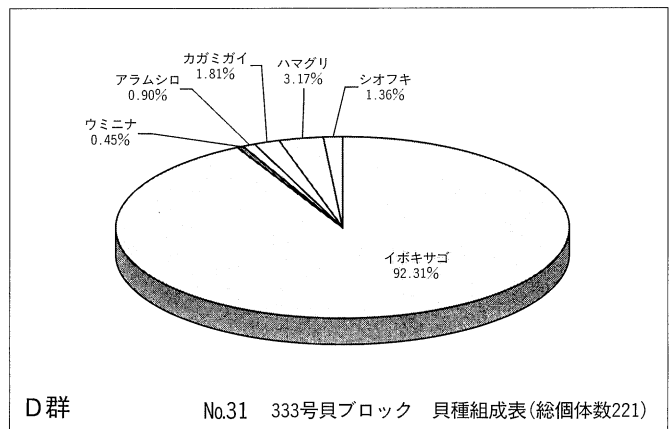
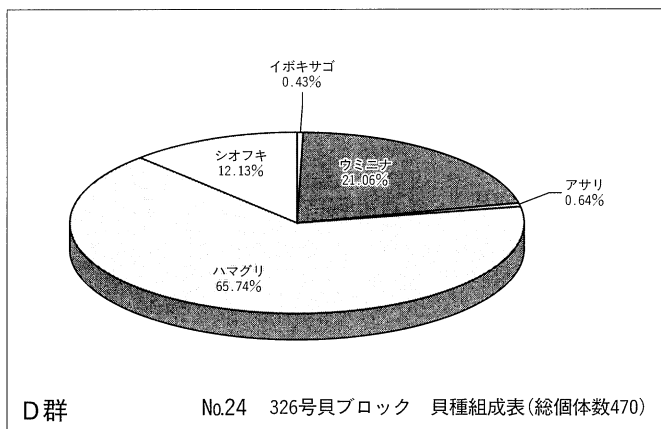
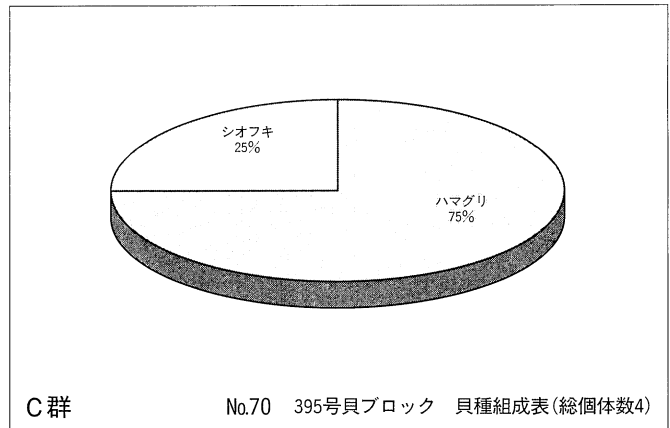
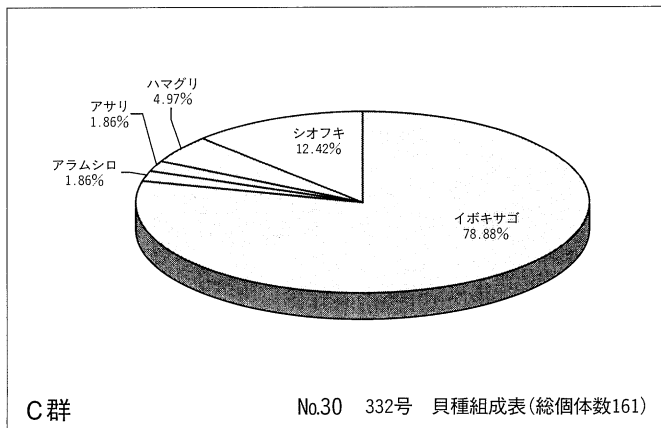
B 群

No.21 323号貝ブロック 貝種組成表(総個体数7)

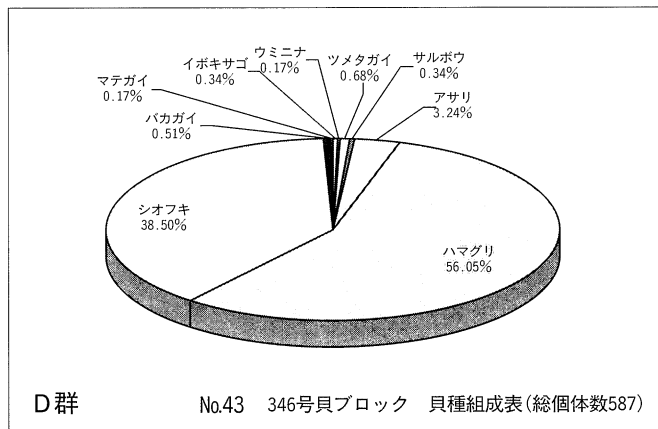
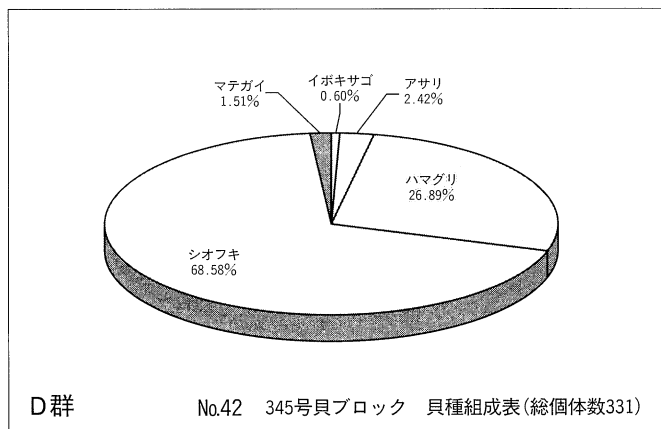
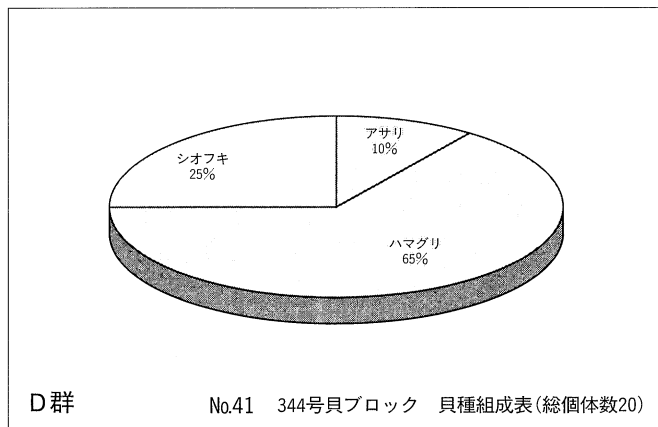
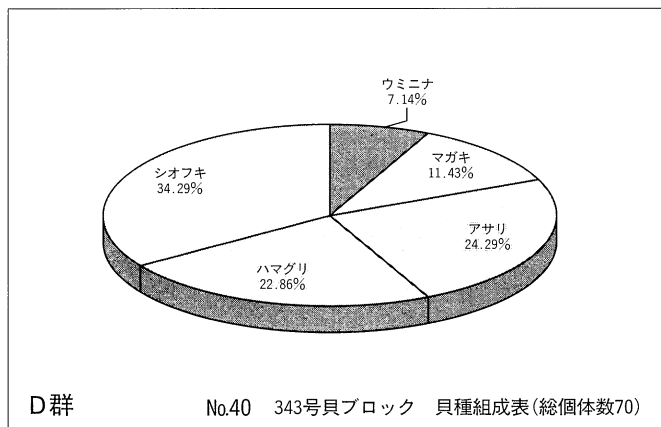
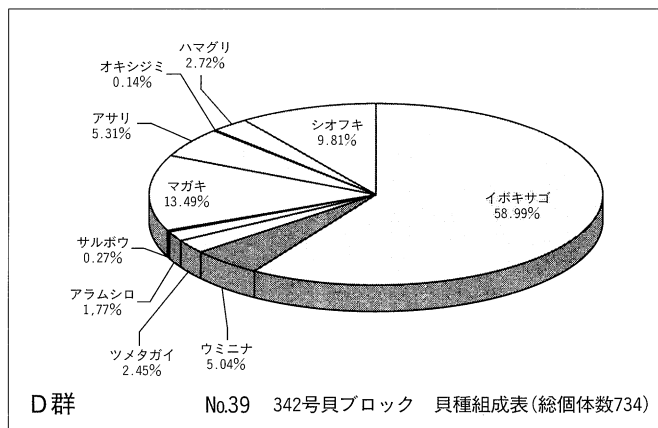
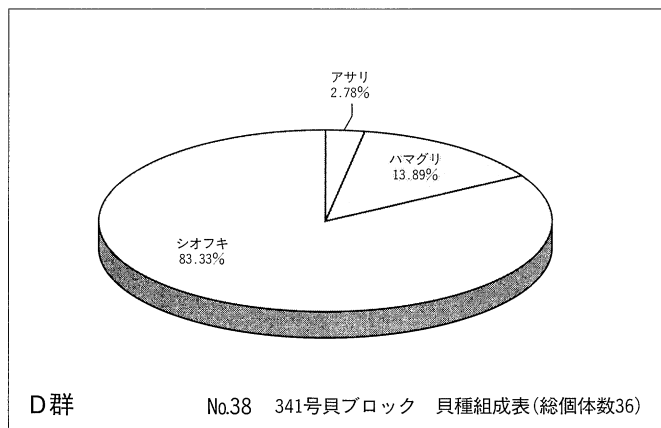
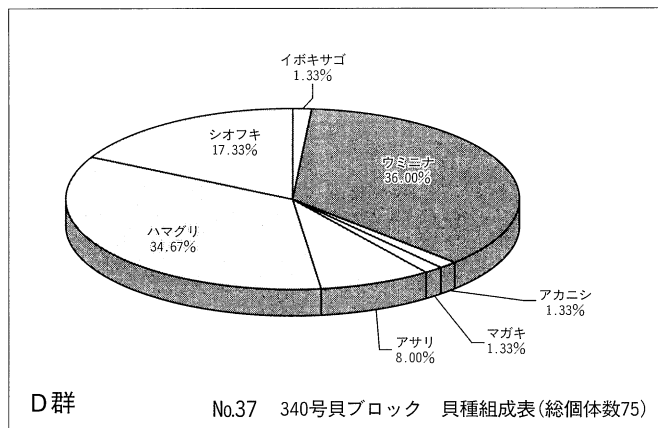
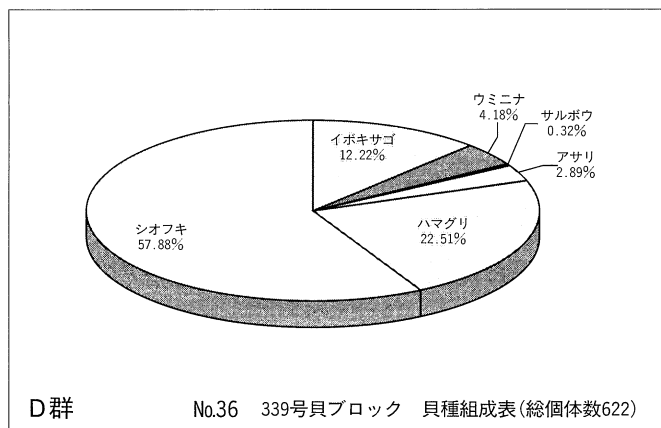
第57図 遺構別貝種組成(2)



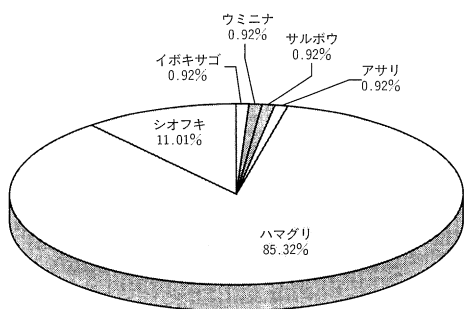
第58図 遺構別貝種組成(3)



第59図 遺構別貝種組成(4)

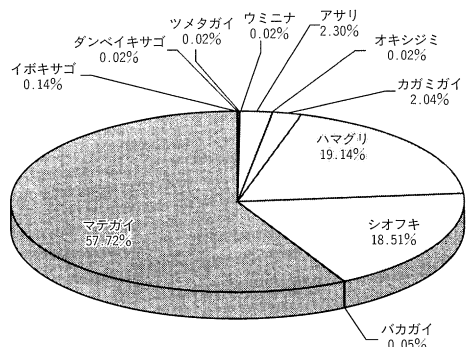


第60図 遺構別貝種組成(5)



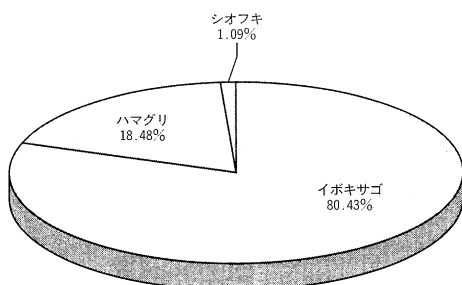
E 群

No.44 347号貝ブロック 貝種組成表(総個体数109)



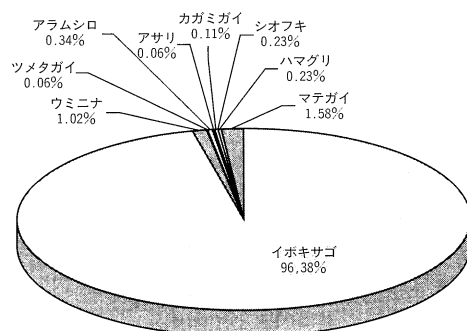
E 群

No.45 348号貝ブロック 貝種組成表(総個体数4,165)



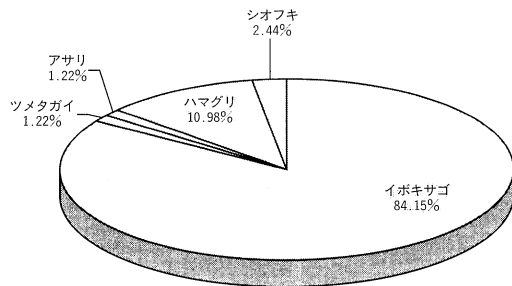
E 群

No.46 349号貝ブロック 貝種組成表(総個体数92)



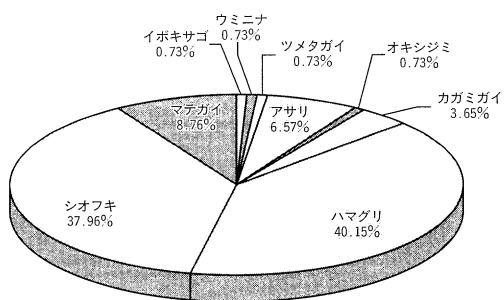
E 群

No.47 350号貝ブロック 貝種組成表(総個体数1,750)



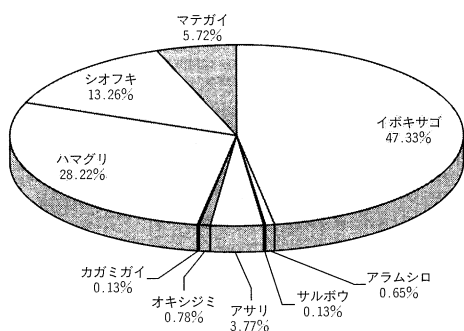
E 群

No.48 351号貝ブロック 貝種組成表(総個体数82)



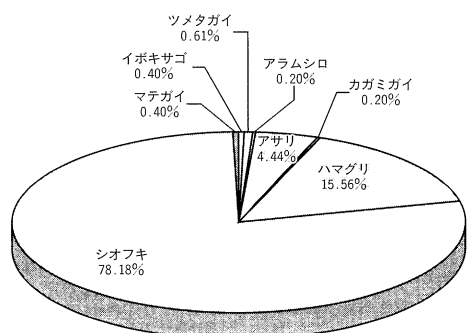
E 群

No.49 352号貝ブロック 貝種組成表(総個体数137)



F 群

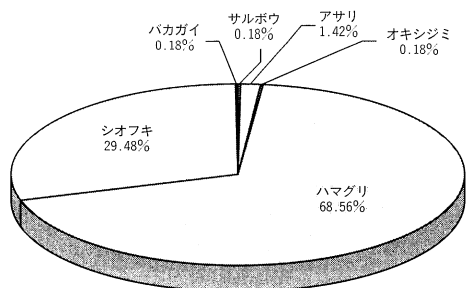
No.50 353号貝ブロック 貝種組成表(総個体数769)



F 群

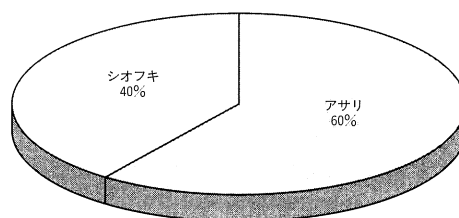
No.51 354号貝ブロック 貝種組成表(総個体数494)

第61図 遺構別貝種組成(6)



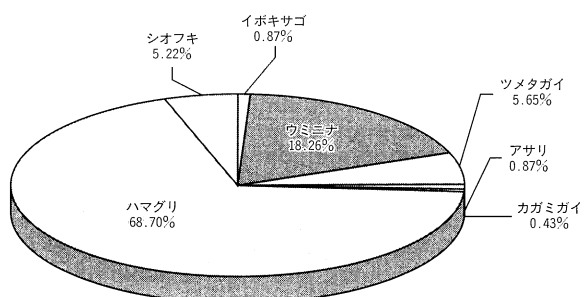
F 群

No.52 355号貝ブロック 貝種組成表(総個体数563)



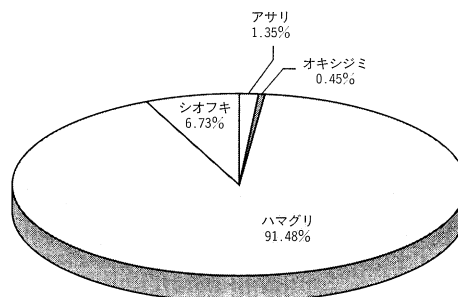
F 群

No.53 356号貝ブロック 貝種組成表(総個体数45)



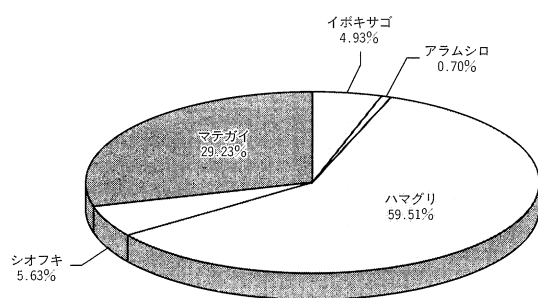
F 群

No.54 357号貝ブロック 貝種組成表(総個体数230)



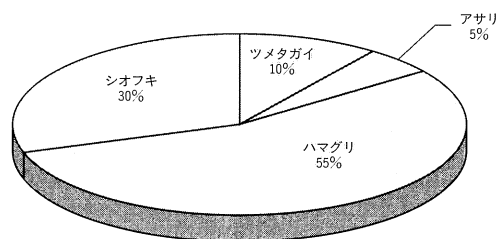
F 群

No.55 358号貝ブロック 貝種組成表(総個体数223)



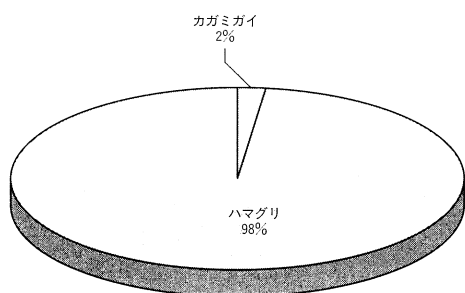
F 群

No.56 359号貝ブロック 貝種組成表(総個体数284)



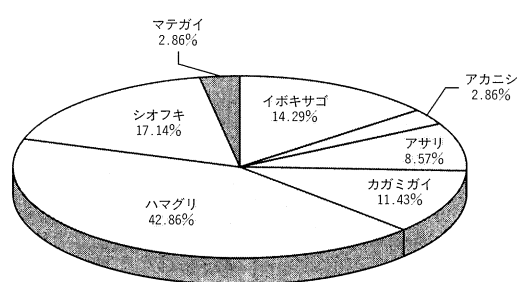
F 群

No.57 360号貝ブロック 貝種組成表(総個体数20)



F 群

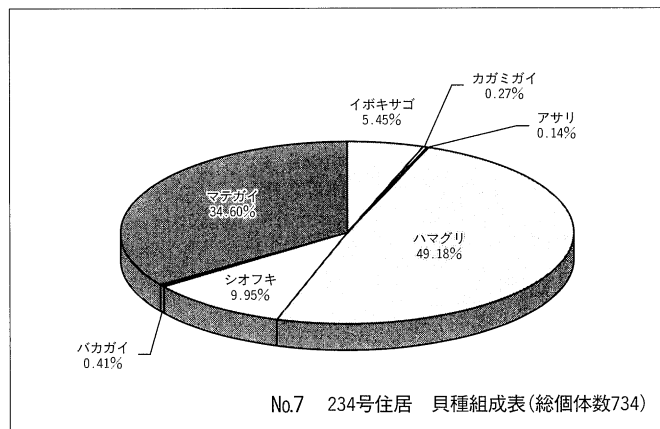
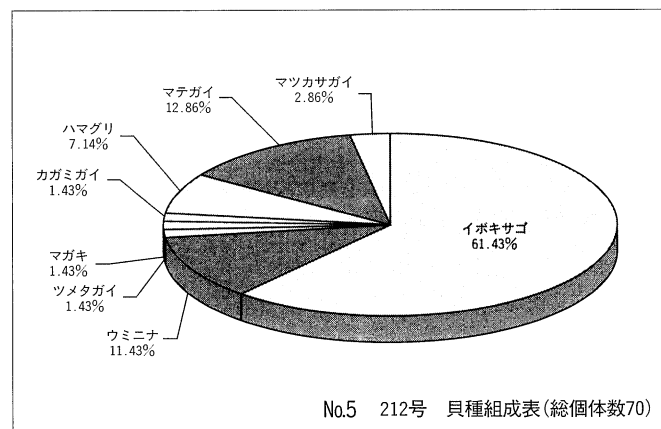
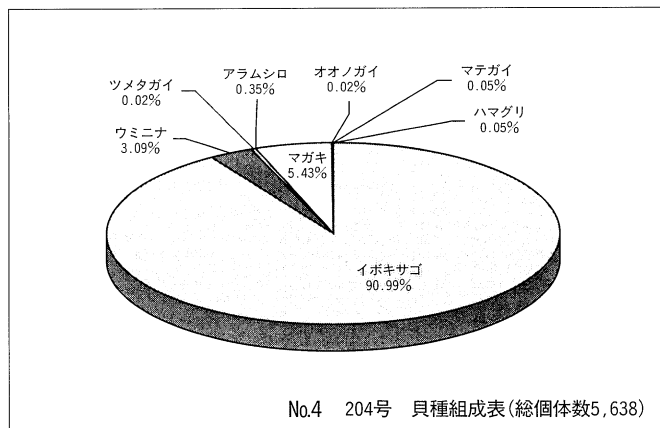
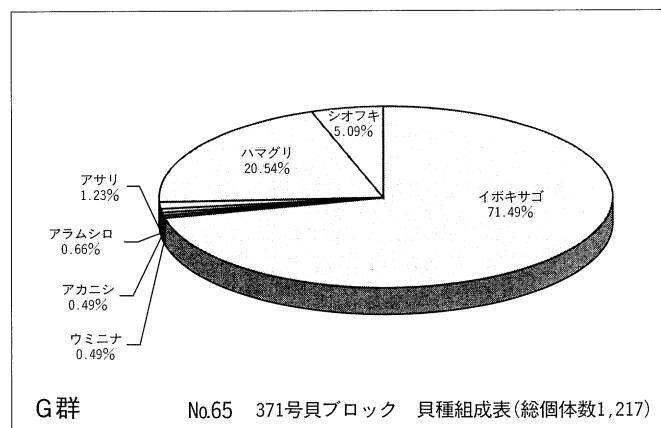
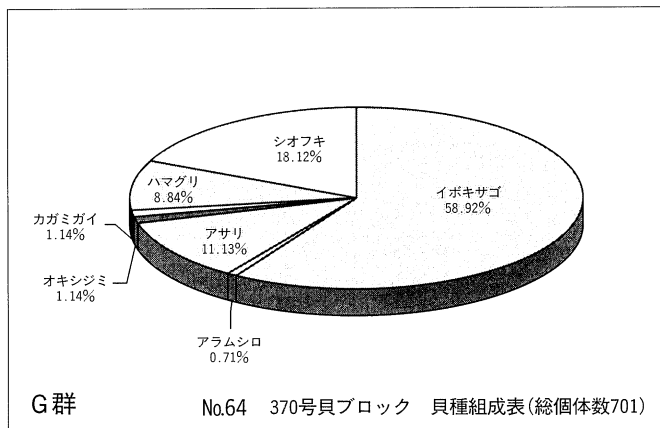
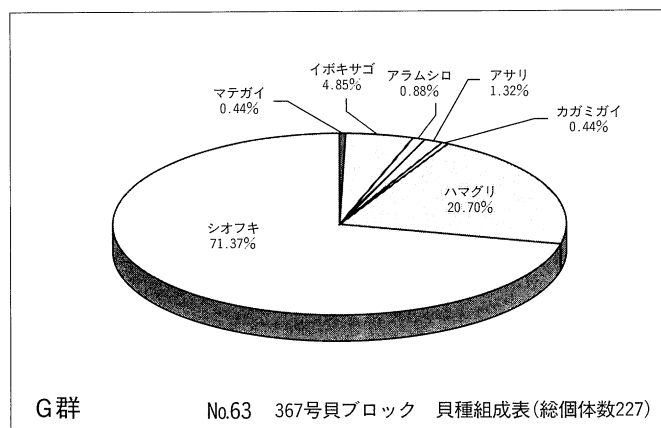
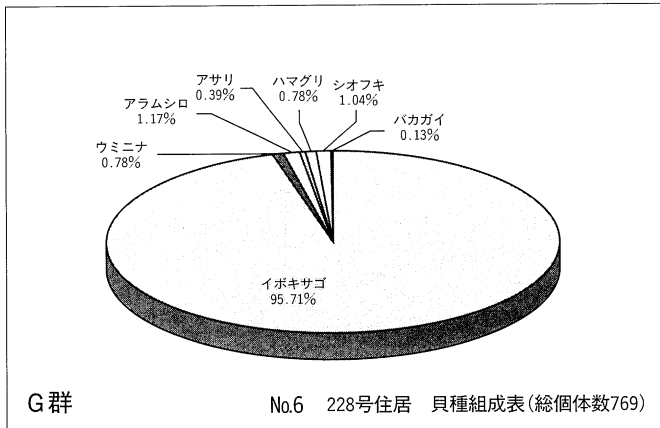
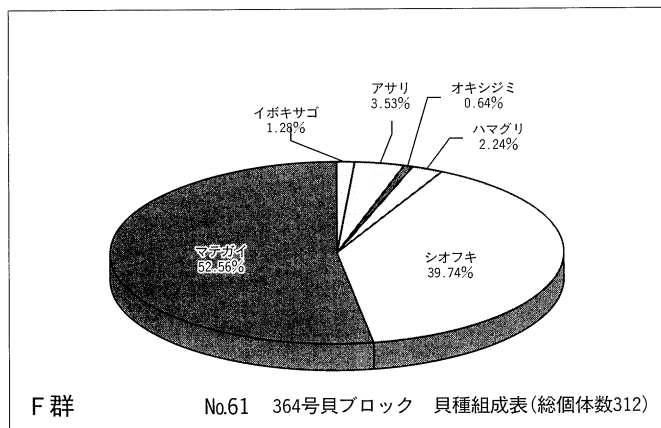
No.58 361号貝ブロック 貝種組成表(総個体数50)



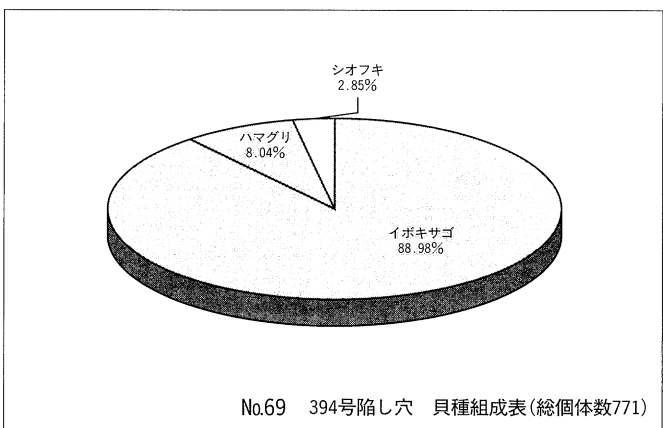
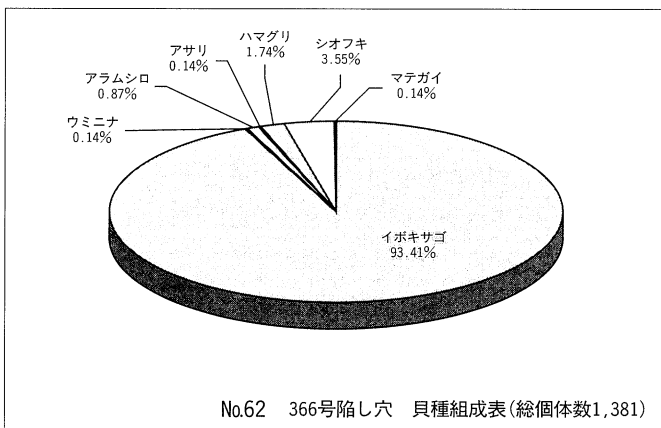
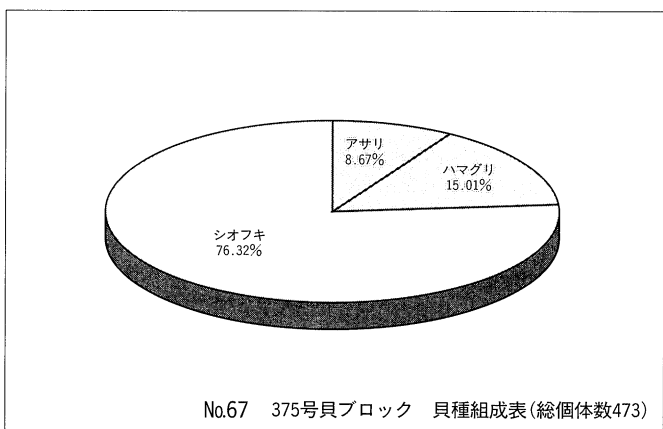
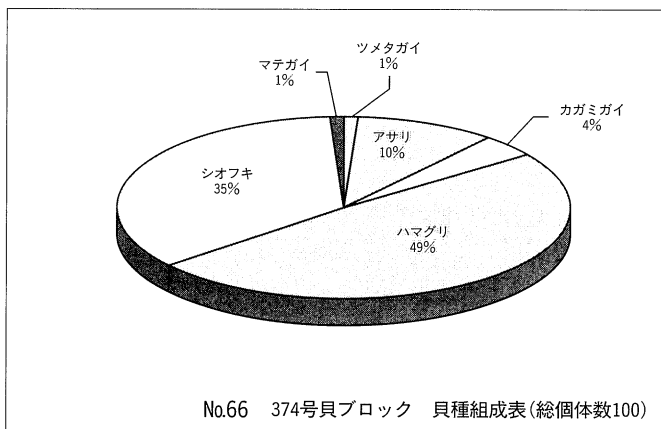
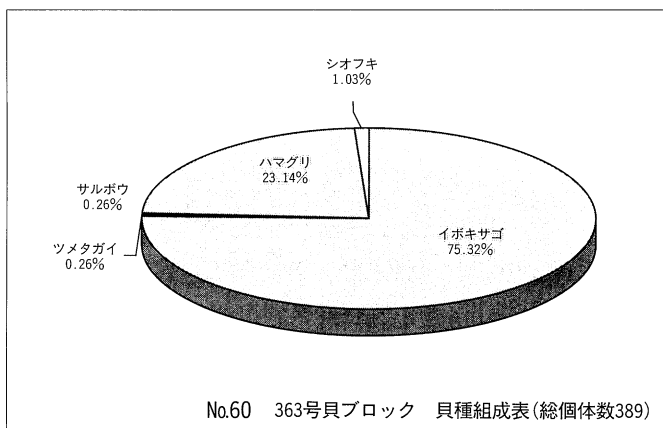
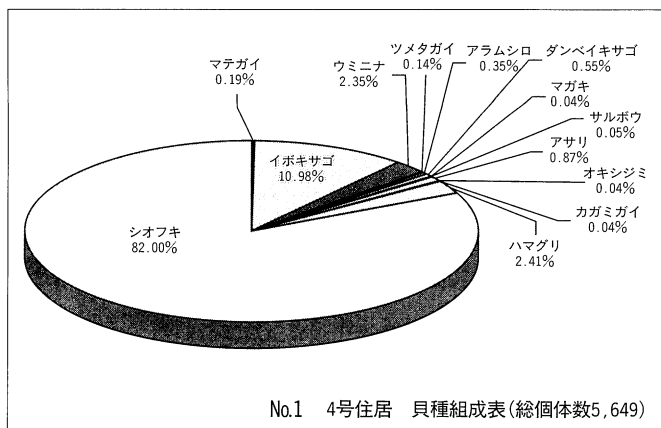
F 群

No.59 362号貝ブロック 貝種組成表(総個体数35)

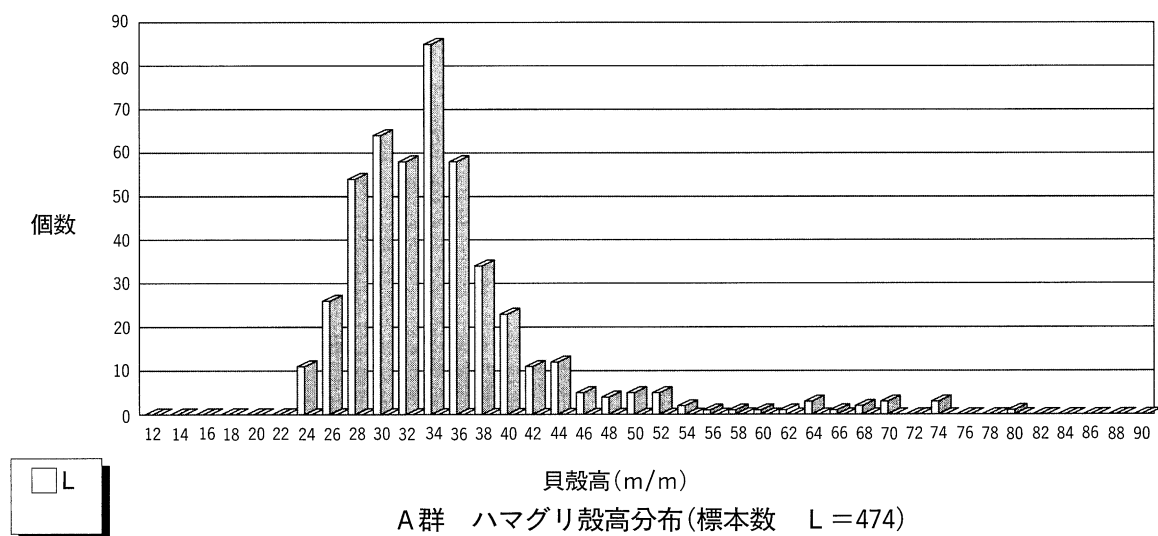
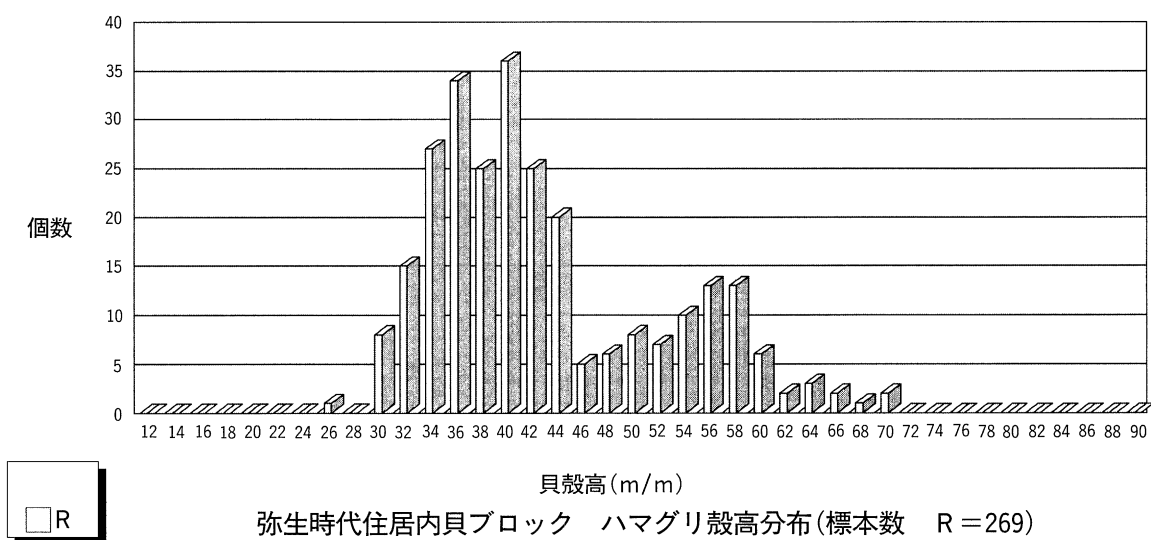
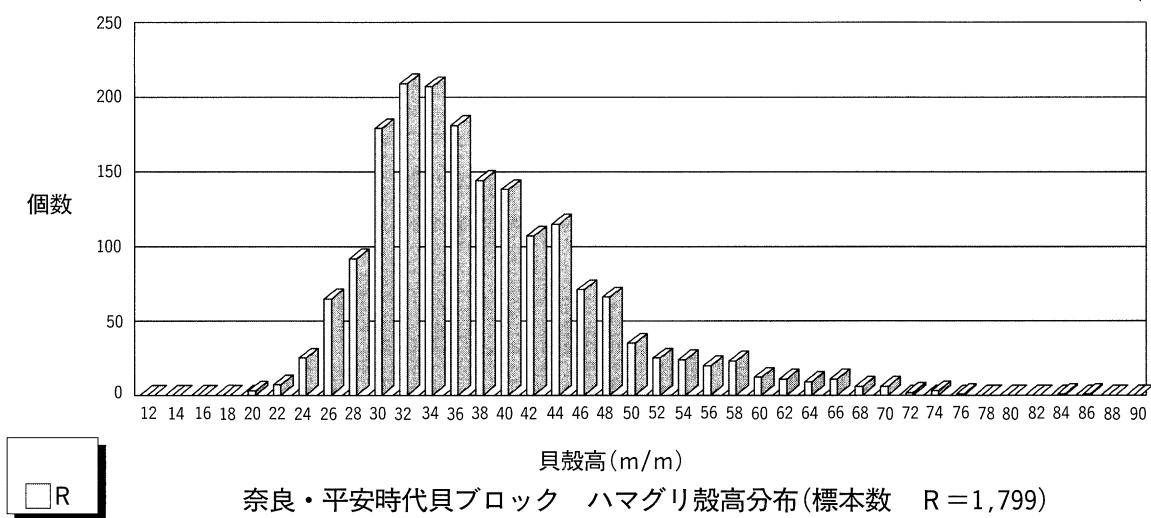
第62図 遺構別貝種組成(7)



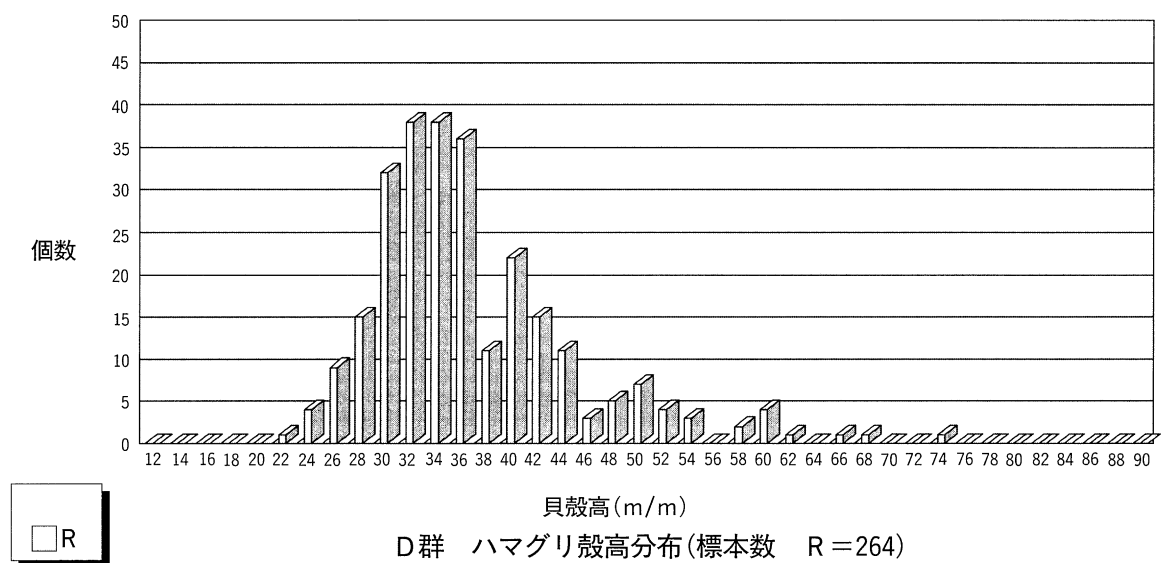
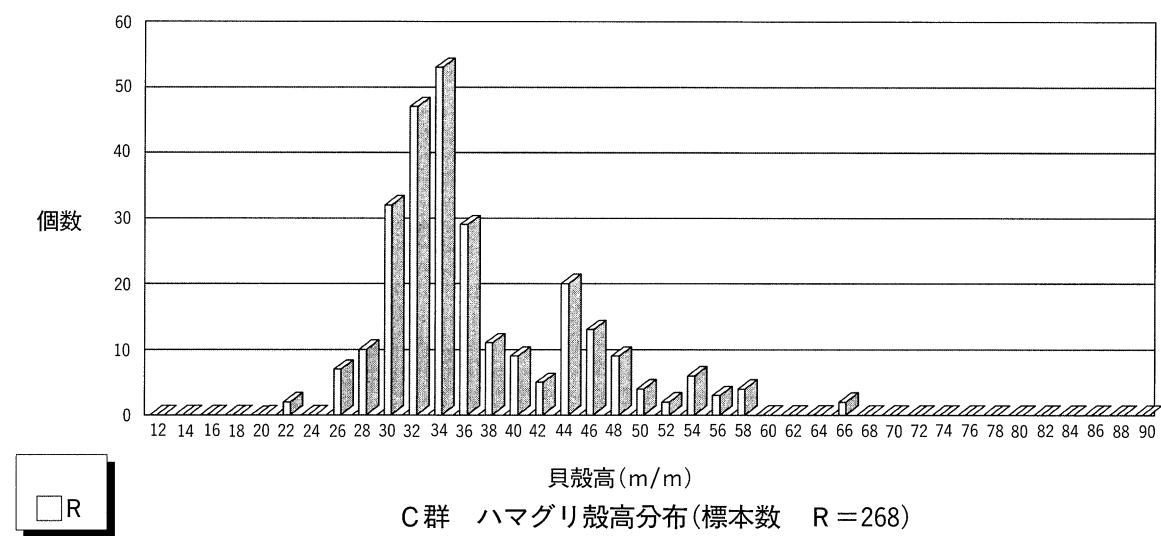
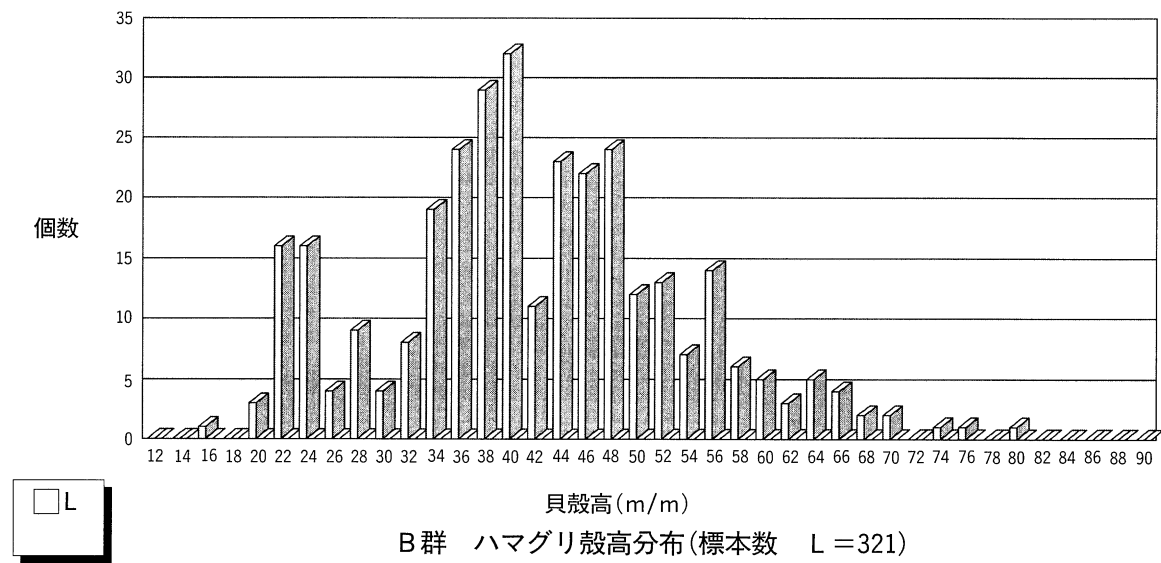
第63図 遺構別貝種組成(8)



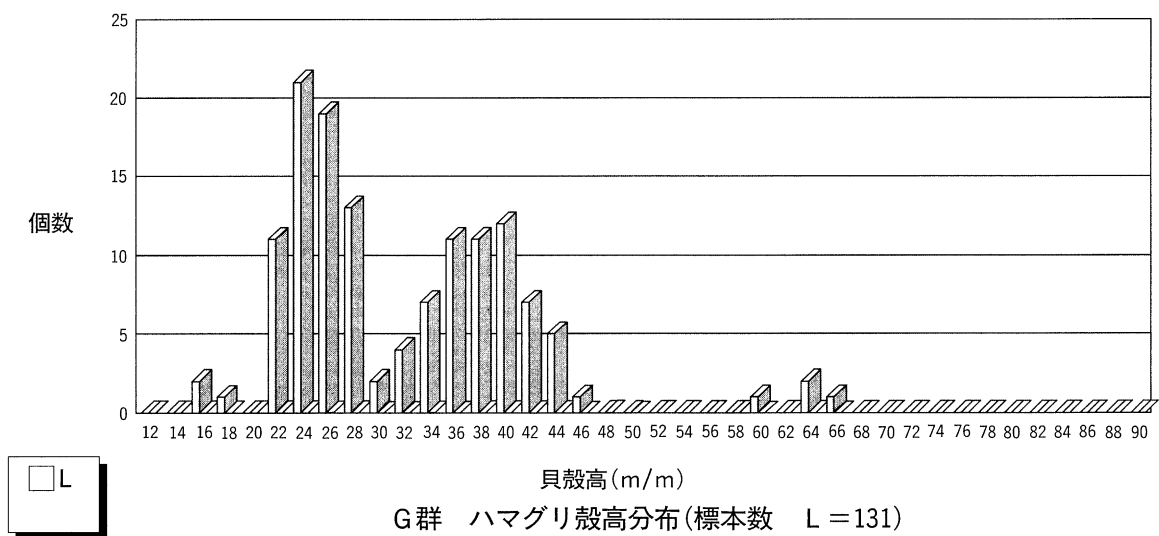
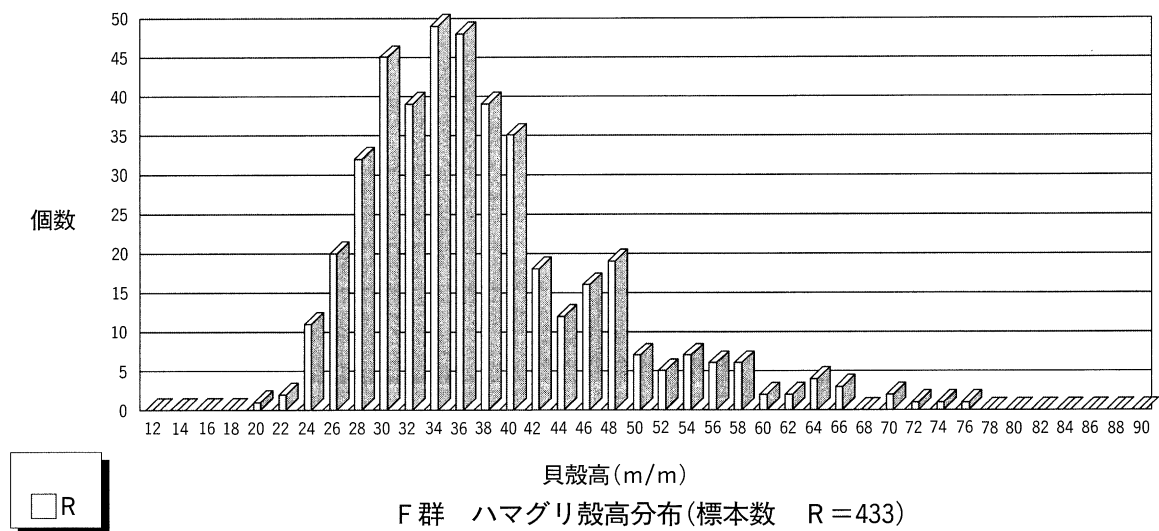
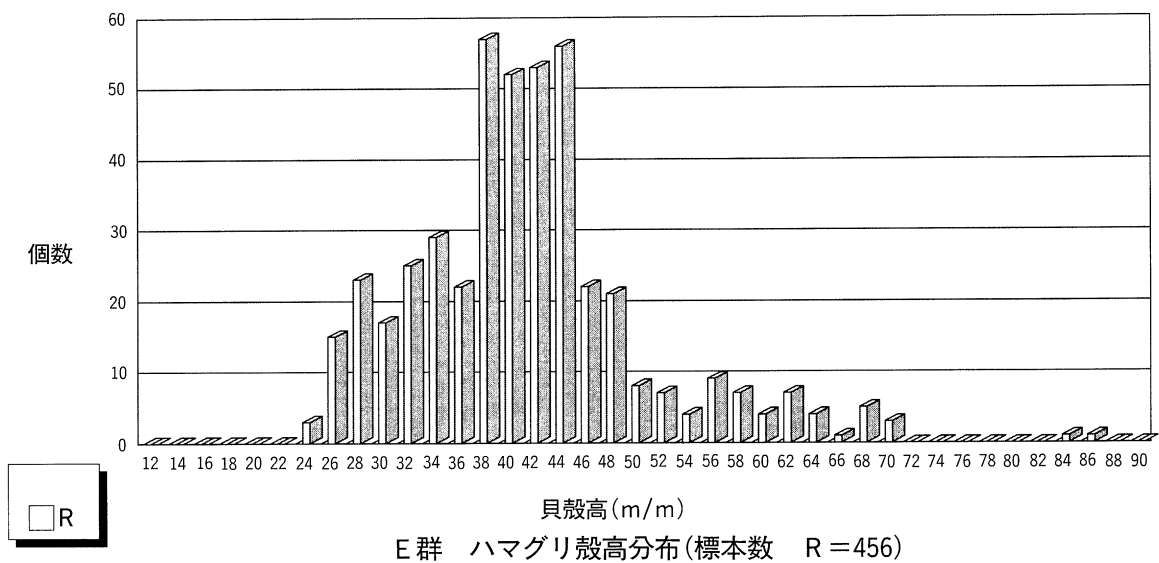
第64図 遺構別貝種組成(9)



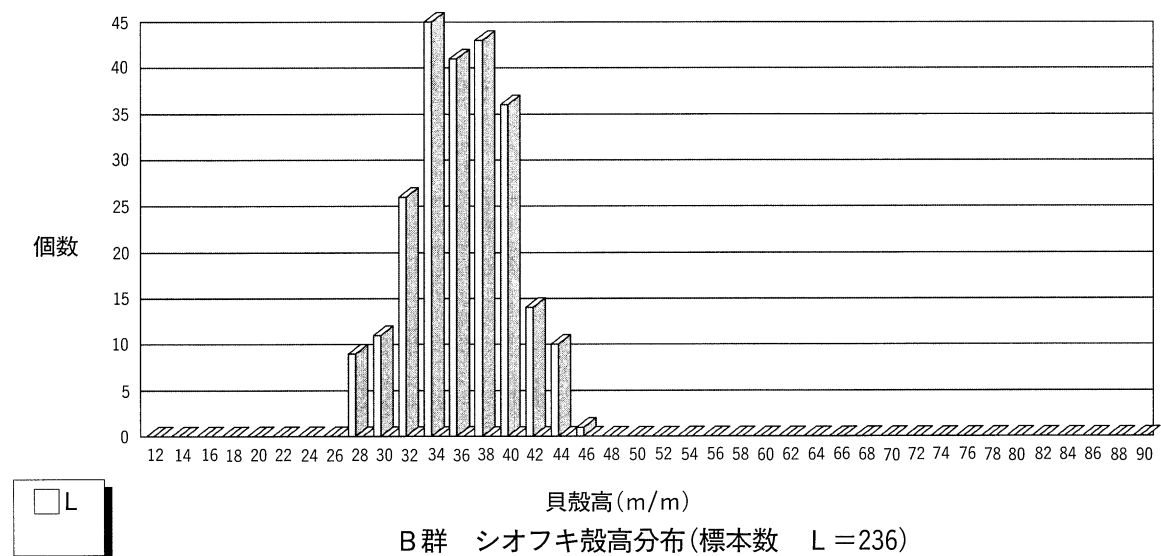
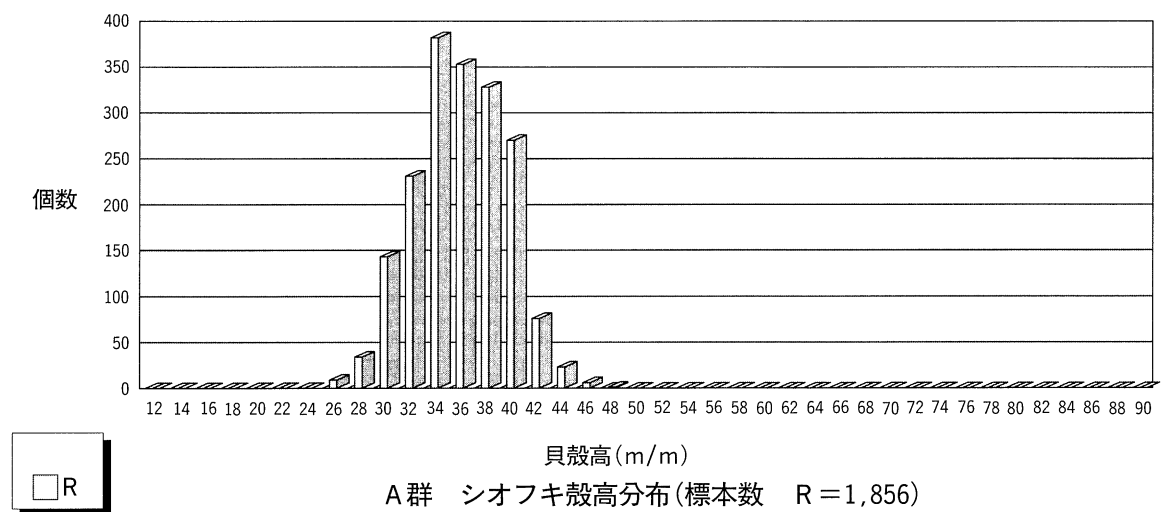
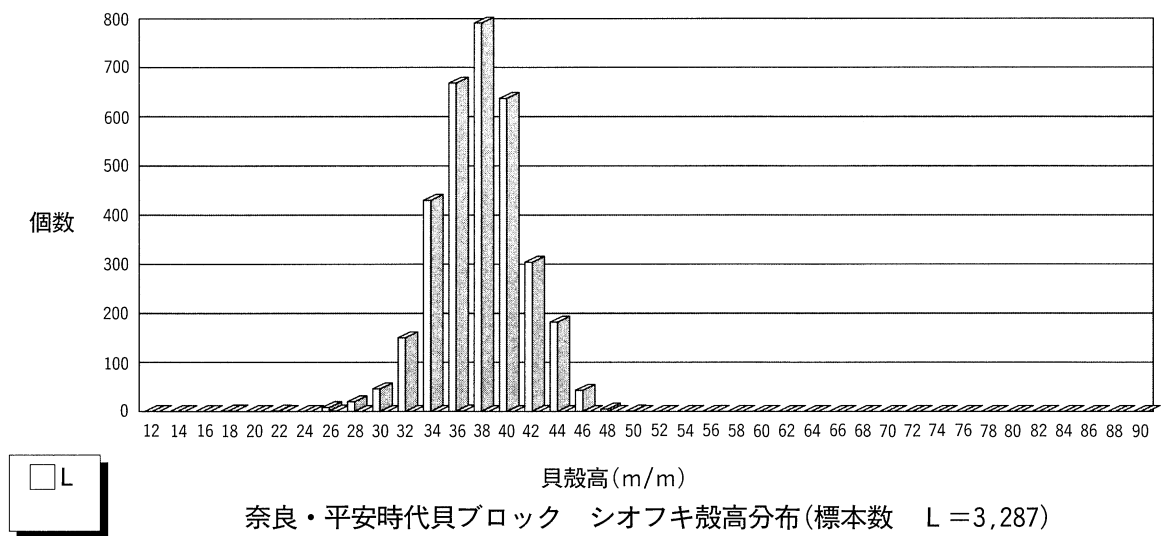
第65図 貝の殻高分布(1)



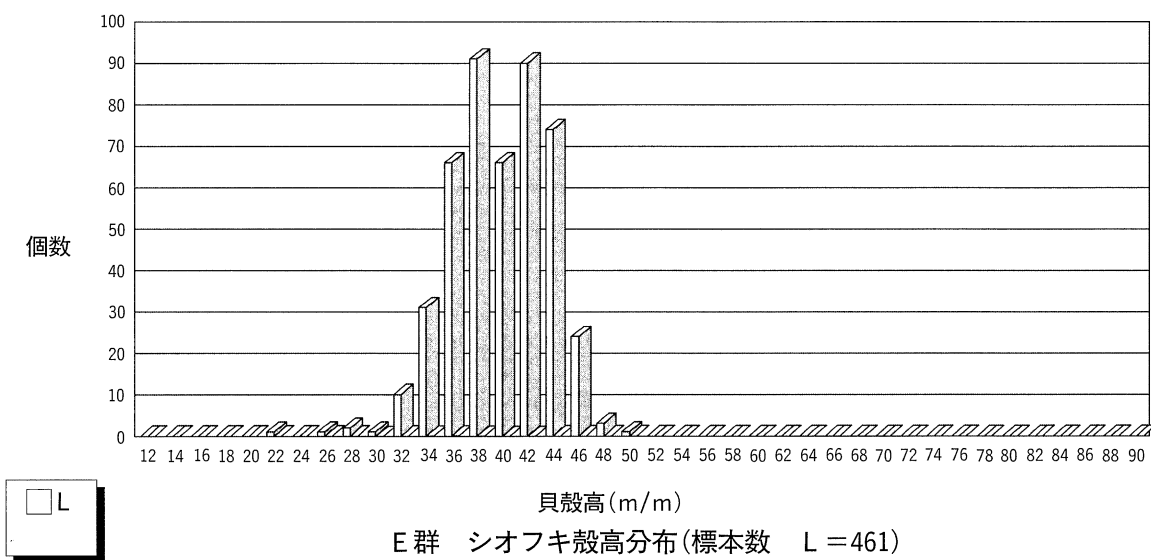
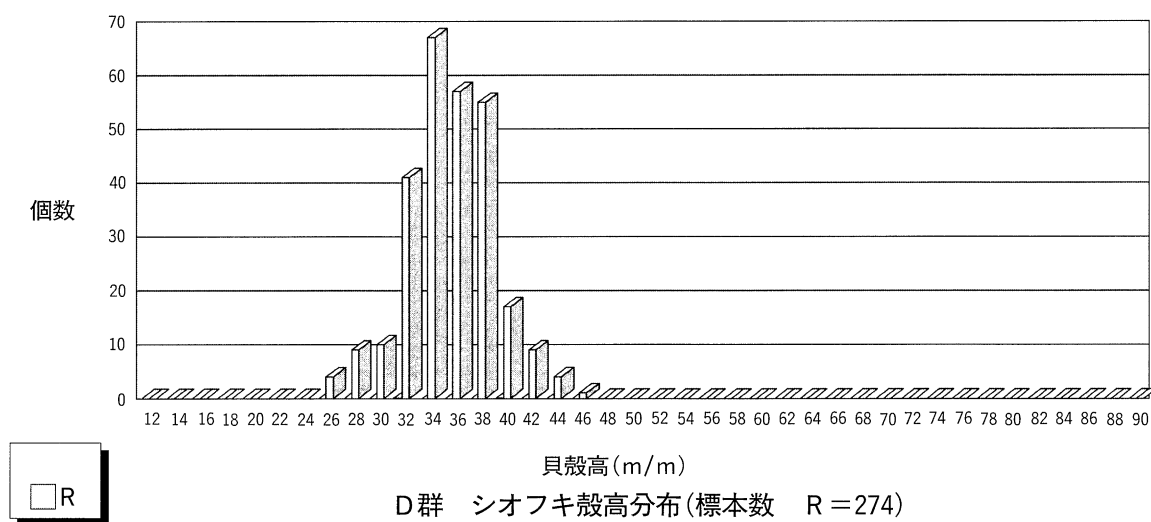
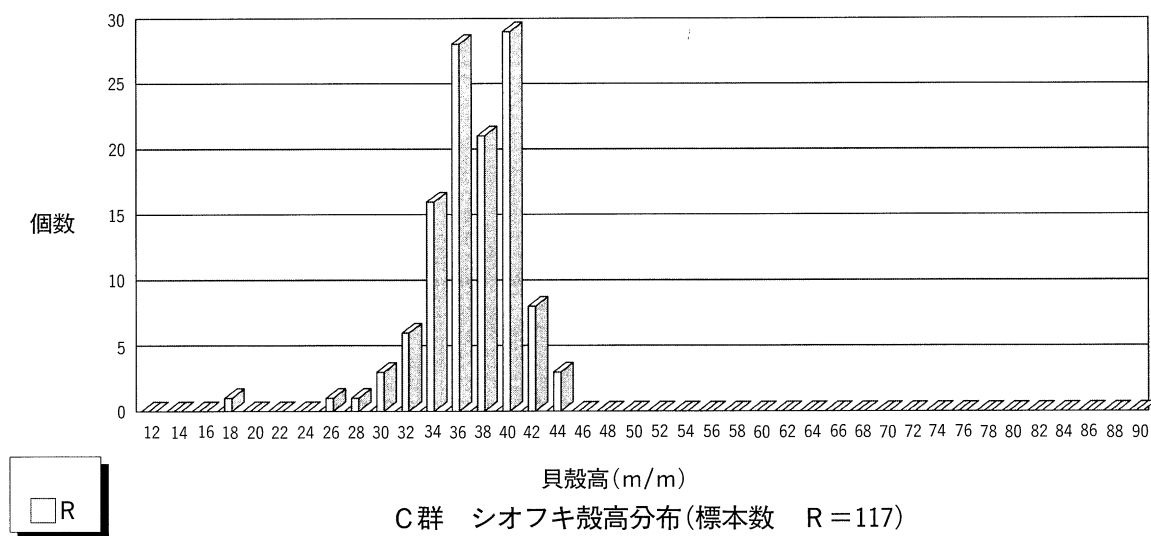
第66図 貝の殻高分布(2)



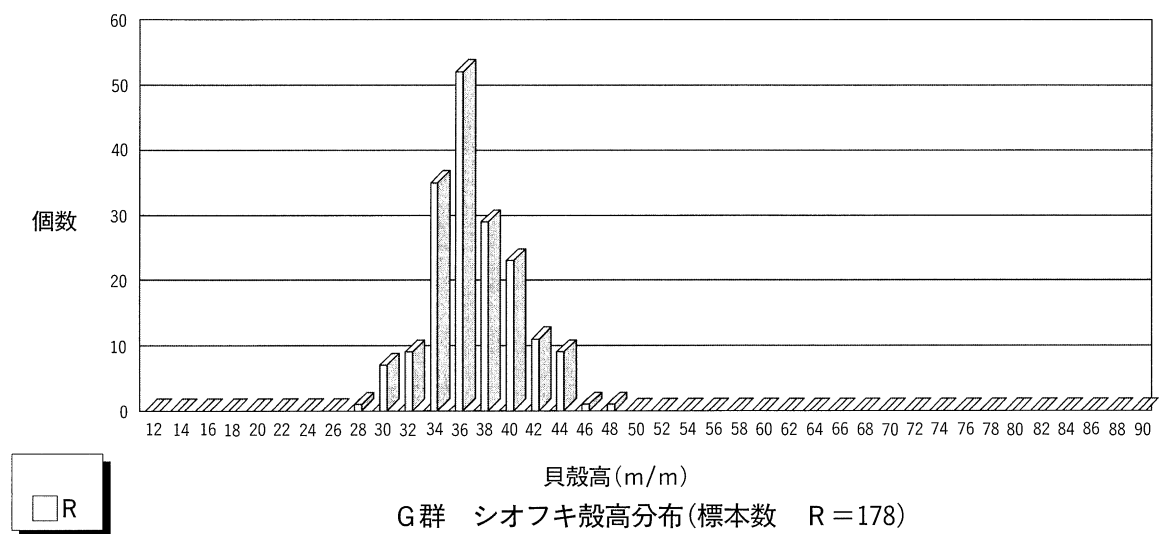
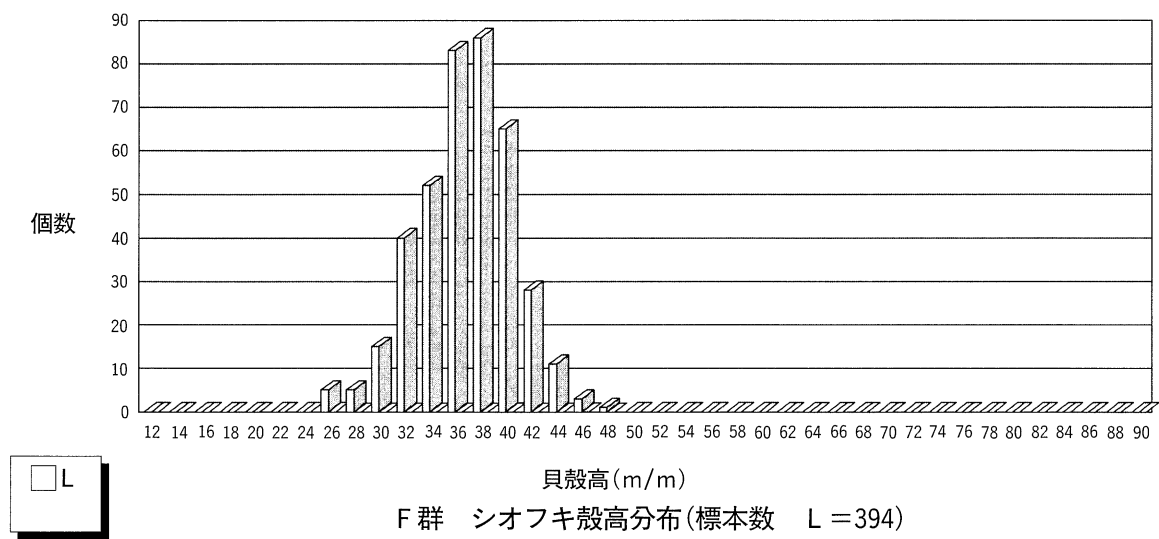
第67図 貝の殻高分布(3)



第68図 貝の殻高分布(4)



第69図 貝の殻高分布(5)



第70図 貝の殻高分布(6)

第5節 その他の遺構

(1) 坊作1号塚および240号土壙（第71図、写真図版92・93）

北西側尾根状台地基部の西側斜面を見下ろすGN、HN区に所在する。調査前の状況では、地表面から径10m前後で約1m弱の高まりが残っていた。坊作遺跡の所在する台地の西側には、円墳6基からなる南向原古墳群が所在することから、当初古墳と想定して調査に入った。調査の結果、盛土した状況ではあるが周溝が見あらず、古墳ではないことがわかった。土層は、ローム土地山の上に暗褐色土の自然堆積層があり、その上からソフトローム混じりの暗褐色土、締まった暗褐色土、ローム土を含む暗褐色土を盛って、高まりを形成している。本来は高さがあったことと思われるが、現状では暗褐色土地山から約90cm程度の高さの盛土を残している。形状については、円形であったか方形であったかは不明である。規模的には13m前後の築成と思われる。

なお、この遺構の東側裾部分から、人を埋葬した土壙(240号)が発見されている。土壙は隅丸方形で、南北方向に長軸を合わせている。規模は、長軸1.5m、短軸1m、深さ60cm程で、壁はほぼ垂直に掘削し、丁寧に仕上げて墓壙を造っている。墓壙内から、成人と思われる1体の人骨が残されていた。人骨は頭部をほぼ北に向け、手で両足を抱え込むようにして埋葬し、そのまま体ごと西に横倒しになった状況である。従って、座棺での埋葬であろう。人骨については、整理時には所在不明であったため、性別、年齢などは不明である。この土壙と塚の関連については、直接的に結びつく要素は確認できないが、埋葬に関係した何らかの施設であったことも考えられる。

(2) 土 坑

64号土坑（第72図、写真図版93）

南東側台地KQ—01、11区に所在する。形状は南北に長い長方形で、長軸5.2m、短軸1.5～1.7m、深さ30cm程の規模を持つ。壁部分は傾斜があり、底面は平坦ではあるが南から北方向に緩やかに傾斜する。底面部分に複数の径25～40cm、深さ50～70cm程の小ピットが不規則に掘り込まれている。どのような性格を持つ土坑かは不明である。

137号土坑（第72図）

国分尼寺跡北辺部溝の北門付近KM—01、02、11、12区に所在する。形状は北東—南西方向に長い楕円形で、長軸3.6m、短軸3.1m、深さ1.1m程度で、底面は2m、幅1mの平坦部を持つ土坑である。壁は乱雑な掘り方で整形はしていない。調査時の記載がないため、時期、性格などは不明である。乱雑な掘り方から考えると、ゴミ穴かあるいは土取の穴であった可能性もある。

138号土坑（第72図）

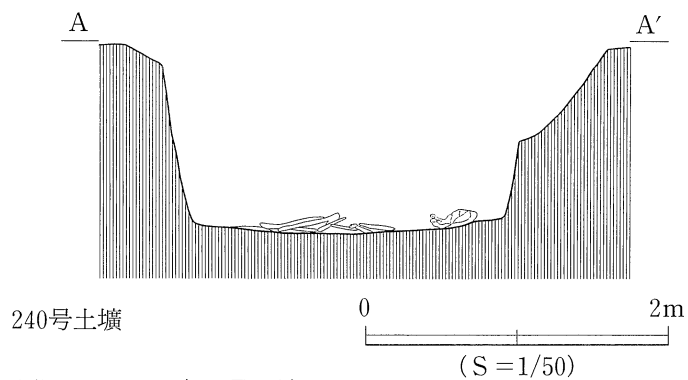
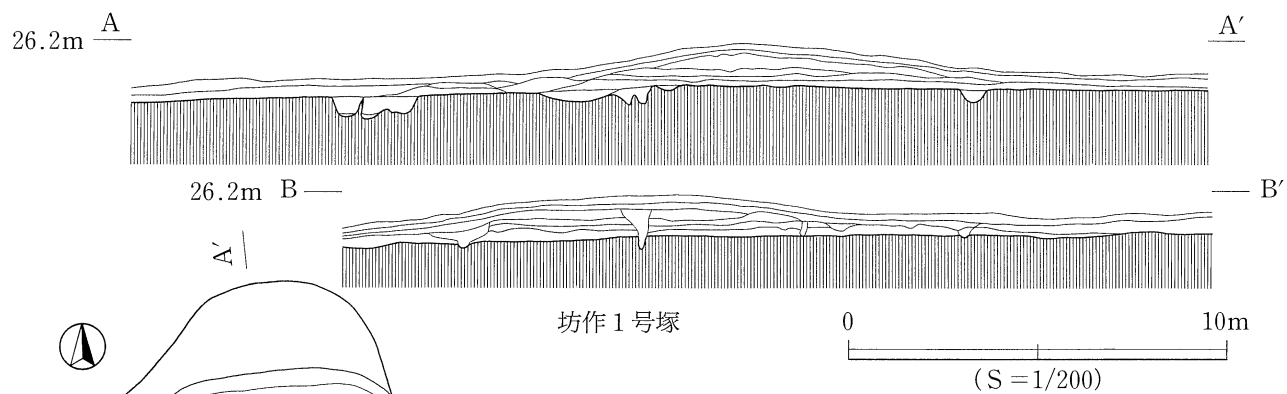
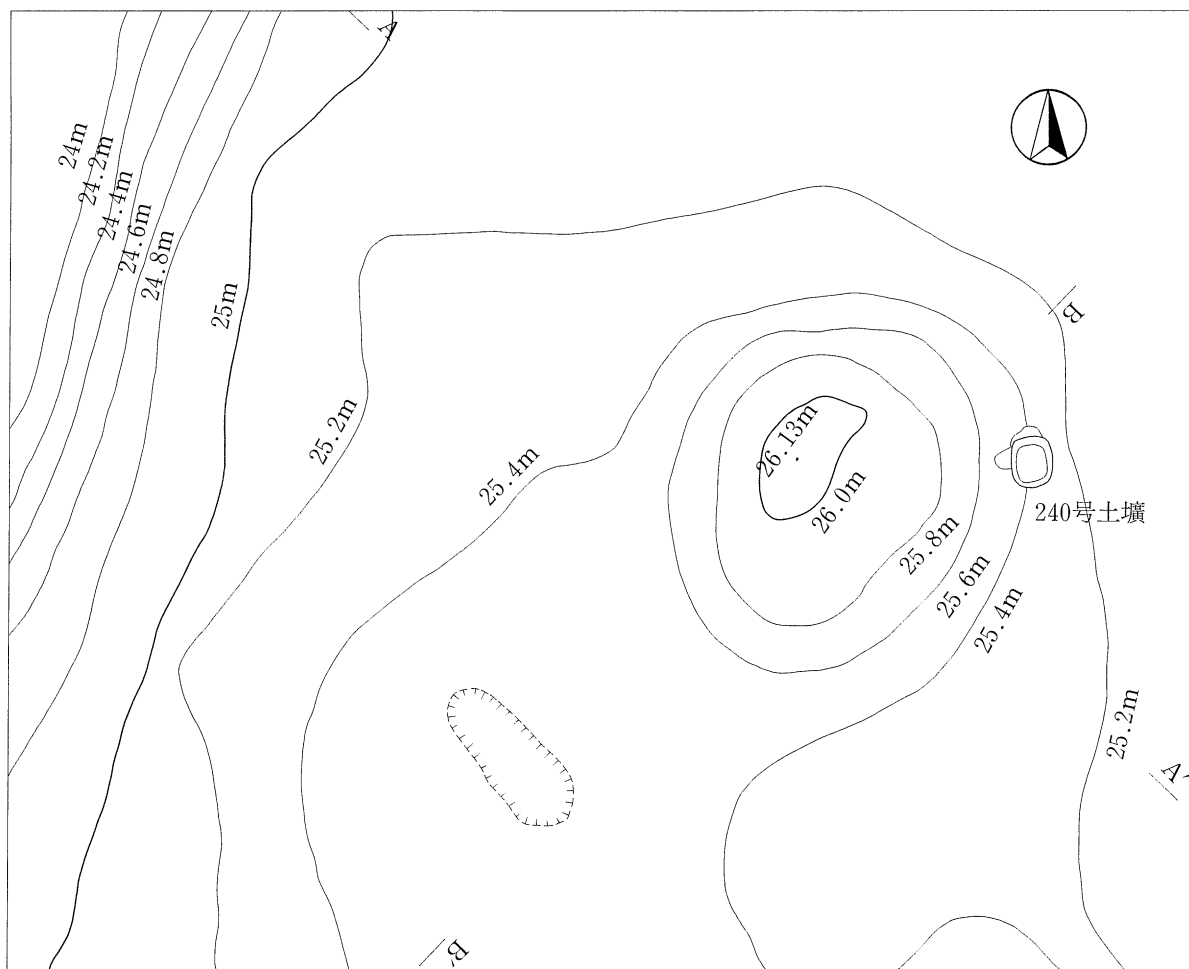
国分尼寺跡北辺部溝の北門付近JM—61、62、71、72区に所在する。137号土坑は南側10m程の所に位置する。形状は円形状で、径3m、深さ1m程度で、掘り鉢状である。壁は乱雑に掘っており、整形はしていない。137号土坑同様、調査時の記載がないため、時期、性格などは不明である。乱雑な掘り方から考えると、ゴミ穴かあるいは土取の穴であった可能性もある。

247号土坑（第72図、写真図版93）

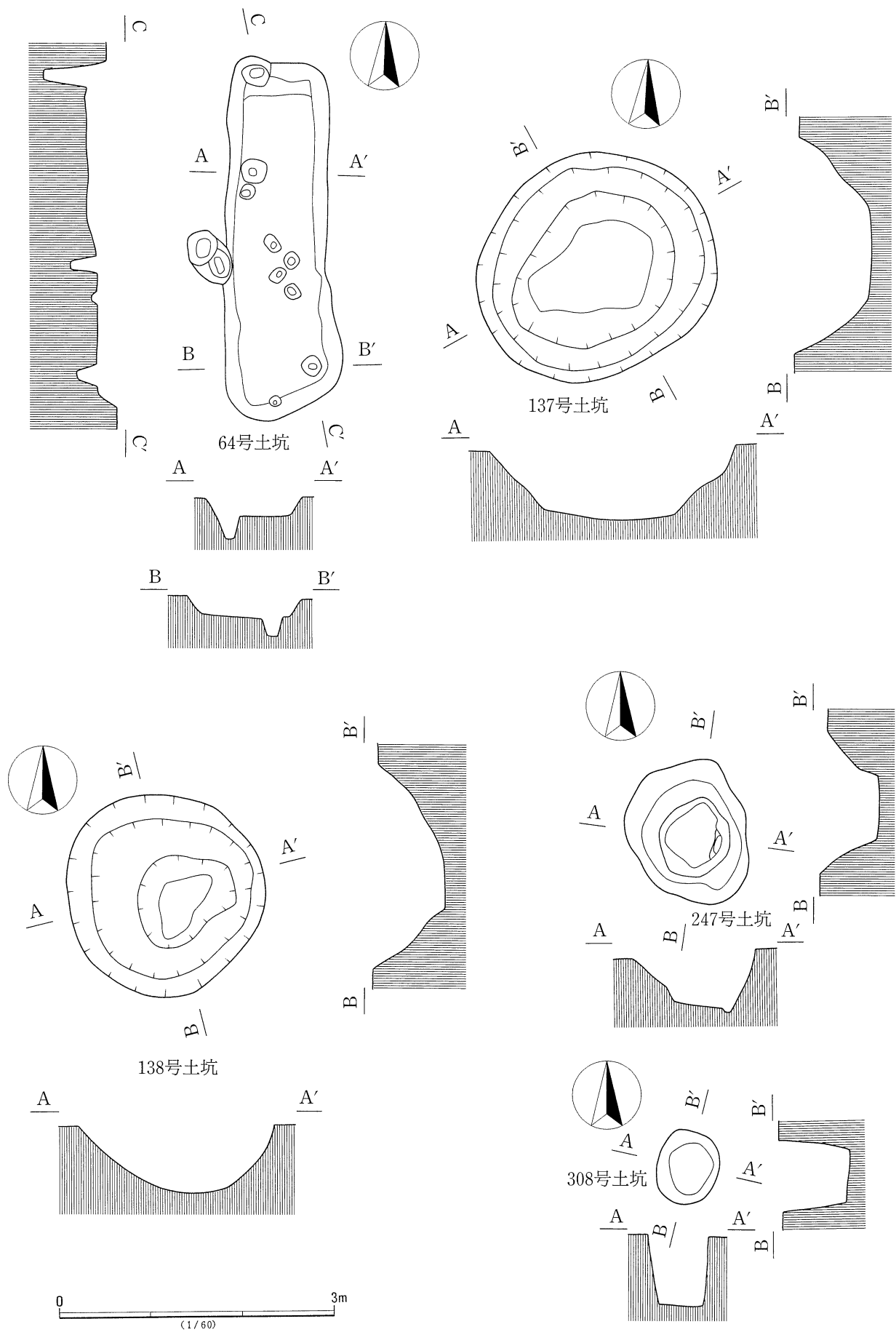
北西側尾根状台地基部の西側部分HN—02、03区に所在する。形状は南北に長い楕円形で、長軸2.1m、短軸1.8m、深さ0.8m程度で、掘り鉢状である。壁は乱雑な掘り方で整形はしていない。時期、性格は不明である。

308号土坑（第72図、写真図版93）

南東側台地LQ—08、18区に所在する。形状は南北方向の楕円形で、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ1m程度のピット状である。壁は垂直に掘り込まれ、底面も平坦である。時期、性格等は不明である。



第71図 坊作1号塚および240号土壇



第72图 64号·137号·138号·247号·308号土坑

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 縄文時代の遺構と遺物

第2節 弥生時代の遺構と遺物

第3節 奈良・平安時代の集落

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 縄文時代の遺構と遺物

検出された縄文時代の遺構は炉穴と陥穴に限られ、竪穴住居跡など定住的な集落の痕跡は坊作遺跡においては希薄であった。炉穴は1基単独のものもあるが、ほとんどが複数の炉を持ち14群を数えた。時期的には田戸下層式の後葉から野島式にかけてであり、台地に占める区域はまとまりがあるものの、時間的には幅があるものと考えられる。炉穴の構造は、全体的に東西方向に長軸をとるものが多く、火床面が西側に位置するものが多い。焼土の堆積は比較的厚く、範囲も円形を呈するものが主である。土器が出土したことによって炉穴の時期を特定することができた。早期の田戸下層式、田戸上層式、子母口式、野島式にわたる土器が伴っており、時期的には幅がある。主体となるのは田戸上層式で、田戸下層式は炉穴の覆土にわずかに混入している程度であり、炉穴の使用時期からは外れている可能性がある。また、鵜ガ島台式土器を伴う炉穴はなく、炉穴の構築も断続的に行われた可能性が高い。台地上の炉穴の位置は、北西の一隅のやや台地が突出した平坦面にまとまっている。ある程度の型式幅があるにもかかわらず、炉穴が一部分にまとまっているという状況からすれば、炉穴が継続的に構築される要因がそこに存在したのと考えられよう。炉穴の構造は1基のものもあるが、数基が切り合うものの方が多く、繰り返し再構築されている。したがって結果として連結しつづけ一見規模が大きな炉穴には見えるが、短期的には数基が同時に使用される方が稀であり、炉穴を使用する集団の規模は、いたって小規模なのではないかと推測される。炉穴はいわゆる屋外炉であり、居住域に伴う遺構であると考えられ、竪穴住居跡がこの炉穴の周辺に営まれた可能性は高いが、今回の調査では1軒も検出されなかった。

陥穴は、102基検出された。形態は、長楕円形を呈し両端の幅が狭く、特に底面では両端が尖り気味になるA型、長楕円形を呈し四方がやや四角く張る形態で、底面形もほぼ検出面形に相似しているB型、楕円形を呈し全体に丸味のある形態のC型の3種である。このうちA型はいわゆる溝型の陥穴で、縄文早期の所産と思われる。坊作遺跡内からはわずかに5基検出されたにとどまり、分布の状況は群を構成せず1基単独の構築である。これに対しB型、C型はⅠ群およびⅡ群とした連続する配置または群を構成しており、特にⅠa群・Ⅰb群に分けられた2つの陥穴群は組織的・計画的に構築されたことは明らかである。また、Ⅱ群とした陥穴群においても台地の北東から入り込む谷頭を囲むように検出されている。これらの群を構成する個々の陥穴は、それぞれの群において単一の形態ではなく、B型、C型の2種類の形態が互いに混在している。このことからⅠ群、Ⅱ群はそれほど構築時期を隔てておらず、しかも同一集団によって構築されたものと考えることができよう。構築の時期は、遺構の性格上土器が伴わなかったことから確定することはできなかったが、縄文時代の陥穴であろうと推測される。

遺跡内から出土した遺物は、縄文土器とわずかな加工品にとどまっている。縄文土器は包含層の遺存状態がよくなかったことから量的には少なく、弥生時代以降の竪穴住居跡などの覆土に混入していたものが割合としては多い。時期は、早期から晩期に及ぶ。早期は撚糸文土器、田戸下層式土器、田戸上層式土器、子母口式土器、鵜ガ島台式土器、前期は諸磯式土器、浮島式土器、興津式土器、中期は五領ヶ台式土器、阿玉台式土器、加曽利E式土器、後期は堀之内式土器、加曽利B式土器、晩期は安行式土器と千網式土器などである。いずれの型式においても量は少なく、早期の土器を除けば微量であったと言える。炉穴に伴う早期の土器は、田戸下層式から田戸上層式が最も多かったが、遺構外の土器は田戸下層式が多く、炉穴出土の土器は田戸上層式が主体であり、若干の齟齬がある。遺構外の田戸下層式は西川博孝氏の3細分によれば新段階から新々段階に位置し、新々段階を主体と

している。第Ⅰ群2類d種の明神裏3式が出土しているが、伴う時期としては出土土器の主体となる田戸下層式新々段階をあてることができるのではないかとと思われる。この他、第Ⅰ群4類のうち第44図100～104の縦位の細かい茎束条痕が密に施され、さらに半截竹管による鋸齒状の沈線文などが施文される例は、類例を見ない。第Ⅰ群2類d種と同様に田戸下層式の新々段階に並行する可能性が高いのではないかとわれ、今後検討が必要であろうと思われる。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

坊作遺跡から発見された竪穴住居跡161軒のうち、弥生時代住居跡は42軒を数える。これらは調査区北側の北東方向に細長く延びる舌状台地上にほぼまとまって占地し広がりは見られない。住居跡の分布状況を見ると、大まかに尾根台地部分の先端部、中央部、基部の三カ所にまとまって分布している。遺構密度はやや先端部分が高く、次に中央部、基部部分はやや散漫な状況である。個々の住居跡は、同時期での切り合い・重複関係はなく、すべて単独で存在している。

概報(註1)で調査者は、「住居址はほとんど床面を貼り床にし、極めて軟弱な住居址が多い。住居構築形態に若干の相違を指摘することができる」と記述している。

(1) 遺物から見た様相 (第9表)

今回整理作業を行った結果、実測図を掲載した遺物点数は114個体で、このうち1個体として取り扱えた遺物の個体数は、甕45、壺50、鉢15、高杯4を数える。このほか破片として載せたものは甕片6、壺片21、鉢片9、土製品1である。遺物がほとんど出土しなかった住居跡は、123号、144号、156号、188号、195号、198号、199号、200号、201号、213号、214号、223号、226号住居跡の13軒を数え、概して出土遺物の少ない住居跡群と言える。この中で比較的出土量の多かった住居跡は、192号、204号、214号、221号、230号住居跡などがあげられる。

甕は、口縁部に輪積痕を残すものや輪積みを頸部最下位に段状に残すタイプが主体的で、半数以上の32個体を占めている。細かく見るならば(註2)、口縁部に4～7段程度の輪積痕を残す甕A類15個体、甕A類の特徴を持ち、輪積みの最下段にキザミを加える甕B類4個体、輪積痕を頸部最下段に段状に残す甕C類6個体、甕C類の最下段にキザミを加えるタイプの甕D類7個体を数える。また、口縁部内面に刺突状のキザミ目をめぐらすものも見られ、古い様相を示すものも見られる(217号、224号)。台付甕は希薄で、脚部片2点のみの出土である。また、中期宮ノ台期の形状を残した長胴形甕も少量見られる(192号、222号、232号)。

壺は、全体のわかるものは少ないが、器形的に複合口縁壺がほとんどと思われる。文様は、頸部～胴部上半に沈線によって区画された斜縄文帯や連続山形文によって施文されるものがほとんどであり、一部網目状文を複合口縁部分(218号、221号、232号)や頸部(229号、230号)に沈線区画で施文するものなどが見られる。網目状文については、軸の確認ができないものもあるが、付加条3種が主体となるものと推定される。山形文は複雑化した複合山形文ではなく、単純な連続山形文のみである。S字状結節文を用いた施文は見られない。なお189号住居跡の壺(1)は、素口縁の壺で口縁部分に8段以上の斜縄文を施している。

鉢は、口縁部分に文様帯を有しており、ほとんどが内彎する形態を示している。このうち174号住居跡(5)、184号住居跡(5)の遺物は折り返し口縁で、折り返し部分下端にキザミを施している。文様帯は沈線区画による3段にわたる単純な交互斜縄文がほとんどを占めている。S字結節文を用いた区画施文は見られない。

第9表 弥生時代住居跡一覧表

遺構 番号	時 代	主軸方位	主軸 類別	主軸×副軸 (m)	面積(m ²)			住居形態	焼失 家屋	柱穴	貯蔵 穴	炉	出入口 施設	実測図掲載遺物					備 考
					確認面	床面	内区							壺	甕	鉢	高杯	砥石	
113	弥生(後・初頭)	N-57°10'-W	A	3.0×2.8	6.73	6.09		不整円形						2 A	1				
123	弥生	N-62°45'-W	A	5.2×4.22	16.63	15.16	5.41	楕円形		○		1	○						張り出し状テラス
129	弥生(後)	N-71°30'-W	A	5.36×4.75	21.02	19.01	5.89	楕円形		○	○	1	○		1				
131	弥生	N-65°10'-W	A	5.5(推)×5.2	20.52	19.68	7.07	不整円形		○									132号住居により一部破壊 される
144	弥生	N-16°40'-E orN-73°20'-W	A	4.2(推)×3.7(推)	12.88	10.44		不明		不明					1				145号住居により2/3を破壊 される
156	弥生	N-68°30'-W	A	3.3×3.2	8.78	7.98		円形			○	1	○						
157	弥生	N-68°20'-W	A	6.5×5.25	30.46	28.28		隅丸長方形		○									2本柱穴
160	弥生(後・前葉)	N-40°15'-W	B	6.82×5.93	34.35	32.19	10.13	楕円形		○	○	2	○	2 A・B	1				焼土
163	弥生	N-38°50'-W	B	3.78×3.26	10.04	8.92		不整円形				1							
164	弥生	N-55°55'-W	A	4.44×3.9	15.88	14.55		隅丸長方形			○	1	○						
174	弥生(後・中葉)	N-42°00'-W	B	4.72×4.69	18.54	17.63		不整円形				1	○	2 C	1				不明土製品
177	弥生(後)	N-61°45'-W	A	3.7×3.7	7.97	7.32		不整円形		不明					1				175号住居により3/5を破壊 される
178	弥生(後・前葉)	N-43°30'-W	B	7.1×6.14	35.41	32.7	9.67	楕円形		○	○	1	○	2 A	2	1			焼土
184	弥生(後)	N-14°30'-W	D	4.42×4.35	16.2	14.8		不整円形		○	○	1			2	1	1		2本柱穴 台付甕
186	弥生(後)	N-37°25'-W	B	4.4(推)×4.2	15.35	14.86		不整円形			○	1			1				
188	弥生	N-49°30'-W	B	2.95×2.9	6.6	5.8		円形				1							
189	弥生(後・中葉)	N-25°30'-W	C	4.18×4.21	15.14	13.33		不整円形	○		○	2	○	1	1				焼土・炭化材多い 素口縁壺
191	弥生(後)	N-51°50'-W	B	10.7×8.5	76.27	68.09	23.15	隅丸長方形	○	○	○	1	○		1			2	焼土・炭化材
192	弥生(後・前葉)	N-61°30'-W	A	10.2×7.82	67.61	64.33	20.48	楕円形		○	○	3	○	2		4	1		
198	弥生	N-11°40'-W	D	4.8(推)×4.35	17.7	17.08		楕円形				1							
199	弥生	N-33°00'-E orN-57°00'-W		2.96×2.4	5.5	4.73		楕円形		○		1							2本柱穴
200	弥生	N-13°00'-W	D	6.3(推)×4.8(推)	25.45	24.9		楕円形				1							
201	弥生	不明		2.95×2.88	6.54	5.3		円形											
204	弥生(後・前葉)	N-38°00'-W	B	5.34×4.97	22.63	20.61	7.23	隅丸方形		○	○	2		5 A・C・D	2	4			住居内貝ブロック 張り出し炉あり 壁際に小柱穴並ぶ
206	弥生(後・前葉)	N-29°50'-W	C	4.5(推)×4.1	15.5	14.61		楕円形	○	不明					1				205・207号住居に1/3を破 壊される 焼土・炭化材
212	弥生(後・中葉)	N-34°10'-W	B	3.62×3.28	9.57	8.8		不整円形	○			1		1	4				住居内貝ブロック 焼土・炭化材
213	弥生	N-10°20'-W	D	2.4×2.3	4.39	3.63		円形											
214	弥生	N-28°30'-W	C	5.06×4.47	18.82	16.99	5.38	楕円形	○	○	○	1	○						焼土・炭化材
215	弥生 (後・前～中葉)	N-0°55'-W	D	7.0×5.75	34.26	31.23	10.24	楕円形	○	○	○	1	○	5 A・C・D	5				焼土・炭化材
217	弥生	N-9°40'-W	D	4.4×3.95	14.29	12.91		楕円形			○	1		2 A・D	1	1		1	
218	弥生 (後・中葉?)	N-29°20'-W	C	5.83×4.85	23.28	21.84	7.89	楕円形		○	○	1		2 A・D	3			3	台付甕
221	弥生(後・前葉)	N-29°30'-W	C	5.6×4.7	22.29	19.18	6.43	楕円形	○	○	○	1		6 A・B	5		1	1	炭化材・発泡土器
222	弥生(後・前葉)	N-25°30'-W	C	5.35×4.22	18.53	16.92		楕円形	○		○	2		1	3	1			底部穿孔甕 焼土・炭化材
223	弥生(後・前葉)	N-24°35'-W	C	4.55×4.0	15.24	13.93		隅丸長方形				1							
224	弥生 (後・前～中葉)	N-40°30'-E		3.95×3.7	13.35	10.43		不整円形			2 ○	1	○	2 D	1				
225	弥生(後)	N-3°30'-W	D	5.1×4.24	17.91	15.96	6.02	楕円形	○	○	○	1	○	1	1				焼土・炭化材多い
226	弥生(後・前葉)	N-21°20'-W	C	4.8×4.1	17.13	15.94	5.88	楕円形	○	○		1		1					228号住居により1/5を破壊 される 焼土・炭化材多い
229	弥生 (後・前～中葉)	N-18°50'-W	C	6.6×5.58	30.14	26.91	9.39	楕円形		○	○	1	○	1 A	1	1			523号建物により一部壊さ れる
230	弥生(後・中葉)	N-1°00'-W	D	5.9×5.35	26.7	24.71	8.12	不整円形		○	○	3		2 C・D	4	1	1	5	
232	弥生(後・前葉)	N-9°00'-W	D	3.72×3.3	10.41	8.57		不整円形			○	1	○	3 A・C	2			1	
234	弥生(後・中葉)	N-4°10'-W	D	6.36×5.24	28.55	26.8	8.12	楕円形	○	○	○	1	○	2 A・D	2			1	住居内貝ブロック 建替え? 貯蔵穴の周囲に堰堤状の 囲い
235	弥生(後・中葉)	N-2°30'-W	D	7.73×6.0	42.14	38.92	9.91	隅丸長方形		○		1	○		2	1			小型鉢 焼土

主 軸 類 別
A N-55°～72°-W
B N-34°～52°-W
C N-17°～30°-W
D N-0°～15°-W

甕 の 類 別
A □縁部分輪積痕
B □縁部分輪積痕+キザミ
C □縁部分最下段のみ輪積痕(有段)
D □縁部分最下段のみ輪積痕+キザミ

高杯については、4点のうち、頸部、脚部、杯部などの断片的な破片のため全体を推定できるものは230号住居跡(4)が唯一である。概して遺物数は少ないが、接合部に凸帯の貼付けやキザミを施すものが多い。230号住居跡(4)は、口縁部折り返しで、沈線区画のした部分に斜縄文で施文する。折り返し部の幅は狭く、下端にはキザミを施す。また杯部は焼成前の穿孔がなされている。192号住居跡(8)は、接合部に帯状の凸帯を貼り付けて斜縄文で施文したうえ、円形浮文を貼り付け竹管文を施す。

遺物から見た様相では、施文は沈線で区画する斜縄文が主体をなしており、S字結節文は見られない。山形文も複雑化せず単純な文様がほとんどであり、全般的に後期の古い時期の様相を示している。細かく見るならば、宮ノ台期の特徴を残す甕などがあり、後期前葉と考えられる遺構も見受けられるが、大きな時期差はあまり認められず、概略、後期前半の範疇で捉えられる。

(2) 遺構から見た様相 (第73～75図、第9表)

坊作遺跡から検出された42軒の住居跡が、すべて一時期の同時並存遺構とは考えにくいものであり、当然微妙な時期差を持って、住居数の増減や移動などを繰り返して集落が変遷しているものと思われる。ただ住居跡から出土した土器が少なく、また時期的にもおおよそ後期前半のなかで収まってしまうため、土器からは明瞭な時期差をとらえることが難しい。

ここでは住居形態などの要素を含めて、遺構から特質や集落変遷が抽出できるか検討を加えたい。

まず、住居形態を見ていきたいが、弥生時代の住居跡の平面形状としては、おおまかに円形・不整円形・楕円形・隅丸長方形があげられる。坊作遺跡の場合、分類すると

円形プラン 4軒 156号、188号、201号、213号。

不整円形プラン 12軒 113号、131号、163号、174号、177号、184号、186号、189号、212号、224号、230号、232号。

楕円形プラン 19軒 123号、129号、160号、178号、192号、198号、199号、200号、206号、214号、215号、217号、218号、221号、222号、225号、226号、229号、234号。

隅丸長方形プラン 6軒 157号、164号、191号、204号、223号、235号。

以上おおまかに分類できる。本遺跡では、楕円形プランが全体の約半数を占め、続いて円形・不整円形状が40%、隅丸長方形形状が15%という割合を示している。

住居の規模を見ていくと最大のものは長軸10mを越え、床面積68.09㎡の191号住居跡(隅丸長方形形状)、床面積64.33㎡の192号住居跡(楕円形状)があげられる。この2軒は、他の住居跡を引き離して突出した大きさを持っていることから、集落内での特殊な位置を占めているものと思われる。最小は径2.4m、床面積3.63㎡の213号住居跡(円形)があげられる。全体的に見るならば9～21㎡あたりにほとんどが集中する。床面積の平均は19㎡あたりになる。平面形態ごとに床面積を見ると(第75図住居形態別床面積)、円形状は最大でも径3.3m、床面積8㎡、平均5～6㎡程度の大きさで極めて小さいことが言える。不整円形状は、ややばらつきがあり、最大で径5.4m、床面積19.7㎡、最小で径3.7m、床面積7.3㎡、平均13㎡あたりの値を示す。楕円形状は、この集落では最も多く見られる主体を占める平面形態である。最大は先ほどの長軸10.2×短軸7.8m、床面積64.33㎡、最小は長軸4.4×短軸4m、床面積12.91㎡で、平均すると長軸6.2×短軸4.8m前後、床面積12.9㎡となる。隅丸長方形形状は、形態別では最も規模があり、最大は長軸10.7×短軸8.5m、床面積68.09㎡、最小は長軸4.6×短軸4m、床面積13.93㎡、平均長軸6.6×短軸5.4m前後、床面積31㎡である。概して円形・不整円形類は規模が小さく、楕円形、隅丸長方形形状の順に規模の

値が大きい。特に隅丸長方形形状の住居跡は、中期宮ノ台期以来の平面形態で一般的に大型である。その後、平面形態は長方形形状から正方形に近い形状へと推移して、大型から規模を減じて縮小していくことが看取される。

次に、貯蔵穴や出入口梯子穴などの住居内施設について概略する。まず、貯蔵穴については42軒に対して、23軒の住居跡から検出されている。平面形態別に見ていくと、橢円形状の住居跡からは半数以上の13軒、隅丸長方形形状からは3軒、円形状からは1軒、不整円形状から6軒である。これは、橢円形状の住居跡数の約7割、隅丸長方形形状の住居跡数の5割を占める結果になる。貯蔵穴の形状は約6割が四角形で、あとの4割が円形・橢円形を占める。平面規模を見ると、最大が80cm程度、最小が40cm程度で、50cm前後が平均的な大きさである。深さは最大で70cm、最小で15cm、平均30cm程度である。設置された位置は、ほとんどが炉と反対側で、長軸方向に対して右下の壁際、方位でいうと住居の南から南東側壁際に固定されている。この付近は、ちょうど出入口施設の右側あたりに該当する。貯蔵穴施設に関連して、234号住居跡からは、方形形状の貯蔵穴の周りを幅40cm、高さ5cm程度の半円形に土を持った凸堤状の「馬蹄形遺構」(註5)が取り囲んでいる。このような遺構は、貯蔵穴を何らかの意味合いで保護するためのものであろう。それほど多くは見られないが、弥生時代から古墳時代初めにかけて散見される施設である。次に、出入口施設については42軒に対して18軒の住居跡から検出されている。平面形態別に見ていくと、橢円形状の住居跡からは半数の9軒、隅丸長方形形状からは4軒、円形状からは1軒、不整円形状から4軒である。これは、橢円形状の住居跡数の約5割、隅丸長方形形状の住居跡数の2/3を占めている。形状は約5割が長方形で、あとの5割が円形・橢円形を占める。平面規模を見ると、長方形形状のものが最大で60cm、40cm前後が平均的な大きさである。深さは30cm程度のものである。位置は、ほとんどが炉と対向しており、南から南東側の壁からやや離れたところに見られる。234号住居跡のものは、支柱穴を結んだ中央に位置している。191号、214号、224号住居跡のものは、掘形が住居跡外側方向から内側に向かって斜めに掘り込まれている。板状の梯子を斜めに掛けて、この穴で固定したものと思われる。掘形の幅は、40～80cm前後で深さ40cmほどである。

このほか、施設での特徴のあるものについては、123号住居跡の長軸の両壁際に幅25cm程度、長さ2.7mの張り出したテラス状の平坦面が見られる。また204号住居跡では、住居跡壁枠から半円形状にはみ出した平坦面を作り、そこに炉を造り出している。

最後に、住居の方向を取り上げ、その方位の違いから時期的な変遷が追えるのか、あるいは集落の特性が読みとれるかを検討してみたい。なお、住居方位は、炉の有無、住居長軸方向との兼ね合いから、この軸と座標北(註3)のなす角度を主軸方位として取り扱っている。

計測の結果、主軸がある程度の幅のなかに収まる住居群を抽出したところ、おおそ方位性で4グループのまとまりをつかむことができた(第75図住居主軸方位)。

A群主軸方位 N—72°～55°—W のグループ

B群主軸方位 N—52°～34°—W のグループ

C群主軸方位 N—30°～17°—W のグループ

D群主軸方位 N—15°～0°—W のグループ

A群 10軒 113号、123号、129号、131号、144号、156号、157号、164号、177号、192号。

B群 9軒 160号、163号、174号、178号、186号、188号、191号、204号、212号。

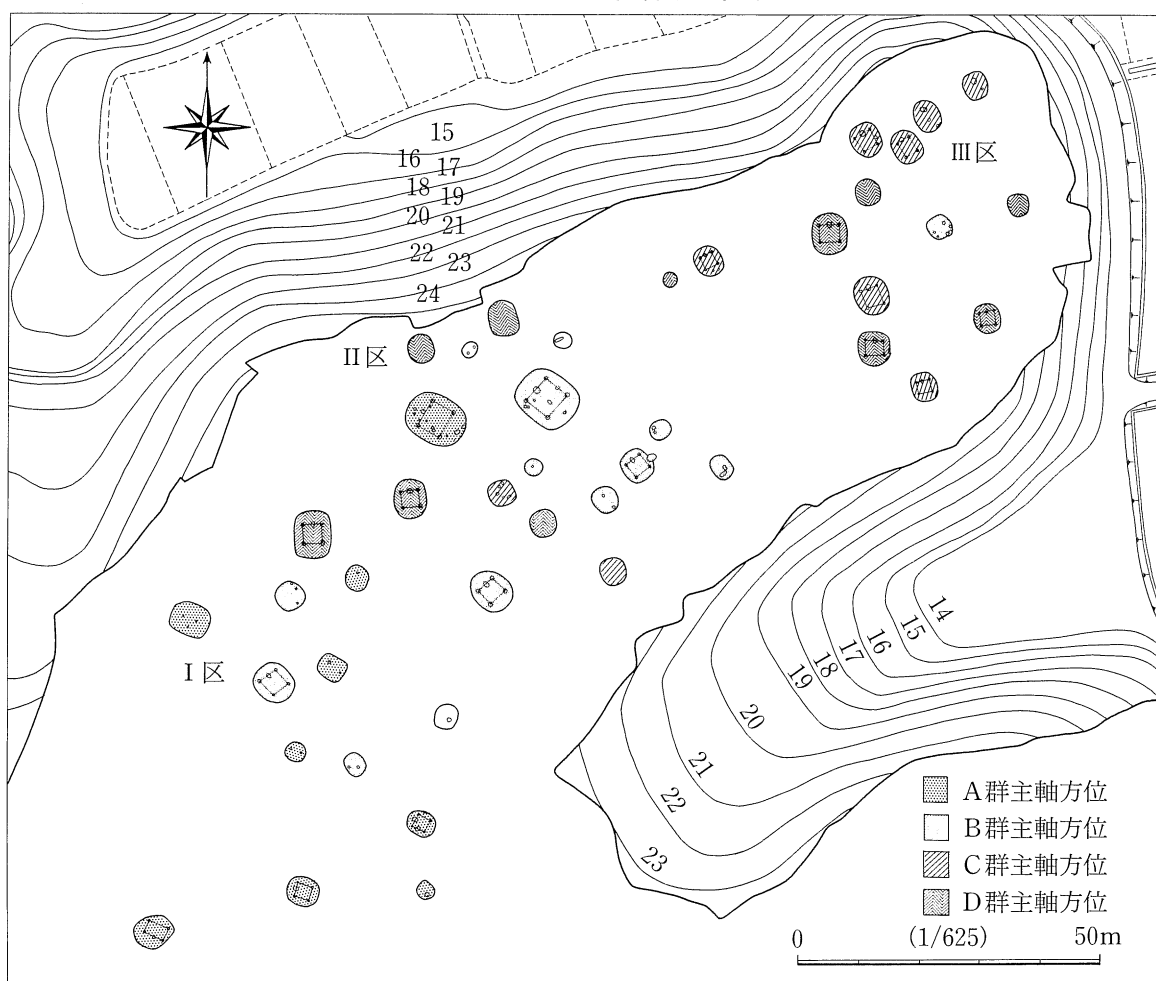
C群 9軒 189号、206号、214号、218号、221号、222号、223号、226号、229号。

D群 11軒 184号、198号、200号、213号、215号、217号、225号、230号、232号、234号、235号。

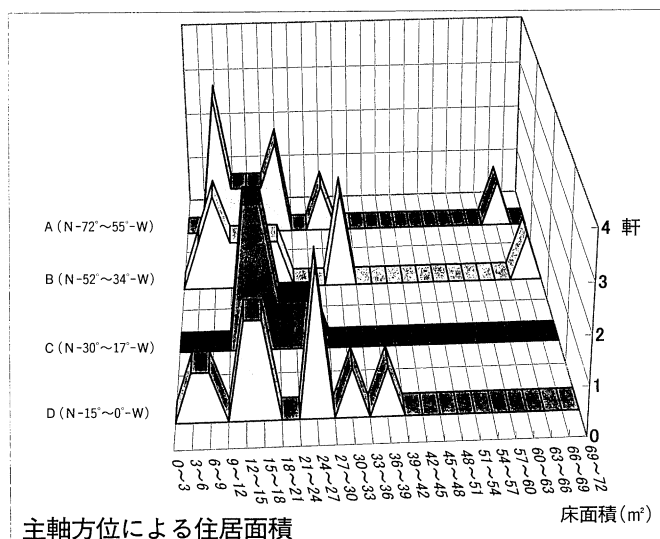
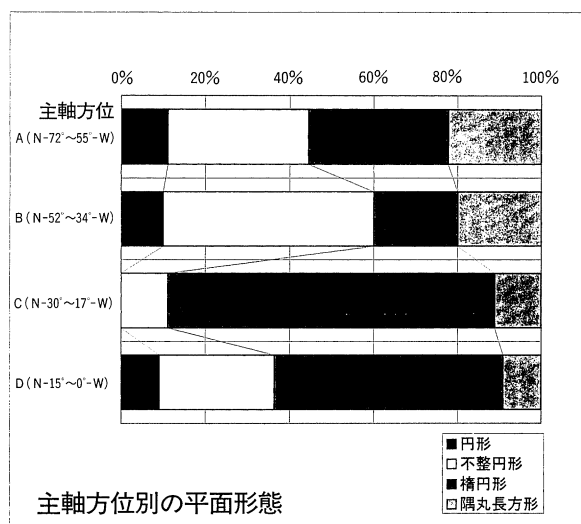
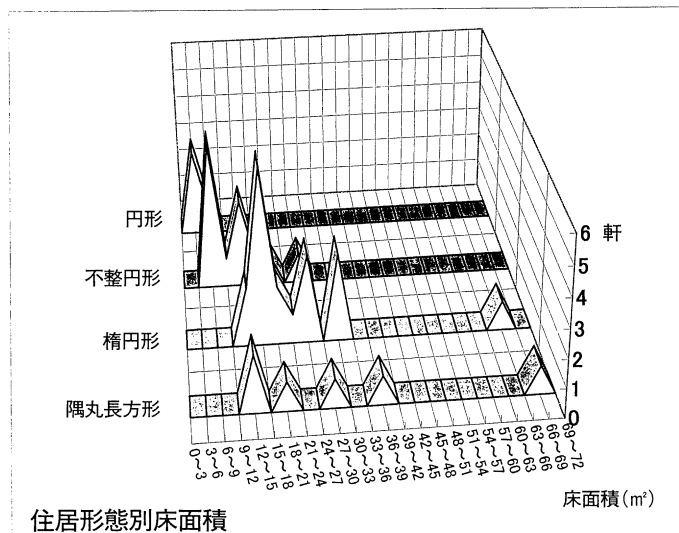
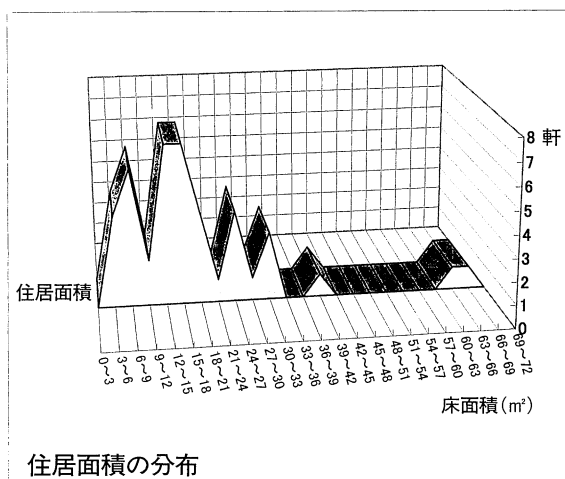
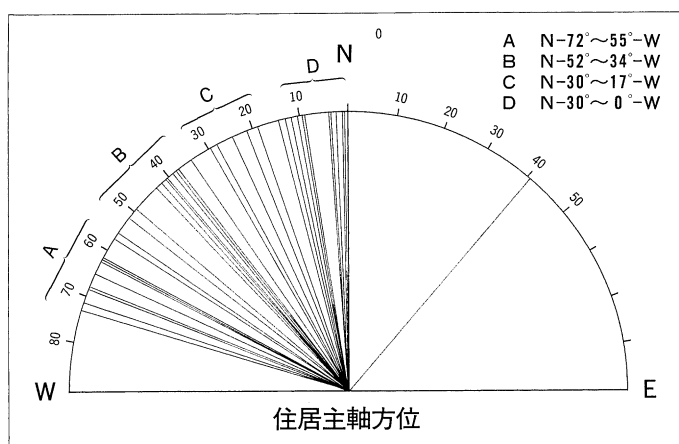
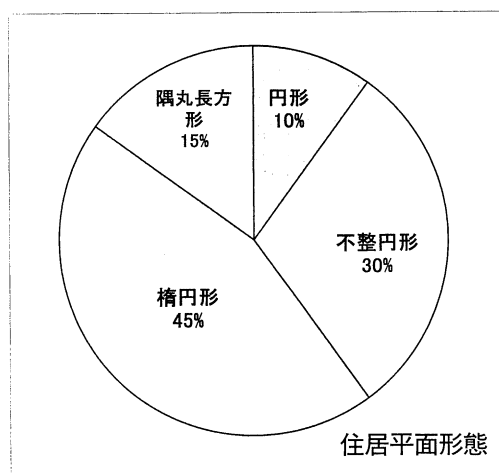
A群からD群という主軸方位の動きは、西から北西、北へと移動している。この主軸方位の動きとともに、住



第73図 弥生時代住居跡分布図



第74図 主軸方位による分布図



第75図 弥生時代住居跡分析グラフ

居の占地もおおまかに尾根状台地の基部から突端方向へ移動しているようにうかがえる。A群のまともは尾根の基部台地を中心としてやや中央にかけての範囲(I区)、B群は尾根中央部(II区)、C群は尾根突端部(III区)へと移動し、D群はC群付近のやや南側と中央部のB群付近の北側との2地区に分かれるという動きが見受けられる。群のなかでは、お互いの住居は重複することなく、無造作に造られているわけではない(第74図)。そもそも、住居の主軸方向はその集落内において無秩序に決定されるものではないという前提に立った場合、それが集団内の規制として働いているのか、またそれが実体として同時期性を表しているのかを見極めることは、個々の例にあたって検証することになる(註4)。このことから、中央部(II区)に占地している群のなかでA群192号住居跡、B群191号住居跡と明らかに方向性の異なるD群184号住居跡、234号住居跡の各々の出土遺物を取り上げて見ると、各住居跡とも基本的には沈線区画の斜縄文を主体とした文様構成である。ただ192号住居跡遺物のうち長胴形甕の器形や調整にハケ・ナデが残っていることなどを考慮するならば、後期前半でも古い部類に含まれる様相が見てとれ、本遺跡の弥生時代住居跡の中でも当初の遺構ともとれる。一方、234号住居跡や184号住居跡の遺物は調整や器形など前者に比較してやや新しく捉えることが可能と考えられる。同様に突端部(III区)について見た場合、C群221号、222号住居跡などの主軸方位が近い群の住居跡と明らかに方向性の異なるD群の230号、215号住居跡を比較して見ると、明瞭な差は見られないものの前者の群が、やや古い様相の感じを受ける。主軸方位の明らかに異なる住居跡を取り上げて、該当する住居跡の出土遺物を比較したところ、主軸方位の同一あるいは異なるということは、その住居跡の时期的な差を表している可能性が高いことが推測できる。少なくとも、中央部分のII区に所在する明らかに主軸方位が異なった住居跡からは2時期の集落変遷を追うことができ、また突端部分のIII区についても同様と思われる。ただ、II区・III区のもの进行比较した場合、同方位の住居跡が時期の同一性を持っているかどうかは速断できない。また、群として分類した住居跡すべてがそうであるとも言い切れないことも充分考えられるところである。また、A群からD群という主軸方位からの変遷を、そのまま時期の変遷として捉えることは、確実性はないが、ある程度は考慮できる部分を持っている。少なくともA・Bの群はD群より先行すること、C群はD群に先行する傾向が見られる。集落の形成の様態から推測すると、II区の群のうち、当初と考えられる住居跡は方向性を主体に、それに遺物の様相・住居の大きさなどを加味して見るならば、少なくとも192号、191号住居跡などの大規模な住居跡を核として、178号、160号、204号住居跡は同時期性を求めることが可能と思われる。基部に所在するA群とした方向性の住居跡は、規模の小ささや出土遺物の少なさから判断を保留したい。また北方向に近いDとした一群のなかでは234号、235号、198号住居跡あたりは同時期性を求めることが可能であろう。

ここで、焼失住居について取り上げて見ると、ほぼ確実に焼失したと考えられる住居跡は11軒が確認でき、全体の1/4を占めている。このほか、焼土が床面に残るものの焼失と判断できない住居跡は3軒、160号、178号、235号があげられる。11軒の焼失住居を先ほどのA～D群の主軸方位で便宜的に振り分けてみると、A群は該当なし、B群は191号、212号住居跡の2軒、C群は189号、206号、214号、221号、222号、226号住居跡の6軒、D群は215号、225号、234号住居跡の3軒が該当する。特にC群に該当する住居跡は、9軒中6軒と2/3が焼失していることになる。また焼失住居からの出土遺物が少ないことなどから、不慮の災害というより住居廃絶するに際して、家屋を焼失・廃棄したものと考えられる。

(3) まとめ

本遺跡での弥生時代住居跡群は、出土土器の様相などから最も遡れる時期として後期初頭、新しい様相でも後期前半(新)の範疇に含まれるものであり、後期後半には下らないことがおおそ推定することができる。これら

の状況を踏まえると、当該集落は、過去にまったく集落が営まれたことはなかったこの舌状の尾根台地部分に、他からの移住(分村という要因か)という形で、まず尾根の中央部に数軒程度の住居が造られ集落が営まれるようになったものと推定される。その後、住居の移転などから周辺、おそらく突端部分に集落が移動していったという可能性を指摘することができよう。このことは、A～D群という主軸方位の違いを時期差と考えて分類した状況から、少なくともA群またはB群とD群、C群とD群という異なる主軸方位で分けられるうちの何軒かについて、土器の様相で判断した場合に新古に分けることができ、最低2時期か3時期の集落変遷を追うことができる。また焼失住居の様相から、故意による住居の焼却・廃棄、そして移動という行動が予想されるところである。従って、本遺跡での42軒の弥生時代住居跡は後期前半代という限られた時間また空間のなかで、2～3時期の集落変遷をみた後、集落の永続をやめ、新たな土地に移住していったことがうかがえる。

ここで、参考までに本遺跡周辺の弥生時代集落を見ていくと、北東側の台地縁辺部分の南向原遺跡では、後期前半ころの住居跡が3軒確認されている(註6)。また南側の国分尼寺の尼坊周辺からは、後期初頭に当たる住居跡が十数軒発見されている(註7)。さらに尼寺の西門あたりから南にかけての祇園原貝塚一帯からは、中期宮ノ台の時期の住居跡が23軒、後期1軒、後期末葉7軒が発見されている(註8)。これらの遺跡は、本遺跡から100～300mの範囲内に所在していることから、本遺跡と何らかの関連を持っていると考えている。

いずれにしても、未整理の遺跡が多いことなどから、本遺跡の弥生時代集落の位置づけは、今後周辺の遺跡も含めて国分寺台遺跡群の整理が進展していくなかで検討すべき課題と考えている。

註

- 註1 須田 勉 『坊作遺跡発掘調査概要』 上総国分寺台遺跡調査団 千葉県市原市教育委員会 1976.3
須田 勉 『上総国分寺台発掘調査概要 IV 坊作遺跡の調査』 上総国分寺台発掘調査団 千葉県市原市教育委員会 1977.3
- 註2 「甕形土器の様相から見た君津地方の小地域性」 共同研究「君津地方における弥生後期～古墳時代前期の諸様相」『君津都市文化財センター研究紀要』VII 財団法人君津都市文化財センター 1996.3
分析によると、甕A類の出土量は東京湾岸の臨海性の遺跡に共通性が見られること、また臨海部でも君津地方南部地域に多く、逆にC・D類は北部地域に多い傾向を示すという。
- 註3 公共座標の北を表す。坊作遺跡の座標北(GN)は、真北(TN)方向から約10'30"東偏する。
- 註4 大村 直 『下鈴野遺跡』 財団法人市原市文化財センター 1987.3
- 註5 大村 直 『市原市叶台遺跡』 財団法人市原市文化財センター 1991.3
- 註6 田中新史ほか 『南向原』 上総国分寺台遺跡調査報告II 市原市教育委員会 1976.1
- 註7 未整理。註6の『南向原』報告書中「5. 上総国分尼寺跡(002)北辺部の調査」に概要が記載されている。
- 註8 忍澤成視 『祇園原貝塚(本文編I)』 上総国分寺台遺跡調査報告V 市原市教育委員会 1999.3

参考文献

- 市毛 勲・須田 勉 『蛇谷遺跡』 上総国分寺台遺跡調査報告IV 市原市教育委員会 1977.3
- 田中清美・鈴木英啓 『唐崎台遺跡 千葉県市原市能満唐崎台における弥生時代後期の集落址の発掘調査』 市原市教育委員会 1981.3
- 大村 直・菊池健一 「久ヶ原式と弥生町式—南関東地方における弥生時代後期の諸様相(予察)」『史館』第16号

史館同人 1984.

山口直樹 『小田部新地遺跡』 財団法人市原市文化財センター 1984.3

小沢 洋 『小浜遺跡群II マミヤク遺跡』 君津郡市文化財センター発掘調査報告書第44集 財団法人君津郡市文化財センター 1989.3

大村 直 『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』 財団法人市原市文化財センター 1991.3

諸墨知義 「小櫃川流域における後期弥生土器について—マミヤク遺跡を中心として—」『君津郡市文化財センター研究紀要』VI 財団法人君津郡市文化財センター 1993.3

田中清美 「唐崎台遺跡の竪穴住居跡等の編年試案」『市原市文化財センター研究紀要』II 財団法人市原市文化財センター 1993.3

大村 直 「東京湾東岸における土器編年と集落の動態」『シンポジウム 2 東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993.10

小高春雄 「千葉県における弥生時代後期土器の地域性について」『研究紀要』16—20周年記念論集— 財団法人千葉県文化財センター 1995.3

第3節 奈良・平安時代の集落

(1) 坊作遺跡における土器の変遷 (第76～97図、第10表)

① 坊作遺跡出土土器の様相

今回の整理作業にあたって、遺物については実測できるものは可能な限り実測を行った。土器については実測点数1,487点を数える。内訳は土師器1,064点、須恵器406点、灰釉陶器14点、三彩・緑釉陶器などの施釉陶器2点である。割合から見ると土師器が全体の71.6%、須恵器27.3%を占めている。灰釉陶器や施釉陶器などは、隣接に上総国分尼寺が所在することから、当初は多いものと考えていたが、極めて少なく灰釉陶器が全体の0.9%、施釉陶器0.13%の割合であった。したがって、全体では土師器の占める割合は概ね7割で、そのほか須恵器、灰釉陶器などを合せて3割という傾向を示している(註1)。

土師器については、1,064点のうち杯・碗類が555点で全体の52.2%、皿40点で3.8%、甕類449点で42.2%、甑11点で1%の割合を示している。杯・碗類などの供膳形態が半数以上を占めていることがわかる。

須恵器については、406点のうち杯・碗類が175点で全体の43.1%、皿1点で0.2%、甕類154点で37.9%、甑17点で4.2%、壺25点で5.9%の割合を占めている。このうち隣接する下総の南河原坂窯や中原窯、宇津志野窯などの製品で、従来くすべ焼き須恵器と呼ばれている千葉地域産の茶褐色系の須恵器が、本遺跡出土土器に多く見られるのが特色である。割合的には、須恵器406点中114点で須恵器全体の28.1%を占めている(第76・77図)。この須恵器は、本遺跡では8世紀中葉の後半から入り始め、後葉から9世紀初頭頃に杯類を中心として盛行する。9世紀に入ると甕類が多くなり、中葉から後葉頃まで存在が確認されている。

本遺跡の土器様相については、一般に在地産とされる土師器や永田・不入窯産須恵器の他に下総・常陸系の須恵器、東海系の須恵器、猿投窯産須恵器・灰釉陶器などの外来の土器が比較的多く含まれている。

次に土器の様相について検討を加えたい。坊作遺跡は、従来から上総国分尼寺を運営するために意図的に配置された人為的集落であるとして位置づけられてきた。概報では、「この時期の遺構群で最も古い時期に属するものでもすでに国分寺使用の瓦が含まれており、尼寺址創建時期を遡るものはない。従って、国分寺建立以前から継続的に続いた集落ではなく、国分寺の建立を契機として出現した集落であり、これが平安時代中頃まで存続したものである。」とされている(註2)。

このことから、存続時期(特に開村時期)がある程度限定できる集落と考えられ、昭和62年に行われた房総歴史考古学研究会主催のシンポジウム「房総における歴史時代土器の研究」では、当地域における奈良・平安時代の基準となり得る資料として本遺跡出土の土器を取り上げて土器編年が組まれた経緯がある(註3)。

当時は、本格的な整理も進まない中での限定された資料の扱いであったため不明な点も見受けられるが、現在までも大枠の部分での編年構成は妥当性のあるものと考えている。

今回の整理作業の結果、奈良・平安時代の遺構として竪穴住居跡が119軒、鍛冶遺構2棟、掘立柱建物跡30棟などの遺構が所在することが判明し、ほぼ全容を把握することができた。各遺構については、切り合い関係は少ないものの、比較的良好な土器資料が出土している。今回の作業では、昭和62年に組まれた編年区分(以下「既存編年」と呼称)をそのまま踏襲して土器資料の検討を行い、新たに補足した期別の解釈、また不明瞭な部分を補完する形で編年資料を加えようとするものである。なお、遺構出土の土器資料の取り扱いについては、住居跡の場合、カマド内、床面直上出土のものを、その住居の廃棄時に伴う遺物として認識して抽出し検討を加えている。

「既存編年」では、本遺跡出土土器をⅠ～Ⅶ期区分、8期に細分している。区分では器種の構成、整形技法の変

化、特に土師器杯のロクロ(回転台)使用の整形、未使用および形態変化を中心として画期を捉え区分している。この中では、整形技法としてロクロ未使用(非ロクロと呼称)の土師器杯とロクロ使用土師器杯との量的な逆転状態を経過する時期としたⅢ期と称する部分について、該当する資料が見あたらないことから欠落していた。今回の変遷過程を検討する中で、この時期を定型化したロクロ土師器杯が盛行する次のⅣ期に移行する過渡期として非ロクロ・ロクロ土師器杯が混在し、また市原産(永田・不入窯、石川窯)の須恵器が見られる時期として設定し取り扱うこととする。

従って、今回の検討でⅠ～Ⅶ期を大まかに全体的に捉えると、大きな画期として非ロクロ土師器杯が主体となる時期から非ロクロ・ロクロ土師器が混在し、また市原産須恵器(永田・不入窯、石川窯)を含む時期(Ⅰ～Ⅲ期)を第1段階。定型化したロクロ整形土師器杯が盛行する時期(Ⅳ～Ⅵ期)を第2段階。底部の萎縮した手持ちヘラケズリの杯、および黒色土師器碗、高台付碗、皿、高台付皿、足高高台杯、耳皿などの新器種が加わるなど律令的な土器生産体制が急速に解体に向かう古代末期の様相を示す土器群が出現する時期(Ⅶ期)を第3段階として捉えることができる(註4)。

なお、今回の作業で得られた各期の土器様相は、あくまでも本遺跡内で出土した土器の変遷様相であり、資料の制約から器種ごとの型式学的な変遷過程の検討は充分行っていない。また、当該の変遷様相と隣接に所在する同時期の遺跡での出土遺物との比較、特に東側隣接に所在する貞観17年銘の土師器皿など出土した同時代の遺跡である稲荷台遺跡については、公表された資料からは、本遺跡とはその様相はやや異なる部分も認められるが、現在整理中のため十分な比較検討を行っていない(註5)。このことは、ただ単に各遺跡間での土器様相の違いなのか、あるいは土器資料を抽出する際に対しての齟齬なのかどうかは、今後、国分寺台周辺地域内の同時期に所在した荒久遺跡(未整理)などの様相とを合わせ、器種ごとの型式学的な変遷を把握し、地域内の編年作業を経なければ解決できないものと考えている(註6)。

② 各期の設定とその様相

Ⅰ—a 期(第78・79図)

本期は、供膳形態において、非ロクロ土師器杯類が主体を占める時期である。杯については、従前のヘラミガキ調整を施す鬼高系丸底杯が残るが、主体は器高がやや低く平底で内面の体部と底部との境が明瞭で、体部内面には斜格子状暗文を施すいわゆる「上総型」杯である(註7)。法量としては、口径13.5cm前後、器高3.1～3.7cmあたりの杯である。また口径16～17cm前後、器高5.6～6.3cmの平底で内面の体部と底部との境が不明瞭なやや大型杯などが見られる。下総地域の影響を受けているためか、赤彩を施している杯も見られる。なお、(第78図17)はロクロ整形土師器杯であり、これは武蔵地域系統のいわゆる盤状杯で、下総あるいは武蔵からの搬入品である。

須恵器については、湖西系の長頸壺、常陸系の杯などが見られるが量的には少なく、むしろ地元産の永田・不入窯の須恵器杯が多く見られる。ただ土師器杯などと比べるとその量は客体的である。永田・不入窯製品については、永田編年(註8)で言う初期とした永田Ⅰ期は極少数で、ほとんどがⅡ期とした杯類が主体を占めている。

土師器甕類については、口縁部が強く屈曲外反し、胴部最大径が肩部付近にある長胴のものや、やや緩やかに外反する甕も見られる。また、口縁部が「く」の字状に外反し、器肉の非常に薄い作りで肩部分に横方向のヘラケズリで整形するいわゆる「武蔵型」甕も見られる。このほか土師器台付甕や土師器小型甕、土師器甗などが存在する。

須恵器甕類については、破片のため不明瞭であるが含まれている。量としては客体的なものである。

Ⅰ—b 期(第80～82図)

本期はⅠ—a期同様に、非ロクロ土師器杯類が主体を占める時期である。従前のヘラミガキ調整を施す鬼高系丸底杯は消滅する。「上総型」杯はさらに平底化し、器高を増す方向に向かう。法量としては、口径12～13cm、器高3.6～4.4cmあたりの数値を示している。また、「上総型」杯の特徴のひとつである斜格子状暗文はⅠ—a期と比較すると量的にやや減少する傾向である。また、体部整形はケズリの細かい調整もあるが、ざっくりと横方向に大きくヘラケズリするタイプが増えてくる傾向を示す。このほか、口径16cm前後、器高5.7～6cmの平底で器高があり、体部がやや内彎して立ち上がるやや大型の杯が見られる。

この時期からロクロ整形による土師器杯が、わずかであるが見られるようになる。器形には規格性はない。成・整形は須恵器の技法で、手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリなどで調整している。焼成は土師器そのものの色調である。ロクロ整形の土師器杯とするか須恵器杯の範疇とするのかは微妙である。

須恵器類は、湖西系の長頸壺などがわずかに見られる。常陸系の須恵器はほとんど見られなくなる。この時期は、永田・不入窯の須恵器が主体で、量的にも増加する。永田編年では永田Ⅱ期およびⅢ期とした時期であり、両時期が混在している。また一部であるが、千葉地域産と思われる須恵器杯が認められる。

なお、第80図中の2・3・4の土師器杯と同29の須恵器高台付杯については、49号住居跡から出土しているが、住居の床面に下から3→4→2→29の順で重ね合わせたまま、置かれた状態で出土している。須恵器については永田編年でⅢ期にあたり、この時期の須恵器杯と土師器杯との共伴関係を考える上で良好な資料である。

土師器甕類については、Ⅰ—a期同様に口縁部が強く屈曲外反し、胴部最大径が肩部付近にある長胴のものや、やや緩やかに外反する甕も見られる。また「武蔵型」甕も見られる。このほか土師器台付甕や作りの丁寧な土師器小型甕などが存在する。このほか土師器短頸壺も多く見られる。

須恵器甕類については、破片のため不明瞭であるが含まれている。また甕、短頸壺などが見られる。

Ⅱ期(第83～85図)

非ロクロ土師器杯類が主体を占める時期であるが、ロクロ整形土師器杯が客体ながら見られるようになる。従来の「上総型」杯はさらに器高を増し、体部は直線的になる。斜格子状暗文を施すものはほとんど見られなくなる。法量的には、口径12.5～13.5cm、器高4.0～4.8cmあたりの数値を示している。ロクロ整形による杯は、形態的にも調整技法的にも混雑しており、全体的にⅣ期に見られるような規格性はなく、過渡的な様相を示している。器形は、ほぼ平坦な平底をもつ箱形状で、底部から直線的に立ち上がるものや口縁部で外反する杯などが見られる。整形は底部を静止糸切りで切り離れた後に底部、体部下端を手持ちヘラケズリで整形するタイプや底部、体部下端を回転ヘラケズリで整形するものなど規格化されていない。

この期からロクロ整形による体部内面を黒色処理する「黒色土師器杯」が見られる。系統的には、本期で始めるロクロ整形土師器杯とは異なるものである。

須恵器類は、永田・不入窯の須恵器が主体的である。永田編年では引き続き永田Ⅲ期とした時期である。なお、わずかであるが千葉地域産(南河原坂窯)の須恵器甕、甗などが搬入されるようになる。また東海地方猿投窯産の須恵器が搬入されている。

土師器甕類については、Ⅰ—b期同様に口縁部が強く屈曲外反し、胴部最大径が肩部付近にある長胴のものや、やや緩やかに外反する甕、胴部分が球形に張る甕などが見られる。また引き続き「武蔵型」甕、台付甕も見られる。

Ⅲ期(第86・87図)

この時期は、定型化したロクロ整形土師器杯が確立する次のⅣ期に移行する過渡期として、非ロクロ土師器杯、

定型化されていないロクロ土師器杯が混在する。また須恵器類については、市原産(永田・不入窯、石川窯)須恵器がⅡ期に比べると少なくなり、一方千葉地域産(南河原坂窯)の須恵器が増加する時期としてとらえる。

非ロクロ土師器杯は、Ⅱ期の「上総型」杯と比べると器形が整い始め、器高が高くなる。整形については従来の細かいヘラケズリも存在するが、回転ヘラケズリを意識したかのような幅広く連続した整形を行うものが見られる。ロクロ整形土師器杯は良好な遺物が見あたらないが、Ⅱ期同様に器形、技法とも混在しており、定型化する過渡の様相である。器形は下総に見られる器高の低い平底のものや、器高の高い箱形のものなどが見られる。整形は手持ちヘラケズリのものもあるが、回転ヘラケズリ調整が多くなる傾向である。また、この期にロクロ整形による土師器皿が、わずかであるが新たに加わるようである。

須恵器類は、市原産(永田・不入窯、石川窯)須恵器が前期に比べると少なくなり、千葉地域産(南河原坂窯)の須恵器が増加する時期である。永田編年では永田Ⅳ期とした時期で、石川窯の須恵器と思われる杯などが見られる。また東海地方の猿投窯産須恵器が多くなる傾向である。

土師器甕類については、口縁部が強く屈曲外反し、胴部最大径が肩部付近にある長胴の甕や、緩やかに外反し胴部最大径がやや中位に下がる甕、胴部分が球形に張る甕などが見られる。また引き続き土師器台付甕も見られる。

須恵器甕類については、南河原坂産の広口壺、甕、猿投窯産長頸壺などが見られる。

Ⅳ期(第88・89図)

この期は非ロクロ土師器杯が完全に消滅し、規格性のある定型化したロクロ土師器杯が主体となる時期である。また須恵器類については、市原産(永田・不入窯、石川窯)須恵器がほとんど見られなくなり、千葉地域産(南河原坂窯)の須恵器のみとなる。その量は土師器と比べると客体的である。

ロクロ整形土師器杯は器高が高くなり、直線的に外傾するものや口縁部付近で外反するなど規格化された杯がほとんどである。法量的には、器高は4.0～4.6cmの間で、口径は12.5～13.2cm前後、および13.4～14.2cm前後と法量の分化が見られる。また、口径15～17cm、器高5.6cm前後の大型化する杯も出始める。整形は手持ちヘラケズリのものもあるが、底部および体部下端を広めに回転ヘラケズリ調整するものが主体を占めており、その割合は1:3前後である。

またこの時期から土師器皿類は増加する。法量については、口径13.6～14.6cmあたりに集中している。調整も体部下端、底部を回転ヘラケズリで整形するものがほとんどである(第77図)。

須恵器杯は、千葉地域産(南河原坂窯等)のもので、底部からやや外反気味に立ち上がる。整形は体部下端を回転ヘラケズリ調整もあるが、体部下端、底部を手持ちヘラケズリで整形するものが主体的である。

土師器甕類については、口縁部が強く屈曲外反するタイプや口唇部分を上方につまみ上げるタイプが見られ、胴部最大径は中位付近に下がるものがほとんどである。またⅢ期に引き続き土師器台付甕が見られる。

須恵器甕類については、千葉地域産の短頸壺が見られる。

Ⅴ期(第90～93図)

本期は、定型化したロクロ整形土師器杯類が器形、法量、整形技法とも分化・多様化し、盛行する時期である。

土師器杯類は、器形的には直線的に外傾するタイプ、口縁部付近でやや外反して終わるタイプなどが見られる。また、体部中位付近に数条の凹線をめぐらす特徴的な杯もこの時期に多く見られる。法量的には、口径は12.6～13.6cm、器高3.6～4.4cmあたりの杯と口径14～15cm、器高3.8～4.6cmの杯に集中する。割合的には2:1前後である。また大型の杯などは、器高7～8cmで口径は20cmを越え、内面に細かなヘラミガキを施すものも見られる。整形技法的には、底部および体部下端を回転ヘラケズリで幅広く削るものが主体を占めているが、手持ちヘラケズリや

底部を回転糸切りのまま、整形調整しないものも見受けられる。その割合については、おおまかに見て80%：7%：13%前後である。

土師器皿類については、口径13.6～14.6cm前後、器高2.3～2.6cmに集中しており、杯同様に体部下端、底部を回転ヘラケズリで整形するものが主体的で、一部手持ちヘラケズリ整形や回転糸切りのまま整形調整しないものも見られる。黒色土師器の主体は、大型化した碗に見られる傾向である。

須恵器類については、千葉地域産(南河原坂窯、中原窯他)の須恵器のみであるが、杯類は激減し、代わって甕、甗類が増える。また、中原窯の大型広口壺も見られる。

土師器甕類については、胴部最大径が中位付近にある長胴のものが主体を占める。また台付甕はこの時期に見られなくなるようである。なお、この時期から土師器製置きカマドが新器種として出現するようである。

VI期(第94・95図)

本期は、V期に分化・多様化し盛行したロクロ整形土師器杯類が衰退に向かい、次の時期へ移行するやや過渡期である。

土師器杯類は、口径11.5～12.5cmと12.8～13.6cmとに分化し(割合はおおよそ40%：50%)、口径の縮小化が始まる。これとともに整形技法的には、底部および体部下端を回転ヘラケズリで削るものから、回転糸切りのまま整形調整しないものへ移行し、これが主体的となっていく。割合的には回転ヘラケズリ29%、手持ちヘラケズリ16%、無調整55%と整形調整しないものが半数以上を占める傾向である。また、口径に比して器高が高くやや内彎気味に立ち上がり、体部下端に指で当てたような凹面が見られる整形調整のない杯(第94図21・27)や口径に比して底部の萎縮した手持ちヘラケズリで整形する碗類(同25・26)も見られるようになる。

土師器皿類については、この期では量的に少ないが、杯同様に体部下端、底部を回転ヘラケズリで整形するものから回転糸切りのまま整形調整しないものが主体的になっていく。黒色土師器は、大型碗に見られるが、小型化した杯にも見られるようになる。

須恵器は、千葉地域産の杯類がほとんど見られなくなり、甕、甗類が見られる。この時期は下総系の須恵器生産が終焉に向かうものと思われる。

土師器甕は胴部最大径が中位付近に位置する倒卵形に移行していく。なお、この時期から新器種として土師器片口鉢(第95図44)が加わるようである。

VII期(第96・97図)

本期は、底部の萎縮した手持ちヘラケズリの杯、碗、および黒色土師器碗、高台付碗、皿、高台付皿、足高台杯などの新器種が加わるなど律令的な土器生産体制が急速に解体に向かう古代末期の様相を示す土器群が出現する時期である。

土師器杯類はVI期と比べて底径の縮小化が強まり、これとともに整形技法的には、回転糸切りのまま整形調整しないものや体部下端をやや乱雑に手持ちヘラケズリで整形するものなどが主体を占める。口径は12.7～13cm前後、14～15cm前後に集中しており、割合は2：1あたりである。また整形技法では、その割合は回転ヘラケズリ7%、手持ちヘラケズリ36%、回転糸切り無調整が57%で、無調整が半数以上を占め、手持ちヘラケズリも幾分増加する傾向である。碗類は口径14～16cm前後で、底径の小さい萎縮したもので体部下端、底部をやや乱雑な手持ちヘラケズリで整形するものがほとんどである。

なお、第96図中の5・7・17・18・20・22の土師器杯、碗、高台付杯については、203号住居跡から出土しているが、住居の床面に下から18→17→22→20→7→6→5の順で重ね合わせ、置かれた状態で出土している。この時期の底部

無調整の土師器杯および黒色土師器碗、高台付杯との共伴関係を考える上で良好な資料である。

土師器皿類については、体部下端、底部を手持ちヘラケズリで整形するものや回転糸切りのまま無調整のものが主体的になっていく。黒色土師器は、やや大型の碗や高台が付く碗が主体で、VI期と比較して量的にも増加している。

土師器甕類は胴部最大径が中位付近にある倒卵形が主体だが、小型甕が多く見られる。この時期に土師器台付鉢が新たに器種として加わるもようである(稲荷台遺跡ではやや先行して出現)。

③ 各段階の年代について

次にⅠ～Ⅶ期に細分した各期の土器群について、おおよその年代を推定しておかなければならないが、年代については、昭和62年の「既存編年」で年代観が示されている。

上総地域の場合、当該期の実年代が推定できる土器資料としては、坊作遺跡隣接の稲荷台遺跡E地点37号住居跡出土の「貞観17年」(西暦875年)という紀年銘の書かれた土師器皿があり、この資料を含む土師器杯などの土器群が実年代を検討し得る定点となっている(註9)。従って、この年代以前については、須恵器や東海産の灰釉・緑釉陶器などの他地域産資料からの援用による年代推定に頼らざるを得ない(註10)。また最近では、昭和62年以降の資料の蓄積などから地元産の須恵器、特に市原産の永田・不入窯須恵器および千葉地域産の南河原坂窯須恵器等の土器編年(註11・12)が検討されてきている(註13)。ただ、他地域の編年、特に生産遺跡編年を使用するにあたって、生産地と消費地との年代のずれ、伝世という問題や該期編年の年代観の見直しや修正という問題があり、直ちに援用するには課題が多い。

今回の作業では、それらを含めて検討してみたが、実年代を推定し得る新たな資料の追加は見あたらないことから、各期の年代の枠組みは、「既存編年」における年代観を大方援用し、若干の補足程度にとどめる。

坊作遺跡各期の年代観

Ⅰ—a期	永田須恵器編年Ⅰ～Ⅱ	8世紀中葉(8世紀第2四半世紀後半～第3四半世紀前半頃)
Ⅰ—b期	永田須恵器編年Ⅲ～	8世紀後葉
Ⅱ期		8世紀後葉～末葉前後
Ⅲ期	永田須恵器編年Ⅳ	8世紀末葉～9世紀初頭前後
Ⅳ期		9世紀前葉
Ⅴ期		9世紀中葉
Ⅵ期	(貞観17年を含む時期)	9世紀後葉
Ⅶ期		9世紀末～10世紀前葉

坊作Ⅰ—a期については、従来から述べられているように坊作遺跡で、最も古い様相を示している住居跡として取り扱っている90号住居跡出土遺物の評価、および「大里」という墨書された盤状型土師器杯、常陸系の須恵器を伴う401号住居跡出土遺物の年代観から判断したものである(註14)。

Ⅰ—b～Ⅲ期の年代については、根拠のある年代観は見出すことができない。Ⅱ期とした住居のうち、227号住居跡出土の長頸壺および浄瓶について(註15)、猿投窯の折戸10号窯式期の製品と考えられることから、最近の猿投編年(註16)からは、8世紀末葉を中心とした時期と推定される。またⅢ期については、推定し得る根拠を見出せないが、上総西部地域では非ロクロ土師器杯が、ほぼ9世紀第1四半紀までにロクロ土師器によって駆逐されること(註17)、また、土師器皿の出現を9世紀初め頃としている点などを考慮して9世紀初頭とした。ただ、Ⅰ—b期からⅢ期の間が概略40～50年程度の幅と思われることから、各期の年代の幅は狭く重なることも考えられる。

IV期とした年代について根拠はないが、上総西部地域では市原産須恵器、非ロクロ土師器杯が消滅し、定型化したロクロ土師器杯となる時期を9世紀前葉と漠然と推定している。

V期は、次のVI期が稲荷台遺跡出土の貞観17年(西暦875年)の紀年銘を墨書した土器と共伴する一群と構成的にほぼ平行関係と考えられることから、9世紀中葉と推定している。

VI期は貞観17年を含む年代を考慮して、9世紀後葉としている。

VII期は、従前の土器様相が衰退に向かい、黒色土師器碗・高台付杯・皿などの新器種が加わるなど律令的な土器生産体制が急速に解体に向かう古代末期の様相を示している時期としてとらえ、9世紀末以降(註18)としている。また、本遺跡の最終末住居跡については検討の結果、10世紀前葉(第1四半世紀)頃を越えないものと推定している。

掲載土器の遺構一覧

I — a 期 (第78・79図)

4号住居跡(32)
7号住居跡(6・12・35)
9号住居跡(10・20・28・30・31)
13号住居跡(21)
41号住居跡(27・29)
46号住居跡(1)
53号住居跡(11・13)
90号住居跡(3～5・16)
92号住居跡(19)
93号住居跡(7・33)
98号住居跡(34)
179号住居跡(2・8・14・15・24)
180号住居跡(23・25・26)
401号住居跡(9・17・18・22)

I — b 期 (第80・81・82図)

19号住居跡(16・48)
40号住居跡(11・22・23・34・43・45・52)
42号住居跡(7・19・37)
43号住居跡(31)
44号住居跡(9・26・27)
47号住居跡(6・8)
49号住居跡(2～5・29)
51号住居跡(10・20・32・46・47)
67号住居跡(17)
86号住居跡(1)
87号住居跡(14)
91号住居跡(24・36・50)
94号住居跡(28・33・40)
142号住居跡(18)
162号住居跡(12・15・38・41)
210号住居跡(21・39・42・49)
211号住居跡(13・25・30・35・44・51)

II期 (第83・84・85図)

6号住居跡(40)
12号住居跡(12)
30号住居跡(1・6・7・14・21・23・24・34・45・47)
35号住居跡(2・13・27・32・35)
36号住居跡(3・36・37・48)
43号住居跡(10・29)
45号住居跡(9)
48号住居跡(4・5・22・30・33・39・44)
78号住居跡(8・11・26)
100号住居跡(16・18・25・31・42・43)
136号住居跡(19・20・38・41・46・49)
227号住居跡(15・17・28)

III期 (第86・87図)

11号住居跡(4・21)
25号住居跡(26)
31号住居跡(16)
34号住居跡(10・11・15・22・28)
58号住居跡(2・3・23)
68号住居跡(1・18・20・24)
148号住居跡(17・27・29)
149号住居跡(6・8・13・14)
182号住居跡(9・12・19・25)
228号住居跡(5・7)

IV期 (第88・89図)

16号住居跡(10・19・21・23・26・27・28・30)
153号住居跡(1～8・11・13～16・20・22・24・25・29・31・32)
169号住居跡(9・12・17・18)

V期 (第90・91・92・93図)

5号住居跡(5・52・57・63)
95号住居跡(1・23)
121号住居跡(17・28)

122号住居跡(27・35・42・49)
134号住居跡(20・21・22・37・44)
135号住居跡(7・12・13・41)
143号住居跡(26・31・50・62)
151号住居跡(8・33・45・53・54・55)
155号住居跡(46)
158号住居跡(24・29・32・56・59・60)
167号住居跡(11・16・30・36)
220号住居跡(3・15・18・19・34・38・39・43・58)
231号住居跡(2・4・6・9・10・14・25・40・47・48・51・61)

Ⅵ期 (第94・95図)

29号住居跡(8・9・25)
132号住居跡(1・28・43)
154号住居跡(10・30)
159号住居跡(5・6・26・33・37・41)
161号住居跡(2・3・27・38・42・44)
183号住居跡(7・14・24・32・34)
216号住居跡(11・22・23・40)
233号住居跡(4・16～21・29・31・35・36・39)
402号住居跡(13・15)
404号住居跡(12)

Ⅶ期 (第96・97図)

66号住居跡(2・3・16・27・29)
88号住居跡(10・12・13・14・28・33)
132号住居跡(21)
202号住居跡(11・19・24・25・30)
203号住居跡(1・4～9・15・17・18・20・22・23・31・32・34)
207号住居跡(26)

第10表 主要土器類の消長

時期 種別	I—a 期 8 世紀中葉	I—b 期 8 世紀後葉	II 期 8 世紀末葉	III 期 8C末～9C初頭頃	IV 期 9 世紀前葉	V 期 9 世紀中葉	VI 期 9 世紀後葉	VII 期 9 世紀末～10 世紀前葉
非クロロ土師器杯				---				
鬼高系丸底杯	---							
盤状型土師器杯	---							
上総型土師器杯			-----					
クロロ土師器杯+回転ヘラケズリ		-----						---
クロロ土師器杯+手持ヘラケズリ			-----					-----
クロロ土師器杯+無調整						-----		
クロロ土師器大型杯								
土師器皿+回転ヘラケズリ				-----				
土師器皿+手持ヘラケズリ								-----
土師器皿+無調整						-----		
土師器高台付皿								
土師器杯+内面黒色処理		----						
土師器椀(底部萎縮+手持ヘラ)							-----	
土師器高台付椀(杯)+内面黒色処理							-----	
土師器小型甕								
土師器台付甕						-----		
武蔵型土師器甕	-----			-----				
置きカマド								
湖西系須恵器		-----						
常陸系須恵器		----						
猿投窯須恵器			---		--			
猿投窯灰釉陶器				---			-----	
永田窯須恵器 I 期	---							
永田窯須恵器 II 期	-----		-----					
永田窯須恵器 III 期		-----		-----				
永田窯 IV 期(石川窯含)				-	---			
千葉地域系須恵器		-----					-----	
瓦	---							
良好な遺構(標準遺構)	※ 9 号住 ※ 53 号住 ※ 90 号住 ※ 179 号住 ※ 401 号住	※ 8 号住 ※ 40 号住 ※ 42 号住 ※ 44 号住 ※ 49 号住 ※ 51 号住 ※ 91 号住 ※ 211 号住	※ 30 号住 ※ 35 号住 ※ 43 号住 ※ 48 号住 ※ 59 号住 ※ 78 号住 ※ 100 号住 ※ 136 号住 ※ 227 号住	※ 31 号住 ※ 34 号住 ※ 58 号住 ※ 68 号住 ※ 149 号住 ※ 182 号住 ※ 228 号住	※ 16 号住 ※ 153 号住 ※ 169 号住	※ 5 号住 ※ 121 号住 ※ 122 号住 ※ 134 号住 ※ 135 号住 ※ 143 号住 ※ 155 号住 ※ 158 号住 ※ 167 号住 ※ 220 号住 ※ 231 号住	※ 3 号住 ※ 29 号住 ※ 109 号住 ※ 132 号住 ※ 159 号住 ※ 161 号住 ※ 183 号住 ※ 216 号住 ※ 233 号住 ※ 404 号住	※ 66 号住 ※ 88 号住 ※ 202 号住 ※ 203 号住
目安となる様相	・非クロロ土師器杯 ・鬼高系丸底土師器杯が残る ・盤状形の器高の低い平底杯 ・上総型杯(斜格子状暗文) ・湖西系須恵器 ・常陸系須恵器 ・永田須恵器 I～II 期(I 期は極く少数で、II 期が多い)	・非クロロ土師器杯 ・底部平底化し器高が増す ・上総型杯(斜格子状暗文) ・非クロロ大型椀 ・クロロ土師器杯の初現? ・クロロ土師器黒色処理杯の初現? ・湖西系須恵器が少なくなる ・永田産須恵器(II～III 期)が主体を占める ・南河原坂産須恵器が入る?(初期品)	・非クロロ土師器杯 ・非クロロ杯は器高が増し、平底・直線的になる ・クロロ整形土師器杯が出始める(判断できないものもある) ・クロロ土師器黒色処理杯 ・非クロロ大型杯 ・永田産須恵器(III 期)が主体を占める ・南河原坂産須恵器 ・猿投窯産の須恵器が入る ・湖西系須恵器	・非クロロ土師器杯 ・クロロ土師器杯(回転ヘラケズリだが、手持ヘラケズリ整形多い) ・土師器皿の出現(9c 第14半紀)(回転ヘラケズリ主体) ・永田産須恵器(IV 期)(石川窯須恵器) ・南河原坂産須恵器杯などの製品が多くなる ・猿投窯の須恵器	・非クロロ土師器杯は消滅 ・クロロ土師器杯の定型化(回転ヘラケズリが主体だが、手持ちヘラケズリ混在) ・土師器皿が多くなる(回転ヘラケズリ主体) ・土師器大型杯出現 ・永田・不入窯系の須恵器はほとんど見られない ・南河原坂産須恵器	・クロロ土師器杯の盛行(回転ヘラケズリが主体)(一部糸切り無調整) ・土師器皿の盛行(回転ヘラケズリ主体、糸切り無調整も入る) ・土師器大型杯の盛行 ・土師器杯で体部に凹縁が数条入る杯が見られる ・南河原坂産須恵器中原窯あるいは宇津志野窯須恵器が入る	・クロロ土師器杯(糸切り無調整が主体的、回転ヘラケズリ、一部手持ちヘラケズリも見られる) ・土師器皿(糸切り無調整が多い) ・台付鉢の出現(福荷台遺跡) ・千葉地域系須恵器が少なくなる	・クロロ土師器杯(回転糸切り後、無調整と底部の萎縮したざっくりと削る手持ちヘラケズリが多くなる) ・杯の底部萎縮化 ・土師器椀・皿類が多くなる ・土師器黒色処理杯が多くなる ・土師器黒色処理高台付椀・杯が加わる ・土師器足高台付杯が加わる ・土師器耳皿が加わる